折々のことば



鷲田清一

折々のことば
1～5

涯（はて）は
涯ない

大岡信



折々のことば　鷲田清一　1

涯は
涯ない

大岡信

6762回にわたり本紙で書き継がれた「折々のうた」。それをまとめた本の最終頁にそっとこう記されていた。ことばはひとの体験をまとめなおしてくれるもの、別の角度から見るよう促してくれるもの。この新しい連載が、凝り固まった心をほぐし、ときにはふわりと別の場所へと移動させてくれる、そんなきっかけになればと願う。人生も旅のようなもの。涯はありません。

2015・4・1



折々のことば　鷲田清一　2

めいわくかけて
ありがとう

たこ八郎

迷惑かけて「すみません」ではなくて、「ありがとう」。荒れて、酔っぱらって、くだを巻き、周囲の人に迷惑かけるばかりだったけれど、みんなはぼやき、怒鳴りながらも、見限らずに迷惑をかけられつづけてくれた、そのことへの感謝である。迷惑かけずに生きられる人なんていない。だからこれはだれが口にしてもおかしくない。たこは昭和のコメディアンで元ボクサー。

2015・4・2



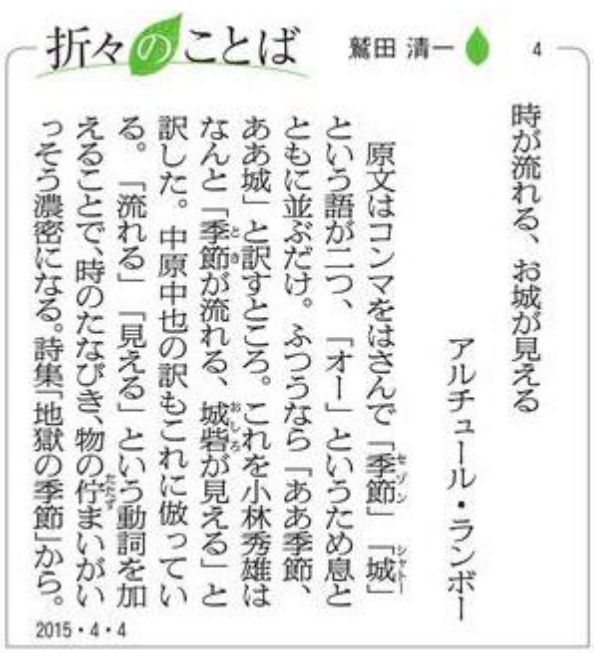
折々のことば　鷲田清一　3

ちゝは汝を悪にあらじ、母は汝をうとむにあらじ。唯これ天にして、汝が性のつたなきをなけ。

松尾芭蕉

骨を野に晒すことも覚悟の旅の途中、芭蕉は川のほとりに3歳ほどの捨て子を見つける。哀れと思いつつも、引き取ることもできず、捨て置くこともできず、袂から食い物を投げ、でも見捨て、立ち去らざるをえない。そんなおのが中途半端さに胸を掻きむしられるような場面が、どの人生にもある。「野ざらし紀行」から。

2015・4・3



折々のことば　鷲田清一　4

時が流れる、お城が見える

アルチュール・ランボー

原文はコンマをはさんで「季節」「城」という語が二つ、「オー」というため息とともに並ぶだけ。ふつうなら「ああ季節、ああ城」と訳すところ。これを小林秀雄はなんと「季節が流れる、城砦が見える」と訳した。中原中也の訳もこれに倣っている。「流れる」「見える」という動詞を加えることで、時のたなびき、物の佇まいがいっそう濃密になる。詩集「地獄の季節」から。

2015・4・4



折々のことば　鷲田清一　5

アホになれんやつがほんまのアホや

関西での言い伝え

関西では優等生は嫌われる。もう少し正確にいえば、優等生然としたふるまいは小ばかにされる。成績がいいことはそれほど評価されずに、自分をあえて笑われ役にすることで、他の一人一人の言い分を聴き、でも最後に「しゃあないな」と一つにまとめ上げることのできる人がほんとうに賢いとされる。おもろいやつ、頼りになるやつのほうが、うんと評価が高いのである。

2015・4・5

折々のことば
６～１０

口下手な行員のほうが成績がいいんです

旧知の銀行員



折々のことば　鷲田清一　6

我々は見るものを模倣するのでなく、想像するものを模倣するのである。

三木清

パリに観光で行って、これがエッフェル塔だと確認し、次のスポットに移動する。帰ってエッフェル塔のことを話そうにも、鉄骨の感触すら憶えていない。エッフェル塔についてパリ案内で知っていたことをただ確認しただけ。絵はがきをもう一枚見るのと変わらない。私たちは幻想をなぞりながら現実を組み立てていると、この哲学者はいう。「構想力の論理」から。

2015・4・6



折々のことば　鷲田清一　7

Alone Together

ジャズのスタンダードナンバー

恋人たちが孤立しているなら「ふたりぼっち」と訳したいが、ここは孤独な人が隣りあって、と解したい。悲しみはひとりで背負うほかない。慰めあうなんて格好悪い。そんな人たちがジャズ喫茶にやってくる。群れずに依らずに、それぞれが内に孤独を深く宿しながら、同じ空間にいる。これ、地縁や社縁によらずに、個々人がみずからの判断で動くデモクラシーの基本となる感覚に通じるかも。

2015・4・7



折々のことば　鷲田清一　8

愛さないと見えないものというのがあるんじゃないですか

岩田慶治

愛情関係の話ではない。研究の話である。はじめて参加した文化人類学者たちの研究会で、このことばに衝撃を受けた。研究とはだれもが方法さえ学べばできる客観的な作業と思っていたからだ。が、岩田さんは、愛のまなざしがあってはじめて見えてくるものがあるという。愛がなければ、見えるはずのものも見逃してしまう。異なる民族のあいだでもきっと同じことが言える。

2015・4・8



折々のことば　鷲田清一　9

口下手な行員のほうが成績がいいんです

旧知の銀行員

ある銀行員がしみじみと、こう語っていた。能書きを淀みなく連ねるよりも、ほんとにこんな調子のいいことばかり言っていいんだろうかと、ついことばに詰まり、言い淀んでしまう営業員。そういう口ごもりが逆に、聴く人のこころをがちっと摑むのだろう。能弁よりは口下手がいい。ひとは話を聴くとき、話される事柄だけでなく、話し方、そう、口ごもりをこそ聴いている。

2015・4・9



折々のことば　鷲田清一　10

各人がそれぞれ自己自身にもっとも遠い者である

ニーチェ

「道徳の系譜」のなかで引かれているドイツの格言。最も見えにくいのは自分自身である。ということは、自分を他者のほうから見る術を磨く必要があるということだ。だからまた、自分がほんとうは何も知らないということを知っている人が、いちばん賢いということにもなる。私の看板であるこの顔、それをよりによって自分だけが見られないことの怖さに心が凍りつく。

2015・4・10

折々のことば
１１～１５

時は金なり

ベンジャミン・フランクリン

折々のことば　鷲田清一　11

身体髪膚之を父母に受く。敢えて毀傷せざるは孝の始めなり。

中国の古典「孝経」

体は髪から皮膚までみな両親から授かったものだから、壊したり傷つけたりしてはならないという意味。「私の体なのだからそれをどうしようと私の勝手だ」という理屈と、体は私だけのものではないという実感とのあいだで、ひとは揺らぐ。ちなみに旧制高校の寮には、「寝台白布之を父母に受く。敢えて起床せざるは孝の始めなり」と自室の扉に貼り紙をする輩がいたそうな。

2015・4・11

折々のことば　鷲田清一　12

大きな海が来るよ

ある2歳児

友人が幼い息子をはじめて海へ連れていったとき、波を見てとっさにこうつぶやいたという。波は穏やかだったが、子どもには海が壁のように見えた。長じて津波の画像はどう映ったか？　そういえばわたしの次男もはじめて列車に乗ったとき、「線路が走っている！」と口走った。どちらがほんとうは動いているのか？　認識論では存外難しい問題である。子どもは小さな哲学者。

2015・4・12

折々のことば　鷲田清一　13

激情を表に出さずにいれば、やがて潰える。怒りをぶちまける前に10数えよ。

ウィリアム・ジェイムズ

ひとは悲しいから泣くのではない、泣くから悲しいのだと言った哲学者のことば。ひどい塞ぎや落ち込みから抜けだそうと思えば、その反対、快活なときの様子を意識してすればいいと言う。背筋を伸ばし、眉間の皺をほどき、目を輝かせて長調で話し、にこっと笑みを返すこと。ひとは弱いもの、心の健康を保つにも身体の助けを借りねばならない。「心理学原理」から。

2015・4・13

折々のことば　鷲田清一　14

時は金なり

ベンジャミン・フランクリン

これを「手に入れる」ことから考えれば、時を無駄にするなという勤労と効率を勧めるちょっとばかりけちくさい警句になってしまうが、これを人に「与える」という視点からすれば、気前よくなれとの格言にもなる。育児でも介護でもそうだが、ケアの本質には、他の人に、自分にとってもっとも大事なもの、つまりは時間をあげるということがある。

2015・4・14

折々のことば　鷲田清一　15

自分の経験から学ばねばなりません。しかしそれだけでは小さすぎる。

やなぎみわ

自分の独自性を確認したくて、というかそれを確認しなくては自分の存在がもたないような気がして、他人にはない素質や体験を見つけようと、自分の過去をほじくり返す。こうして世界がどんどん縮こまってゆく。〈わたし〉は、囲われた敷地ではない。他の人たちとの関係が、歴史のいろんな文脈が、交差する場である。意表をつく作品を創りつづけてきた美術家のことば。

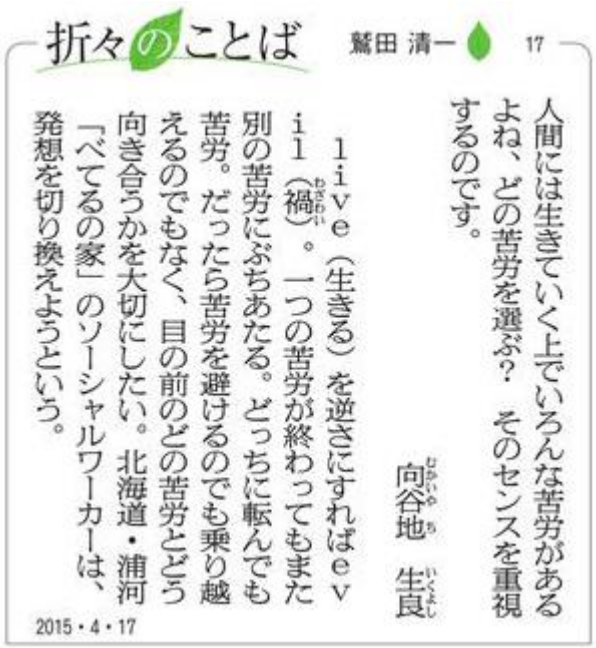
2015・4・15

折々のことば
１６～２０

夢でもし逢（あ）えたなら　素敵（すてき）なことね

大瀧詠一











折々のことば
２１～２５

贅沢（ぜいたく）は素敵（すてき）だ

第２次大戦時の標語パロディー

折々のことば　鷲田清一　21

《私の言うことを聴いてください》というのは、《私に触れてください、私がここにいることを知ってください》ということだ。

ロラン・バルト

語りは、メッセージ（意味）と語調との二重奏をなしている。だから、人の話を聴くとき、気がよそに行っていてその意味を聞きそびれることがあるが、意味を理解することにこだわって、そのことばに込められたほんとうの願いや訴えを聞きそびれもする。悲しい不注意だ。ことばと感覚の思想家による芸術論集「第三の意味」から。

2015・4・21

折々のことば　鷲田清一　22

贅沢は素敵だ

第2次大戦時の標語のパロディー

戦時中、贅沢できる人ではなくて、贅沢などとてもかなわぬ人たちが「贅沢は敵だ」と唱和させられた。暮らしの格差が厳しくなるなかで、倹しく暮らすほかない現代にも、「贅沢は素敵だ」と言いあえる心の自由だけは確保しておきたい。真の贅沢は高額の消費ではなく、困窮のなかにあってもいたわりとねぎらいの声をかけてくれる人たちがいることにあると心得つつ。

2015・4・22

折々のことば　鷲田清一　23

Any where out of the world

シャルル・ボードレール

「この世の外ならどこへでも」。あえて英語で書かれている。違う場所へ行けばもっと幸福になれるという、「青い鳥」の夢を謳っているのではない。逆である。つねにある場所から逃れ、住むべき別の場所を夢見るという、そんな幻想で編まれたみみっちい人生。そういう移住の夢で覆われた世界そのものの外へ出たいという、そもそもかなわぬ夢。痛い。散文詩集「パリの憂鬱」から。

2015・4・23

折々のことば　鷲田清一　24

私は失敗したことがない。ただ、1万通りの、うまくいかない方法を見つけただけだ。

トーマス・エジソン

これにはいくつかのバージョンがあり、不首尾に終わった回数は2万とも700ともいわれる。偉大な発明の前には実験や工夫のゴミの山があることを、現場の技術者はよく知っている。画期的な革新が起こりにくいのは、失敗しなかったからこういう生活があるのだ、とみずからに言い聞かす小心な人ばかりの社会、やり直しを許さない社会になっているからではないか。

2015・4・24

折々のことば　鷲田清一　25

瑣事を愛するものは瑣事の為に苦しまなければならぬ

芥川龍之介

幸福になりたいなら、日常の瑣事のうちに「無上の甘露味」とともに「堕地獄の苦痛」を感じなければならない、と芥川はいう。日々の細かな出来事の中に、甘苦を、薄い葉の表裏のように感じ取ること。「こうあるべきだ」と大上段に構えた原則論はそういう機微を見逃してしまう。そう、瑣事を笑う者は瑣事につまずく。人生の痛烈なしっぺ返し。「侏儒の言葉」から。

2015・4・25

折々のことば
２６～３０

日本人は寡栄養に強く、過栄養に弱い。

肝臓の専門医

折々のことば　鷲田清一　26

自分が何に対して自分であるかというその相手方が、つねに自分を測る尺度となる。

キェルケゴール

これをすればあの人はどう思うだろうかと、とても気になる人がいる。その人といつ出会い、そのことで自分がどうごそっと変わったか？　自分が何者かを考えるときも、人生を直線のようにイメージし、その中で一貫して変わらないものを探すのではなく、あみだくじのようなものとして思い描けば、人の一生もずいぶん違って見えてくる。哲学の書「死に至る病」から。

2015・4・26

折々のことば　鷲田清一　27

日本人は寡栄養に強く、過栄養に弱い。

肝臓の専門医

日本人の体は、摂取したわずかの脂肪を数日間うまく使って飢えを凌ぐのには向いているが、栄養過多にあって脂肪を減らす機能は劣るらしい。知人の医師から聞いた。ご馳走を途中でやめるのも、便利な物をあえて使わないのも、何かある事業を起こすために別の事業をやめるのも、むずかしい。人口減少へと向かう時代、得意のダウンサイジングがなぜできないのか。

2015・4・27

折々のことば　鷲田清一　28

みおつくし（澪標）

古地図の印

川を運航する船が浅瀬に乗り上げて座礁しないよう、昔の水路には河底の深さを示す標識があった。それを古地図では「〒」と表した。大阪市はこれを市章としてきた。ものごとの表面の様子に惑わされず、ほんとうに大事なものを知り、それを守るという志を表す。澪標は「身を尽くす」という語にも通じる。そう、何ごとにも誠意をもってあたるということ。

2015・4・28

折々のことば　鷲田清一　29

身長が伸びなくなってようやく大人になるわけです

原研哉

ものごとの本質をぴたり一言、それも抽象的な概念ではなくて、具体的な記述で引き出すことばがある。これがまさにそうで、成長をめざすのはまだ青いとき、成長のあとにやってくるのは実りのとき、いいかえれば成熟と洗練のときだという。この国の現在を考えるとき、心に銘じておきたいことばである。昨年10月21日、本紙の取材に答えたデザイナーならではのことば。

2015・4・29

折々のことば　鷲田清一　30

忘れねばこそ思ひ出さず候

江戸の芸者

哲学者の九鬼周造が滞欧中、仏語で書いた随想「ＧＥＩＳＨＡ」（坂本賢三訳）の中で引いていることば。あの人のこと、あの出来事のことは、いまも心の中で疼いたままで、いつまでも過去へと流れ去ってくれない。だから思い出すこともない。そのことを、その激痛に呑み込まれることなく、他者からの同情も拒みつつ、言い切っている。まことに凄としたことばである。

2015・4・30

折々のことば
３１～３５

わたし、この子とは性が合いませんねん。

友人の妻

折々のことば　鷲田清一　31

ほしいものが、ほしいわ。

糸井重里

ほしいものは何でもある。ほしいと思うより先に並んでいる。あとは選ぶだけ。でも、明日になればきっともうほしくなくなっている……。そんな欲望の空洞を描いた、高度消費社会まっさかりの時代の西武百貨店の広告。ほんとうにほしいのはもはやモノではなく、何が何でもほしいという渇きだとする、コピーの先駆者の苦い自己批評が、はっとする広告になっていた。

2015・5・1

折々のことば　鷲田清一　32

本当に思っていることを、うまく書けない文章のほうがときには文章としては上である。

荒川洋治

詩人は「言葉と意味との食いちがう部分」をしか信じないと、かつて大岡信さんは言った。言葉はいつも過剰か過少で、出来事や経験とぴたり一致することがない。が、その隙間に、祈りや悔い、希望や絶望が棲みつく。そのちぐはぐさ、噛み切れなさこそ大事だと現代詩作家の荒川さんは考える。胸をなで下ろすというより、よけい怖くなる。「文芸時評という感想」から。

2015・5・2

折々のことば　鷲田清一　33

今の多くの人たちは非凡なものにでなくば、非凡を見ないほど平凡に落ちたのである。

柳宗悦

「平凡の中に非凡を見るより非凡なことがあろうか」と、日本の民芸運動を主導した柳はいう。尋常でないことが何も起こっていないということ、それこそ一つの達成である。そこには、人びとの無数の痛い経験と忍耐と工夫とが沈殿している。その非凡な達成を知らずして平凡と切り捨てる人たちが文化の土台を毀す。そして自身もやがて転ける。「茶道論集」から。

2015・5・3

折々のことば　鷲田清一　34

売りにゆく　柱時計が　ふいに鳴る
横抱きにして　枯野ゆくとき

寺山修司

やりきれないときに、鳴らなくてもいい物が、やりきれなさに追い打ちをかけるように音を立てる。家が破綻する前は律義に鳴っていたそのぼーんという音がしないよう、必死で平衡をとっている自分のふるまいがほとほと情けない。葬儀の席でおなかがごろごろ鳴る。おならがぷっと出る。そんなもの悲しいちぐはぐさもふと思い出す。歌集「田園に死す」から。

2015・5・4

折々のことば　鷲田清一　35

わたし、この子とは性が合いませんねん。

友人の妻

あるパーティーで、一回り年上の友人が家族を紹介してくれた。初対面のわたしに、奥さんは、横に立っている大学生の息子のことを、笑みをまじえてこう言った。奥歯にものがはさまったような口調ではない。親子のあいだでことばが淀みなく、遮るものもなく行き交う。信頼しあっていなければ吐けないことばだ。密着より隔てを選ぶこの距離感。見習いたい。

2015・5・5

折々のことば
３６～４０

見えてはいるが、誰も見ていないものを見えるようにするのが、詩だ。

長田弘

折々のことば　鷲田清一　36

おじし　きみかき　みんしき　さぼかれ
つんしんかぼこにぼぐさらし
ふりら　かひい　みさな　しじぐ　のるし

元永定正

意味のないことばはひとを不安にしもするが、音の肌理と転がりに身をあずけているうち、凍てついた心が溶かされてくる。かじかんだ感覚に生気が戻ってくる。ことばのもう一つの力。画家の絵本「ちんろろきしし」から。ちなみにこの本のオビには河合隼雄の返句も。「でやほあなわかんほのこ」。これは後ろから読んでください。

2015・5・6

折々のことば　鷲田清一　37

ただ　たんに　生きたいなー　あーだこーだ
言葉のピンで　止められないで

岡崎京子

犬はいいなあ、食って寝て、ただ生きているだけでいいんだから……とひとは言う。けれどもひとはその、ただ生きていることができない。生きる意味や理由が見つかるとむくむく元気が湧くが、見つからないと、生きること自体が苦痛になって、生きていてもしかたがない、生まれてこなかったほうがよかったと思いつめる。漫画「チョコレートマーブルちゃん」から。

2015・5・8

折々のことば　鷲田清一　38

二のつくものは持つな

福田赳夫

歴代首相の高度成長政策や列島改造論をつとに批判してきたこの元首相は、倹約を旨とし、質素な家に住み続けた。別荘や別宅（かつて二号と呼ばれた）を持つような政治家になるな、「一所懸命」を貫けということか。だが、落としどころ、つまりはセカンドベストを見いだすのが政治の妙だとすれば、二を持つのがときに大事ともなる。御厨貴「権力の館を歩く」から。

2015・5・9

折々のことば　鷲田清一　39

見えてはいるが、誰も見ていないものを見えるようにするのが、詩だ。

長田弘

視界には盲点があるだけでなく、見えているのに見ようとしないものがある。歴史のある時点ではだれにも見えないものもおそらくはあろう。だから、見ることにはそれなりの努力が要る。工夫が要る。他の人にはどう映っているかをこまやかに参照する必要もある。修業時代にふれたこのことば、わたしにとっては哲学の定義でもある。「読むことは旅をすること」から。

2015・5・10

折々のことば　鷲田清一　40

stoïcisme(est impossible)

ネクタイの文字柄

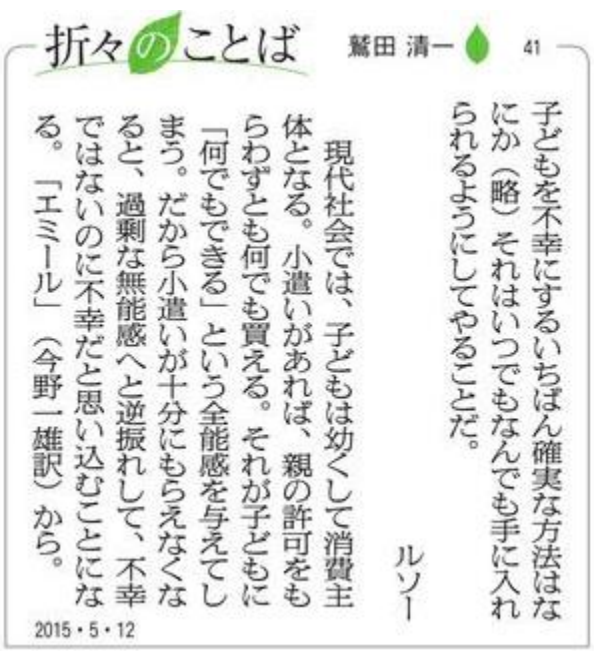
ふと目を引かれて買ったネクタイにプリントされていたフランス語。直訳すれば「禁欲主義（そんなの無理）」。ジャケットを着れば、stoïcisme（ストイシズム）だけが胸元に見えて、括弧内のことばはジャケットに隠れる。地味な羽織の裏地にじつは妖しい絵が描いてある、そんないなせ、あるいは不従順の現代版だ。堅苦しい式典が済んで、ボタンを外す時がなんとも楽しみ。

2015・5・11

折々のことば
４１～４５

子どもを不幸にするいちばん確実な方法はなにか（略）それはいつでもなんでも手に入れられるようにしてやることだ

ルソー


折々のことば　鷲田清一　41

子どもを不幸にするいちばん確実な方法はなにか（略）それはいつでもなんでも手に入れられるようにしてやることだ。

ルソー

現代社会では、子どもは幼くして消費主体となる。小遣いがあれば、親の許可をもらわずとも何でも買える。それが子どもに「何でもできる」という全能感を与えてしまう。だから小遣いが十分にもらえなくなると、過剰な無能感へと逆振れして、不幸ではないのに不幸だと思い込むことになる。「エミール」（今野一雄訳）から。

2015・5・12


折々のことば　鷲田清一　42

スキルと呼ばれるものは、隣の芝生に行って発揮されなきゃ実はだめなんじゃないか。

小山田徹

アーティストがアートの分野で突きつめた表現をするのはあたりまえ。異なった分野に出かけていって、アートの分野で培った技をそこに翻訳し、活用できてはじめてそれはスキルとなる。アーティストとは隣の芝生に行けるパスポートを持っている人のことだ、とこの美術家は言う。宮城県女川町で試みた「対話工房」での発言。これは博士号についても言えること。

2015・5・13


折々のことば　鷲田清一　43

教育において第一になすべきことは、道徳を教えることではなく、人生が楽しいということを体に覚え込ませてやることなのである。

永井均

生きる理由がうまく見つけられない人に、人生が生きるに値するものだと納得させるのは難しい。生きることは楽しいという肯定感が底にないと、自分の人生をしかと肯定できない。だから子どもに不幸な傷があっても、それ以上に楽しい経験をまわりが与えつづけること。ルールを教えるのはその後だ。「これがニーチェだ」から。

2015・5・14


折々のことば　鷲田清一　44

もっと先へ行きたい。でもそれには摩擦が要る。ザラザラした大地へ戻ろう！

ウィトゲンシュタイン

役人のまるで書きことばのような語り、プレゼン慣れした生徒の流れるような語りは、淀みもひっかかりもなく、上滑りするばかり、やがていずこかへ失せる。ことばってこんなにも軽く、薄いものだったのかとうら悲しい思いに襲われたときに、ふと思い出す哲学者のことば。人の心にざわめきを引き起こすざらついたことばにいつも触れていたい。「哲学探究」から。

2015・5・15


折々のことば　鷲田清一　45

生きる知恵ってなものを全然使わないから、ただただ快適なだけで、笑いあえるユーモアがぜんぜん生まれなくなります。

清水ミチコ

友だちと温泉旅行で、たまりにたまった日頃のあかを落とす。「全てがものすごく贅沢で、サービス上等、ずうっと快楽三昧！」。でもそのあと「モノマネの女王」はこう思い知る。ユーモアと笑いは、余裕のなさを超えようとするところ、悲しみのヴェールを押し開こうとするなかでしか、にじみ出てこないと。「主婦と演芸」から。

2015・5・16

折々のことば
４６～５０

いっそ「記録」は過去ではなく、未来に属していると考えたらどうだろう。

畠山直哉


折々のことば　鷲田清一　46

「うまく生きる」ことには役立ちません（たぶん）。けれども「よく生きる」ためには欠かせないものです（ぜったい）。

大嶋義実

音楽のことを言っている。子どものための音楽教室を開いているフルート奏者のことば。音楽を勧める理由にも引かれるが、括弧内の挿入が、主旋律に絡む軽やかな装飾音のようですばらしい。音楽家らしく、文章のリズムも抑揚も心地よい。このフレーズ、多用は無用だが（たぶん）、でも、いろんなケースで使える（ぜったい）。

2015・5・17


折々のことば　鷲田清一　47

人の存在とは、現実には、社会的な諸関係の総和（アンサンブル）である。

カール・マルクス

自分というものを、その意識からではなく、さまざまの歴史的な関係の交差点としてとらえること。インタレスト（関心）という語はラテン語のインテル・エッセに由来する。つまり何かの「あいだにある」ということ。私の存在そのものが一つの社会問題なのだというふうに、ひとは自己への関心を広げてゆく必要がある。「フォイエルバッハに関する十一のテーゼ」から。

2015・5・18


折々のことば　鷲田清一　48

名人は定石からはずれても、それが定石になってしまうのですね。

山内志朗

能に「闌（たく）る」という境地がある。正しい型、「是風（ぜふう）」ばかりでかえって弛（たる）んでしまうとき、名人は修業中の者が絶対にしてはならない型、つまり「非風」をまぜるのだという。先端のファッションデザイナーが、あえて高校生の変形服とまがうばかりの服を作ることがあるように。一周して出発点に戻ったとしても階（かい）が違うのだ。哲学者による「〈畳長（じょうちょう）さ〉が大切です」から。

2015・5・19


折々のことば　鷲田清一　49

いっそ「記録」は過去ではなく、未来に属していると考えたらどうだろう。

畠山直哉

写真家はこう言って、「そう考えなければ、シャッターを切る指先に、いつも希望が込められてしまうことの理由が分からなくなる」と続ける。震災前のことばとは思えない。写真だけではない。家庭で淡々と子どもの日常を記録する母親のふるまいにも、役所で誰のためともなくこつこつ書類をとじる人の作業にも、きっと密（ひそ）やかな祈りが込められている。「話す写真」から。

2015・5・20


折々のことば　鷲田清一　50

聖徒や偉人は他人に向かって何も求めない（略）彼らはあれこれと諭す必要すらない。彼らがただいるというだけでよい。

アンリ・ベルクソン

この人がいてくれてよかった、と心底思える人がいる。自分にはたぶん無理だろうが、こんな人になれればと憧れ、まねることだったらちょっとはできる。そういうところから道徳は少しずつ身についてゆく。道徳の力は、人を強要するのではなく、むしろ招くところにある。「道徳と宗教の二つの源泉」（森口美都男訳）から。

2015・5・21

折々のことば
５１～５５

今年はようお照らしがありまして

門徒のおばあさん

折々のことば　鷲田清一　51

みずからの中の偉大なものの小ささを感ずることのできない者は、他人の中の小さいものの偉大さを見すごしやすい。

岡倉天心

品格、教養、有徳、勇気、美意識……。いずれも称賛すべきものではあるが、そういう偉大さも、その陰で、あるいは縁の下で、その人のために、食事を用意し、掃除をしている人たちの沈黙の行為がなければ何ものでもない。このことを知り尽くしているか否かに、その「大きさ」はかかっている。「茶の本」（桶谷秀昭訳）から。

2015・5・22

折々のことば　鷲田清一　52

あのさあ、お父さん、あたしのこと怒るんなら最後まで怒れば？

重松清

叱責と慰め、励ましと制止、そのあいだで右往左往しているのはわかる。いっしょに揺れてくれて、うれしい。でももっと揺れているのは私なんだから、ちゃんと壁になっていてくれなくちゃ……。思いやりすぎて「まあな」「そんなことないさ」としか言えない父と、次の一歩を踏み出したくもちょっと自信のない娘の、ぎこちないやりとり。「団旗はためく下に」から。

2015・5・23

折々のことば　鷲田清一　53

今年はようお照らしがありまして

門徒のおばあさん

石川県に帰省した僧侶のもとに門徒さんから大きな白菜が届けられる。「みごとな白菜ですね」と言うと、自分の努力や工夫については一切口にせず、自分はほんのささやかなお手伝い、お日さまがよく照ってくださったのでこんなになりましたとの返事。人間に独りでできることなんてまずない。つねに他に恵まれてこそ人は在る。一楽真「この世を生きる念仏の教え」から。

2015・5・24

折々のことば　鷲田清一　54

これは偉大なる空振りです

梅原猛

戦後すぐ、京都大学哲学科で開かれた田辺元の主著の批評会で、二十歳そこそこの学生が大先生の本をこう断じ、先輩からこっぴどく叱られる。何としても知りたいという真理への強い意志を称えながら、だがこの道はだめだと断言する梅原さん。いま後輩を奮い立たせようというときも、満面笑みを湛えながら、しかし厳しくこう言う。「梅原猛の授業　仏になろう」から。

2015・5・25

折々のことば　鷲田清一　55

あしたのそのつぎに思いを描きます。まだ見えないけど、なんとなく見えるかな、を大切にします。

日比野克彦

アーティストの主宰する「明後日新聞社」の宣言である。明日の姿というのは、いま自分が立っている視点からしか描けない。あたりまえのことだ。だから日比野さんは、今日のニーズの延長ではなくその彼方にあるものを描こうという。現下の視野の内には位置づけようのないもの、それを描くのがクリエーティブな活動だ、と。

2015・5・26

折々のことば
５６～６０

どないかします

東大阪の工場主











折々のことば
６１～６５

この子らを世の光に

糸賀一雄

折々のことば　鷲田清一　61

タンポポの花一輪の信頼が欲しくて、チサの葉いちまいのなぐさめが欲しくて、一生を棒に振った。

太宰治

棒に振った人生は、花一輪の信頼、葉一枚の慰めよりもはたして重かったか、と問い返したくなる。このことばはだから反語なのかもしれない。花一輪の信頼、葉一枚の慰めを得るためにこそ人生の彷徨はあるという。人生の行き着く先はいつも霧の中。「生れて、すみません。」という副題をもつ短編「二十世紀旗手」から。

2015・6・1

折々のことば　鷲田清一　62

この子らを世の光に

糸賀一雄

「この子らに世の光を」ではない。逆である。重度の障害児が「だれととりかえることもできない個性的な自己実現」をしているのを目撃した糸賀は、この子らと家族がもし不幸であれば、私たちの社会もまた不幸であると考えた。ともに死のうというほどの苦しみが、この子をもつことの喜びと感謝と誇りへと転じるべく尽力した。「障害福祉の父」、1968年に没す。

2015・6・2

折々のことば　鷲田清一　63

A friend in need is a friend indeed.

英語のことわざ

「最近、どう？」と聞くと、「いろんなことあるもんだね」。「そやなあ」と返してあとはしばし沈黙。積もる話をしようと久しぶりに会ったはずなのに、どうでもいいような話ばかりして、「じゃあ」と言って別れる。若い頃、ともに修羅場をくぐり抜けた思い出に、それ以上のことばは余計。言わずとも今の苦労具合も推し量れる。「いざという時にいてくれるのがほんとうの友」という意味。

2015・6・3

折々のことば　鷲田清一　64

いい思い出だけが残ること、それを成仏と言うんです。

橋本峰雄

逝った人との、生前はどうしても断ち切れなかったさまざまのこだわりが、時の移ろいとともに少しずつほぐれてくる。じかに向き合っていたときには解けなかった確執も少しずつ削ぎ落とされ、その人のいい面だけが残る。そういうかたちで亡き人のイメージが整ってくると、遺された人の心も安らぐ。京都・法然院の梶田真章貫主からうかがった前貫主のことば。

2015・6・4

折々のことば　鷲田清一　65

あら

詩　篠原資明

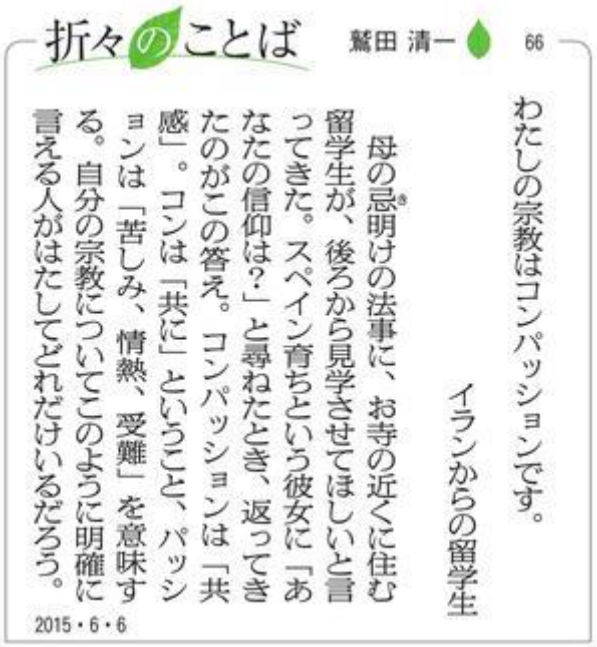
この詩人・美学者は、短詩を究めようとしてついに、一つの語を二つに分解しただけの詩型（超絶短詩）にたどり着いた。この詩句の元は「嵐」。「差　くら」（桜）、「ぎゃ　愚」（ギャグ）、「鉄が　くしゃ」（哲学者）などがうようよ。駄洒落すれすれだが、事の見え方がごそっと変わり爽快だ。詩に疎い人も、気がつけば試している。「言霊ほぐし」から。

2015・6・5

折々のことば
６６～７０

父上様、母上様　三日とろゝ美味（おい）しうございました。干し柿、もちも美味しうございました。

円谷幸吉


折々のことば　鷲田清一　66

わたしの宗教はコンパッションです。

イランからの留学生

母の忌明けの法事に、お寺の近くに住む留学生が、後ろから見学させてほしいと言ってきた。スペイン育ちという彼女に「あなたの信仰は？」と尋ねたとき、返ってきたのがこの答え。コンパッションは「共感」。コンは「共に」ということ、パッションは「苦しみ、情熱、受難」を意味する。自分の宗教についてこのように明確に言える人がはたしてどれだけいるだろう。

2015・6・6


折々のことば　鷲田清一　67

写生は絵となり、絵はついに模様となったのです。

白洲正子

能は、人の動作を写し取ることから始める。取るべきものは取り、他は捨てて、粋だけを集めた「絵」になる。それが幾代にもわたって反復されるなかで単純な型となる。型は「方眼紙の上にでも写したくなるほど正確」な「模様」であり、そこには技法だけがあって、想像や陶酔の入る余地はない。単純がもっとも難しい理由がここにある。「お能・老木の花」から。随筆家。

2015・6・7


折々のことば　鷲田清一　68

年とともに人生はクロノロジー（年代記）からパースペクティブ（遠近法）になり、最後は一枚のピクチュア（絵）になる

中井久夫

若いころはいつ何をしたかを年代で覚えている。歳がゆくと、年代は正確に言えなくても出来事の順番はまちがえない。そして最晩年はほとんどの記憶が絵のように同じ平面に並ぶようになる。なんとも豪奢なことではないか。精神科医が、イギリスの作家E・M・フォースターの述懐から着想したことば。「徴候・記憶・外傷」から。

2015・6・8


折々のことば　鷲田清一　69

父上様　母上様　三日とろゝ美味しうございました。干し柿、もちも美味しうございました。

円谷幸吉

「もうすっかり疲れ切ってしまって走れません」に至るまでに、兄姉、おいめいなど31人の近親に向けた、食べ物、洗濯、送り迎えなどへの礼が挟まる。「日本」の期待を背負い、ついに応えきれなかったマラソン選手の遺書は、大義ではなく身近な人たちの小さな支えに宛てられていた。東京五輪で銅メダルを取るも27歳で自死。

2015・6・9


折々のことば　鷲田清一　70

口ぐせのような　ありふれたラブ・ソング
今夜も君に歌うよ　本当の気持ちだから

忌野清志郎

だれもがついしでかすヘマやドジを愛おしみ、つねにちっぽけなもの、弱い者の側に立って抵抗してきた歌い手だからこそ、このフレーズも「誇り高く生きよう」というタイトルも、すなおに受けとめられる。「愛しあってるかい？」というライブでの呼びかけも、大事にしてもらってるかい、そのためにはまず君から大事にしないといけないよ、と言っているように聞こえる。

2015・6・10　JASRAC　出　1505752-501

折々のことば
７０～７５

くやしかあ

女子学生

折々のことば　鷲田清一　71

くやしかあ

女子学生

九州大学に集中講義に行った時のこと。卒論の草案を教授に酷評された学生が、控室に戻り、涙をためてこう叫んだ。腸からどくどく溢れ出てくるようなことばに圧倒された。若者たちのことばから地方の濃い響きが消えて久しい。「はらわた語」とでも呼んでみたい、口先だけでない、内臓から立ち上がってくることば。どんと体当たりしてくる魂のことば。

2015・6・11

折々のことば　鷲田清一　72

旦那さまだって、顔はむきだしだ。私は全身が顔なのだ。

モンテーニュ

ある人が、真冬に物乞いがシャツ一枚でいるのに驚き、どうしてそんな格好でいられるのか尋ねたとき、こう答えたという。いつごろから、人の存在は、身分証明書の写真のように顔に約められるようになったのだろう。かつては他人の佇まいに、後ろ姿に、いや指先にだって、その人が誰であるかを一目で見てとったのに。16世紀の思想家の「随想録」（松浪信三郎訳）から。

2015・6・12

折々のことば　鷲田清一　73

クルッテイナイ時も、当然おれはクルッテイナイと思っているし、クルッテイル時も、おれはクルッテイナイと思っている。

なだいなだ

自分に非があること、自分の考えに誤りがあること、自分の視線が偏向していること。これらを認めるのがひとは大の苦手。おのれの考えに固執する。だからこそ、問題が錯綜していて見えにくいのではなく、私のまなざしに問題があるのではないかと、つねに疑ってかかる必要がある。精神科医による「くるい　きちがい考」から。

2015・6・13

折々のことば　鷲田清一　74

人類学者は「ヴュジャデ」を通じてひらめきを求める。

トム・ケリー

はじめて見るのに、かつてどこかで見たことがあるように思うのがデジャヴュ（既視感）。ヴュジャデはその逆で、見なれたものをまるではじめて見るかのように見ること（未視感）。駄洒落である。偉大な発見はたいてい、ありふれたものを新しい目で見るところから生まれる。米国の経営者による「イノベーションの達人！」（J・リットマンとの共著、鈴木主税訳）から。

2015・6・14

折々のことば　鷲田清一　75

何を言っているかではなく、その人間が何を聞き取る人間であるのかを注視していれば間違う確率は少ない。

平川克美

医師、教員、そして何より政治家。世間でセンセーと呼ばれる人たちから昨今、どんどん削がれてきたのが、「聞き取る」この能力、この意志ではないか。この人がほんとうに心配していること、知りたがっていることが何かを見定めることが、恋愛にあっても、選挙においても肝要。２０１４年1月のツイッターから。文筆家。

2015・6・16

折々のことば
７６～８０

聴くとは、動けなくなることだ。

濱口竜介

折々のことば　鷲田清一　76

同じ釜の飯を食う

言い習わし

会社のことを英語でカンパニーという。パンを意味するラテン語panis（パーニス）に、「共に」を意味する接頭辞comをつけた合成語。食料を分けあって食べる、ひいては食いぶちをともにするという意味。会社が、国家が、もはや個人を最後まで守ってくれないだろうとの予感のなかで、いかに生き延びていくかは、苦楽を共にした仲間をどれだけもっているかに懸かっている。

2015・6・17

折々のことば　鷲田清一　77

「公」のもの、皆のものであるからこれは私のもの以上に大切にしなくてはいけないというふうになりにくい。

加藤哲夫

この国では公共的なものは「誰のものでもない」ものと解されがちで、皮肉にも「だから私が勝手にしてもいいのだ」というふうに私物化される。公園や公衆便所など「公」がつく場所が汚い理由がここにある。「公」を、皆のもの、人びとに開かれたものへと裏返す必要がある。NPO活動の先駆者による「市民の日本語」から。

2015・6・18

折々のことば　鷲田清一　78

われわれは一つの誤りを正そうとして他のものかを誤らせないように注意しなくてはならない。

T・S・エリオット

憲法の約束も、地域で継承されてきたしきたりも、叡智（えいち）のタペストリーのようなもの。糸を一本抜けば、いつか全体が解（ほど）けてしまう。その前に、無念のまま逝った人びとを胸に工夫を重ねた先人に、深く思いをはせること。先人がこれだけは守らんと誓ったことを反芻（はんすう）すること。「文化の定義のための覚書」（深瀬基寛訳）から。詩人。

2015・6・19

折々のことば　鷲田清一　79

聴くとは、動けなくなることだ。

濱口竜介

「聴く」といいながら、ひとはたいてい聴きたいこと、理解できることしか聴かない。ほんとうの「聴く」とは、これまでそのようなものがあるとすら思っていなかったような他人の心の疼（うず）き、心の震えに触れて、身じろぎできなくなることだ。そしてそれにとことん身を晒（さら）すこと。今年1月、砂連尾理（じゃれおおさむ）のダンス公演「愛のレッスン」アフタートークでの若き映像作家の発言。

2015・6・20

折々のことば　鷲田清一　80

なまいきが民主的なんだ

森毅

なまいきと思えるくらいの友人関係がいい。友だちといえばすぐに同級生、同期生のことになってしまう。20歳くらい年の差のある友人がいてもいいのに。友だちの幅がとても薄くなっている。年長者を「上級生」と考えずに、「友人」と思うこと。そして対等に話すこと。そこからやり直さないと世界は広がらない。名物数学者のエッセー集「ものぐさ数学のすすめ」から。

2015・6・21

折々のことば
８１～８５

兵隊は地図を見たことがありません

浜田知明

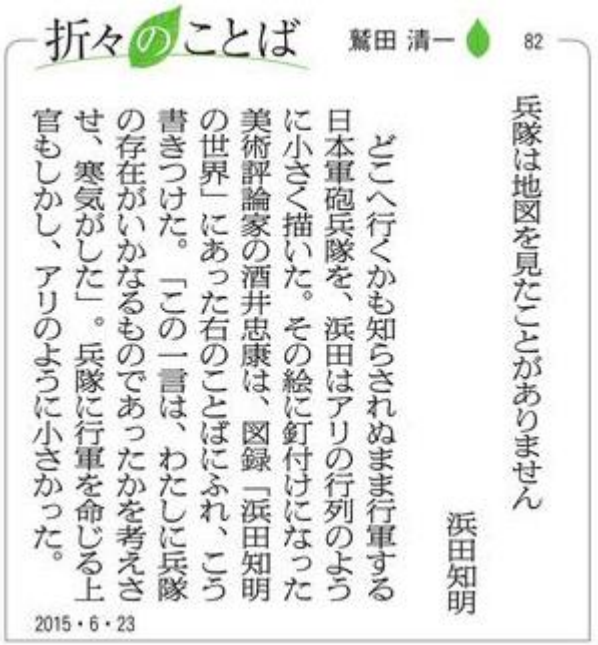

折々のことば　鷲田清一　81

わたしではあかんみたいですわ

ある介護スタッフ

介護には、人と人とのパーソナルな関係という面がどうしても外せない。だから、世話する人とされる人の相性がよくないことから、思いもしないトラブルが起こる。施設ではそういうときは早めに担当をチェンジする。相性の悪さを越えようとしないでいい。それより、いずれを傷つけることもなくこのようにあっけらかんと言える空気を保つことが、現場ではきっと大事。

2015・6・22


折々のことば　鷲田清一　82

兵隊は地図を見たことがありません

浜田知明

どこへ行くかも知らされぬまま行軍する日本軍砲兵隊を、浜田はアリの行列のように小さく描いた。その絵に釘付けになった美術評論家の酒井忠康は、図録「浜田知明の世界」にあった右のことばにふれ、こう書きつけた。「この一言は、わたしに兵隊の存在がいかなるものであったかを考えさせ、寒気がした」。兵隊に行軍を命じる上官もしかし、アリのように小さかった。

2015・6・23

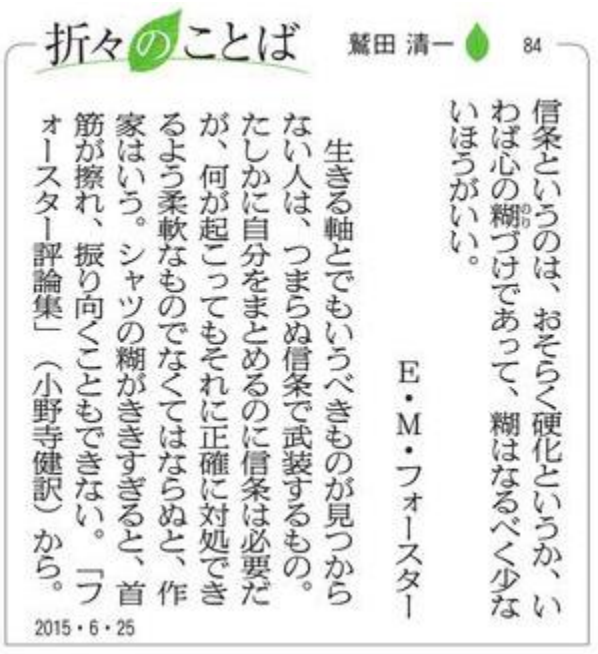

折々のことば　鷲田清一　83

上から見下ろさずに全体を見る

大峯あきら

これが俳句の理想だと、元哲学教授で僧侶・俳人の大峯は言う。自分を外して世界を上空から俯瞰できるような場所はない。しかし、世界を自分の場所からしか見ないのもだめ。ゆがみが出る。とすれば、世界が自分の内部を吹き抜けるところを見る？あるいは、世界の地響きに耳を澄ます？これは人生の難問でもある。今年5月18日付の本紙大阪本社版夕刊記事から。

2015・6・24


折々のことば　鷲田清一　84

信条というのは、おそらく硬化というか、いわば心の糊づけであって、糊はなるべく少ないほうがいい。

E・M・フォースター

生きる軸とでもいうべきものが見つからない人は、つまらぬ信条で武装するもの。たしかに自分をまとめるのに信条は必要だが、何が起こってもそれに正確に対処できるよう柔軟なものでなくてはならぬと、作家はいう。シャツの糊がききすぎると、首筋が擦れ、振り向くこともできない。「フォースター評論集」（小野寺健訳）から。

2015・6・25


折々のことば　鷲田清一　85

人と違うことをして目立つのは誰でもできる。人と同じことをして秀でなさい。

西靖の父

多くの若者は就職先を選ぶにあたって「自分にしかできないこと」は何かと思い悩む。だが、新入社員にその人にしかできないことをさせる会社はない。誰でもできることをまずさせ、点数評価ではなく、どんな工夫や努力をするかをじっと見る。何を任せられるかを判断するために。毎日放送のアナウンサーの西が幼い日に父から何度も言い聞かされたことば。

2015・6・26

折々のことば
８６～９０

白だ黒だとけんかはおよし　白という字も墨で書く

昔の都々逸

折々のことば　鷲田清一　86

嫉妬を生むものは、自他のあいだの大きな不均衡ではなく、むしろ近似である。

デイヴィッド・ヒューム

能力や財産に関して、途方もなく差がある人に、ひとは嫉妬しない。ひとが嫉妬する相手はむしろ、境遇が近い人、優劣や運不運など、その人との比較がいちいち気になってしかたがない人である。その意味で、嫉妬の相手は、実はもっとも気がかりな自分が映っている鏡なのである。人生へのこの透視力を、哲学者は20代半ばでもう身につけていた。「人間本性論」から。

2015・6・27

折々のことば　鷲田清一　87

彼らは、この文明世界に真の悲劇などありえないと信じているからこそ、悲劇をもてあそんでいるのである。

オルテガ・イ・ガセット

スペインのこの思想家は、第1次世界大戦後しばらくして、この惨劇の根に現代人の「慢心」を見るようになった。「慢心」とは、自分に満足し、「自分以外のいかなる審判にも自分をゆだねない」こと。19世紀以降、人類はそうした「慢心したおぼっちゃん」の時代に入ったと警鐘を鳴らした。「大衆の反逆」（神吉敬三訳）から。

2015・6・28

折々のことば　鷲田清一　88

白だ黒だとけんかはおよし　白という字も墨で書く

昔の都々逸

何もわかっていないんだね、と言われているみたい。どんな違いも対立も、しょせん、ことばの戯れ。ことばはものごとを分けて立体的に見せてくれるが、それらを単純化し、対立をむしろ固定しもする。しかしさらに、ことばにはその対立を溶かす力もある。ことばは、噛み切れないものを噛み切れないままに表すときにもっとも深くなる。苦労人はそれをよく知っている。

2015・6・29

折々のことば　鷲田清一　89

光が光と闇とを顕わす

スピノザ

「白だ黒だとけんかはおよし　白という字も墨で書く」という、昨日の都々逸を、この17世紀オランダの哲学者のことばの横に並べたい。真理という知性の光によって真と偽が浮き彫りになるように、語りえないもの、ことばの及ばないものも、ことばによってはじめて知られる。世界をこじ開ける力。人生の喜びも悲しみも、そして空しさも、ことばなしには立ち現れない。

2015・6・30

折々のことば　鷲田清一　90

チョット・マッテ・クダサイ……
Never leave me kudasai

ハワイの往年のポップス

懐かしの曲「NEVER SAY GOODBYE　ちょっと待って下さい」から。日本ではかつてゴールデン・ハーフの歌ではやり、今はなかの綾が切々と歌う。「待って！　私を置いてかないで」というせっぱつまった英語の表現に、「下さい」という、聞き知った懇願のフレーズがちぐはぐにつながる。まちがった言葉遣いのkudasaiなのにちゃんと通じるぶん、余計せつなさが増す。

2015・7・1　JASRAC　出　1507256-501

折々のことば
９１～９５

病気でやめるよりはよい

旧友

折々のことば　鷲田清一　91

各人が責任を問われる必要のないことから受ける苦痛を、可能なかぎり減らさねばならない。

市井三郎

たまたまこの国、この民族の一員として生まれたことで強いられる苦痛。この性、このような体つきに生まれたことで受ける苦痛。本人のあずかり知らぬ属性によって受けるこれらの不条理な苦痛を取り除くことが、「自由」や「平等」といった理念よりもっと根本的な倫理的要請だと、哲学者はいう。「歴史の進歩とはなにか」から。

2015・7・2

折々のことば　鷲田清一　92

きみが　シャッターを押すから
私の悲しみは　全部笑っている

宮尾節子

「大丈夫だよ」「元気だよ」と声をかけてくれているようなカメラの視線、あなたの視線。それに私の悲しみも溶かされる。詩集「明日戦争がはじまる」から。そういえば、新喜劇だったか「わし、元気か？」というせりふがあった。自分で自分をいじくりまわすのはやめて、相手に判断をゆだねる。「ハウ・アー・ユー？」ではなく、「ハウ・アム・アイ？」。いい質問だ。

2015・7・3

折々のことば　鷲田清一　93

快晴。天婦羅蕎麦、鯛焼を食べて「荘子」を読む。

横尾忠則

「無」に遊び、たゆたう思想を読むのだから、食物玩味から離れるほうに関心があるとだれもが思うのに、この美術家はさくっとした揚げ物に舌打ち、下町の子どもがとろける粉ものの甘菓子をほおばりつつ、荘子の世界に入ってゆく。自由自在というこの境地、食べ物を腹に蓄えるというよりも、体に通すという感覚なのだろうか。「週刊読書人」での5月17日の日記から。

2015・7・4

折々のことば　鷲田清一　94

病気でやめるよりはよい

旧友

国立大学長の職を退いたあと、旧友が、かならずしも万全でない私の体調を慮り、同僚とも相談して、家から至近距離にある彼の大学に迎え入れてくれた。長らく授業から離れていたので、学生たちとじっくり哲学の文献を読めるのがうれしかった。が、突如、異動せざるをえない事情が発生した。わびようもなくうなだれるばかりの私に、彼はぽつり、こう返したのだった。

2015・7・5

折々のことば　鷲田清一　95

旨い料理は傾向として味が薄いと感じる。これはまさに味が舌に近寄るのではなく、舌が味に寄っていこうとするのである。

深澤直人

この希代のデザイナーは、デザインに奥行きがあるというのは、それを使う人の感覚の触手が伸びてゆく余地がたっぷりあることだと言う。便利すぎるのも、細部まで使い方が決まっているのもよくない。優れたデザインは人を受け身にしない。逆に人のセンサーを引き込み、おずおずと立ち上がらせる。「デザインの生態学」から。

2015・7・6

折々のことば
９６～１００

心からわかりあえないんだよ、
すぐには
心からわかりあえないんだよ、
初めからは

平田オリザ











折々のことば
１０１～１０５

都会の人たちは、呼吸が浅いまま人と付き合っている感じがするんですよね。

西きょうじ

折々のことば　鷲田清一　101

外国人やちょっとしんどい人など〈異物〉が入ってきても、受けとめる力が高くて、場が温かいんです

上田假奈代

大阪・釜ケ崎のあいりん地区の元日雇い労働者たちのことを言っている。「おじさんたちは人生経験豊富なので、引き出しが多い」と。苦労は人の懐を深くする。上田は、社会とのつながりを絶たれた人たちの支援に、詩や音楽などの表現をとおして取り組む、やはり懐の深い異能の人、不屈の人。「フィランソロピー」368号から。

2015・7・12

折々のことば　鷲田清一　102

ここにはねえ、ムッシュー、パリでいちばん幸福な人が住んでいるんですよ

パリのタクシー運転手

パリを訪れたとき、わざと遠回りをするタクシーがあるから気をつけろと知人に言われた。だまされまいぞと、途中ある墓地にさしかかったとき、教会のようなボックス型の墓を見つけたので、「ここにはホームレスの人が寝泊まりしているそうですね」と土地通ぶったら、すぐに返ってきたのがこのことば。人生、何が幸福かは誰にも言えないという哲学がそこにはあった。

2015・7・14

折々のことば　鷲田清一　103

世界の変化のスピードがこれだけ速くなると、〈地図〉はもはや役に立たない。必要なのは〈コンパス〉です。

伊藤穰一

不確定な要因が錯綜し、複雑に折り重なって展開する現代世界では、事前の予想図にしたがって特定の航路を選んでもすぐに想定外の事態にぶつかって右往左往することになる。大事なのはだから、「何をしたいか」というコンパスをしっかりもつことだと、マサチューセッツ工科大メディアラボ所長は言う。「WIRED」5号から。

2015・7・15

折々のことば　鷲田清一　104

この一枚の紙のなかに雲が浮かんでいる

ティク・ナット・ハン

雲なしには水はなく、水なしには樹は育たない。そして樹なしに紙はない。だからこの紙のなかに雲がある。くわえて陽光も樵の存在も欠かせない。いずれの一つも、それ以外のすべてによってある。同じように、個人の内なる瞑想も社会全体につながっている。「行動する仏教」を実践するヴェトナム出身の禅僧による「仏の教え　ビーイング・ピース」（棚橋一晃訳）から。

2015・7・16

折々のことば　鷲田清一　105

都会の人たちは、呼吸が浅いまま人と付き合っている感じがするんですよね。

西きょうじ

都市生活では、ことばを受け取り、感触を確かめ、返すべきことばを練る前に、相手のことばに「反応する」ことが先に来がちだ。流通しているありきたりのことばをオウムのように返し、不意をついて出た相手のことばにすぐキレる。もっとオフラインの時間、「呼吸を深くする時間」を作ろうよと、このベテランの予備校講師は言う。津田大介との共著「越境へ。」から。

2015・7・17

折々のことば
１０６～１１０

現場のプロには、これを知ったらしんどくなるという直感がある。

ある看護師

折々のことば　鷲田清一　106

現場のプロには、これを知ったらしんどくなるという直感がある。

ある看護師

介護をはじめケアの現場では、人を「支える」ことが途方もなく重くなることがある。いろいろ事情を知ってしまうと、ひとりの人間としていやでも深く巻き込まれてしまう。その消耗が重なって、やがて燃え尽きもする。割り切ることでかろうじてできてきたところに、割り切れないものを持ち込むことの危うさを、プロはよく知る。現場の一筋縄ではいかないところ。

2015・7・18

折々のことば　鷲田清一　107

ハナニアラシノタトヘモアルゾ
「サヨナラ」ダケガ人生ダ

井伏鱒二

なんという超訳。原文は、唐代の詩人、于武陵の「勧酒」のなかの「花発多風雨／人生足別離」という一節。花は咲いてもやがて風雨に散る、人生には別れがつきものだ、と詩人は詠む。人生は、出会いよりも別れのほうが後に引くみたい。「厄除け詩集」から。ちなみに寺山修司はこれを承けて、「さよならだけが人生ならば……人生なんかいりません」と詩に書きつけた。

2015・7・19

折々のことば　鷲田清一　108

なみだは　にんげんのつくることのできるいちばん小さな　海です

寺山修司

どうしても譲れないこと、受け容れられないこと。あまりに悲しくてやりきれないこと。小さな者たちの小さな、小さな抗議は、けして、けして小さくはない。どっと押し寄せる波に溺れてしまいそうな大海ではなくて、自分たちでじわりじわり広げてゆく海。「小さな海」までひらがなが続くのがいい。「いちばん短い抒情詩」の全文。「愛さないの、愛せないの」から。

2015・7・20

折々のことば　鷲田清一　109

〝つながり〟は必ず両手をつなぎ合っているわけではなく、片手はブラブラと泳がせておくことだって時に必要なのだ。

アサダワタル

人と人とのつながりや絆はとても大切なものだが、それを気持ちを同じにすることというふうに考えると、逆に息苦しくなる。群れずに一人でいることは、「未だ見ぬあなたと未来の〝居場所〟を共に創り上げるために今必要な堂々たる〝逃げ場〟」なのだと、「雑業家」を名のるアサダは言う。「コミュニティ難民のススメ」から。

2015・7・21

折々のことば　鷲田清一　110

閑さや岩にしみ入蟬の声

松尾芭蕉

あまりに有名な一句。沈黙のなかにびーんと張りつめた空気がある。言葉は音。この句を構成する17音のうち「い」音が7。蟬の声に擬したこの音が効果を高めていると、ドナルド・キーンさんは「古典を楽しむ」で指摘する。同じ「おくのほそ道」から「夏草や兵どもが夢の跡」を引き、ここにも「お」の連続が聞ける、と。そして「O」は古より「悲しい音」なのだとも。

2015・7・22

折々のことば
１１１～１１５

この国では異見を持つ行為そのものが、空気を読めないってことになってしまうらしいんです。

福田和香子

折々のことば　鷲田清一　111

テーブルが汚れていたらそっと拭き取るような、あたりまえの気遣いがあればいい

春田有二

「お気持ちわかります」と言われると、「そんなに簡単にわかってたまるか」と返したくなる。被災地ではこんな「親切の行き違い」がよく起こる。だから「たいそうなこと」は必要なく、そっと見守ることが大事と、東北でも支援にあたる兵庫の医師は言う。ただし「なにもしないでいるというのは結構勇気がいることなんですよ」とも。加藤寛・最相葉月「心のケア」から。

2015・7・23

折々のことば　鷲田清一　112

一枚の布の尖端がほころびはじめて、その織り目の細い一本の繊維が風に揺らぐような場所から、言葉が生み出される。

佐々木幹郎

若い頃、私は「悲しみ」という語だけは使うまいと決めていた。感情の微細な襞を一包みにしてしまう風呂敷みたいだから。詩人は、「悲しみ」の感情こそ一枚の布のようなものだと言う。それがさまざまの事象に触れつつ綾を広げてゆく尖端の、そのほつれた部分に抒情が生まれるのだと。「中原中也　悲しみからはじまる」から。

2015・7・24

折々のことば　鷲田清一　113

いかに日常ちゃんと挨拶するかがまず大事で、それだけでいいのよ。それだけでいい。

笑福亭鶴瓶

「おはよう」「ゲンキー？」というふうに、挨拶ではほとんど内容のない語をやりとりする。挨拶においては、問われていることがらよりも、自分がだれかに問い、問われているということそのことに意味があるからだ。密着はしないで、しかしたがいの境涯を気遣いあうというスタンスでいることの合図として、挨拶はある。5月29日のTBS系「A－Studio」から。

2015・7・25

折々のことば　鷲田清一　114

二つの行き過ぎ。理性を排除すること、理性しか認めないこと。

パスカル

憎悪をまるで正義のように語るときも、ひたすら合理的に正義を語るときも、ひとの理性はうまく機能していない。非合理に流されないために理性はあるが、もう一方で、合理から漏れ落ちるものをすくい上げるためにも理性はある。そういえば、ドイツ語の「理性」（Vernunft）の原義は「聴き取る」ということにある。「パンセ」（前田陽一・由木康訳）から。

2015・7・26

折々のことば　鷲田清一　115

この国では意見を持つ行為そのものが、空気が読めないってことになってしまうらしいんです。

福田和香子

式で君が代を歌わない教諭を笑う友だち、気づかないふりした自分、目を塞いだ管理職。そんな苦い記憶から抜け出るためにデモに参加したと、この学生は言う。周りのコンテクスト（脈絡）に自分をはめ込むのでなく、自らコンテクストを紡ぎだしてゆく。個人が一人の「市民」となるのはそこからだ。本紙7月11日の記事から。

2015・7・27

折々のことば
１１６～１２０

「わかる、わかる」と言うたときは失敗や。

河合隼雄

折々のことば　鷲田清一　116

ハードルにぶつかって転びそうなのをグッと立て直す能力は、都市から離れれば離れるほど高くなる。

為末大

バランスを崩して転びそうになったときの回復力は、整備されたトラックで練習する都会の子より、ぬかるみや凸凹のある道でふだん練習している生徒のほうが高い。整地が子どもの力を削ぐ？　オリンピックに連続3回出場し、いま全国でスポーツ教育に取り組む元陸上選手がそう語る。「伊東豊雄　子ども建築塾」から。

2015・7・28

折々のことば　鷲田清一　117

「わかる、わかる」と言うたときは失敗や。

河合隼雄

「聴かせて」と言っても、聴かれるほうには、こんな苦しみ、言ったってわかるはずがない、さっとわかられてたまるかという思いがあり、聴くほうにも、わかるけどわかりたくないという思い、本当にわかっているのかという心細さがにじむ。わかってもらえなかったけれど聴いてもらえたと、納得がゆくにも時間がかかる。臨床心理学の巨匠がお弟子さんに語ったことば。

2015・7・29

折々のことば　鷲田清一　118

ものの味わいの判る人は人情も判るのではないかと思いやす

ある料亭の主人

料理は、素材が選りすぐったものであればもちろんうまいが、それ以上に、私を喜ばせようとだれかが懸命に働いてくれているのを知ることでいっそううまくなる。自分が大事にされていると感じさせてくれるものは、おいしい。だから私は、料亭の奥まった個室でなく、厨房の見えるカウンターでいただくのが好き。幸福感に満たされるから。霜山徳爾「人間の限界」から。

2015・7・30

折々のことば　鷲田清一　119

出会ったのは　なにかの　ご縁ですね　でもお別れも　またご縁なのです……さようなこと　ならば　さようならの　ことば

浜田真理子

自分をほどきたくなったときによく聴くのがこの人の歌。ふわんと力の抜けたその歌語りに慰められる。お別れはしたくない。けれどいつか来るかもしれぬ日のためにお別れのことばを入れた「小箱」は用意しておきましょう……と囁きかける。「縁」は恵まれるものであって、人が操るようなものではないだろう。「胸の小箱」から。

2015・7・31　JASRAC　出　1508851-501

折々のことば　鷲田清一　120

顎の裏を打ちに出てみれば白ける嘯不意のゴロ寝に俺は困りつ

阿倍野仲間

「週刊朝日」にかつて、初春に百人一首の替え歌を載せる恒例の特集があった。1977年の大賞作は、前年にあった元世界チャンピオンのボクサー、モハメド・アリとプロレスのアントニオ猪木の異種格闘技を詠む。猪木が寝ころんだまま攻めるので困り果てたアリの心情を思いやって。元歌は「田子の浦にうち出でてみれば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ」（山部赤人）。

2015・8・1

折々のことば
１２１～１２５

待つ身が辛(つら)いかね、待たせる身が辛いかね

太宰治

折々のことば　鷲田清一　121

社会は幼児教育の中に自己の夢をひそかにかくしておくが、おとなの生活の中には、社会の現実とそのみじめさが読みとられる

ミシェル・フーコー

ひとは教育学のなかで自己の「黄金時代」を夢見るのだと、この思想家は言う。現下の惨めさから目をそらすべく。だが、おとなたちのその見果てた夢を押しつけられるほうはたまったものではない。子どもは無垢(むく)な存在ではない。おとなと同じか、それ以上にもがき苦しんでいる。「精神疾患と心理学」（神谷美恵子訳）から。

2015・8・2

折々のことば　鷲田清一　122

風呂に入って死んだやつはおるけど、風呂に入らんで死んだやつはおらん。

友人の叔父

亡くなる寸前まで風呂に入りたがる人の介護も骨が折れるが、風呂に入りたがらない人の介護もなかなかに難儀である。でも、ひどく手がかかったこと、こういう憎まれ口を投げつけられたことも、いずれ懐かしい思い出になる。そう思えば我慢もできる。もし苦労を笑ってこぼせる人がそばに一人でもいれば、こんな売りことばに買いことばもとくと楽しめる。

2015・8・3

折々のことば　鷲田清一　123

うっすらと哀(かな)しいのがやりきれないんだ。ひどい哀しさなんかまだいいや、少し哀しいのがいつも浸(し)みついちゃってるんだよ

幸田文

人生、ままならない。思いやりが過ぎると何も言えなくなる。気遣いが過ぎるとあてつけになる。事が思いとは逆に運ぶ。ほんとうはそんなこと、つゆ願ってはいなかったのに……。このちぐはぐがひりひり痛くて。小説「おとうと」から。１９６０年に市川崑監督が映画化。半世紀後、山田洋次監督が同名の映画を市川監督に捧げた。

2015・8・4

折々のことば　鷲田清一　124

A dog has an owner.
A cat has a staff.

英語のジョーク

「犬にはご主人、猫には使用人」「犬には飼い主がいる、猫には取り巻きがいる」などいろんな訳があるようだが、スタッフというのは言い得て妙だ。犬は飼い主におもねり、猫には飼い主がおもねる、とも言われるが、世話しているつもりが世話されているという関係は、人のことを言ってるよう。幼い頃に化け猫の映画を見てから猫が苦手になったが、〈所有〉を超えたこの関係には憧れる。

2015・8・5

折々のことば　鷲田清一　125

待つ身が辛(つら)いかね、待たせる身が辛いかね

太宰治

借金返済の算段に行ったはずの太宰が、いくら待っても帰ってこない。人質にされた檀(だん)一雄がしびれを切らし、やっと居所を突きとめたら、なんと井伏鱒二宅で気楽に将棋を指していた。人を食った言い訳だが、期待されるのはたしかにしんどい。期待されなさすぎも辛いが、期待されすぎというのはいっそう辛い。ふと今どきの子どもを思う。檀の「小説　太宰治」から。

2015・8・6

折々のことば
１２６～１３０

きみ、ダイヤどころやない。みんな人生のダイヤ狂ったんや。

阪急電鉄の駅員

折々のことば　鷲田清一　126

場所を借りるときは、行ったときよりきれいにして帰れ。

芸術系の大学で映画制作を教えるこの監督は、撮影実習を私の家ですることになって、最初に学生たちにこう告げた。場所を借りたことへの感謝の気持ちをそういう形で表せということだろう。が、それは、何かに取り組むときは、そのしまい方まで念頭に置いて始めろという、プロの心構えも伝えていた。うちが世話になっている庭師はいつも無言でそうしてくれている。

林海象

2015・8・7

折々のことば　鷲田清一　127

髪の毛が後退しているのではない。私が前進しているのである。

ソフトバンクの社長は「髪の毛の後退度がハゲしい」とからかわれて、こう反撃した。ネットではよく知られているエピソードらしい。孫さんが空気を切って突進している様が目に浮かぶよう。優れた企業家はなかなか逆転思考にたけている。２０１３年1月8日のツイッターから。ちなみに、今日8月8日を、ハハハ、「笑いの日」として祝日にしようという運動もある。

孫正義

2015・8・8

折々のことば　鷲田清一　128

もし君が身を救いたいと思うならば、君の皮膚を危険にさらしなさい。

怖いことばだけれど、やっぱりほんとうだと思う。ひとにはどうしようもなく弱いところがあって、自身のことですら自分ひとりでは支えきれない。最後の最後のところでだれかに支えられるほかない。そういう支えに幸運にも恵まれたければ、弱さ、脆さという、みずからの生肌を隠してはならないと、現代フランスの思想家は言う。「五感」（米山親能訳）から。

ミシェル・セール

2015・8・9

折々のことば　鷲田清一　129

誰も負けない社会は生きやすいけれど、負けないために勝者にならないといけない世の中は生きにくい。

長年、アフリカでゴリラの調査をしてきた山極さんは、ゴリラには優劣の意識がないと言う。喧嘩になっても仲裁が入り、対等なところで決着がつく。だから力が劣っても、強い者に媚びるところがない。そんなゴリラと同科のヒトが、序列と上下関係に重きを置くニホンザルに近づきつつあると憂う。「『サル化』する人間社会」から。

山極寿一

2015・8・10

折々のことば　鷲田清一　130

きみ、ダイヤどころやない。みんな人生のダイヤ狂ったんや。

阪神での激震の直後、大震災とはつゆ知らず、「ダイヤそうとう遅れますよね？」と聞いてきたサラリーマンに駅員が返したことば。人としての無力に打ちのめされても、ツッコミを入れつつ、泣き笑いの会話をすることで、関西人はなんとか上を向くことができた。このユーモアの力が、茫然自失の苛酷な現実のなかで泉のように噴きだした。藤尾潔「大震災名言録」から。

阪急電鉄の駅員

2015・8・11

折々のことば
１３１～１３５

哲学とは、みずからの始点が更新されてゆく経験のことである。

モーリス・メルロ＝ポンティ

折々のことば　鷲田清一　131

哲学とは、みずからの始点が更新されてゆく経験のことである。

モーリス・メルロ＝ポンティ

世界について考えるとき、これ以上さかのぼれない出発点だと見なしてきたものが、じつは先行する別の働きによって実現されたものであることに気づくこと。始点だと思っていた場所が、別のある隠れたいとなみの終点であったと知ること。同じことは、ひとがみずからの人生をふり返るときにも言える。20世紀フランスの哲学者による「知覚の現象学」序文から。

2015・8・12

折々のことば　鷲田清一　132

①「愛とは、理解の別名です」
②「今日はその話はやめにしましょう」
Siri（シリ）

画面に向かって質問をすれば何でも答えてくれるSiriという機能がiPhone（アイフォーン）にはあるらしい。知人が「愛とは何か」と尋ねた。返ってきた答えが①。私なら「じゃあ恋は誤解の別名ですか？」と返したくなるところだが、彼は翌朝も同じ質問をした。その答えが②。履歴も探りつつ人ごとに違う応じ方をするソフトもすごいが、質問者の心理にも妖しい興味が湧く。

2015・8・13

折々のことば　鷲田清一　133

罪ふかきもののごとくに昼ながら浅草寺のにはとりの声

斎藤茂吉

1937（昭和12）年、歌人50代半ばの作。啼（な）くべきではないときに啼く鶏の声。年老いても、残照のように消えゆくことなく、不意に当てもなく噴きだす欲望のぎらつき？　あるいは、前年の二・二六事件、そして迫り来る日中戦争の足音が聞こえるなかで、歌うことの意味を定めかねている？　そんな自分への戸惑いが、鶏の姿に重なる。第十二歌集「寒雲」から。

2015・8・14

折々のことば　鷲田清一　134

未整理の過去と手さぐりの未来との間に点描でしか描けない現在がある。

伊達伸明

一つの意味にすっきりとまとめられる過去の出来事など、たぶん嘘（うそ）である。一つに結ぶ未来の像もきっとすぐ無効になる。そして現在。どの場所から見るかによって現れ方はさまざまで、単一の視点から捉えるのはとうてい不可能だ。この美術家は一つにまとめようとする力に、飄々（ひょうひょう）と抗（あらが）いつづける。多様性を徹底して擁護しようとする。詩「とつとつな音」から。

2015・8・15

折々のことば　鷲田清一　135

ほがらかとは、恐らくは、
悲しい時には悲しいだけ
悲しんでられることでせう？

中原中也

「ほがらか」とは、明るく光るさま。悲しみが明瞭すぎて、惑うところがない。それほどにくっきりと悲しい。そんなときはむしろ悲しみにとことん浸ること。それしかできないし、そのほうがいっそさわやかだ。詩「酒場にて」から。そういえば「私の上に降る雪は／いとしめやかになりました……」という一節も中也にはある。

2015・8・16

折々のことば
１３６～１４０

目的を手近（てぢ）かな低いところにおくから、高遠の目的と、そのために必要とされる多くのものとは、一切きりすてられてしまふ

田中美知太郎

折々のことば　鷲田清一　136

私は死んだものをただ懐かしむのはいや。生きているものを懐かしいと思いたいの。

稲葉真弓

あのとき私はなぜあんなふうに思ったのだろう。私はいま何をどうしたいのだろう。私はどこで生きたいのだろう……。たしかに私であったし、いまも私なのに、私にはなぜそうなのかがわからない。私でありながら、ずっと「私のかたわらを通りすぎて」きた、自分でもよくわからない「今の自分」を、慈しみつつ透かし見たいと、短編「午後の蜜箱」の登場人物は言う。

2015・8・18

折々のことば　鷲田清一　137

胎児は……僅か一週間で、あの一億年を費やした脊椎動物の上陸誌を夢のごとくに再現する。

三木成夫

胎児は受胎後しばらくして、軟骨魚類から爬虫類、哺乳類の顔貌を次々とその面に漂わせ、最後にヒトの顔になるという。ヒトの顔にサメやクマなどの「おもかげ」が浮かぶのを見て、どこか懐かしく感じるのも理由のあることなのだ。ヒトと他の生きものとを、差異ではなく連続のほうから見ること。解剖学者の「胎児の世界」から。

2015・8・19

折々のことば　鷲田清一　138

生地が、ずるい、ってことは、器が小さいということだ。

色川武大

会社でも麻雀でも、新米は自分を出さずにじっと眺めること。頼りなさそうに映っても「小ずるくない」と認められたら及第。まず要領だ、などと考えたらだめ。スケールが縮こまる。後はひたすら正攻法で攻めること。すると不思議に助けの手も伸びてくる。大切なのは人としての素地が邪でないことだと、「雀聖」と呼ばれた作家は言う。「うらおもて人生録」から。

2015・8・20

折々のことば　鷲田清一　139

正しいと思うことは、一人ひとり違うんですね。

二十歳の若者

バブルがはじけた頃、商業施設の建設が中止になり「なかったこと」にされた地下空間で、アートイベントを友人たちと敢行したとき、ボランティアで駆けつけてくれた若者が、打ち上げでしみじみとこうつぶやいた。「えっ、二十歳にもなって？」と言いかけてことばをのんだ。彼女はここで大人たちにもまれ、学校という場所ではできない学びをしっかりしたのだから。

2015・8・21

折々のことば　鷲田清一　140

目的を手近かな低いところにおくから、高遠の目的と、そのために必要とされる多くのものとは、一切きりすてられてしまふ

田中美知太郎

国家は、国防や経済のためにあるのではない。それらを国家の目的と考えるのは、「何でもよいから生き残るのが、人生最高の目的である」と考えるのと同じだと、戦後ほどない時期に、ギリシャ哲学の碩学は書いた。政治において、そして人生において、それが何のためにあるかを、日々考えておくこと。「善と必然との間に」から。

2015・8・22

折々のことば
１４１～１４５

欲しいのは人だ。必死で探している。

藤浩志

折々のことば　鷲田清一　141

ちり際よしとおだてられて、
女のほこり、女のよろこびを、
かなぐりすてることなかれ

金子光晴

戦時中、愛国・国防をうたう婦人団体に集う人たちが、「華美な服装はつつしみましょう」という警告カードを持って、化粧や装飾の目立つ女性を摘発して回った。飾るどころか、身の疲れ、やつれへと追い込まれる女性たちの「あきらめ」を、詩人は哀しみ、憤り、「きたないもんぺをはくなかれ」と詠った。詩「さくら」から。

2015・8・23

折々のことば　鷲田清一　142

わたしたちがそれを頼りに生きている真理の圧倒的に多数は、検証されていない真理からなる。

ウィリアム・ジェイムズ

人生にも歴史にも、唯一の正しい道、つまりは「検証された」解などあろうはずはない。他の人たちとともに生きてゆくなかで、わからないけれどこれは大事ということを見つけることが、何より大事。わからないものにわからないままに正確に対処するワザが、生活にも社会活動にも求められる。哲学者の「プラグマティズム」から。

2015・8・24

折々のことば　鷲田清一　143

美というものの立場から附加えた一本の柱も鋼鉄もなく、美しくないという理由によって取去った一本の柱も鋼鉄もない。

坂口安吾

刑務所とか冷却剤の工場とかを例にあげ、ただ必要なもの、それだけが必要な場所に置かれている姿が美しいと言う。何かについて書くときも、うまくまとめようという下心がついうごめきだすが、「美しく見せるための一行があってもならぬ」と戒める。作家の矜持は省略とそぎ落としにかかっているのか。「日本文化私観」から。

2015・8・25

折々のことば　鷲田清一　144

それらしいものほど、無責任なものはない

松浦弥太郎

それらしく作られたものがそれらしく流通し、それをみなが「良い」と思う。そこでは視線がモノから逸れ、世間の空気へと向かう。企業のひも付きにならず、市場の商品を消費者の立場から検証してきた雑誌「暮しの手帖」の精神を継ぐ前編集長は、イメージが先行する商品に対し「ほんとうに良い」ことの意味を問う。批評とは見分けること。「暮しの手帖日記」から。

2015・8・26

折々のことば　鷲田清一　145

欲しいのは人だ。必死で探している。

藤浩志

「これはあなたの仕事。私の仕事ではない」と言ってはばからぬ組織は脆い。だれの仕事でもないが、だれかがそっとやっておかなければならない仕事が、じつは全体を支えている。どこかに油断はないか？だれかにしわ寄せが行っていないか？そんなふうに全体を案じる人がいるか否かが、組織の帰趨を決める。十和田市現代美術館長の口をふとついて出たことば。

2015・8・27

折々のことば
１４６～１５０

緑児（みどりご）は言わば無意識の記録掛りでありました。

柳田国男

折々のことば　鷲田清一　146

「わかる」ということには、言葉がはじかれている領域がある。

小池昌代

お経の勉強などしたこともなく、だからたぶんお経も呪文のようなものなのだろうに、詩人の母は「聞いていればわかる」と言う。お経の意味は、繰り返し聞いているうち、あるとき不意に向こうから、身体の奥にまで染み込んでくるものなのだろう。「耳で聞く」「頭で考える」とあたりまえのように言うが、それはかなり雑な物言いである。「散文集　産屋」から。

2015・8・28

折々のことば　鷲田清一　147

偉大な冒険とは同じ顔の中に日ごと見知らぬものが現われるのを見ることだ。

ジャコメッティ

友人の顔を描くことに心血を注ぎ、ついぞ完成を見ることなく終わった美術家のことば。私とは異なる場所から何かを感じている他者。その内側から見える光景はおそらく空より遠く、海より深い。この無限の隔たりが「他」であるということなのだろう。同じでないということ、そのことがかぎりなく尊い。「ジャコメッティ　私の現実」（矢内原伊作・宇佐見英治訳）から。

2015・8・29

折々のことば　鷲田清一　148

揺れて見えます　今宵の月は
泣けてきました　嗚呼……

桑田佳祐

サザンオールスターズの曲には、こんな切ない表白と、甕覗を買いそうな「C調言葉」が交錯する。C調は「お調子者」とハ（C）長調とを掛けているらしい。「歌舞いている、アウトローぶってるだけ。結局は下に行くんだけどね」と、取材に答える。こんな自嘲がときに、ひどく落ち込む人を慰めもする。軽さが渋さに、諦念に、裏返るところが凄い。ソロ曲「月」から。

2015・8・30　JASRAC　出　1509764-501

折々のことば　鷲田清一　149

上の空で返事をするということは、次にナニかを切り出す気配を予感させる前提として、率直な会話にない面白さがある

中村伸郎

老夫婦の対話では、空気がなじみすぎているからか、はたまた互いに理解不能と思い定めてきたからか、独り言と語りかけの区別がつかず、生返事がときに小さな事件の前兆ともなる。この往年の舞台俳優は妻に、主語も脈絡もなしに、「留守番がないから、出られないって言うのよ」と言われた。「おれのことなら放つといて」から。

2015・8・31

折々のことば　鷲田清一　150

緑児は言わば無意識の記録掛りでありました。

柳田国男

ことばはいつも「活気と新鮮味」を求めて刷新される。そのとき、幼子の思いもよらぬ表現に、逆に大人たちがかぶれ、ことばの命をつなぐということも珍しくない。「我々の家庭に小児がおらぬと淋しいように、子供の言葉が交っていなかったら国語はあるいはもう少し几帳面な愛敬の乏しいものになっていたかも知れません」と民俗学者は言う。「小さき者の声」から。

2015・9・1

折々のことば
１５１～１５５

妻が逝って、私は、空ばかり写している。元気になんか、なりたくないね。

荒木経惟（のぶよし）

折々のことば　鷲田清一　151

やってみなはれ。やらなわかりまへんで

鳥井信治郎

サントリー（旧・寿屋）の創業者の口癖。社業を継いだ佐治敬三はこれを「度胸と執念」の表れとし、敬三の甥・鳥井信吾は、「前向きな失敗は問わず、やらざるの罪を問う」、そういう心ばえなのだと説く。社にはだからおおらかな気風が漂う。リーダーは率いる人ではなく、背中を押す人のことなのだ。山口瞳・開高健「やってみなはれ　みとくんなはれ」から。

2015・9・2

折々のことば　鷲田清一　152

忙しさにイライラした夏目漱石が、そのイラだたしさから、あのような作品を創作したような力を思いだせばよい。

唐木順三

忙しいとばかり言い続けていると、人の心は貧相になる。明日のことにかまけて、「いつかは用立つもの、実は眼にみえないところで用立っているもの」が見えなくなる。文化のそういう「余力」というか「底力」が、漱石が生きていた時代にはまだあった。いら立たしさをもそれとしてきちんと表現できた。評論家の「朴の木」から。

2015・9・3

折々のことば　鷲田清一　153

そんなの当り前だよ、一人でニヤニヤしている人がいたら不気味じゃん。一人の時は人間は機嫌がいいわけがない。

佐野洋子の友人

年老いても、岡本かの子みたいに「いよよ華やぐいのちなりけり」なんて詠まないで、むしろ人生から下りてトボトボ歩いていたい。なのに、一人暮らしのなかで、むかつき加減だけは「十四歳の少年のように」仮借のないものになってゆく。それで友だちに電話をしたら、即こう返された。絵本作家の「神も仏もありませぬ」から。

2015・9・4

折々のことば　鷲田清一　154

命は天運にまかせて、惜まず、いとはず。身は浮雲になずらへて、頼まず、まだしとせず。

鴨長明

少しでも長生きしたいとは思わないし、人生を厭って死に急ごうとも思わない。何かに寄りかかりたいとも、何かが足りないとも思わない。一生の楽しみは「うたたねの枕の上」に極まる。こう言い切れたのは、生死も日々の努力もみな泡沫のようなものだという認識から。そんな地点にときに立ち戻って、自らの来し方をふり返ってみたい。「方丈記」（角川文庫版）から。

2015・9・5

折々のことば　鷲田清一　155

妻が逝って、私は、空ばかり写している。元気になんか、なりたくないね。

荒木経惟

悲しいときは悲しむだけ悲しんだほうがいい。こころが空っぽになれば、その空しさをそのままおもいっきり表したほうがいい。妻に逝かれた写真家はしばらく、その「空」を「空」として撮ることしかできなかった。妻とのこの世ではぷつんと切れて垂れ下がっている糸に、それでも自分をぶら下げたままにしておきたかった。「空景」展（１９９０年）に寄せたことば。

2015・9・6

折々のことば
１５６～１６０

忘れ草垣もしみみに植ゑたれど醜（しこ）の醜草（しこくさ）なほ恋ひにけり

相聞歌

折々のことば　鷲田清一　156

残酷な現実や、大きすぎる敵に対して戦う方法があるとしたら、それはじぶんたちの甘やかな想像力なのかもしれません。

今日マチ子

描かれていないものにこれほど生々しく想像がかき立てられる漫画はめったにない。歴史的事件として語られる戦争のさなかにも、人びとが丹念に紡いできた日常はある。作品「ｃｏｃｏｏｎ」は、その日常をさえ容赦なく圧しつぶす戦争を、沖縄のひめゆり学徒隊を題材に、〝弱くて甘い〟少女の視点から描く。そのあとがきから。

2015・9・7

折々のことば　鷲田清一　157

文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその劇烈の度を増す

寺田寅彦

洞窟の中で暮らす時代は、じっと潜んでいれば暴風も凌げた。粗末な小屋なら倒壊しても建て直せた。重力に逆らい、自然に抗うような施設を造るようになって、建物の倒壊や堤防の決壊に命を落とすようになった。送電線が大規模に敷設されるようになると、一地域での損傷が広域を巻き込むようになる。これを宿命として放置していていいのだろうか。「天災と国防」から。

2015・9・8

折々のことば　鷲田清一　158

大きな壁にぶつかったときに、大切なことはただ一つ。壁の前でちゃんとウロウロしていること。

玄田有史

越えられない壁に直面したとき、うずくまっていないでその前でうろつくこと。すると壁の下に小さな穴が見つかり、トンネルが開くかもしれない。ヘリコプターが上空から見つけてくれるかもしれない。「希望は、無駄とか損とかという計算の向こうにみつかったりするもの」だと、労働経済学者は言う。「希望のつくり方」から。

2015・9・9

折々のことば　鷲田清一　159

習慣。考えずに行動するすべ、しかも考えてやるよりもっとうまく行動するすべ。

アラン

車に乗るとき、運転操作に集中しつつ、音楽を聴いたり、助手席の人とおしゃべりに興じたりできるのは、習慣が私たちの活動を最小限の筋肉の働きにまとめてくれるから。一つの行動の型を訓練によって身体に住みつかせることで、別の行動を並行してできるようになる。身体は賢い。パリの高等中学で長年、哲学教師を務めた思想家の「定義集」（神谷幹夫訳）から。

2015・9・10

折々のことば　鷲田清一　160

忘れ草垣もしみみに植ゑたれど醜（しこ）の醜草（しこくさ）なほ恋ひにけり

相聞歌

恋を忘れようと忘れ草を植えたのに何の効果もなかったと、恋する人が役立たずの草に当たり散らしている。万葉集はほんとうはポップスだったんだという現代語訳集「ＬＯＶＥ　ＳＯＮＧＳ」は、これを次のように訳す。「悲しい恋に効くっていうから垣根いっぱいに植えたのに　忘れ草のバカ！　忘れ草のウソつき！　あの人への気持ち全然止まんないじゃない」

2015・9・11

折々のことば
１６１～１６５

秋になると
果物はなにもかも忘れてしまって
うっとりと実のってゆくらしい。

八木重吉

折々のことば　鷲田清一　161

ほめられなくても自分の気のすむような仕事はしたいものだ

広島県のある石工

雑な仕事をすれば、次に来た職人もそれを見てつい雑な仕事をする。だから「いい仕事」をしておきたいと、石積みの職人は言う。石工のこの矜持は、施主ではなく、未来の職人たちに宛てられていた。石工のこのことばを聞き書きした民俗学者は、そこに「だれに命令せられるのでもなく、自らが自らに命令することのできる尊さ」を見た。宮本常一「庶民の発見」から。

2015・9・12

折々のことば　鷲田清一　162

人民はなほ社中の人のごとく、一人にて主客二様の職を勤むべきものなり。

福沢諭吉

国家は、人民が申し合わせて作った「会社」（団体）のようなもの。つまり国民が「会社」の主人で、政府は支配人のようなもの。国民はふだんはその支配人に会社の運営を任せていてよいが、その機能が滞ったり劣化したときは、「理をもって政府に迫る」のみならず、運営の一端をみずから担う覚悟がなければならないと、明治の思想家は説いた。「学問のすゝめ」から。

2015・9・13

折々のことば　鷲田清一　163

何が足りないのかっていうふうに思うわけです。女が女をやるのにね。

杉村春子

女を演じるとはどういうことか。女のリアルを捉えるためには、意識を研ぎ澄ませなければならない。自然のまま女でいたら、あるいは惰性のまま女でいたら、女の本質は見えてこないから。本質を捉えるには、余計なものをそぎ落とさねばならない。そういう意味での虚構が女優業には必要だと、D・シュミット監督の映画「書かれた顔」のなかで杉村は語っていた。

2015・9・15

折々のことば　鷲田清一　164

秋になると
果物はなにもかも忘れてしまって
うっとりと実のってゆくらしい

八木重吉

秋は稔りと収穫のとき。そんなふうに自然と秋を迎えられる時代はよかった。秋は黄昏時というよりは、成熟のときだった。人のみならず自然にもどこか品位があった。今は、人生の秋を前にしてひとはつい悪あがきをするし、天候も異常続きで過去の経験が生きない。なんとも貧相な、このところの秋である。詩「果物」の全文。

2015・9・16

折々のことば　鷲田清一　165

人生は死ぬまでの暇つぶしやから。暇つぶしには仕事が一番ええ

島田洋七のばあちゃん

人生とは、おのれの存在の空虚を直視しなくて済むようたえず気を散らしておく営みの連続だという、17世紀の思想家、パスカルのことばにぴたり重なる。仕事こそ気晴らしの最たるものだと。怖い視点だが、こう考えると人生、少し気が楽になる。漫才師はここから、老後の人生も「○○ごっこ」だと思えばいいとの教訓を引きだす。「がばいばあちゃん　幸せの教え」から。

2015・9・17

折々のことば
１６６～１７０

何しろやることがみみっちいんだもの。

阿川弘之

折々のことば　鷲田清一　166

啓蒙を実現するために要求されるのは……万事において自分の理性を公的に使用する自由である。

イマニュエル・カント

公職・官職にある人でも、社会のなかで自らにあてがわれたその職務と組織の論理にひたすら忠実に、ということはつまり無批判的にふるまうときは、理性を私的に使っているのだと、哲学者は言う。自らの判断力をあらゆる市民のために使用するところにこそ理性をもつ者の自由がある、と。「啓蒙とは何か」（福田喜一郎訳）から。

2015・9・18

折々のことば　鷲田清一　167

ただザワザワとさわめいているだけでいいんだよ。はっきりとした音をお前から聞きたいなんて、思っていないのさ。

R・ボルヒャルト

「耳を澄ましたりすれば、きっとお前も痛いだろうから」と続く。お前の解釈を聴きたいのではない。お前があがいていること、ぶるぶる震えていることを、そっと知っていたいのだ。共感は、内容についてではなく、そうした存在の震えにこそ向かう。アドルノ「三つのヘーゲル研究」（渡辺祐邦訳）で引かれた詩「休止」から。

2015・9・19

折々のことば　鷲田清一　168

何しろやることがみみっちいんだもの。

阿川弘之

戦時下、繰り上げて挙行された東大の卒業式に、時の軍人宰相が、呼ばれてもいないのに、胸に仰山の勲章を飾りつけ列席した。式辞で「私はここにひとつの大いなる……」と言いかけ、絶句した。自分も日露戦争のとき繰り上げで卒業したが、今ここに大日本帝国の総理として立っているという感慨にむせんで。学生としてそこにいた作家のきつい一言。「大人の見識」から。

2015・9・20

折々のことば　鷲田清一　169

何度、行っても…、覚えて、もらえない（略）ゾクッとするんですよ。毎回、まっさらで向き合えるってことに

砂連尾理

認知症の人とのダンスを試みてきたこの現代舞踊家は、伝わらないことそのことに魅せられた。「共感」ばかりが求められる時代、思いが通じないもの、自分では捉えきれないものの魅力がひどく削がれてきたのでは？　このことば、共演した看護師の西川勝さんがせんだいメディアテークの定期刊行本「ミルフイユ」03で引いている。

2015・9・21

折々のことば　鷲田清一　170

Un ange passe.

フランス語の言い回し

話の最中にことばが途切れると、フランス人は、アナンジュパス、「ほら、いま天使が通ったよ」とつぶやく。なんともきまりの悪い一瞬。この瞬間もまた心地よく思う、そんな懐の深い会話をしたいもの。中島らもが「舌先の格闘技」で引いていて、ふと思い出した。話に「スが入る」とも言うらしい。東京に「あなんじゅばす」なる楽団があるが、さてその天使はどんな顔をしているのかな。

2015・9・22

折々のことば
１７１～１７５

躓（つまず）きは人生の初期にした方がいいですよね。

雨宮処凛（かりん）

折々のことば　鷲田清一　171

世には、欠点をうまく身につけている人もあれば、長所を持てあましている人もある。

ラ・ロシュフコー

長所も欠点も自分にはよく見えない。それに、長所はときに嫌みに、欠点は愛嬌に裏返る。短気や優柔不断が、決断の速さと熟慮へと反転するように。であれば、長所は、他人に差を見せつけるのでなく分け与えるもの、欠点は、見せまいとするのでなく〈個性〉として育むもの、と考えたほうが賢いかも。17世紀フランスの公爵による「箴言と考察」（内藤濯訳）から。

2015・9・23

折々のことば　鷲田清一　172

躓きは人生の初期にした方がいいですよね。

雨宮処凛

社会になんの違和感も抱かずに、それこそ空気を読みながら「表面的には明るく」過ごせていることがほんとうは危ないと、格差・貧困問題に取り組む活動家・作家は言う。人生の初期設定は書き直せる、もっと別の生き方がありうるということを、10代のうちに躓きのなかできちんと思い知っておいたほうがいい、と。兵藤友彦「奇跡の演劇レッスン」での対談から。

2015・9・24

折々のことば　鷲田清一　173

子どものからだは……外から情報を受け入れやすく、かつ次に動ける可能性をできるだけたくさん持っているような姿勢がいい

竹内敏晴

体育館で生徒が強いられる、あの、前屈みで両膝を抱え込む三角座り。息が少ししか入らず、自発的な動きのとれない「手も足も出ない」状態、「息をひそめている」姿勢である。これが子どもたちの存在を融通のきかない、縮こまったものにすると、からだのレッスンに取り組んできた竹内は憂う。「ことばが勞かれるとき」から。

2015・9・25

折々のことば　鷲田清一　174

大学が道徳的あるいは宗教的影響を学生に及ぼすことができるとするならば、それは……大学全体にみなぎっている気風によるのです

ジョン・スチュアート・ミル

専門職に就こうという人が大学で学ぶべきものは、専門的知識そのものではなく、それらを「正しく」用い、導く教養だと、哲学者は言う。そのためには、物事を包括的にみる見方、いいかえると、知識を、人としての義務を顧みる」手段と捉える見方が不可欠だと。「大学教育について」（竹内一誠訳）から。

2015・9・26

折々のことば　鷲田清一　175

これだけ手許に持っていれば必要な時にその知識をそこから引き出せるという考え、これは案外恐ろしいことではないかと思います。

串田孫一

いつでも引っぱってこられるよう、手許に必要な知識だけを用意しておくのは、要領はいいだろうが、そこに知ることの悦びはない。教わったという温もりもない。知ることの悦びは、なんとしても知りたい／伝えておきたいという、人と人の関係の内にこそある。「山の哲学者」と呼ばれた随筆家の「考えることについて」から。

2015・9・27

折々のことば
１７６～１８０

私は忘れっぽくなって、かえって「いい加減」さを自覚でき、あいまいさも一つの正確さであることを知った。

戸井田道三

折々のことば　鷲田清一　176

柴又の夕日まっかな唐辛子

辻征夫

赤色はいのちの火床？　絵の具の赤ではなくて、人びとの暮らしのなかに染み入る赤。背後に人いきれを感じる。ついこの間、寺の集まる京の夜の、明かりのない路を歩いていたとき、闇の向こうに沈むまっかな陽が見えた。目を凝らしたら、信号機の赤だった。人っ子一人いない宵の人工の赤、これもまたぞくぞくするほど美しかった。詩人の「貨物船句集」から。

2015・9・28

折々のことば　鷲田清一　177

私は忘れっぽくなって、かえって「いい加減さ」を自覚でき、あいまいさも一つの正確さであることを知った。

戸井田道三

学者には「正しいことは一つときめすぎているきらい」があるが、そういう思考の癖ははやく捨てたほうがいいと、能芸の評論家は言う。加減、案配、潮時などという職人や現場の判断がそう。たえず移動する均衡点を、そのつど状況に応じて外すことなく確定できるのが、まさに正確ということだ。「忘れの構造」から。

2015・9・29

折々のことば　鷲田清一　178

いやなお方の親切よりも　好いたお方の無理がよい

古い都々逸

今どきの人は、「愛してる」と言えばいいのに「愛させてほしい」と言う。「信じる」と言えばいいのに「信じさせてほしい」と言う。恋とは人に焦がれること。自分のことより相手のことを先に思いやること。そして自身は痛い思いをしてもなお、その人の思いを支えたいと願うこと。愛されたいと思うよりそれが先なのでは？　愛とは、もらうものでなく贈るもの。

2015・9・30

折々のことば　鷲田清一　179

Je t'aime beaucoup.

フランス語の言い回し

「ジュ・テーム」はご存じのように「愛してる」という表現。それに「ボクー」を付けると「あなたのことがとても好き」という意味になる。「好き」でなく「大好き」なのだから愛はいっそう深いかといえば、実は逆なのだそうだ。ある人への愛は、量とか程度、比較などを超えたところではじめて生まれるからだと、現代フランスの哲学者、J・L・ナンシーは「恋愛について」で説く。

2015・10・1

折々のことば　鷲田清一　180

ミネルヴァのふくろうは、たそがれ時になってようやく飛びはじめる。

G・W・F・ヘーゲル

哲学は、現実に起こっていることの意味を問い、理解しようとするものだから、つねに現実より遅れる。が、そういう知的な反芻を重ねるなかでこそ現実の真の意味は浮き彫りになってくる。哲学が古代ギリシャの守護神・ミネルヴァの梟に例えられるのは、人びとが眠っているときにひとり眼を開き、世の中を注視するものだから。ドイツの哲学者の「法の哲学」序文から。

2015・10・2

折々のことば
１８１～１８５

<だいたいお母さんてものはさ
しいん
としたとこがなくちゃいけないんだ>

茨木のり子

折々のことば　鷲田清一　181

〈だいたいお母さんてものはさ
しいん
としたとこがなくちゃいけないんだ〉

茨木のり子

こう言い放ちつつ、ランドセル揺らせて通り過ぎる2人の少女。「名台詞」と喝采したあと、母だけじゃないよと詩人はつぶやく。何が起ころうと動じず呑み込む。哀れに思っても手を出さずじっと見守る。灯台のようにいつも同じ場所で待つ。その静けさは、人としての底知れぬ寂しさに蔽われるものなのかも。詩「みずうみ」から。

2015・10・3

折々のことば　鷲田清一　182

いい顔とは、生にはりついている死とのつきあい方が、素直にすけてみえる顔のことです

森崎和江

人はいのちを差配できると思い込むようになって、逆に、穏やかな顔で死ぬことも容易でなくなった。死は、一個のいのちの消失に尽きるものではない。土が生き物の死体を腐らせることで植物を育むように、人の死も「大きな自然の摂理にくるまれたもの」としてあるはず。その死が「いのちの素顔」から遠ざかるばかりだと、作家は憂う。「大人の童話・死の話」から。

2015・10・4

折々のことば　鷲田清一　183

私が生れたよりももつと遠いところへ。そこではまだ可能が可能のままであつたところへ。

九鬼周造

この哲学者は庭の木犀の匂いを嗅ぐのをこよなく愛した。嗅ぎながら、私が男／女になる以前、私がこの家族の一員となる以前、私がこんな人格になる以前、つまり、別のものでもありえたそんな可能性におのが身がほどかれてゆくのを、無上の悦びとした。そのことで現在の苦しみを超えようとした。随筆「音と匂」から。

2015・10・5

折々のことば　鷲田清一　184

You must get your living by loving.

ヘンリー・デイヴィッド・ソロー

livingにlovingを掛けて「愛することで生計を立てねばならない」と言っている。これを前後の脈絡から推して、「生計を立てるということは、利益に無関係に、骨身を惜しまないことなのです」と山口晃は訳す。真に豊かな生活は、生活のために自分の時間を「社会に売り渡して」しまわずに、自らが納得のゆく仕事をなすことで得られる。森に隠棲した思想家の「生き方の原則」から。

2015・10・6

折々のことば　鷲田清一　185

思うている腹の中を空にする機会を恵んでやつてこそ、始めて、母のような教誨といえるのではなかろうか。

篠田龍雄

「その日」がいつか、独房の中で神経を張りつめ、微かな音の変化にも妄念を膨らませる死刑囚。その口からこの「怪物」を吐き出させること、そこから教誨師の仕事は始まると、教誨の先達は言う。が、そのためにはまず、教え諭す〈師〉の面を外し、吐き出してくれる〈器〉になる覚悟が要る。堀川恵子「教誨師」での引用から。

2015・10・7

折々のことば
１８６～１９０

今日だけわたしは悪い人になってます。

岩手県大船渡の元看護師











折々のことば
１９１～１９５

おもしろおかしく

堀場雅夫

折々のことば　鷲田清一　191

しかし、早まって電車に飛び込まないでください。そういうときは反対側のホームに行き、逆方向の電車に乗ることです。

末井昭

会社で孤立したり、上司に嫌みばかり言われている人は「休み明けの月曜日はつらいかもしれません」という文を受けて。逆行きに乗ればとりあえず気分は変わる。世間の尺度から離れることで少しは楽になれる。世間の圧力はそれを怖がる人にまっ先にかかってくる。幼い頃、男との心中で母を亡くした編集者の著書「自殺」から。

2015・10・14

折々のことば　鷲田清一　192

おもしろおかしく

堀場雅夫

分析・計測機器メーカー、堀場製作所の創業者の口癖。京都大学の学生だった頃にベンチャー企業を立ち上げた堀場さんは、製品開発でも労使関係においても、この精神を貫き通した。この会社では「秀でる」よりも「おもしろい」が優先される。半数以上を占める海外社員にも、このモットーは、説明せずとも「ジョイ&ファン」だけで通じるらしい。この夏に逝去された。

2015・10・15

折々のことば　鷲田清一　193

二日酔いの無念極まるぼくのためもつと電車よ　まじめに走れ

福島泰樹

社会の理不尽をいくら撃ちつづけても、社会はびくともしない。抗う側の傷が深まるばかり。鬱屈したその無念が、今朝も何ごともないかのように定時に運行する電車に向かって噴きだす。「ここよりは先へゆけないぼくのため左折してゆけ省線電車」という歌もある。そしてここでの「左折」を「挫折」と歌うことも。歌人の「バリケード・一九六六年二月」から。

2015・10・16

折々のことば　鷲田清一　194

今日の不寛容は、ある特定の議論を強要……するというより、あらゆるタイプの議論を拒否し、議論そのものを嘲笑する

イタロ・カルヴィーノ

不寛容は、外部からどんな声も伝わってこない状況、他者が自分の内部に介入してこない状況を求めることで、「世界の死体化」を望んでいると、作家は言う。1977年にイタリアで記された「今日」が、およそ40年後の極東の地での「今日」でもあることの意味を問いただす必要がある。「水に流して」（和田忠彦ほか訳）から。

2015・10・17

折々のことば　鷲田清一　195

たいがいにしときや

大阪の住職

大阪・天王寺近くにある寺に、ひと頃、地下街を追い出された路上生活者たちが移住してきた。朝、住職が起きると、境内はブルーシートだらけ。住職はみなに「出て行って」ではなくこう告げた。ここが限度というところを判断してね、いざというとき受け容れられなくならないようにとの思いで。双方それぞれに事情があって、これが潮、と見定めるのは存外むずかしい。

2015・10・18

折々のことば
１９６～２００

お母さんの誕生日じゃないのに。でも、今日は、お母さんの出産記念日でもあるんやな

作家の子ども

折々のことば　鷲田清一　196

唄を忘れた金糸雀は
うしろの山に棄てましよか
いえ、いえ、それはなりませぬ

西条八十

八十には若い頃、象徴派の詩人として出発しながら、老母、弟妹に妻と娘を扶養する必要があって、詩を離れ、ひたすら生計を立てることに傾注せざるをえない時期があった。自らへの責めと憐れみが交錯する心の内を、歌を忘れたカナリアに託した。童謡「かなりや」の書かれた背景や反響については筒井清忠「西条八十」が詳しい。

2015・10・19　JASRAC　出　1512062-501

折々のことば　鷲田清一　197

請われれば一差し舞える人物になれ

梅棹忠夫

リーダーの条件は、と問われて「フォロワーシップを経験し理解することやろな」と民族学者は答えた。優れた従者とは、脱落しそうな人、過重負担になっている人がいないか、リーダーに代わって後方から目配りできる人。メンバーがそれぞれ別個に本業をもつ地域社会がうまく回るかどうかは、そういう従者をどれだけ擁するかに懸かっている。「梅棹忠夫　語る」から。

2015・10・20

折々のことば　鷲田清一　198

すなわち最もよき人々は帰ってこなかった

ヴィクトール・E・フランクル

労働不能とみなされガス室送りとならないよう、ときに囚人を取り締まる側に立ちもする、そんな生き残りをかけた蹴落としあいを潜り抜けうる者が、ナチスの強制収容所では生き残った。精神科医の「夜と霧」（霜山徳爾訳）から。同じく長いシベリア抑留から帰還した石原吉郎は自らの詩集のあとがきで、これに「最もよき私自身も帰ってはこなかった」と書き添えた。

2015・10・21

折々のことば　鷲田清一　199

やってきたことは一種の落ち穂拾い。落とし物には意外と本音が隠されている

赤瀬川原平

昇った階段の先には？　降りる階段しかなかった。そんな愉快な建造物を探し回ろうと路上観察学会を仲間と立ち上げた前衛美術家。背後にはきっとこみ入った事情があろうが、まずはその存在の無意味さを楽しむこと。〈正史〉という歴史の物語から外され、消された無名の人びとの営みは、こういうかたちでも現在の〈正史〉に抵抗している。本紙昨年10月27日の記事から。

2015・10・22

折々のことば　鷲田清一　200

お母さんの誕生日じゃないのに。でも、今日は、お母さんの出産記念日でもあるんやな。

作家の子ども

わが子の誕生日に子どもの好物はもちろん、ケーキ類もたっぷり用意したが、自分より先に母親ががぶがぶ食べているのを見てあきれる子。誕生日はたしかに母の出産記念日でもある。こんなあたりまえのことにも人はなかなか思い至らない。相手の身になるということの難しさを改めて教わった。本紙9月28日夕刊（大阪本社）の湊かなえの随筆「誕生日じゃなくて…」から。

2015・10・23

折々のことば
２０１～２０５

一日三秋（いちじつさんしゅう）

詩経

折々のことば　鷲田清一　201

一日三秋（いちじつさんしゅう）

「一日見（み）ざれば三秋の如（ごと）し」。一日会わないだけで三年も会っていない心地になる。それほどに強く希（こいねが）う気持ちだ。「一日千秋」とも言うことから「千秋の思い」という語も生まれた。約束もないのにひたすら祈りつつ待つ。待つことに耐える。強く慕って、待ちこがれ、待ちわび、待ち明かし、待ちあぐねて、ついに待ちぼうけ……。人とはなんともせつないものである。

詩経

2015・10・24

折々のことば　鷲田清一　202

だめだよ！　そんな高いの

何かの売り場で、赤ん坊をおぶった母親が、こう言って4歳くらいの男の子の手を引っぱる。石垣りんは、連れ去られる子どもが腕に感じた「容赦のないものの力」と「身のほどを知るせつなさ」を懐かしんで「ああいいなあ」と思う。そしてそのせつなさが本物の「ごちそう」を用意するのだと語る。14歳から定年まで銀行員を勤め上げた詩人の「焔（ほのお）に手をかざして」から。

子連れの母親

2015・10・25

折々のことば　鷲田清一　203

佐渡裕少年に誇れる演奏会がつくれたかどうか、それが僕のなかの絶対基準になっている

佐渡裕

子どもは、楽しければ、魂が揺さぶられれば、体が勝手に動く。情感のことを英語でエモーションという。心がぐいと動かされること、つまり魂の運動（ムーブ、モーション）のことだ。そして音楽にも、大人のように評価や解釈といったものを経ずに、じかにふれ、共振する。言ってみれば〝野生〟のまま反応する。（棒に振ることのなかった）「棒を振る人生」から。

2015・10・26

折々のことば　鷲田清一　204

１瞬に１生をかけることもある。
１生が１瞬に思える時があるだろう。

香月泰男

展覧会の図録「〈私の〉地球」に掲載された手書き、横書きの文章で、「１」がまるでくさびを打つかのように映る。香月の画業のすべてはシベリア抑留中に目にし、経験した非業と非情への問いかけとしてしかありえなかった。人にはどうしても消せない一点、癒えない一点があって、時とともに語り口は変わっても、ついに同じ一つの〈傷〉を際限なく反芻（はんすう）するほかないものなのか。

2015・10・27

折々のことば　鷲田清一　205

囚人が水たまりを脇へよけたとき、わたしはまだ盛りにある一つの生命を絶つことの深い意味……に気がついたのだった。

ジョージ・オーウェル

囚人が広場の絞首台に連れて行かれる。衛兵に肩を摑（つか）まれながらも、途中水たまりのところでさっと脇によける。彼とわれわれは同じ世界を見、感じているのに、彼一人がふっと消える。これを目撃した作家は、人としての品位を自然に備えた一つの生命を抹消することの決定的な誤りを知る。随筆「絞首刑」（小野寺健訳）から。

2015・10・28

折々のことば
２０６～２１０

憲法が「どういう国にしたいか」という願いそのものであるならば

赤坂真理

折々のことば　鷲田清一　206

《私》ってのは他者なんです。

アルチュール・ランボー

私は自分のことを「私は」と語りだす。が、「私」は私だけが使う語ではない。だれもが自分のことを「私」と言う。そのかぎりで「私」はもう私に固有のものではない……。朝一番から理屈っぽいことを言ってすみません。でもこれで「私らしさ」などとはそう簡単には言えないことをわかっていただきたかったのです。詩人の書簡（鈴村和成訳「ランボー全集」）から。

2015・10・29

折々のことば　鷲田清一　207

多様性は……多様な存在の外からその数を数えるような一個の存在に対して生起するのではない。

エマニュエル・レヴィナス

多様性の尊重には、一人ひとりが異なる存在であることが前提となる。人びとが数で一括りにされるところに多様性はありえない。人はその個別性においてこそ輝く。20世紀フランスの哲学者は、だれかを別のだれかで置き換え可能と見るのは、人間に対する「根源的不敬」であると言う。「全体性と無限」（合田正人訳）から。

2015・10・30

折々のことば　鷲田清一　208

今様のことどもの珍しきを、言ひひろめ、もてなすこそ、またうけられね。世にことふりたるまで知らぬ人は、心にくし。

兼好法師

世に流行っていることを、訳知り顔で言いふらし、もてはやすのはみっともない。言い古されるまでそのことを知らないほうが奥ゆかしい、という意味。世に散らばることばをさらにまき散らすことばは、宙を舞う塵のようなもの。「空語」とでも言いたいところだ。それを口にする人は、塵のように軽い、空しい。「徒然草」から。

2015・10・31

折々のことば　鷲田清一　209

述而不作、信而好古

孔子

「述べて作らず、信じて古を好む」と読む。「述べる」とは、語り継がれてきた古典を祖述すること。「作る」とは新しく創ること。とはいえ、古典をお題目のようにくり返せばいいと言うものでもない。「信じる」とは、賢人が言い伝えんとしてきた知恵のなかから、これこそ本当に大事と思われることを一身を懸けて選び取ること、継ぐことである。「論語」述而第七から。

2015・11・1

折々のことば　鷲田清一　210

憲法が「どういう国にしたいか」という願いそのものであるならば

赤坂真理

元をただせば憲法（コンスティテューション）とは「成り立ち」という意味。憲法はたんなるルールや枠組みでなく、国家が「願望や理想」をも含めどのように造られているか示す「設計図、青写真」であるはずだ。研究者でなく「ごく普通の日本人」として「自国の近現代史を知ろうともがいた一つの記録」だと作家みずからいう長編評論「愛と暴力の戦後とその後」から。

2015・11・2

折々のことば
２１１～２１５

碁敵（ごがたき）は憎さも憎しなつかしし

古川柳

折々のことば　鷲田清一　211

祓（はら）いのけることはしないで、穢（けが）れたままで救うということ、これを私は愛と言い慈悲というのです。

鈴木大拙

救われんとすればこれこれの条件を満たす必要がある、と言うのでなく、そのままでいいと、傷や汚れやあがきごと抱擁すること。それが「慈悲」だと仏教学者は言う。他の人に向かい、何の条件も付すことなく、ただ「いるだけでいい」と言えるかどうか。宗教の信は一にそこに懸かっている。安藤礼二編「折口信夫対話集」から。

2015・11・3

折々のことば　鷲田清一　212

碁敵（ごがたき）は憎さも憎しなつかしし

古川柳

学生時代、私は授業でよりも、下宿でやる仲間との読書会でずいぶん鍛えられた。授業の予習はしないのに、読書会では前の晩、注解書や同じ著者の他の本を克明に参照し、当日は「ちゃんと準備できてないんだけれど」などとほけつつ、論をぶつけあった。これが私の原点になっている。井上ひさしが亡くなったときに、親しかった俳優の小沢昭一が追悼文で引いた川柳。

2015・11・4

折々のことば　鷲田清一　213

扉は……それがいったん閉じられると……たんなるのっぺりとした壁よりもいっそう強い遮断感を与える。

ゲオルク・ジンメル

橋がいつも向こうへ通じているのに対して、開け閉めできる扉は、人を招き入れ、また送り出しもするが、人の受け入れをあらかじめかたくなに拒むものでもある。扉を前にして、それがどういう表情をしているかを、故国を逃れてきた難民たちは敏感に感じ取る。ドイツの哲学者・批評家の評論「橋と扉」（鈴木直訳）から。

2015・11・5

折々のことば　鷲田清一　214

気持ちの素性さえ、しゃんとしてればいいんだ。

領家高子

自由奔放に生きた母に振り回されたと恨む若い芸者が、「決められた」道を歩みたいと漏らしたとき、女将は、その道も自分で決めること、けれど「決められていると思う気持は大事におし」と言った。理屈とも筋道とも言わず「素性」と言うところがいい。何かを大事にし、いろんな経緯もあったが最後はこうと決めた、ということが定かであればいいと。小説「向島」から。

2015・11・6

折々のことば　鷲田清一　215

「死んだ」者よりは「死なれた」者の方が、やはり、叶わないのである。つらいのである

秦恒平

英語の自動詞に受動態はないが、日本語には、「死ぬ」という自動詞にも「死なれる」という受動態がある。死ぬ人でなく、死なれる人に思いを重ねるのだ。人は自らの死を恐れるが、その死は想像するだけで体験はついにできない。そのとき自分も消失しているのだから。死の経験の原型はだから、大切な他者を失うというところにある。作家の「死なれて・死なせて」から。

2015・11・7

折々のことば
２１６～２２０

禍福は糾（あざな）える縄の如（ごと）し

ことわざ

折々のことば　鷲田清一　216

生きのこるわれをいとしみわが髪を撫でて最期の息に耐へにき

吉野秀雄

私が死ぬということは、別の誰かが私に死なれることでもある。ひとはよく死の恐怖と言うが、ほんとうは死ぬほうだって、自分が死んだらあいつはどうなるか、私の代わりにあいつをかまってくれる人がいるかと、遺される者を案じて胸がはり裂けそうになっている。遺される者を愛しむ気持ち、それのほうが自身の死への恐怖よりも切迫している。歌集「寒蟬集」から。

2015・11・8

折々のことば　鷲田清一　217

この男は、知らないのに、何か知っているように思っているが、わたしは、知らないから、そのとおりに、また知らないと思っている。

ソクラテス

このわずかな差によってわたしのほうが知恵があるらしい、と続く。いわゆる「無知の知」を説くくだりだ。このとき「知らないと思っている」と言い、「知らないと知っている」と言わないところがミソ。問いはだから、そこで終わるのではなく、むしろそこから始まる。プラトン「ソクラテスの弁明」（田中美知太郎訳）から。

2015・11・10

折々のことば　鷲田清一　218

美しいものを見るためには目は美しくなければならない。……青い目がなくてどうして本当の青い空が見えようか。

ガストン・バシュラール

世界がどう見えるかは、世界をどのように見るかと一つになっている。セザンヌがリンゴの表面をさわさわと触れるかのようなタッチで描いたように、見るとはまなざしを世界のひだのあいだに分け入らせてゆくこと。世界は、それを見る眼にかなうようにしか現れない。詩的想像力あふれる科学哲学者の「水と夢」（及川馥訳）から。

2015・11・11

折々のことば　鷲田清一　219

禍福は糾える縄の如し

ことわざ

食でも性でも、満たされた後、それ以上は苦痛でしかなくなる。病苦は、ときにそれをきっかけとして家族に固い絆をもたらす。一代で財をなした人は財産のわずかな目減りにも強い不安を抱く。このように禍と福は紙一重、すぐ裏返る。こういうさめた目をもつかどうかが、人生のありようを意外に深いところで決めている。司馬遷「史記」の記述に基づくことわざ。

2015・11・12

折々のことば　鷲田清一　220

育てるためには、やはり「任せきる」ことがいちばんの方法です。

竹下佳江

たとえば地域の祭。なぜずっと続けるのかと聞かれても、答えに困る。祭では、高齢の人から幼児まで、それぞれの人にそれぞれ役が割り当てられる。任された役をきちんと務め上げることで、自分が手を抜けば祭が台無しになってしまうこと、自分がここにあることの意味を体感することができる。バレーボール全日本代表の主将を務め上げた選手の「セッター思考」から。

2015・11・13

折々のことば
２２１～２２５

一夜一夜に人見ごろ

語呂合わせ

折々のことば　鷲田清一　221

悲しみ方の型が入ってきたとき、はじめて私たちは悲しみに耐える能力も身につけることができるのです。

山崎正和

悲しいときは誰しもなりふりかまわず泣きたくなるが、最後は体を納得させ、その力を借りないと耐えない。悲しみは、感情というより、体のもっと深い場処から噴き上がるものだ。そのとき人は思わず、悲しみの型を演じることでかろうじてそれを凌いだ古人たちの技をなぞっている。美学者・評論家の「文明としての教育」から。

2015・11・14

折々のことば　鷲田清一　222

どんな人でも、家のなかでは有名人なんです。……人間がそれ以上の有名というものを求めるのは間違いではないかと思いますね。

鶴見俊輔

生まれ、名づけられたとき、私はまわりの人たちの思いの確かな宛先としてあった。「者」としてそのように尊重された記憶こそ、人のもっとも大切な財産だ。やがて世間で別の名を生き、老いさらばえて「見知らぬ」人となり、そして「物」の一つとして終わる。その覚悟を備えよ、と思想家は言う。共著「いま家族とは」から。

2015・11・15

折々のことば　鷲田清一　223

支援者を増やしておくのがいちばん安全なんです。

熊谷晋一郎

ケアという関係は、家族や親しい人の献身的な支援へと閉じるのでなく、いつでも手伝ってもらえるよう依存先をあちこちに分散させておくことが肝要だと、自身も重い障害をもつ小児科医が語っていた。これは介護される者だけでなく、介護する側にも言えること。ケアを受ける人よりケアをする人のほうが往々にして助け手が少ないという重い事実もある。

2015・11・16

折々のことば　鷲田清一　224

私たちはこの世を見るために、聞くために、生まれてきた。だとすれば、何かになれなくても、私たちには、生きる意味があるのよ

元ハンセン病患者役のせりふ

ある時、ある場所から見つめている者がいるということが、世界を支えている。だれも見なかった、だれも聴かなかったら、世界がかくあるということも、世界が語るということもなかったのだから。命ある者の体験と語り、その一つ一つが世界の存在についての証言である。ドリアン助川原作・河瀬直美監督の映画「あん」から。

2015・11・17

折々のことば　鷲田清一　225

一夜一夜に人見ごろ

語呂合わせ

$\sqrt{2}$（ルート２）、つまり1.41421356……の語呂合わせ。夕涼みに薄衣で戸外に出て、ふだんは忙しく声をかけあうだけの人とゆったり言葉を交わす、そんな夏の宵をふと思う。あるいは、日ごとまた一段と艶っぽくなる若い娘を思い浮かべる人もいるかも。平方根を学ぶ数学の時間でありながら、古典の授業を思わせる雅な響きがあった。ちなみに$\sqrt{3}$は「人並みにおごれや」。こちらは無粋。

2015・11・18

折々のことば
２２６～２３０

ブキッチョってのは、その代わりに
憶（おぼ）えたらすごいんですよ

下町の匠（たくみ）

折々のことば　鷲田清一　226

野球というのは不思議なもので、道具を大切にする気持ちが、技術を向上させるんです

谷沢健一

東京六大学野球で記録更新中の連敗を94で止めた東大野球部。そのコーチが元中日ドラゴンズの主軸打者、谷沢だった。まるで塾でのように指導を予約し、根拠を問い、無安打を前提に得点法をロジカルに考え、道具を道具と割り切る部員たちに、戸惑いながらもまずは道具の取り扱いから伝え始めた。そう、心の配り方から。「文藝春秋」9月号、渡辺勘郎の取材記から。

2015・11・19

折々のことば　鷲田清一　227

ブキッチョってのは、その代わりに憶えたらすごいんですよ

下町の匠

器用な人なら省けるところ、すっとまたぎ越せるところが、不器用な人だとそうはいかない。なかなか思い通りにはならないから、道具や材料に聞くしかない。が、そのぶん、物との対話は疎かでなくなる。器用な人より文字どおり「物わかり」がよくなる。技が立ち上がる場所がぐっと深まるのだ。町工場に寄り添ってきた作家・小関智弘の「どっこい大田の工匠たち」から。

2015・11・20

折々のことば　鷲田清一　228

弱いところのそのまた弱いところの、その中の弱いところがすばらしい。

向谷地生良

病む人は、ちょっとした気圧や湿度の変化、空気の動きにも敏感に反応する。心の障害に苦しむ人は、他の人を蹴落とそうとか、そのために嘘をついたり背伸びをしたりと、自分に無理をかけなければならなくなると、「病気」というスイッチが入るとソーシャルワーカーは言う。病んで弱っている人は、そういう、人にとっての《不自然》を教えてくれる大事な存在なのだと。

2015・11・21

折々のことば　鷲田清一　229

葉はやはらかく　枝はかたい
かたい枝が　やはらかい葉をつくる

高見順

苦労を、痛い体験を、幾重にも内に畳み込むなかで、少しずつではあるが人には芯ができてゆく。堅い芯ができてようやっと、弱さに震えている他者にも思いをはせること、重ねることができるようになる。風にそよぐ葉のように。小説家は後年、初な心持ちで綴った若き日の詩行をしみじみ思い起こしつつ、求められればそれをよく色紙にも書いた。「高見順詩集」から。

2015・11・22

折々のことば　鷲田清一　230

（悔恨の）その光によって、悔恨することなければ思い出さなかった沢山のものごとを初めて具象的に思い出すことができる

マックス・シェーラー

希望が心を未来に託すことだとすれば、悔いは過去への心のたなびきだ。いずれも不在の時空へと心を送り届ける。悔いは後ろ向きの悲嘆や後悔ではない。悔いのなかでこそ、悔いに苛まれずにいるときは見えなかったものがしかと見えてくる。悔いはそういう発見の光としてもある。哲学者の論考「悔恨と再生」（小倉貞秀訳）から。

2015・11・23

折々のことば
２３１～２３５

彼らが親の私に対して礼儀正しくあってほしいように、親の私も彼らに対して礼儀を失いませんように

ある私立学校のパンフレット

折々のことば　鷲田清一　231

え、うちの家内きれいでっか？　十人並みよりちょっと上かな（笑）。

ホスピスの患者

薬の副作用でつい眠気がくる患者さん。話を聞こうにも、奥さんがいると照れてさらに口数が減る。が、奥さんが席を外したとたん、「うちのおばはんは」とすっとぼけつつ感謝の気持ちを口にする。余命幾ばくもない人は奥歯に物の挟まった言い方はしないが、はにかみは失わない。これが下町の「品」か。フリーの編集者、青山ゆみこの聞き書き「人生最後のご馳走」から。

2015・11・24

折々のことば　鷲田清一　232

人間は、天使でも、獣でもない。そして、不幸なことには、天使のまねをしようとおもうと、獣になってしまう

パスカル

愛を、正義を訴える人は、それをあまりに純粋に求めることで、逆に、誰かがやるしかないとあえて「美しくない」仕事を引き受けてきた人たちへの想像力をなくしてしまう。愛と正義を掲げて残虐な行為をくり返す人たちを、私たちは歴史の中で何度も見てきた。17世紀フランスの思想家の「パンセ」（前田陽一・由木康訳）から。

2015・11・25

折々のことば　鷲田清一　233

ハンスが殺されたことが悲劇なのではない。むしろ……ハンスが殺されなかったかも知れないことこそが悲劇なのだ。

東浩紀

理由は？　アウシュビッツの強制収容所では、殺されるのは「ハンス」でも誰でもよかったからである。それがユダヤ人のこの少年でなければならぬ根拠はなく、「選択はほとんど偶然で決まっていた」。ハンスは代わりのありえない存在として殺されたのではない。そこに悲劇があった。思想家の第1作「存在論的、郵便的」から。

2015・11・26

折々のことば　鷲田清一　234

彼らが親の私に対して礼儀正しくあってほしいと思うように、親の私も彼らに対して礼儀を失いませんように。

ある私立学校のパンフレット

関西のミッション系の学園が、子どもに過剰な期待を抱く保護者に配った文章。米国の教育雑誌創刊者の「親の祈り」をアレンジしたもの。親の心得として「気分のすぐれない時には黙るようにさせて下さい」、「彼らが……間違いを犯しながら経験を積む機会を奪う事のないようにさせて下さい」と続く。ただただ頭を垂れるばかり。

2015・11・27

折々のことば　鷲田清一　235

あんたが笑うと私も笑う

認知症を患う女性

人を喜ばせて自分も喜ぶというところが人にはある。ご老人はそれがうまい。赤子をくすぐる、ちょっかいを出す、にらめっこする……。認知症の婦人は犬をあやし、子守歌を歌って寝かしつけるなかで「感情」を取り戻した。生徒と先生の見分けがつかないめだかの学校のような関係がケアにはある。ノンフィクション作家、真並恭介の「セラピードッグの子守歌」から。

2015・11・28

折々のことば
２３６～２４０

野の草は　愛される人たちには
愛されぬ人々にとってほど青くない
のだ

フェルナンド・ペソア

折々のことば　鷲田清一　236

ムッツリ投げてムッツリ去る

山藤章二

トルネード投法で有名な元大リーガーの野茂英雄は、マウンドでは黙々と投げ、勝とうが負けようが記者の問いにもぼそっと生返事をするだけ。自慢や教訓は垂れず説明もしない。イラストレーターは「こういう不器用な男にしびれる」と言い、孔子から「巧言令色すくなし仁」を引く。投手は投球がすべて。叱責も黙って自分にのみ投げつける。「老いては自分に従え」から。

2015・11・29

折々のことば　鷲田清一　237

明日17になる。逃げつづけて17年になる。

ある少年

10代に向けて書かれた本には「14歳の～」というタイトルのものが多い。かつての元服の年頃である。戦後のある時期までは、大江健三郎の小説「セヴンティーン」をはじめ、歌謡曲や漫画でも17歳が危うい季節の象徴だった。17歳のとき自室でエレキギターの練習中に感電死した山田かまちを記念する美術館を訪れた少年は、こう記帳した。山田の作品集「青い炎」から。

2015・11・30

折々のことば　鷲田清一　238

この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない。

村上龍

数十万の中学生が登校をやめ、ネットビジネスを起こして大人の社会からの脱出と独立国家の立ち上げを図るという、荒唐無稽な小説「希望の国のエクソダス」。その中心人物のことばだ。未来のビジョンを語れずに、惰性と優柔不断の中で付け焼き刃の策を打つしかない時代、豊かさの見かけの中で閉塞だけが深まりゆく時代を、作家は「ゆっくりと死んでる」と表現した。

2015・12・1

折々のことば　鷲田清一　239

富士山はいきなり高いんじゃなくて、裾野が広いから高いんだよね。

柳家小満ん

富士の裾野には、足がすくむような原始の深い樹海があり、反対側には製紙工場の細長い煙突群がある。いくつもの登山口がある。稽古を重ね、人の噺もたっぷり聞くなかで、話芸は磨かれる。裾野が広いとは八方美人になれということではない。人は酸いも甘いも広くみずから経験してはじめて、見晴らしのよい高みに出られるようになる。「東京かわら版」９月号から。

2015・12・2

折々のことば　鷲田清一　240

ホネとは秀根、大事な根が骨であった。

中西進

人には目があり、鼻、歯、耳がある。植物も芽があり、花、葉、実がある。何という照応。かつて体を幹と言い、手足は枝と言った。そして根。ホは焔や稲穂のホで「すぐれたもの」を意味するとの説がある。骨が人の大事な根だとすれば、私の生き方の根幹は、そしてその存在の根っこは、はたしてどんな形をしているか？　国文学者の「日本人の忘れもの・３」から。

2015・12・3

折々のことば
２４１～２４５

野の草は　愛される人たちには
愛されぬ人々にとってほど青くない
のだ

フェルナンド・ペソア

折々のことば　鷲田清一　241

最大のタブーはもはやセックスなどではなく、「愛」なのかもしれない。

伊藤俊治

性的なものがあけすけに見られ語られる時代。人びとが本当に恐れるのは、傷つき、ときに自分が壊れてもしまう、「愛」という名の他者とのディープな交感なのかもしれない。この写真史家は、ネットに性情報が溢れだす直前の１９９０年代に、セックスはいまや「愛の親密さや感情的な交感を避ける口実」になってはいないかと、鋭く問いかけた。「20世紀エロス」から。

2015・12・4

折々のことば　鷲田清一　242

野の草は　愛される人たちには
愛されぬ人々にとってほど青くないのだ

フェルナンド・ペソア

愛しあう人がいて、その人に意識が吸い寄せられていると、まわりでほのかに点滅しているものへの感受性が鈍ってしまう。何かに集中するより、むしろぼんやりしているくらいのほうが、暗号のような世界の兆しへの感度が上がる。のめり込むより少し身を引いたほうが世界をこまやかに感じられる。この事実に人は救われる。詩選「ポルトガルの海」（池上岑夫訳）から。

2015・12・5

折々のことば　鷲田清一　243

傷つきやすいというのも能力の一つです。

山本毅

「どーだ」とばかりに、自信満々の演奏をする人がいる。それはそれで立派だが、競争を勝ち抜かないと職につけない音楽界の現状がそうさせているところがあると、打楽器奏者は言う。音楽は人を励まし、奮い立たせもするが、人を慈しみ、慰めるものでもある。傷ついた心によく共振するのは、傷つきやすい繊細な感受性だ。そもそも音楽は競いあうようなものではない。

2015・12・6

折々のことば　鷲田清一　244

まちの人が求めるのは、そこにないもの。その人が求めるのは、そこにあるもの。

大竹文雄

夏はまるで蒸し風呂のよう、冬はすきま風に打ち震える京都人は、穏やかな海に面した温和な気候と空調のきいたマンション生活に憧れる。が、外の人は自然とうまく折りあいをつけてきた京都の知恵と風情に憧れる。地の人にとってありふれたものもじつは無数の試練を経てたどり着いた一つの達成であると気づかせてくれるのは、外の人だと、京都生まれの経済学者は言う。

2015・12・7

折々のことば　鷲田清一　245

Enjoy every sandwich

ウォーレン・ジヴォン

ロサンゼルスで暮らすこのフォークロック歌手は、肺がんで余命３カ月と宣告され、残された時間を、友人と家族に遺す最後というよりも生涯最高のアルバムの制作に取りかかった。そして「今度のことで生死について見方が変わったかい？」という友人の質問にこう答えた。「どのサンドイッチを食べるときも一つ一つ味が楽しめるようになったよ」と。追悼ビデオ作品“(Inside)Out”から。

2015・12・8

折々のことば
２４６～２５０

あしひきの山鳥の尾のしだり尾の
ながながし夜をひとりかも寝む

柿本人麻呂

折々のことば　鷲田清一　246

お金が集まったらやろうと思っている人には、誰も出してくれないんですよね。

矢津吉隆

だから、やりたいことを思いついたら、人に言って、もう始めていることにしてしまおうと言う。「美術とは単に癒しや美しさのためだけでなく、日常をあらたな視点から捉え直し、世の中に様々な問いをなげかけるもの」。その信念から、美術家は仲間と空き家をリフォームし、展覧会の中に泊まれるアートホステル「クマグスク」を立ち上げた。大学の後輩への一言。

2015・12・9

折々のことば　鷲田清一　247

ぼくの職業は寺山修司です。

寺山修司

この歌人・演出家はつねづねこう語ったと伝わる。自分以外のだれもしようとしなかった仕事に取り組む。自分がここにあることで思いもしない創造的な集団が生まれる。そういう破格の人にしか口にできないことばだ。けれども、私がここにいることで人びとのこういうネットワークができたという意味でなら、どんな人にも同じことばを堂々と口にする資格はある。

2015・12・10

折々のことば　鷲田清一　248

勝ちに不思議の勝ちあり
負けに不思議の負けなし

松浦静山

戦後初の三冠王、ヤクルトを再生させてからは名監督としても鳴らした野村克也さん。とあるパーティーで企業家が引いたこの平戸藩主のことばに打ち震えた。「月見草」と自ら称する野村さん、期待されながら大輪を咲かせなかった選手、悪知恵を働かせる老投手、それに負け癖、ケガについて蘊蓄を傾ける。読むほどに納得は深まる。「負けに不思議の負けなし」から。

2015・12・11

折々のことば　鷲田清一　249

あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む

柿本人麻呂

詩人の高橋睦郎による現代語訳「百人一首」が好きだ。「山深く住む山鳥、その長く垂れた尾羽のように長長しく続くこの夜を、私はひとりさびしく寝るほかはないだろうか。恋しいあなたを遠くに置いて」。独り寝のさみしさを最後にぽそっとつぶやくまで、歌はただただその夜の長さをほんと長々と恨めしく描くばかり。「あーあ」というため息そのものが歌になっている。

2015・12・12

折々のことば　鷲田清一　250

長い間かけて自分流に成功しているのを初対面の医者に何がわかる。

松田道雄

赤ちゃんの小さな変調に不安をつのらせる母親を、小児科医はこう言って激励した。同時代の社会問題にも真正面から向きあい、子育てにあたっての父親の心構えや集団保育の意義を熱く語った。症例解説の後にはいつも「心配しなくていい」と書きつけるのを忘れなかった。近くに子育てのベテランがいない若い夫婦を、戦後長く支えつづけた「育児の百科」から。

2015・12・13

折々のことば
２５１～２５５

私語厳禁

喫茶店の貼り紙

折々のことば　鷲田清一　251

自己のアイデンティティとは、自分が何者であるかを、自己に語って聞かせる説話（ストーリー）である

R・D・レイン

個人のアイデンティティー（同一性）とは、自分がこういう人間であると納得できるそのストーリー、いわば人生の軸となるものだ。が、それは人びとのあいだでもまれ、翻弄（ほんろう）されるなかで、幾度も根底から揺るがされる。人生とはだから、自分を組み立てている物語を一度ならず語りなおしてゆくプロセスだといえる。精神科医の「自己と他者」（志貴春彦・笠原嘉訳）から。

2015・12・15

折々のことば　鷲田清一　252

私語厳禁

喫茶店の貼り紙

かつて街にはこんな貼り紙をした名曲喫茶やジャズ喫茶があった。レコードや再生装置を買うにはみな貧しすぎた時代だ。音をほおばるように聴いた。そこ以外、一人きりになれる場所がなかった。薄暗がりの中、人は自己に沈潜しようとした。携帯メールでつながるようになって、あの授業中の私語すら消えた。が、それと同時に、自己に沈潜したいという渇望も消えた？

2015・12・16

折々のことば　鷲田清一　253

人は思い出されているかぎり、死なないのだ。思い出すとは、呼びもどすこと。

山田稔

今は亡き知己たちの家のあたりを一人、ぶらっと歩いていると、ふと彼らの散歩に仲間入りしているかのような気分になる。その幸福な夢想の中ではだれも「車椅子に乗っていない」。魂と魂の、ほのかな温（ぬく）みをおびた無言の語らいに、しばし身をたゆたわせる。やがて日も陰り、それぞれの家路につく。小さな時間、大切な光景。作家の「八十二歳のガールフレンド」から。

2015・12・17

折々のことば　鷲田清一　254

人間はできたことよりもやりきれなかったことの方が記憶に残るのかもしれない

港千尋

何かを断念した思い出は、いつまでも心に貼りついて消えない。成し遂げたことはすぐに忘れるが、途中でくじけてしまった事実は、疼（うず）きのように、ちょっとした拍子に首をもたげる。この過去のことばを引かれ、そんなこと言いましたかねと、写真家・批評家ははにかむ。それはすでにしっかり身についている証しでしょう。教え子との対談（「週刊読書人」11月27日号）から。

2015・12・18

折々のことば　鷲田清一　255

自分が予想している以上に乱れている相手を、自分の中心に取り入れてしまうんです。それができるかできないかですよ、生け花は

中川幸夫

この前衛いけばな作家にとって、花は飾られるものでも鑑賞されるものでもない。まるでまぐわうかのように、花をいじくる。花の声に耳を澄ます。芽を出す頃から萎（しお）れて枯れ落ちるまで、花のいのちをしかと見届けようとする。作家にとっては花の蜜も「花の血」なのであった。東京・中野のアパートを訪れたときに聞いたことば。

2015・12・19

折々のことば
２５６～２６０

思い星人

山下洋輔

折々のことば　鷲田清一　256

帰らすくらいならいかさにゃええじゃない

リハビリ中の女性

平行棒を摑んで行き帰りするなかで脚力を回復させようとする療法士に、老婦人は「しつこい男じゃねえ」と言いながらこう口走った。日々の暮らしにこんな無意味な行為はない、と。乳児は握力をつけてから哺乳瓶を握るのでなく、瓶を握ろうと試行錯誤するなかで握力をつける。同様に、歩行能力も必要があって移動するなかで回復してくる。三好春樹の「老人介護」から。

2015・12・20

折々のことば　鷲田清一　257

死ぬとわかっていてなぜ人は生きていけるのか。その根源的な理由を考えるのが、文学部というところです。

大宅映子

意表をつく表現だが、ほぼ完璧な人文学の定義だと思う。思想も文学も美術・音楽も宗教も、個の限られたいのちを超えて個を支えるもの、ひとが〈人類〉として創造し、伝えてきた価値である。人文学はそうした創造の意味を問い、さらにその歴史的な連なりを跡づけようとする。評論家がかつて関西の私大でおこなった講演から。

2015・12・21

折々のことば　鷲田清一　258

思い星人

山下洋輔

怒り心頭、「オモイ菌」の汚染と闘っている人がいる。政治家やスポーツ選手や芸能人への取材では、決まって「どんな思いで？」と聞く。聞かれたほうも「国連の思い」「犯人の思い」などと返す。それが希望なのか決意なのか、はたまた構想、後悔、戦略なのか、きちんと語りも語らせもせず、ナアナアの思考停止に陥っていると嘆く。ジャズピアニストのブログから。

2015・12・22

折々のことば　鷲田清一　259

酒場は「いっちょかみ」があるから面白い。

井上理津子

「いっちょかみ」は大阪弁で、ちょっとだけ口を突っ込むこと。酒場では隣の客の話にもつい絡んでゆく。でもって酒がますますうまくなる。フリーライターの「大阪下町酒場列伝」から。駅ではこんな例も。東京の女性が切符を買うため小銭を入れたらなんと５００円玉のおつりが出てきた。どうしたものか困惑していると、隣のおっちゃんがすかさず告げた。「とっとき」

2015・12・23

折々のことば　鷲田清一　260

Merry Crisis and a Happy New Fear

壁の落書き

社会不安や戦禍のさなか、ヨーロッパの市中ではこんな落書きがしばしば見られた。クリスマスをクライシスに、イヤーをフィアーに変えた「危機おめでとう、新しい恐怖に幸あれ」というパロディーだ。こういう悲しくも芯の強いウィットは逆に人びとを強くつなぎもする。そういえば「メリー・クリスマス」には昔から「滅入り、苦しみます」というなんとも情けないパロディーもあった。

2015・12・24

折々のことば
２６１～２６５

それは、きょうの朝刊が真実を報道していることを確かめようとして、それを何部も買い込んでいるようなものである。

ヴィトゲンシュタイン

折々のことば　鷲田清一　261

生きているうちは、ひとは世のなかの役にたってしまう。

石田千

例が面白い。犯罪者だって、警察が動けばガソリン補給や張り込み中のパンが必要となるし、尋問中は出前のカツ丼を食べ、収監されると職業訓練で人々に貢献する。つまりは「金銭物資の流通」が起こる。どんな人も役に立つから存在に意味があるのでなく、ただいるだけで意味がある。が、そもそも役に立たないでいることが難しいと小説家は言う。「役たたず、」から。

2015・12・25

折々のことば　鷲田清一　262

ひきこもりの子供たちのことをニューヨークで聞いて、アジアの子供たちらしい革命だと喜んだり

オノ・ヨーコ

家族も学校も社会も拒否する子供。類いまれなる一個の感受性として世界に身を張ってきた前衛アーティストからすれば、ひきこもりも命懸けの「革命」と見えてくる。続けて「女性が結婚を渋るようになったと聞いて、これも革命だと嬉しがったり」とも書く。東京都現代美術館の「オノ・ヨーコ　私の窓から」展の図録から。

2015・12・26

折々のことば　鷲田清一　263

ほんとうにぼくらの時代を表現することができるのは、それに背を向けることができる者、上っ面でなく深いものを……探す者だろう

カルロ・カッソーラ

映画「プーベの恋人」の原作者でもあるイタリアの小説家は、同時代の趨勢から外れ、それからの風圧に抗うところに、時代の本質も病巣も浮かび上がると考えた。人が時代の何を拒んでいるのか、その身もだえのうちにこそ、時代の顔が現れるのだろう。I・カルヴィーノ「水に流して」（和田忠彦ほか訳）で引かれていることば。

2015・12・27

折々のことば　鷲田清一　264

それは、きょうの朝刊が真実を報道していることを確かめようとして、それを何部も買い込んでいるようなものである。

ウィトゲンシュタイン

ある記憶を証拠立てるのも所詮は別の記憶。記事の正しさを確認するために他の新聞の記事を参照しても、この限界は超えられない。結局は同じ新聞を何部も買うのと同じ。だから少なくとも知人の過去の体験や遠くの友からの知らせなど、報道されないものとの照合が、事態の立体的把握には必要だ。「哲学探究」（藤本隆志訳）から。

2015・12・28

折々のことば　鷲田清一　265

Two seconds.

英語の慣用句

「天使の歌声」とたたえられる、今注目の若手歌手サム・スミスは、日本人記者が電話インタビューしたときに、電話に出るなりこう言ったという。“One moment, please”でも“Just a minute”でもなく「２秒待って」。待たせたくないけどちょっぴり時間がかかるかも、だったらごめんね、といったこまやかな心遣いが短いことばにこもっている。このさりげない一言は癖になりそう。

2015・12・29

折々のことば
２６６～２７０

猿を決め込む

戯（ざ）れことば



折々のことば　鷲田清一　266

自分自身の声をワンバウンドで聴きながらプレゼンテーションする習慣、心の余裕を持つことが大切です。

伊東乾

オフィスでもホールでも、空間は余計な反射音を除去するよう設計されている。しかし、マイクを通したクリアで陰りのない声は聴く人の心に響きにくい。思いを届けようと思えば、マイクなしで壁のエコーを使い、前後左右から微妙な時間差で心をまさぐる、そんな「分身」術が必要だと、作曲家・指揮者は言う。「聴能力！」から。

2015・12・30



折々のことば　鷲田清一　267

ツンとくるお手紙は、いっぱいある。でも、旅のひとつの句読点だと思ってやっている。

火野正平

視聴者が手紙に綴る思い出の場所を代わりに自転車で訪ねるＮＨＫの番組「にっぽん縦断　こころ旅」。そのガイド本「人生下り坂最高！」から。ハアハア息を切らせて上りつめようやく見える風景もあれば、下り調子のときこそ見える風景もある。上りの踏んばり、つらさを知ればこそ、下りも極楽となる。人生、「ちゃんちゃん、本日は終了っていうふうに」やっていたい。

2015・12・31



折々のことば　鷲田清一　268

なまけものぶらさがり見る去年今年

有馬朗人

「怠け者」と指さされるのは、周りがみな仕事であくせくしている時。昨今は、こなすという感じの仕事ばかりで、じっくり取り組める仕事は少ない。いやそもそも定職に就きにくい。だから逆にナマケモノという語が懐かしく響く。でも、時流から外れ世を逆さに見る感覚だけは内に養っておきたいと年始に思う。俳人・物理学者がぶらり訪ねた動物園で詠む。「立志」から。

2016・1・1



折々のことば　鷲田清一　269

猿を決め込む

戯れことば

三匹の猿がそれぞれ目と耳と口を塞いでいる。見ざる、聞かざる、言わざる。これを「三猿」という。自分に都合の悪いことはあえて知らんぷりすること、これを「猿を決め込む」という。巻き添えになることを恐れて口をつぐむ人。あえてふれないことで「ないこと」にする報道。ほんとうは政治から子どもの様子まで、見ないふりしてちゃんと見ていることが肝要なのに。

2016・1・3



折々のことば　鷲田清一　270

理解できるような助言はきかないこと…ぜんぜん役に立たないにきまっているわ！

ルーシー

八方塞がり、どう動けばいいのかわからなくなったとき、脱出口を見つけたくて人に意見を聞く。もっと見晴らしのよい場所に出るためこれまでとは違う道を歩んでみようというのだから、目に入るのは当然、見慣れぬものばかり。今の自分にもわかるような助言は古い道しか教えてくれない。Ｃ・Ｍ・シュルツの漫画「スヌーピーたちの人生案内」（谷川俊太郎訳）から。

2016・1・4

折々のことば
２７１～２７５

それはまだ人々が「愚（おろか）」と云う貴い徳を持って居て、世の中が今のように激しく軋（きし）み合わない時分であった。

谷崎潤一郎

折々のことば　鷲田清一　271

難解なもの、手に負えぬものこそお誂え向きだと思っている学生の無邪気さのほうが……賢明なのである。

テオドール・W・アドルノ

問題をひしと感じそれと格闘するより先に、基礎から順にと分析法ばかり説く学問の権威主義。真の問題がどこにあるかを問う前に、解決の処方ばかり教える市場のマニュアル文化。いずれも問いに直面している人を問いから遠ざけてしまう。が、そんな学生の無邪気すらもう失せた？　哲学者の「文学ノート1」（三光長治訳）から。

2016・1・5

折々のことば　鷲田清一　272

桃李不言下自成蹊

司馬遷

「桃李もの言わざれども下自ら蹊を成す」とは、桃や李はものを言うわけではないが、その花や香りに引かれて人が集まり、下にはおのずと小道ができるという意味。徳のある人の場合がそうだが、逆に、気弱な人、情にほだされやすい人、義を感じてすぐに突っ走ってしまう人にも、脇で見ているとはらはらするので、人はつい救いの手を差し伸べる。「史記」から。

2016・1・6

折々のことば　鷲田清一　273

それはまだ人々が「愚」と云う貴い徳を持って居て、世の中が今のように激しく軋み合わない時分であった。

谷崎潤一郎

みすみす損とわかっていてそれをする。後ろ指さされると知りつつ流され、身を持ち崩す。世の趨勢からあえて外れるのは、損得勘定からすれば「愚」であろう。が、世の習いにすり寄らない、そんな生き方をも懐深く抱擁する社会は、危機をしたたかにくぐりぬける別の選択肢を用意しているともいえる。短編「刺青」から。

2016・1・7

折々のことば　鷲田清一　274

私たちはまず埃りを立てておいて、それから、見えないと不平を言うのである。

ジョージ・バークリー

問題が複雑に絡まりあっていて、どこから手を着けたらいいか途方に暮れることがある。真に考えるべき問題、突きつめるべき問題と、問題のように見えているだけのものを見分けることは存外難しい。問題にじかにふれる前にうわさ話、メディアの言論を通してものごとを見ていないか、問う前にいちど省みること。18世紀の哲学者による「人知原理論」（大槻春彦訳）から。

2016・1・8

折々のことば　鷲田清一　275

お父さんというのは役割で、一生懸命お父さんをやっているけど、だからって大人だということじゃないんだから

串田和美の母

この俳優・演出家は10代に、父・孫一と大喧嘩をした。食卓の椅子を床に叩きつけオイオイ泣いていると、母がこう諭した。これを機に父と子ではなく「友だち」になりたいと思うようになった。裏を返せば、父が大人を演じてくれる「友」だったからこそ思いきり対峙できたということ。串田孫一「考えることについて」の解説から。

2016・1・9

折々のことば
２７６～２８０

どうにもならないことはたくさんあると身に染みた今でもこんな夜があります。

知的障害の子をもつ母

折々のことば　鷲田清一　276

Your love's put me at the top of the world

カーペンターズ

「あなたの愛は私を世界の高みに連れて行ってくれる」。あの「トップ・オブ・ザ・ワールド」のさびの部分を、西加奈子「さくら」の主人公は「よーらーぷっみー、あーざーとっぽらわー」とひらがなで歌っていた。中学生の私は「あおなほーりょーへーん」。ビートルズの"I want to hold your hand"（邦題「抱きしめたい」）をそう丸覚えした。歌は意味でなく、口調で体の奥に居座る。

2016・1・10　JASRAC 出 1512461-501

折々のことば　鷲田清一　277

ぼくは二十歳だった。それがひとの一生でいちばん美しい年齢だなどとだれにも言わせまい。

ポール・ニザン

魂の内臓から噴き上げる激しい渇望。膨らむ憧れとひどい幻滅。社会の中で方位を定められずにいる漂流感。いったい何をやっているのかといった無力感。青春時代にひとはあがきと焦りに溺れそうになる。小説「アデン　アラビア」（篠田浩一郎訳）から。誰だったか「青春など若いやつにはもったいない」とうそぶく御仁もいた。

2016・1・11

折々のことば　鷲田清一　278

どうにもならないことはたくさんあると身に染みた今でもこんな夜があります。

知的障害の子をもつ母

排泄（はいせつ）トレーニングを始めて11年。今日は着替えを4組ぬらし「おむつの予備を」との手紙を持ち帰り、ぐっと凹（へこ）む。「ようやく一山越えたのかな」と喜んでいたのに。でも水好きの子はお漏らしも不快でないだったら仕方ないか……。「困ったやつ」と思いもするが、この世で二つとないご縁。朝になればきっとまた気持ちは凸に。ブログ「とんとんのヒトリゴト」から。

2016・1・12

折々のことば　鷲田清一　279

Shake it up baby

内田裕也

シェキラベイビーともシェキナベイベーとも聞こえる。初期ビートルズがカバーした曲「ツイスト＆シャウト」で有名になったフレーズ。「あれを振って踊りな」。「あれ」は腰とかいろいろ想像できる。お利口さんでいたくないんだろ、もっと突っ張っていいんだよ、お前のいいところをふてぶてしく出せ、という感じか。このロック歌手の決めぜりふは、生き方としての「ロック」を象徴する。

2016・1・13

折々のことば　鷲田清一　280

くりかえし製作すべきでもなければ、同じ人間がやたらくりかえして見るべきではない「記録」というものもあるのである。

吉田秀和

ホロヴィッツの演奏会の録画映像。そこには、聴衆はもちろん本人も見たことのない苦渋の形相が映しだされていた。音楽の「真実」をもぎとるために一人のピアニストがかくも「手荒」に扱われていいものかと、音楽評論家は思わず目を伏せる。反復して晒（さら）される画像が見る者の品位をも蝕（むしば）んでゆく例は少なくない。「私の時間」から。

2016・1・14

折々のことば
２８１～２８５

なんだか申し訳ないピカピカだね。

ある写真家

折々のことば　鷲田清一　281

みんな、「戦さになってしまって」とか、「戦さが起ってしまって」とか云ってるよ。

井上ひさし

戦後何年経っても、「私が戦争をはじめました」と認める人はついにいなかったと作家は言う。気がつけばそんなことになっていた、というのが誰も彼もの言い草だった。「した」ことがいつのまにか「なった」ことへとずらされてしまう。進んで責任を負おうとしないこの習性は、政治家や官僚という以上に、彼らに任せきった私たちのものだ。戯曲「花よりタンゴ」から。

2016・1・15

折々のことば　鷲田清一　282

われわれは過渡期にある。しかし何にむかっての過渡なのか？　それについては誰も少しもわからない。

シモーヌ・ヴェイユ

1933年にフランスの思想家は「抑圧と自由」（石川湧訳）でこう書いた。私たちも今、同じように過渡期にあると感じている。が、それは、人びとが言うように未来が予測不能だからではない。人口減少をはじめ、これからいくつもの重い課題に直面するとわかっていながら、そのために何をすればいいのか見えないからである。

2016・1・16

折々のことば　鷲田清一　283

忘れてええことと、忘れたらあかんことと、ほいから忘れなあかんこと

河瀬直美

神隠しにあったのか、幼い息子が行方不明になってかなりの時間が経つ。その父親が自分に言い聞かせるかのようにこうつぶやく。大切な人を失ったひとは、いつかはその人の不在を前提に人生を組み立てなおしてゆかざるをえない。何を軸に？　それは思い出の仕分けでもある。社会が瓦解しつつあるときもきっと同じことが言えるだろう。監督の映画「沙羅双樹」の中から。

2016・1・17

折々のことば　鷲田清一　284

なんだか申し訳ないピカピカだね。

ある写真家

友人が女性カメラマンと都心部を連れ立って歩いているとき、彼女は上層階の窓ガラスを清掃中だったゴンドラの作業員を見上げつつこうつぶやいた。そのままで美しいものはない。誰かの「見えない労働」によって整えられている。久しぶりに京都御所を訪ねたら、広大な砂利道に草は一本も生えていなかった。帰りに寄った料理屋のお肉は美しく切りそろえられていた。

2016・1・18

折々のことば　鷲田清一　285

とりあえず
さようなら

向田邦子

「あげ魔」といわれた作家は、心付けをさっと渡せるよう、財布にいつもポチ袋をしのばせた。「好日」や「花束」と上書きして。餞別にはこんなふうに。相手の心を揺さぶりすぎないよう気遣ってか。もちろん相手を喜ばせたいとの一心でだろうが、ひょっとして、情けをかけられるのが切なくて先にあげるのかも。少なくとも私の場合はそうだ。「向田邦子展」の図録から。

2016・1・19

折々のことば
２８６～２９０

プライバシーとは、
他人に挨拶（あいさつ）をすることで
守られる自己ではないだろうか。

松山巖

折々のことば　鷲田清一　286

人形の衣装の中の私の指遣いは、外からは見えないうえに、弟子にさえ明かしません。

吉田簑助

技は教えられるものではなく、ひそかに盗むものだと、文楽に一生を捧げてきた人形遣いは言う。「自分の技量分しか盗めないものですから／段階を超えた事を教えられてもわかりません」と。伝統芸能にかぎらず、人は師匠のことばによってではなく、その背中を見て、いちばん大事なことを学ぶ。同じかそれ以上の時間をかけずに「体得」はありえない。「簑助伝」から。

2016・1・20

折々のことば　鷲田清一　287

目は臆病　手は鬼

三陸地方に伝わることば

気仙沼のある魚問屋でのこと。大にぎわいの宴席のあと、下げた食器の山を見てため息をついていると、一家の母がこう言ったという。途方もない量の片付け仕事を前に怖じけているときも、とりあえず手を動かせば存外すんなり事はなる。震災後、すさまじい瓦礫の山を前にしてボランティアの人たちがこのことばを立証した。「斉吉魚問屋便り」（２０１３年２月）から。

2016・1・21

折々のことば　鷲田清一　288

プライバシーとは、他人に挨拶をすることで守られる自己ではないだろうか。

松山巖

扉ではなく薄い障子や襖で区切られるだけ、部屋に鍵もかけられない日本家屋。プライバシーは欠如しているのではなく、それを侵すことのない日常の礼儀や作法とちょっとした挨拶とによって、しっかり支えられていた。部屋に入るとき、「なかにいる人にまず声をかけ、膝をつき、障子や襖の引き手に指をかけ、ゆっくりと引く」ように。評論家の「住み家殺人事件」から。

2016・1・22

折々のことば　鷲田清一　289

己の孤独を賑わせる術を知らぬ者は、忙しい群衆の中にあって独りでいる術をも知らない

シャルル・ボードレール

群衆の中で無名になる。つまり「自分」を解除して無数の別の者になりうる。それを「自由」として楽しめてはじめて、ひとは自らのいのちを真に賑わすこともできるようになる。何ごとも自分を起点にしてしか考えられない人は、「思いのままに自分自身でもあり他者でもある」という幸福な「孤独」に浸ることができない。散文詩集「パリの憂鬱」（阿部良雄訳）から。

2016・1・23

折々のことば　鷲田清一　290

志援金を払っても何の見返りがあるとも思えませんが、大物になった気分にはなれます。

和田芳治

貨幣を介した等価交換ではなく、貨幣に換算できない物々交換をベースに地域経営を再建しようと、広島県の山あいで起業してきた「元気で陽気な田舎のおじさん」。自由な「志援」で互いに支えあおうと言う。藻谷浩介＋ＮＨＫ広島取材班の「里山資本主義」から。そういえば多くの英和辞典で、リベラルという語の意味としてまっ先に挙げられているのは「気前がいい」だ。

2016・1・24

折々のことば
２９１～２９５

何でもないことを　悲しく言うのは
何でもないけど　悲しいことを
何でもないように　言うのは苦しい

小野省子

折々のことば　鷲田清一　291

雨ニモ負ケソウ
風ニモ負ケソウ

沢村澄子

弱いことをちゃんと「弱い」と言い、苦しいことを「苦しい」と言えるのは、実は強い人かもしれない。３００枚の牛乳パックをつないで「雨にも風にも負けない傘」を作ろうとした東北の書家は、突風に煽られそうな傘を見て書いた。震災前は、壊れないものをどう作るかに腐心したが、今は「壊れた後、どうするかを考えている」と。「沢村澄子　２０１０－２０１５」から。

2016・1・25

折々のことば　鷲田清一　292

問題を解決することよりも、問題を見いだすことしたがって問題を提起することの方が肝心なのである。

アンリ・ベルクソン

面倒な問題に直面したとき、「そういうことだったのか」と、問題と見えているものの隠された前提に気づくことが、しばしば解決の糸口になる。与えられた問題の解を探るより、問題をきちんと立てることのほうが重要だし、また難しい。真の問題は創造されるものだと、哲学者は言う。「思想と動くもの」（矢内原伊作訳）から。

2016・1・26

折々のことば　鷲田清一　293

何でもないことを　悲しく言うのは　何でもないけど　悲しいことを　何でもないように　言うのは苦しい

小野省子

おのが悲しみについて書こうとすると、つい自らを哀れんで、ことばにふくらし粉をまぶしてしまう。あるがままを書くというのはそれほどに難しい。自分のことだからこそきちんと距離をとらないといけないのだが、自らを隔てるのは、言ってみればかさぶたを剝がすようなもの。ちりちり痛む。詩集「牛丼屋夜間アルバイト」から。

2016・1・27

折々のことば　鷲田清一　294

人間、一度タガがはずれると、誰しも自分のなりたくないものにまでなってしまう

成澤弘子

へたっている自分というものは、誰しも他人には見せたくない。ちょっとばかり気負うところがないと、他人の前に「自分」を立てることもできない。軸を外すとぐじゃぐじゃに崩れてしまう。軸を保てるかどうかは、「自分を育てなくてはならない時期に、すっぱだかの自分と直面したかしないかの違い」だと、エッセイストはいう。「正統派オバンギャルドの主張」から。

2016・1・28

折々のことば　鷲田清一　295

現に食べている食物をなぜひたすらまずいと考えるのか。まずいと思えば消化不良になるだろう。

小林秀雄

翻訳文化と指さされようが、底の浅い文化と揶揄されようが、判断は今ここにあるこの文化のなかで芽生えさせるほかない。たとえそれが朽ちかかっていても。歴史の地べたではなく高みに立って、時代をさげすむだけ、自らもそれにまみれてきたことを掘り下げない批評がいかに空しいかと批評家は言う。「ゴッホの手紙」から。

2016・1・29

折々のことば
２９６～３００

いやなんだ、
余韻で歌っているというのが

藤圭子

折々のことば　鷲田清一　296

六根清浄（ろっこんしょうじょう）

寺で育った義母は、孫が病でふせっていると、背中やおなかをさすりながらこの仏教語をひたすら唱えた。六根とは目や耳や舌など、世界を感受する六つの器官、言ってみればいのちの座。病はこの失調からくる。それらが清らかに整うことを願ってこの語をくり返すのだった。元来は寒参りや登山のときに唱えるらしいが、私には人のいのちを深く愛おしむことばに聞こえる。

おまじない

2016・1・30

折々のことば　鷲田清一　297

意識はしばしば感覚のひだのなかに身を潜めている。

ミシェル・セール

祈るときは合わせた二つの掌（てのひら）のあいだに、口惜しくて歯ぎしりするときは歯と歯のあいだに、悔いて顔をしかめるときは眉間（みけん）、あるいは瞼（まぶた）のあいだに、魂はある。このように魂は体のいろんな場所に散在すると、現代フランスの思想家は言う。脳の科学とは違い、魂にじかに響いてくる魅力的な思考だ。では他人の皮膚と触れあうときには？「五感」（米山親能訳）から。

2016・1・31

折々のことば　鷲田清一　298

とても清々（すがすが）しい気持ち悪さでした

ある展覧会の来場者

何かよくわからないものは人を不安にするが、妙にわかりやすいもののほうが本当は怪しいのではないか。今の自分には理解困難なものとの出会いこそが視野をぐいと開く。だから、不可解なものを不安がるのではなく、ときめきをもって感受すること。山縣良和＋坂部三樹郎による奇抜なファッションコレクション《絶命展》に寄せられた感想。「ファッションは魔法」から。

2016・2・1

折々のことば　鷲田清一　299

いやなんだ、余韻で歌っているというのが

藤圭子

喉（のど）の手術を受けて声が出やすくなったのに、逆に引退を決めた歌手は、なぜと訝（いぶか）しむ対談相手にこう答えた。一度頂を極めたら、あとは転げ落ちるか、別の頂に跳び移るしかない。お金のことを考えれば続けられるかもしれないけれど、それは仕事じゃないし、ましてや歌ではないと。自分を模倣してまで生きながらえたくないということか。沢木耕太郎の「流星ひとつ」から。

2016・2・2

折々のことば　鷲田清一　300

福は内　鬼も内

梅原猛

「創造者というものは一種の鬼を自分の中にもっていなかったならばすぐれた仕事はできない」と哲学者は言う。鬼は小心な計算を嚙（か）う魔物かもしれない。怨（うら）みを残して逝った死者かも、畏（おそ）るべき風体をした異人かもしれない。いずれにせよ、訳もわからないまま内から激しく突き上げてくるものに身を開いておかないと、人は何かを創ることができない。「老荘（ろうそう）と哲学」から。

2016・2・3

折々のことば
３０１～３０５

時の流れがね、
落っことしていったものを
一番後ろから拾いながら
トボトボと行くっていうのが、
私には合ってるかなって思うんです

中島みゆき

折々のことば　鷲田清一　301

きみはすぐ「なるほど」って言うね。

大瀧詠一

知りあいの記者がこの音楽家を取材中、よく理解できないことがいろいろあって、発言が途絶えないようつい相づちを打っていたらこう言われたという。何度も同じ質問を受けるプロは、ふつう宣伝もあって期待されているとおりに答えはするが、他方で、知らない自分に気づかせてくれるような反応を密かに求めている。通じていないということがときにプロを奮い立たせる。

2016・2・4

折々のことば　鷲田清一　302

「これもいい」「あれもいい」という発想のほうがおいしい料理を作れる。

小林カツ代

すぐに作れるおいしい料理を紹介し、忙しい親たちに支持されていた料理家は、自然派とか安全派、「食育」などと肩ひじはらずに、おいしい料理を食べさせるほうが子育てにはいいと言う。実際、おいしいものを作って喜ばせてあげようと腕を鳴らす人が輪の中心にいると、その集団は華やぐ。ほんとうはそれがいちばんいいのかも。「学びの場.com」の取材に答えて。

2016・2・5

折々のことば　鷲田清一　303

言葉なんかおぼえるんじゃなかった（略）
意味が意味にならない世界に生きてたら
どんなによかったか

田村隆一

生きることの意味、世界があることの意味。人は生きようとしてそれに深くこだわる。そして翻弄される。世界を意味に約めてしまわないこと。意味の膜ごしに世界をいわば「水平」になぞるのではなく、その膜を切り裂かんばかりに世界と「垂直」に対面すること。言葉の限界をも詩人は言葉で突きつめようとする。詩「帰途」から。

2016・2・6

折々のことば　鷲田清一　304

すぐ役立つことは、すぐ役立たなくなる。

橋本武

中勘助「銀の匙」を3年かけて読むという型破りの授業を続けた灘中学・高校の元教諭のことば。役に立つことを軽視するのではない。役に立つということを考えるときには、そもそも「何のために」かを深く考えること。自分たちに続く世代の行く末に思いをはせつつ、当面の利益に勝るものが何か、生徒にじっくり探らせようとした。本紙2014年1月18日夕刊から。

2016・2・7

折々のことば　鷲田清一　305

時の流れがね、落っことしていったものを一番後ろから拾いながらトボトボと行くっていうのが、私には合ってるかなって思うんです

中島みゆき

時代の浮かれの中で目もくれられずまた ぎ越されてしまうもの、時代の厚い雲にさえぎられ見えなくなっているもの、時代の勢いの中で置いてきぼりにされたもの。用済みと払い落とされたおがくずのような命の佇まいを慈しむ、その落ち穂拾いの小さな足音にこそ耳をそばだてたい。NHK「SONGS」（昨年11月7日）での発言。

2016・2・8

折々のことば
３０６～３１０

どっちかっていうと、私、「好き」より「嫌い」のほうが好きなの。

石内都

折々のことば　鷲田清一　306

手作り＝ステキ。ではないと思うのです。まさかこれを手作りで？　というものをさらっと作るのがステキかなと思っています

片根智子

東京・代々木上原でベーカリーを営む夫婦。籠作りやエプロンの製図は妻が自分で。「手作り」だから好きというのは、「はやっている」から好きというのと変わらない。記号や意味を通さずに、物の佇まいにじかに心をときめかせたい。そのような物を作れるのは、手が勝手に動くほど素材と長く深く向き合ったあと。「毎日のパン」から。

2016・2・9

折々のことば　鷲田清一　307

お疲れ様です。

メールの書き出し

メールの出だしによくこうある。「みんなそんなに疲れてるの？　疲れたって認めたらもう踏んばれないよ」と返したくなる。疲れが人に蔓延してしまう。たぶん「とりあえずビール」と同じで、本番に向けて力むことなく助走するための符号みたいに使われているのだろう。でも元は、他者をねぎらうことで自分を励ましもすることば。せめて用件を伝えた後に書きたい。

2016・2・10

折々のことば　鷲田清一　308

どっちかっていうと、私、「好き」より「嫌い」のほうが好きなの。

石内都

「好き」より「嫌い」のほうが対象により激しくこだわっている。魂がどうしてもざわついてしまうのだ。それは魂を裏から炙りだす熱のようなもの。だから自分の、そして他者のいのちの道筋をたどるためにこそ「嫌い」なものを撮る。皮膚に残る傷痕やひび割れ。亡き母の口紅や下着。爆死した子の服。作家・黒川創らのインタビューに答えた「女・写真家として」から。

2016・2・11

折々のことば　鷲田清一　309

言葉は人の動きや思考を仕切り直すために存在するべきで、信頼よりも打破のために使われるべきだと思う。

武田砂鉄

決まりきった言い回しが溢れ、それに誰も違和を覚えない、そんながちがちの世界に人はべたっと貼りついている。言葉はたしかに散らばった思いをまとめるためにある。が、それ以前に、世界のオブラートを剝がし、凝固した世界を溶かし編みなおすため、世界を別な仕方で切り開くためにある。フリーライターの「紋切型社会」から。

2016・2・12

折々のことば　鷲田清一　310

一瞬でも風が吹いたら倒れてしまうぐらいのバランスでやりたい。

オダギリジョー

このような緊張を持続できるのは凄いことだ。野生の獰猛さをすら感じる。けれどもだれにも一度や二度は、修羅場をくぐった経験はあるのではないだろうか。これと似た思いでかろうじて人生の綱渡りをしたことが。一度それを経験したら度胸がすわる。何ごとにもすぐには動じなくなる。NHK「SWITCHインタビュー達人達」（昨年11月28日放送）での俳優の発言。

2016・2・13

折々のことば
３１１～３１５

取材は「おもしろいってわかってる」から行くんじゃない。
「おもしろそう」だから行く

都築響一

折々のことば　鷲田清一　311

人物が「通っていった感じ」。いつもそこを求めている。

国本武春

同じ演目を何百回とやっていると、人物がひとりでに動きだすことがあると浪曲師はいう。能では一つの面をいくつもの魂が通り抜け、文楽では人形にいのちが吹き込まれる。落語では同じ一つの顔が男、女、老人、幼児へと刻々変化する。たまたま魂が枝にとまるように一つの体にとまるのだとすれば、「私」もこの体をよぎるものとなる。そう考えると気持ちが少し楽になる。

2016・2・14

折々のことば　鷲田清一　312

目から鱗が落ちる

使徒行伝（新約聖書）

イエスを迫害していた張本人が、突然視力を奪われる。イエスの弟子が手をあてると目から鱗のごときものが落ち、彼は回心する。鱗とは、折り重なる先入見で曇らされた眼鏡のようなもの。外すと視界がぱっと開ける。だがそれは、色眼鏡を透明の眼鏡にかけ替えただけのことかもしれぬ。仮面を外した素顔が別の仮面であるように、人はついに眼鏡なしには見えないのかも。

2016・2・16

折々のことば　鷲田清一　313

教育とは死に至らない失敗を安全に経験させるためのものです

植松努

教育は、失敗や責任の避け方を教えるものでなく、それへの対応の仕方、その乗り越え方を教えるものであるはず。失敗は許されないという空気が、結果として「誰の責任なのかわからないシステム」をつくり上げると、宇宙開発にかかわってきたこの町工場の経営者は言う。人はつい「どうせ無理」と口にするが、まずはそれに負けない人を育てたいとも。「思うは招く」から。

2016・2・17

折々のことば　鷲田清一　314

取材は「おもしろいってわかってる」から行くんじゃない。「おもしろそう」だから行く

都築響一

会議でアイデアを持ち寄っても、それぞれ不十分なところをあげつらい、結局はつぶしあいに終わって、無難な、ということはつまらない案だけが残る。未知の不確定なものだけど「おもしろそう」、という発端のぞくぞくした気持ちがそがれてしまうから。何がはやるかという意識をまずは捨てなければ斬新な企画はできないと、編集のベテランは言う。「圏外編集者」から。

2016・2・18

折々のことば　鷲田清一　315

真の方法は、探究されるべき物事の性質に従う。

エドムント・フッサール

あらゆる対象を等しく分析できるような一つの方法は存在しない。物事の真相を捉えるにはそれにふさわしい方法、文体、もしくは表現のスタイルがある。対象がナイフの研ぎ方を教えてくれるのであって、対象にナイフの切れ味を押しつけてはならない。これは芸術や建築についても言えること。〈現象学〉という分析の方法を提唱した哲学者の「厳密な学としての哲学」から。

2016・2・19

折々のことば
３１６～３２０

《人類愛》は逆説を含んでいる。
というのは、人間一般を、人間であるというだけの理由から愛するのは《矛盾を含んでいる》からだ。

ウラジミール・ジャンケレヴィッチ

折々のことば　鷲田清一　316

世界は多分雲形定規のような形をしているのだろう。

三島由紀夫

ふいに旋回し、そこから思わぬ動きを始める世界。そして人生。「一つの辺がいつのまにか妙にひねくれて内側へ曲っていたり、かと思うと、まっすぐな一辺が突然断崖絶壁になったりする」と、小説「命売ります」の主人公は言う。人生の渦中で下す判断はたしかにサーフィンのよう。微かな兆しにも感応する嗅覚と、とっさの目配りと平衡感が要る。後で疲れがどっと出る。

2016・2・20

折々のことば　鷲田清一　317

できるだけ屈折している人がいい……光がいったときには、普通の人の屈折率よりも違うふうに光が入って、演劇が立ち上がるんだ。

蜷川幸雄

世の習いにうまく合わせられない人、生き方がこじれている人のほうが、演出に対し複雑に反射するので、演技は厚くなる。どこか時代の影がさすところもあり、演技に独特の綾が生まれると、演出家は言う。俳優について語っているのだが、人生というドラマにおいてもきっと同じことが言えるはず。「蜷川幸雄の稽古場から」より。

2016・2・21

折々のことば　鷲田清一　318

《人類愛》は逆説を含んでいる。というのは、人間一般を、人間であるというだけの理由から愛するのは《矛盾を含んでいる》からだ。

ウラジミール・ジャンケレヴィッチ

人は他者を理由なしには愛せない。が、「彼／彼女は～だから」という理由でだれかを愛するのは「その人」そのものを愛することではない。逆に、何の条件もつけないで他人をただ「人間である」ということだけで愛することもできない。ここに人間の愛の矛盾がある。20世紀フランスの哲学者の「道徳の逆説」（仲沢紀雄訳）から。

2016・2・22

折々のことば　鷲田清一　319

We did it.

米国の宇宙物理学国際研究チーム

運がようやっと巡ってきたとガッツポーズで「やったあ」と言うよりも、揺るがぬ信念をもってやり遂げたという「やりました」の感じか。苦難を極めてついになしとげた偉業は、冗舌にではなく抑えめの短いことばで表現される。言いたいことは無数にあろうが、それらをのみ込んだほうが、かえって聞く人の想像をかき立て、さざ波のように遠くまで伝わる。「重力波」観測の記者発表の席で。

2016・2・23

折々のことば　鷲田清一　320

知らないうちになくなっていることも多いし、なくなっていることすら、気づけねえこともある

復興途中の被災地で

自分というのは底が見えないものだから、失ったものが何かも計り知れないところがある。被災地の男性は、「もう何も失いたくねえ。津波であんなになくなったのに、まだ失うものがあったのかと驚いてしまう」と言う。喪失の思いは時とともに膨らみ、内にこもる。小森はるか＋瀬尾夏美の映像作品「波のした、土のうえ」から。

2016・2・24

折々のことば
３２１～３２５

寛容は自らを守るために不寛容に
対して不寛容たるべきでない

渡辺一夫

折々のことば　鷲田清一　321

細く　長く　曲がることなく　いつも　くすくす　くすぶって　あまねく　広く　世の中へ

松栄堂

京都のお香の老舗、その創業家に伝わる家訓。太くて重い存在感などなくていい。冴えてなくても輝いてなくてもいい。目につかないところでちょろちょろくすぶっていればいい。ただ、曲がったこと、それだけはしてはならない。調子に乗ってはいけない。線香のように地味に静かにこれを守っていれば、いつかきっと人様のお役に立てる……。相伝もこうして長くまっすぐ。

2016・2・25

折々のことば　鷲田清一　322

人生を模糊たる霞の中にぼかし去るには老碌状態が一番よい。

森於菟

明澄な意識に突如訪れる死は悲惨だ。だから「完全なる暗闇に入る前に薄明の中に身をお」き、現実の「あくどさとなまぐささ」をいったん失うことが肝要。「現実を忘れるどころか、この調子では死ですら越えて夢見そうである」という境地に入れば、死は「夢のつづき」であるばかりか「望みうる唯一の生」かもしれないと、森鷗外の長男の医学者は言う。「老碌寸前」から。

2016・2・26

折々のことば　鷲田清一　323

寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容たるべきでない

渡辺一夫

人間は、弱肉強食の残酷、決闘の悲惨から、法という契約を立てて脱却してきた。暴行・蛮行も「非人間的な取扱いは決してしないというむつかしい条件の下に」制裁してきた。不寛容はさらに激しい不寛容しか生まないから。不寛容を後になって反省しても、犠牲は生き返らないから。寛容は寛容によってしか守れないと、フランス文学者は言う。「狂気について」から。

2016・2・27

折々のことば　鷲田清一　324

故郷から伸びているいちばん丈夫な糸は……胃につながっている

P・ワイリ&A・ゲニス

「おふくろの味」といわれるように、故郷の味覚の頑固さはだれもが認める。とはいえ故郷の味も、われらがカレーライスやラーメンがそうであるように、「国籍」などといった囲いには微塵もこだわらない。旨いものは旨い。食の貪欲さはナショナリズムなど蹴散らしてしまう。20代で「ソ連」からアメリカに亡命した2人組の「亡命ロシア料理」（沼野充義ほか訳）から。

2016・2・28

折々のことば　鷲田清一　325

正義とか快適とか、一方向にしか向かわない言葉は、心を狭くする。

徳永進

誰も正面きって反対できない観念は、出かかった言葉をのみ込ませる。思いのたけどころか、小さなためらいをすら口にさせない。そうしていのちの機微と揺らぎを一つ一つ潰してゆく。「効率」や「公平」もときにそのように働く。「生と死という反対言葉が支配する臨床の現場にいるから、なおさらそう思います」とホスピス医は言う。本紙２０１１年1月18日夕刊から。

2016・2・29

折々のことば
３２６～３３０

彼らは命令しないのです。

半藤一利

折々のことば　鷲田清一　326

三月の甘納豆のうふふふふ

坪内稔典

俳句は日常の断片を事細かに説明するのではなく、刷毛で掃くようにさっと描く。そして、すっと一息でつぶやける、そんな口のなじみを大事にする。甘納豆をほおばりながら、長かった冬の厳しさが終わり春はもうすぐそこ、と思うと、自然に顔がほころんでくる。それだけでいい、いや、それがいい。そのことをだれに憚ることもなくもらす、ことばによる一筆書きの世界。

2016・3・1

折々のことば　鷲田清一　327

彼らは命令しないのです。

半藤一利

１９４４年秋、零戦で敵艦に体当たりして散る特攻作戦が軍令部で起案された。ある幹部が航空隊副長を言いくるめるため、副長に任せるという上官の架空の意思を伝えると、副長は上官が承知しているならと同意した。そしてそれは「澎湃として下からの熱意に」よるとされた。誰も責任をとろうとしない体制は以後もずっと「志願」という形をとった。作家の「昭和史」から。

2016・3・2

折々のことば　鷲田清一　328

いいや

ドラマ「あさが来た」のせりふ

「否」。ＮＨＫの連続テレビ小説の中によく出てくるせりふ。商家の主人も番頭さんも女子衆も、同意できないときに言う。「違う違う」と反射的に否定するのではなく、これまで自分が後生大事にしてきたことからしてそれだけは肯えないとびしっと否認するときに、短い沈黙を置いて口にする。転換期に必要なのは意志の融和ではなく、信念に裏打ちされた「否」の交換だ。

2016・3・3

折々のことば　鷲田清一　329

あなたは何を根拠にだれかを信頼し、あなたの傷つきやすさを預けようとするだろうか。

田中功起

１台のピアノを5人の演奏家が並んで弾く。5人の陶芸家が1個の陶器を作る。目的や価値を共有することなく「共にある」ことははたして可能か？　たがいに見知らぬ人たちに、共有するものがないまま、融和もできないまま協働作業にあたらせる、そんな実験をこの美術家は試みてきた。水戸芸術館で開催中の個展「共にいることの可能性、その試み」のちらしから。

2016・3・4

折々のことば　鷲田清一　330

このままでいいですわ。そんなどころやない。言うてられしませんわ。

獣医院にて

家の犬がいつもお世話になっている獣医院に「てんかん」の発作を起こしたワンちゃんが運び込まれてきた。不安げに診察台をのぞき込む飼い主。彼女が待合室に戻ってきたとき、ふと見たら上着が裏返しになっている。そのことをさりげなく伝えると、こう返された。飼い犬の異変に取り乱す人がいる一方で、もて余してついに手放す人がいる。犬の生涯は人に翻弄される。

2016・3・5

折々のことば
３３１～３３５

朝食は一人で食べなさい。
昼食は友人と分けなさい。
夕食は敵に与えてしまいなさい。

北方のことわざ

折々のことば　鷲田清一　331

髪をみじかくしたり
つよく小指をかんだり
自分ばかりを責めて

島倉千代子

悲しみに染められたとき、ひとはなぜ自分を責めてしまうのだろう。怒りがこみ上げるときは他人を厳しく攻撃するのに。恋も別れも不意に訪れる。心が傷ついた時、心が揺れる時、女も男も人生いろいろに「咲き乱れる」と島倉は歌う。彼女の告別式では出棺の際にこの曲が流されたという。中山大三郎作詞「人生いろいろ」から。

2016・3・6　JASRAC　出　1601985-601

折々のことば　鷲田清一　332

自分の力というものは、それを与える人がいてはじめて存在できるのだなと思った。

金子郁容

宿泊先を記したメモを失い、米国の空港で右往左往している人を日本から電話で助けた研究者は、自分のほうが力をもらった気がした。自らを「問題の一部」と感じ、それを自分から切り離さないことで「窓が開かれた」と。あえて自分をバルネラブル（傷つきやすい）な状態に置くというボランティアの本質がここに現れ出ている。ネットワーク論者の「ボランティア」から。

2016・3・7

折々のことば　鷲田清一　333

私の生涯は極めて簡単なものであった。その前半は黒板を前にして坐した、その後半は黒板を後にして立った。

西田幾多郎

これで「私の伝記は尽きる」のだと、この思索の人は語る。その意味では幸福な時代であった。学問が学問として自足していると固く信じえたのだから。今は学問が時代とどのように密通し、社会のなかでどのような位置を占めるのかの厳しい自己照査なしに、学問は学問として成り立ちえない。随想「或教授の退職の辞」から。

2016・3・8

折々のことば　鷲田清一　334

村八分

言い習わし

掟を破った者を村の相互扶助のしくみから排除する制裁のこと。村にはかつて、婚礼、看病、家の普請、水害時の世話など、協力して行う仕事が十分あった。うち消火と埋葬の二分を制裁から外したのは、延焼と伝染病が村人に及びかねないから。現代の都市生活では、二分どころか十分すべてを行政や企業によるサービスに依存するようになり、協同の力がぐっと落ちている。

2016・3・9

折々のことば　鷲田清一　335

朝食は一人で食べなさい。昼食は友人と分けなさい。夕食は敵に与えてしまいなさい。

北方のことわざ

ロシアなど北方では、朝食はたらふく食べ、昼食はおつきあいでほどほどにとり、夕食はできるだけ控えめにするように言う。後の活動の時間を考えると、たしかに理にかなっている。地中海側では逆に考える。昼は仕事のエンジンに給油するため、ゆっくりたっぷり食べる。夜はもう寝るだけだから、心ゆくまで酔いしれ、味わい尽くす。文化にはそれぞれの〝哲学〟がある。

2016・3・10

折々のことば
３３６～３４０

初めはしんみり、
中はおかしく、
終(しま)いは尊く

言い習わし











折々のことば
３４１～３４５

先王、人に忍びざるの心ありて、
斯（すなわ）ち人に忍びざるの
政（まつりごと）あり

孟子

折々のことば　鷲田清一　341

悟りといふ事は如何（いか）なる場合にも平気で生きて居る事であつた。

正岡子規

俳人にとって悟りとはいつでも平気で死ねることではなく、生をひたすら愛でることであった。激痛にのたうちまわるなかでも、弟子たちを頻繁に迎えた。薬や麻痺（まひ）剤を服用する一方で、パン、スープ、鶏卵、刺し身、焼き物、飯と三食しっかり食べ、間に牛乳や菓子パンも。死の直前まで床で画譜画帖（がじょう）を楽しみ、絵筆をとり、料理や社会情勢・教育を論じた。「病牀六尺（びょうしょう）」から。

2016・3・16

折々のことば　鷲田清一　342

失うのは一回きりだとしても、人は何かを失ったとき、それを失い続けるともいえる。

宮地尚子

大事な人を失った人はその喪失感をいつまでも反復せざるをえない。食卓での些細（ささい）な会話、もう洗うこともない泥だらけのユニホーム、しがみついてくる小さな手。予感に体が動いてしまうが応えはない。「あるべきものがそこにない」というより「もうあるべきでないものが、そこには確固としてある」と表現したほうが正確だと、精神科医は言う。「ははがうまれる」から。

2016・3・17

折々のことば　鷲田清一　343

「弱さ」は「強さ」の欠如ではない。「弱さ」というそれ自体の特徴をもった劇的でピアニッシモな現象なのである。

松岡正剛

幼いころ作った小さな鉱石ラジオがキャッチしたのはＮＨＫの気象概況。「稚内では風力三、気圧一〇五七ミリバール」。雑音のあいだから微（かす）かに聞こえた。この「おぼつかなさ」が、思わぬ過剰な反応を自分から引き出したと編集者は言う。消え入りそうなほどに微弱な音は微細な感受性をくすぐり目覚めさせる。「フラジャイル」から。

2016・3・18

折々のことば　鷲田清一　344

自分でも一人前の大人か、青二才か分からないでいるしまつだった……けっきょく、何者でもなかったわけだ。

ヴィトルド・ゴンブローヴィッチ

男っぽくも女っぽくもなく、実直でも不埒（ふらち）でもない、そんな分類不能な存在に人は強い不安を抱く。厄介者であってもいいからまずは何者であるか、はっきりせよと言う。社会の設定した仕切りを飄々（ひょうひょう）とまたぎ越す存在こそ、人としての可能性を広げてくれるものなのに。ポーランドの小説家の「フェルディドゥルケ」（米川和夫訳）から。

2016・3・19

折々のことば　鷲田清一　345

先王、人に忍びざるの心ありて、斯（すなわ）ち人に忍びざるの政（まつりごと）あり

孟子

いずれ成熟へと向かうはずだった先進国で、格差と貧困がこれほど深刻な問題になろうとは誰が想像しただろう。昔の立派な王は、他人の悲惨を見過ごしにできない心を持つのみならず、他人の悲惨に深く同情する政治をしたと孟子は言う。つまりそこには「惻隠（そくいん）の情」（人の不幸を前にしていたたまれない気持ち）からする政治があった。「公孫丑章句　上」（貝塚茂樹訳）から。

2016・3・20

折々のことば
３４６～３５０

オレノ、スキナヒト

A・Kさん

折々のことば　鷲田清一　346

社会関係のなかに埋めこまれていた経済システムにかわって、今度は社会関係が経済システムのなかに埋めこまれてしまったのである

カール・ポランニー

身も蓋もない言い方をすれば、あらゆるものが貨幣価値で測られるようになったということ。何ごとも利潤を動機として動く人は未熟であり、「経済的人間」を本来の人間と見る人は哀れなばかりに単純だ。「人間の社会的想像力が疲弊の色を示している」と、経済人類学者は嘆く。「経済の文明史」（玉野井芳郎・平野健一郎編訳）から。

2016・3・21

折々のことば　鷲田清一　347

清く楽しく美しく

小泉今日子

「清く正しく美しく」という標語にちらっと反発する。「なければならない」という窮屈な意識は感覚を怯ませる。「みんなが高速道路をガーッて走っているんだけど、畦道をバイクで走ってるみたいな感じ」のほうが素敵だと言う。「歌手」になる前、一人で原宿をぶらついていた中学生の頃の感覚を思い出し、いつもそこへ気持ちが戻れる自分でありたいと。「原宿百景」から。

2016・3・22

折々のことば　鷲田清一　348

あんたも腹にひとつ重りを落として、時間が経つのを待ちなさい

桜木紫乃

夫のことでいろいろ思い煩う苦労人の女性に、「男も、外でいろいろあるところを、コップ酒一杯で腹に落として家に帰るのよ」と、先輩の姐さんが言い聞かせる。あがいているとき、体にお酒の一滴を落とし、いっときまるごと体にまかせたら、傾いたいのちも平衡を取り戻せる？　ひとはよく体に我慢を強いるが、逆に体に救われることもある。小説「霧」から。

2016・3・23

折々のことば　鷲田清一　349

記憶というのが、ひと条の糸のようなものだったら引きずり出して巻きとっていけるのに

金時鐘

たいていの傷は喉元過ぎれば忘れる。深手の傷はいつまで経っても過去になってくれない。気圧の微かな変化に古傷が疼くように、不意に押し寄せる。「思い起こそうとすると固まりのまま、わっと押しあがってくるから、言葉にならない」。詩人の苦闘は一にこの語れないものをどう語るかにあった。作家・金石範との対談「増補　なぜ書きつづけてきたか　なぜ沈黙してきたか」から。

2016・3・24

折々のことば　鷲田清一　350

オレノ、スキナヒト

A・Kさん

研修4年目の女性医師は、認知症にさらに小脳梗塞を併発し「茶色い涎を垂らして獣のように転げまわる」86歳の男性患者の担当になって、「貧乏くじを引いた」と思った。つきっきりで向きあうなか、ある日「Aさん、私は誰ですか？」と話しかけると、患者さんがこう返したという。医師は思わぬご褒美に胸がいっぱいになる。永田久美子監修「私の声が見えますか？」から。

2016・3・25

折々のことば
３５１～３５５

「恒例　まける日」

ある商店の貼り紙

折々のことば　鷲田清一　351

ふたりで揃ってお膳に頭をさげる恰好は、小学生が先生の前でお辞儀をしている様である

深沢七郎

膳の上にはコッペパン二つと朝飯の残りの冷めたみそ汁だけ。製本屋の夫婦はこれを前に「いただきます」と深く頭を下げる。仕事中も話はしても紙を折る手は休まない。体を動かし、体を養う糧を得る。生計を立てるための仕事をかつて「口過」と言い、粗末な食事で済ますことを「糊口」と言った。命を頂いていることへの畏敬があたりまえにあった。小説「庶民烈伝」から。

2016・3・26

折々のことば　鷲田清一　352

「恒例　まける日」

ある商店の貼り紙

漫画家の吉田戦車さんはこの貼り紙を面白がる。「まける」は値引くこと。売る側がわずかながら損をするからだ。「おまけ」は「お敗北」。買う側は得した気になるが、実は「自分の物欲に負け、メーカーの企業努力に負けている」。売る側は「かなわんなあ」と言いながら本当は勝っている。「勉強する」とも言うが、「まける」のほうが温かくて好きと。「日本語を使う日々」から。

2016・3・27

折々のことば　鷲田清一　353

事実なるものはなく、あるのはただ解釈のみ

ニーチェ

世界はいつもある視点から捉えられる。いいかえると、どこからどう見るかでその見え姿も変わる。だから、解釈から切り離された「事実」そのものがあるわけではない。世界はつねに別様にも解釈できる。「事実」を意味する英語の「ファクト」はラテン語の「作られたもの」（ファクトゥーム）に由来する。19世紀末ドイツの哲学者の遺稿「権力への意志」（原佑訳）から。

2016・3・28

折々のことば　鷲田清一　354

教育においてもっとも大切なことは、すべてを意識化してはならぬということ、またそんなことはできぬと諦めること

福田恆存

教育は「信頼が支配する領域」。見張るかのように警戒や不信の目で子どもを見る人は、子どものみならず、子どもに対する自分の態度をも信じていない。つまり、人のあいだで最初に立ち上がり最後まで残る「自然発生的なもの」を信じていない。教育は計算してどうこうなるものではないと評論家は言う。「教育・その本質」から。

2016・3・29

折々のことば　鷲田清一　355

間　すかっと

岩城見一

以前紹介した「超絶短詩」の最新版。超絶短詩とは、一つの語句を、別の語句と、擬音語・擬態語を含む間投詞とに分解してつくるもっとも短い詩のこと。「マスカット」を美学の碩学はこう歌った。果物の贈答が人と人のあいだを滑らかにする？　考案者の篠原資明が編んだ「吉田山百人一晶」から。ほかに「Ｙｅａｈ！　で？」（家出）、「さ　祝」（幸い）といった秀句も。

2016・3・30

折々のことば
３５６～３６０

コンテクストの近い人でなく、
コンテクストを広げられる人でもなく、
独特のコンテクストを持っている
人から採ってゆく。

平田オリザ



折々のことば　鷲田清一　356

努力は趣味の一種なの。女好きとか遊び好きとか貯金好きと同じ水準。

東海林さだお

この漫画家が努力好きでワーカホリック（仕事中毒）だと聞いて、インタビュアーの平松洋子さんは、両方とも「自分で自分に負荷を与えることで思いもよらなかったものを獲得できる快感」ですねと言う。それへの返答。やりだしたら止まらない、要は、何かに耽る、のめり込むという人の業が、文化を起動させるのか。「創作とショーバイ」（Ｃｏｙｏｔｅ第57号）から。

2016・3・31



折々のことば　鷲田清一　357

ヘンな人と付き合いながら、僕はかろうじて呼吸を続けることができた

秋田光彦

奇人・変人が少なからずいる町が住みやすいのは、これ以上向こうに行くと危ないというリミットが目に見えるから。あの極端とこの極端のあいだなら何をしてもいいという、言ってみれば歯車でいう〈あそび〉の空間がたっぷりとあるから。だからそこでは、自分はどういう存在かとすぐに決めなくても生きてゆける。僧侶に取材した杉本恭子のブログ「坊主めくり」から。

2016・4・1



折々のことば　鷲田清一　358

語ること、書くことは、ある経験を翻訳することであるが、その経験はしかし、それが紡ぎだす言葉のなかではじめて原典となる。

モーリス・メルロ＝ポンティ

言葉にならない経験を言葉で表現しようとするとき、人はそれを翻訳の作業になぞらえる。だが、外国語の原典もあくまで自言語を通して探るほかないように、言葉以前の経験も言葉として整えられてはじめて形をなす。経験に浸っているだけではいつまでもその経験の意味は明らかにならない。哲学者の講義要録集「言語と自然」から。

2016・4・2



折々のことば　鷲田清一　359

……この人、あかんと思うた。

あるジュエリー・デザイナー

とことん悲しいときは目が乾く。涙を流すまでに数カ月かかる。そんなこともわからないのか……。夫に「おまえ、自分の子ども死んでも泣かへんな」と言われて。ダンディーでならした夫が子どもの死後、トレンチコートを裏向きに着て徘徊しているのを目撃したと人から聞いて、この人だめになると思い、よけい泣けなかったのに。それもこれもあって、その後別れたという。

2016・4・3



折々のことば　鷲田清一　360

コンテクストの近い人でなく、コンテクストを広げられる人でもなく、独特のコンテクストを持っている人から採ってゆく。

平田オリザ

劇作家は団員を採用するとき、こういう方針であたると言う。コンテクスト（脈絡）とはこの場合、その人の立っている場所、とくにそこで彼／彼女がどんな人のネットワークを紡いでいるかということ。それが自分のそれとかけ離れた人から選んでゆく。思いも寄らないものとの接触からしか真に新しいものは生まれないから。

2016・4・4

折々のことば
３６１～３６５

一生懸命やるかどうか
わかりませんが、
よろしくお願いします。

知的障害のある青年

折々のことば　鷲田清一　361

菜の葉にあいたら、桜にとまれ……
とまれよ　遊べ、遊べよ　とまれ。
唱歌「ちょうちょう」

誰もが知るこの唱歌、飽きること、休むことまで大らかに肯定する。子どもは我を忘れて何かに熱中しているさなかにも別の兆しにさっと感応する。学者や芸術家のどらわれのなさにもそういうところがある。「お」を付けて丁寧に「お遊び」と言うと、逆に、何の裏づけもないただの自己満足、本気でないただの暇つぶしといった揶揄になる。大人の世界は何とも屈折している。

2016・4・5

折々のことば　鷲田清一　362

美術は人と異なったことをして褒められることはあっても叱られることはありません。
北川フラム

だれをも「一」と捉え、それ以上とも以下とも考えないこと。これは民主主義の原則だ。しかしここで「一」は同質の単位のことではない。一人一人の存在を違うものとして尊重すること。人をまとめ、平均化し、同じ方向を向かせようとする動きを、美術は敏感に察知し、それに抗う。越後妻有や瀬戸内の芸術祭に取り組んできたアートディレクターの「ひらく美術」から。

2016・4・6

折々のことば　鷲田清一　363

一生懸命やるかどうかわかりませんが、よろしくお願いします。
知的障害のある青年

東京・三田の商店街に「うたの住む家」という、即興で歌をつくるプロジェクトがあった。演奏を始める前に若者がこう口にした。「一生懸命やれるかどうか」ではなく「一生懸命やるかどうか」。みんなの期待に応えられないかもしれない。でも一本の道筋に自分を貼りつけないで未来への扉を開けておく。「自由であれ」という命令からも自由であろうとする清々しさを見た。

2016・4・7

折々のことば　鷲田清一　364

大休みのなかから　うまれてきて
小休みに　中休みをまぜてやりつづけ
さいごにまた　大休みにかえっていく
まど・みちお

生きるということを裏側から言えばこういうことになるのか。裏側もこのように「死」ではなく「休み」と考えると、懸命に生きながら、なおさらにしんどさを重ねて、生きることの意味など問わずとも、もっと「かれん」（可憐）な生き方ができようものだ。「ぞうさん」の作詞で有名な詩人、１００歳時の詩集「逃げの一手」から。

2016・4・8

折々のことば　鷲田清一　365

顔はもはやほとんどだれかれの顔でさえなく、単純に顔、しかし深く、見られることの権利以外のなにものでもない
宮川淳

ある人の顔をじっと見つめると、その顔は恥じらって引きこもる。なのに、その顔に気づかないでいると、こっちを向いてと、静かに、そしてすがるように、訴えかけてくる。顔は人のまなざしに呼びかけるものなのだと、美術史家は言う。そして人の顔にかぎらず、絵にも風景にも顔はあると。「鏡・空間・イマージュ」から。

2016・4・9

折々のことば
３６６～３７０

痴呆（ちほう）を病む人たちは、
一つ一つのエピソードは
記憶に残っていないらしいのに、
そのエピソードにまつわる感情は
蓄積されていく

小澤勲

折々のことば　鷲田清一　366

まわりから「頑張って、頑張って」って言われ続けるよりも……ほかの人に「頑張って」って言うほうが力になったのかもしれない。

火野正平

テレビ番組で全国、自転車の旅を続ける俳優は、震災後2年経って東北の被災地を回った。応援するはずが反対に応援されて「逆やんけー」とまどう。ひとは誰かに見守られていることで力をふりしぼることができるが、見守られてという受け身ではなく、誰かのことを案じ、支えることでもっと力を得る。「人生下り坂最高！」から。

2016・4・10

折々のことば　鷲田清一　367

チカン　アカン

大阪の鉄道駅構内にあったポスター

大阪人の絶妙の言語センスをうかがわせる標語。説明の要なし。そういえば東京出張の折、モノレールの中で同僚と議論になった。ＪＲ東日本のスイカ（Ｓｕｉｃａ）ってカード、関西圏の「スルッとＫＡＮＳＡＩ」をまねして「スイッと関東」なんやろか、と私。違う、オレンジカードの後やからスイカって名づけたんやろ、と同僚。ふと向かいの席を見るとご婦人が噴きだしていた。

2016・4・12

折々のことば　鷲田清一　368

僕は好きな理由など考えない
好きな理由が分かったら
嫌いな所も見つけてしまうから

ビートたけし

人であれ絵や音楽であれ、「好き」の一言でいいところを、なぜ好きなの、どこが好きなのと、ひとは聞く。だけど、何かに心をわしづかみにされるというのは、それに吸い込まれること、自分のまとめがつかなくなること。それに無理に形を与えようとすると、あのとろけるような感覚も崩れてしまう。詩集「僕は馬鹿になった。」から。

2016・4・13

折々のことば　鷲田清一　369

痴呆を病む人たちは、一つ一つのエピソードは記憶に残っていないらしいのに、そのエピソードにまつわる感情は蓄積されていく

小澤勲

したという記憶がないと後悔もない。周囲は「わけ」がわからずついら立つ。が、記憶はなくても、自分がどう扱われているかの漠然とした感情だけは堆積してゆく。だから、多数の事例から「わけ」を知る医師より、長くそばで生きてきた人のほうがその感情を深く理解できることもある。精神科医の「痴呆を生きるということ」から。

2016・4・14

折々のことば　鷲田清一　370

バラバラの思いは、どうして集めればいいのでしょうか。
平静を装っても、もう隠しきれないことを。

松井初代

衣服造形家が新賢とともに立ち上げた新ブランド「ｇｉｆｔ」の挨拶状から。自傷を繰り返す本人に代わって、布きれをつぎはぎしてできた服で「リストカットしてゆく」ような気持ちで作ったという。傷んだ心の再出発を「後押し」しようと。ちなみに「贈り物」を意味するｇｉｆｔはドイツ語では「毒」という意味。毒をもって毒を制す？

2016・4・15

折々のことば
３７１～３７５

ほんとうのことかもしれないような話は、うそかもしれないから、おもしろくないのよ

須賀敦子の義母

折々のことば　鷲田清一　371

目標が見えず迷い、その迷うこともまた楽しいということも大切なのに、そういうことができる場がどんどん少なくなっている。

青木淳

「便利なこと、ストレスがないこと、儲けること」ばかりが世に溢れ、「つくる」ことを大事にする場がなさすぎると建築家は言う。することが予め決まっている遊園地ではなく、まずは体を動かし、それらが繋がって空間の中身ができてゆくはらっぱが、都市のみならず学びにももっと要る。「COMPLETE WORKS 3」から。

2016・4・16

折々のことば　鷲田清一　372

この街は、通知簿1と5の親友が毎日わいわいやかましくやっている街ですわ

江弘毅

大阪・岸和田生まれの編集者は、世間の流行や雑誌情報、カタログ情報ばかり気にして、通知簿3、つまりは平均値あたりで無難に生きる、そんな人生はつまらないと言う。岸和田では、そんな生き方を、通知簿1の奴は「さっぱりわからん」と言い、5の奴は「おまえはアホか」で終わりだと。だんじりに街をあげて呆ける理由はこれか。今年の段取りもとっくに始まっている？

2016・4・17

折々のことば　鷲田清一　373

夢と希望を抱いてやって来ました。何者かになる為に・・・つってリアリティないよな

中崎タツヤ

そうつぶやきながら若者は西池袋の○○荘2号室にたどり着く。下宿はうらぶれた木造の中華料理店の2階にあった。「でいきなりこのリアリティだもんな」と。うらぶれたというのは、みすぼらしいというのでも、すさんだというのでもない。自分の存在がやりきれないほど乏しいという思いにも、それぞれに時代のシルエットが映っている。漫画集「じみへん②」から。

2016・4・18

折々のことば　鷲田清一　374

伝えたい気持ちはたくさんあっても
言いたいことなんて一つもないから
写真を送りたくなる。

石川竜一

写真を成り立たせているものは何か。それを沖縄で問い続けてきた若き写真家は、「何らかの刺激に反応していくことで、世界と僕自身のバランスのとれたポイントに印を付けていく」と言う。それは自分の思惑を超えた社会を切り取ることでもあると。写真の裏に書きつけられた文。個展「考えたときには、もう目の前にはない」から。

2016・4・19

折々のことば　鷲田清一　375

ほんとうのことかもしれないような話は、うそかもしれないから、おもしろくないのよ

須賀敦子の義母

貧しくて小学校もろくに行けなかったイタリア人の姑は、本好きで、写真付きのラブロマンスをひそかに愛読していたが、スキャンダル雑誌にはついぞ手を出さなかった。その理由である。小説は虚構だと知るからだろう、いろいろに読めるから難しいとぼやきつつも、本格的なものもむさぼるように読んだ。では新聞はどんなふうに読んだ？　作家の「塩一トンの読書」から。

2016・4・20

折々のことば
３７６～３８０

技術の革新によって生産が上がったようにわたしたちは思っているが、それはじつは
偉大なる錯覚なのである。

佐藤洋一郎

折々のことば　鷲田清一　376

この子は宝子ですたい

水俣病を患う少女の母

水俣病患者に寄り添う医師が、ある患者の家を訪ねる。少女を腕の中に抱く母親に「お母さんも大変でしょう」と声をかけると、こんな返事が。自分がのみ込んだ水銀をこの子が全部吸い取ってくれたから「大恩人」なのだと。この子の面倒で手いっぱいなのをきょうだいが見て、たがいに助けあう「優しい」子どもに育ってくれたからとも。原田正純の「いのちの旅」から。

2016・4・21

折々のことば　鷲田清一　377

さっきと同じように首をのばして右斜め上をみると、そこには夕焼けの空があった。

工藤直子

「ぼくはきょう、てつがくだった」と言うライオンに、「それはよかった。で、どんなだった？」とかたつむりが聞く。で、「うん。こんなだった」とこのポーズをとった。「てつがく」するのは楽でない。肩は凝るし腹もすく。でも「てつがく」になっていると、世界は透視できずとも、人びとを照らす温もった光と出会うことはある。詩人の「てつがくのライオン」から。

2016・4・22

折々のことば　鷲田清一　378

よしあしの中を流れて清水哉

仙厓

葦の茎が折り重なるように茂るあいだを清水が流れる図に添えられた句。水辺に生える「葦」は「あし」とも「よし」とも読む。それを「悪し」「良し」に引っかけて、善と悪が複雑に入り交じる世間、清がすぐ濁に染まり、裏返る世間のはざまを、清きままに生きることの険しさと尊さを詠む。墨で「○△□」とのみ描いた不思議な画で有名な江戸後期、博多の禅僧の俳画から。

2016・4・23

折々のことば　鷲田清一　379

人間はひとくきの葦にすぎない。自然のなかで最も弱いものである。だが、それは考える葦である。

パスカル

人間は宇宙と比べれば、水辺の葦ほど折れやすく儚い存在である。それでも彼をいともあっさり押しつぶす宇宙より尊い。なぜなら「彼は自分が死ぬことと、宇宙の自分に対する優勢を知っている」から。限りなく小さな存在であるが、「考えることによって宇宙をつつむ」からだと、思想家は言う。「パンセ」（前田陽一・由木康訳）から。

2016・4・24

折々のことば　鷲田清一　380

技術の革新によって生産が上がったようにわたしたちは思っているが、それはじつは偉大なる錯覚なのである。

佐藤洋一郎

農業生産は化学肥料の普及で大きく向上したが、それは「作物が窒素分を吸収するための反応速度を速めた」だけのこと。肥料用のリンも枯渇しかけているとされるが、動物の体内に入り、排泄されたり死んで分解されたりして水や土中に拡散しただけのこと。食材は風土から離れてはありえないと農学者は説く。「食の人類史」から。

2016・4・25

折々のことば
３８１～３８５

冷や酒と親の意見は後からきくと
言うけれど、
後のことなどかまっちゃいられぬ
日もあった。
ちょうどお燗（かん）がつきました。

渋沢秀雄

折々のことば　鷲田清一　381

冷や酒と親の意見は後からきくと言うけれど、後のことなどかまっちゃいられぬ日もあった。ちょうどお燗がつきました。

渋沢秀雄

「冷や酒と親の意見は後薬」。その場では腑に落ちないけれど、後になってじわじわ効いてくるというそんな生真面目なことわざを、渋沢は小唄の節回しで飄々と茶化してみせる。渋沢栄一の子息で、東京・田園調布を開発し、東宝会長も務めた実業家。奥方が小唄の師匠でもあったことから、「夫婦共遊び」の家元とみずから称した。

2016・4・26

折々のことば　鷲田清一　382

やめるな！と言ったのがいけなかったようです。道はいっぱいある――とふとそんな気がしたら、私もなんだかほっとしました

クリニックに駆け込んできた母親

せっかく超一流企業に就職したのに、突然会社に行かなくなり、口もきかずやせ衰えてきた息子。上手な「社会対応」ができない息子に、母親は、辞めたら終わりとくり返し訴える。やがて万策尽きて、最後は辞職を認めた。母と子の間に少しばかり「すきま」ができたのがよかったと、精神科医、浜田晋は言う。「心をたがやす」から。

2016・4・27

折々のことば　鷲田清一　383

パンクが好きです。モテません。

古着屋店員（28歳・女性）

ピアスをいっぱい。眉毛は黄色。ジャケットは鋲だらけ。そんな風だからだろう、「めちゃめちゃモテたいわけではないけど、あまりにもモテません」と嘆きの投稿。「いろいろやっちゃったから引っ込みがつかなくなっているんでしょう」と放送作家の宮藤官九郎さん。迷わず個性的でいればきっとそのうち、と背中を押す。深夜のテレビ番組「おやすみ日本」（4月10日）から。

2016・4・28

折々のことば　鷲田清一　384

何が悲しいといふのではなく、何となく遣瀬ないのである。

水原秋桜子

「新編歳時記」で俳人が「春愁」にこと寄せて書く。「春を楽しんだ心は同時に春の愁に沈まなければならない。とは言っても、それは強烈な悲しみではない。とりとめもない愁である」と。歓楽と悲哀の敷居はおぼろ。知らぬまにめくれ返っている。「春愁や草を歩けば草青く」（青木月斗）を引いて、「このやうに何でもない事ながら、それが皆春愁の種になるのである」とも。

2016・4・29

折々のことば　鷲田清一　385

横縞には重力に抗して静止する地層の重味がある。縦縞には重力とともに落下する小雨や「柳条」の軽味がある。

九鬼周造

「いき」の趣味はこの縦縞にこそあると哲学者は言う。縦にすっと走る平行線が、たがいに引かれながらも融合することはない意気地というか諦めを漂わせるから。扇の要や蜘蛛の巣、四方に光を放つ旭日など、同じ縞模様でも放射状に一点に収束する縞は野暮である。集結や結集にはのびやかな自由がないから。「『いき』の構造」から。

2016・4・30

折々のことば
３８６～３９０

仕事はお芝居でしょ

酒場にて

折々のことば　鷲田清一　386

一人で笑うのは一人で悼むより耐えがたい。

イーユン・リー

中国から米国に移住した作家の小説「独りでいるより優しくて」（篠森ゆりこ訳）。登場人物の一人が、愚かな自分を笑いつつ、こうひとりごつ。喜びは誰かと分かちあいたいものだが、自嘲もまた他人を必要とする。突き放した自分を誰かに預かってもらうか潰してもらうかしなければ、糸の切れた風船のように肯定と否定の間を漂うばかり。杳として踏ん切りがつかないから。

2016・5・1

折々のことば　鷲田清一　387

仕事はお芝居でしょ

酒場にて

知人が居酒屋で後輩の職場での悩みを聞いてやっていると、たまたま隣り合わせた〝酒場の哲人〟のごとき客にこう言われたという。そういえば17世紀の思想家、パスカルも「パンセ」のなかで、人が熱中する仕事も学問も遊戯もみな、「自分」という存在の空しさに向きあわないで済むよう、意識をたえず他のものへと散らしておくための「気晴らし」にすぎないと書いていた。

2016・5・2

折々のことば　鷲田清一　388

ぼんち可愛いや寝んねしな　品川女郎衆は十匁　十匁の鉄砲玉　玉屋が川へすっぽんぽん

博多のしりとり歌

博多どんたくで歌われる道囃子。江戸で流行っていた「くさり（鎖）うた」を、博多の菓子屋、河原田平兵衛が持ち帰り、日露戦争のころから歌い始められたといわれる。猥歌のように聞こえないでもないが、どこか切々とした寂しい響きもある。悲喜こもごもというか、諦めとやるせなさの奥底からこそ、笑いや囃しが立ち上がるというのが、庶民の心の佇まいの常なのかも。

2016・5・3

折々のことば　鷲田清一　389

子どもは、消えやすい。現実に根をおろしていないから、一瞬の風で、向こうへと運ばれていってしまう。

川本三郎

家族の外でぽつんと一人たたずむ子どもを、写真家たちは好んで撮る。可愛い、無垢、明るいといったイメージには包み込めない子ども。大人になることで消失するものの、それとの大人自身の深い断絶の意識が、子どもたちの写真に緊張を漂わせ、ときに冷たくも感じさせる。評論家が編んだ写真集「こどもたちはまだ遠くにいる」から。

2016・5・4

折々のことば　鷲田清一　390

「ねえ、チキンのヘリコプターに乗ったらなあに？」「そんなのに乗ったら、おズボンが油だらけになっちゃうぞ」

菅原和孝

人類学者は、調査でアフリカに同行した自閉症の長男と一日に何十回とこの問答をくり返した。そして不思議なこの質問を、彼にすっとさしのべられ、その腕をとらえて離さない息子の「手」と同じものと感じた。語らいの中で人は他者とのつながりを確かめる。歌唱と同じで、意味ではなく身体を通して支えあう。「身体の人類学」から。

2016・5・5

折々のことば
３９１～３９５

長いこと変わらんものは、
よくできている。

尾池和夫



折々のことば　鷲田清一　391

そいつに向かって、ただ祈る。あるいは、もうここまでやったのだからいいだろう、助けてほしいと必死に叫ぶ。

佐々木幹郎

「地球の表面にしがみついて」生きるほかない人間は、自然の凄まじい力に襲われて、この大地を揺り動かす強力を「地の霊」のような人の形をとったものとして思い描くのだと、詩人は言う。原始的ともいえるこの「細心な」感覚が甦ったからか、神戸では地震直後、交通事故が減ったといわれる。評論集「やわらかく、壊れる」から。

2016・5・7



折々のことば　鷲田清一　392

あのねえ、生きているってことが体に悪いのよ

「先生」と呼ばれるホームレスの男性

4歳から子役、歌手として活動してきた松島トモ子さんが、東京・日比谷公園とニューヨークのホームレスを訪ね歩く。ひとかけらの邪心もない彼女の質問に、ホームレスの人たちからこんなしゃがれ声の人生観がぽんぽん飛び出してくる。読み進めるうち、「あなたにはホームがありますか？」と自分が問われているような気になる。「ホームレスさんこんにちは」から。

2016・5・8



折々のことば　鷲田清一　393

人には、自分がだれかから見られているということを意識することによってはじめて、自分の行動をなしうるというところがある

浜田寿美男・山口俊郎

幼児は、親がいつも決まった場所から自分のことを見ているのを確かめてようやく、安心して遊びに没頭することができる。誰かが背後でじっと見ていてくれるから、逆にひとり、目の前のことに全力で取り組めるというのは、もちろん大人たちにも等しく言えること。発達心理学者の共著「子どもの生活世界のはじまり」から。

2016・5・9



折々のことば　鷲田清一　394

長いこと変わらんものは、よくできている。

尾池和夫

新幹線を前にして、「電車や航空機がうんと高性能になっても、ワイパーだけは変わりませんね」と言うと、地震学者からこんな答えが。たしかに矢尻も鍋も古代からほとんど変わっていない。冠婚葬祭などにもそういうところがある。「高速の新幹線にどうしてシートベルトが付いてないんでしょうね」とこんどは先生から。不思議は思考を刺激する。京都鉄道博物館にて。

2016・5・10



折々のことば　鷲田清一　395

家屋はたしかに安全性を保障するもの、嬉しいにつけ、悲しいにつけ、いつもかくれ場所

ヨハン・フィッシュアルト

家は、人がおびえることなく身をほどき、くつろげる場所。強い信頼で結ばれ、「われわれ」という親密な関係の中に浸れる場所だ。けれども「兄弟は他人のはじまり」と言われるように、それは、深刻な葛藤が生まれ、たがいに他者であるということが至近距離で思い知らされる場所でもある。O・F・ボルノウが「人間と空間」で引いている16世紀ドイツの詩人のことば。

2016・5・11

折々のことば
３９６～４００

平和のときには子が父の葬（とむら）いをする。
しかし戦いとなれば、
父が子を葬らねばならぬのじゃ。

ヘロドトス

折々のことば　鷲田清一　396

ラジオの天気予報を気にするのは、自分で頻りに検温器をかけたり、脈拍を計ったりする病人の様なもので……

内田百閒

ラジオが普及して、天気予報を聴く癖がついたことを作家は自戒する。明日は晴れるだろうかとか、この天気、夕方までもつかといった程度のことなら、「近くの四辻まで出て空を眺め、序に近所のお湯屋の煙突から出る煙の流れ工合を見れば大概解る筈」、そういう判断を市民に教えるべきだと言う。随筆集「ものづくし」から。

2016・5・12

折々のことば　鷲田清一　397

きょうは私の日じゃない

飲み屋の常連客

なじみの店なのに、なんとなく客層がふだんと違い、空気がよそよそしいというか、間合いがつかめず居心地の悪いことがある。そんなときはこう思い定めることにしていると、ある女性客が言った。ずっと店に溶け込んできたが、一歩引いて自分を俯瞰して見るのも悪くない。それにたまには無名のまま誰の視線も浴びないでいたいときもある。英語でも同じように言うらしい。

2016・5・13

折々のことば　鷲田清一　398

A rolling stone gathers no moss.

英語のことわざ

「転がる石に苔は生えない」。が、そもそも苔はついたほうがいいのか、つかないほうがいいのか。元来は、職をころころ変えるようでは金はたまらないという意味で言われた。ところが逆に、きびきび働いていれば苔は生えないという意味でも使われるようになったらしい。さて、「爺」となってもステージで歌い、唸りつづけるザ・ローリング・ストーンズ。どっちの意味でこのバンド名を付けた？

2016・5・14

折々のことば　鷲田清一　399

平和のときには子が父の葬いをする。しかし戦いとなれば、父が子を葬らねばならぬのじゃ。

ヘロドトス

哺乳類や鳥類は子育てをする。つまり年長のものが年少のものの面倒をみる。人類はそれだけでなく、後に生まれたものが先に生まれたものを世話し、看病し、見送る。そういう人類固有の特質も、戦では毀れてしまう。これを人間の性と言ってすませてよいのか。「歴史の父」と呼ばれる古代ギリシャの史家の「歴史」（松平千秋訳）から。

2016・5・15

折々のことば　鷲田清一　400

みなさんの想像力が頼りです。

林家染雀

落語では、顔や衣装はそのまま、声も地声の範囲内で、わずかに調子を変えるだけで、数人の老若男女を演じ分ける。いちいち場面の説明をする野暮を避けるために、登場人物の関係は基本的にせりふの中に埋め込む。それを読み取るのは聞く側の仕事。意表を突くオチも、聴衆の理解力をあてにしている。粋はこの省略にこそある？上方落語家の噺「延陽伯」のマクラから。

2016・5・16

折々のことば
４０１～４０５

輜重（しちょう）輸卒が兵隊ならば、
蝶々（ちょうちょう）とんぼも鳥のうち

戦時下の戯〈ざ〉れ歌

折々のことば　鷲田清一　401

それをはじめた者がまた最もよくそれを仕上げうる者であるような仕事が世にあるとすれば、それこそ私のやっている仕事なのである

ルネ・デカルト

うぬぼれもほどほどにと思ってしまうが、哲学者はこう宣言して真理の探究に着手した。最初にやった人が、最後までやった人、極限まで問いつめた人だと、たぶん言える。すでにある問題の圏内を動くのではなく、問題の新しい次元を切り開いたのだから。マルクスを超えるマルクス主義者はいない。「方法序説」（野田又夫訳）から。

2016・5・17

折々のことば　鷲田清一　402

輜重輸卒が兵隊ならば、蝶々とんぼも鳥のうち

戦時下の戯れ歌

輜重輸卒とは、陸軍で軍需品などを運んだ兵隊のこと。国のために見事に散るという「栄誉」を得られぬ後方支援の兵たちは見下げられ、からかわれたという。片方の視力がほとんどなかった亡き父も医療品を運ぶ部隊にいたらしいから、そんな思いでいたのか。それとも、前線の部隊が殺戮した敵方の死体の山を見やりつつ、自分もいつかはこうなるだろうと思い定めたのか。

2016・5・18

折々のことば　鷲田清一　403

愛する者たちを語るということは、彼らが生きたのは（そして……苦しんだのは）《無駄》ではなかったことを証言することです。

ロラン・バルト

批評家は後年、小説を書く準備を始めた。愛する人々を語るために。己の愛を彼らに告げるためではない。いずれ歴史の中に埋没させられる彼らの生を、書き記すことでこの世界に止めるために。何かについて「語る」のではなく「作る」立場を引き受けること、それが小説を書くことだと考えた。「テクストの出口」（沢崎浩平訳）から。

2016・5・19

折々のことば　鷲田清一　404

震災後、困惑する老人たちを見て、コミュニティはたんなる概念ではなく実体そのものであることを私は思い知った。

安克昌

そのコミュニティーが「震災によって深く傷つけられた」と、震災後の神戸で治療と救援にあたった精神科医は言う。ちょっと助けてと言えば、どこからともなくすっと手が差し出されるような支えあい関係だ。船を繋ぐことにひっかけて「もやい」とも言うが、これを熊本県の水俣から学んだ人も多い。「心の傷を癒すということ」から。

2016・5・20

折々のことば　鷲田清一　405

ぼくの楽屋は劇場の廊下なんです。

蜷川幸雄

異なった感受性をもつ俳優たちと劇に取り組む演出家は、彼らの様子を見、気になればすぐに声をかけられるよう廊下に陣取った。他の野手と逆方向を見つつも、チームの一員としてともにプレーするキャッチャーのように。そういえば私が知るある大手企業でも、社長室は設けず、社員たちが働いているそのどまん中で社長が執務している。「蜷川幸雄の稽古場から」より。合掌。

2016・5・21

折々のことば
４０６～４１０

俺は聞いていない

だめな上司は、つい

折々のことば　鷲田清一　406

対話とは、わたしたちを拒否する騒音や、わたしたちを無視する沈黙とは対立するものです

オクタビオ・パス

世界各地で戦闘のない日は一日としてない。紛争下で人は「敵味方の単純化」を急ぐ。差異を認めないイデオロギーの暴力と、他者の声に耳を澄まさずに最後通牒を迫る「指導者の独白」が〈社会〉を壊してしまう。それに抗い、「平和の扉」を開くには、敵対者との対話を忍耐強く維持するほかない。メキシコの詩人・批評家の「大いなる日々の小さな年代記」（曽根尚子訳）から。

2016・5・22

折々のことば　鷲田清一　407

俺は聞いていない

だめな上司は、つい

会社でも役所でも、がちっとした組織で何か事が起こると、決まってこう口走る上司がいる。聞いていないのではなく、聞こうともしなかったのに。状況を俯瞰して異様な気配を人より先に察知し、きちんとした指示を出さなかったことの弁明のはずが、部下への叱責にすり替わる。こういう上司はそのまた上司の顔色をうかがうばかり。聞くことも判断することも放棄している。

2016・5・23

折々のことば　鷲田清一　408

もう決まったことだから

だめな上司は、つい（続き）

「俺は聞いていない」とうそぶく上司のもう一つの常套句。「決めたこと」ではなく「決まったこと」とやんわり恫喝。ここには主語がない。自分では判断せず、反論は予め封じる。自分が関門になるのを、あとで責任を問われるのを、どうも避けたいらしい。「責任」は英語でリスポンシビリティ、他の人からの訴えや求めに応じる（リスポンド）用意があるということなのに。

2016・5・24

折々のことば　鷲田清一　409

人生において、病気になったという事実を変えることはできませんが、病気になった意味を変えることはできると信じています。

宮本直治

がんを患うといやでも「死」を意識する。人生を終局の方から見ると、一人では担いきれない問いをどんと抱え込む。が、「死」について語れる場所は少ない。家族とは互いを気遣って語りにくい。胃がんになって得度した薬剤師は、患者の語らいの場を開き続ける。仏教ホスピスの活動をするビハーラ医療団の「他力の『ビハーラ』」から。

2016・5・25

折々のことば　鷲田清一　410

自然に対しては「なぜ？」という質問は意味をなさない。

池澤夏樹

ハワイ諸島をヨットで巡るなか、作家は波と風に煽られ、「自然の力がいかに大きくて、予測不能で、こちらを無視しているかを実感した。海は「事実を事実として見るための鏡」、そこに「妥協の余地」はなく、こちらが一つ一つ学んでゆくほかないと。そして地元サーファーの姿を見て、自然を相手にする時は遊びですら「一生を費やすに値する」と知る。「ハワイイ紀行」から。

2016・5・26

折々のことば
４１１～４１５

目的から外れようとする力が
実は目的にもっとも
よくかなうものである

外山滋比古

折々のことば　鷲田清一　411

目的から外れようとする力が実は目的にもっともよくかなうものである

外山滋比古

しるこに砂糖とともに少量の塩を加えて味を締めるように、相反する原理を交錯させることで効果を高めることが、人の営みにはよく見られる。破調や不調和をあえて導き入れることで、より高い統合を得る。「遊びが広義の文化として承認されるようになってはじめて」このことに目が開かれると、言語研究者は「新エディターシップ」の中で言う。90を超えてなおしなやか。

2016・5・27

折々のことば　鷲田清一　412

ひとつの壁をつくることで、ひとりの囚人じゃなくて、ふたりの囚人が誕生する。

デイヴィッド・ドゥカヴニー

壁をつくり誰かを閉めだすというのは、壁の中に自分を閉じ込め出られなくすること。牛が聖なる動物として扱われるインドをめざして農場を抜け出た雌牛は、行く先々でこうした仕切りに出くわし、「わたしたち、なんだか、ただ壁から壁へと移動してるだけなんじゃないかしら」とため息をつく。家畜たちを主人公にした現代の寓話から。「ホーリー・カウ」（菊池由美訳）から。

2016・5・28

折々のことば　鷲田清一　413

本当におしゃれな人は、人のことダサイとか言わないんだよ。

ある若者

知人は二十歳ごろ、友人にこう諭されたという。汗の噴き出る季節に紹や紗の薄物を重ね、下の白を透けて見せることで、見る人の気持ちを涼ませるように、おしゃれな人は他人の目を楽しませてあげようとする。艶麿を買いそうな格好をして、こんなんだってありだよと、友人の縮こまる気持ちを膨らませもする。そんな思いやりこそおしゃれの心だと言いたかったのだろう。

2016・5・29

折々のことば　鷲田清一　414

がっかりして、残念で、くだらなくて、失望して悔しくて。何のために、あの事故はあったのだろう

福島県大熊町から避難した女性

すぐ戻れるだろうと思って避難した若い女性が、4年経って、白色のレインコートに身を包み、帰還困難区域に指定された元の住まい近くを訪ねる。そこはやがて中間貯蔵施設になる。よそで原発が再稼働するのを知って、「絶望しても、せめて何か変わると、信じたかった」とつぶやく。広河隆一の写真集「チェルノブイリと福島」から。

2016・5・30

折々のことば　鷲田清一　415

希望とは本来あるとも言えないし、ないとも言えない。これはちょうど地上の道のようなもの

魯迅

20年ぶりの故郷で、かつて兄弟のように遊んだ友と再会する。が、友は頑なに元使用人の息子の立場を崩さず、それぞれの願いも遠く隔たっていた。が、希望を絶やさずにいれば、歴史が切り分けた二つの希望もいつか交わるやも。「地上に本来道はないが、歩く人が多くなると、道ができる」から。短編「故郷」（藤井省三訳）より。

2016・5・31

折々のことば
４１６～４２０

日本は一位とか二位とかを争う
野暮な国じゃなくていい。
「別品」の国でありたいと
思うのです。

天野祐吉







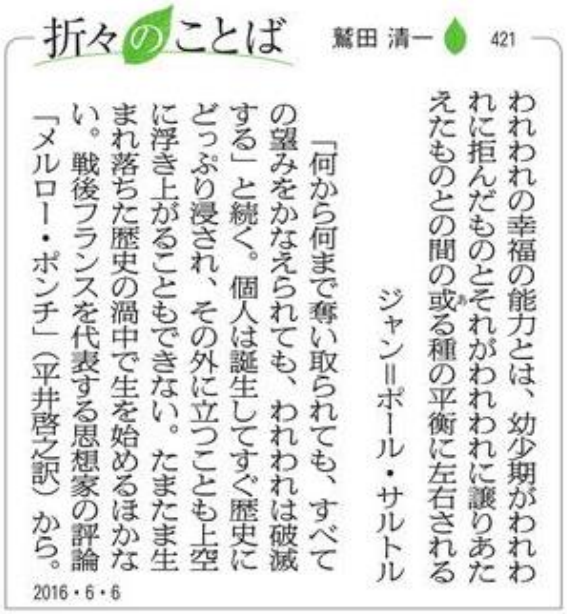




折々のことば
４２１～４２５

希望を持つようになったら
おしまいだよ

あるバーテンダー



折々のことば　鷲田清一　421

われわれの幸福の能力とは、幼少期がわれわれに拒んだものとそれがわれわれに譲りあたえたものとの間の或る種の平衡に左右されるということである。

ジャン＝ポール・サルトル

「何から何まで奪い取られても、すべての望みをかなえられても、われわれは破滅する」と続く。個人は誕生してすぐ歴史にどっぷり浸され、その外に立つことも上空に浮き上がることもできない。たまたま生まれ落ちた歴史の渦中で生を始めるほかない。戦後フランスを代表する思想家の評論「メルロー・ポンチ」（平井啓之訳）から。

2016・6・6



折々のことば　鷲田清一　422

希望を持つようになったらおしまいだよ

あるバーテンダー

未来に託された希望は、いうまでもなく現在の絶望ないしは諦めの裏返しである。それは人のかかる「最後の病気」、「希望病」だと寺山修司は言う。「今に見ていろ」というわけだ。現在の自分を「世をしのぶ仮のすがた」だと思っていても、気がつけば実像と虚像は往々にして反転しているもの。ほんとうの自分って何、と問うてもはや空しい。歌人・演劇家の「幸福論」から。

2016・6・7



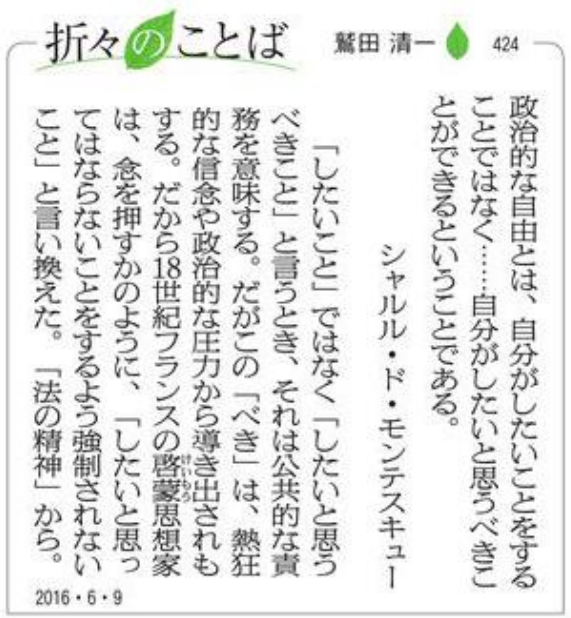
折々のことば　鷲田清一　423

言うだけ言えばいい。相手がどう思おうと、言いっぱなし、という場合が多いのは、からだが他人……に向かって劈いていないのだ

竹内敏晴

話しかけるというのは、相手に働きかけ、相手を変えようとすること。相手に向かってからだが劈いていないとことばは届かず、相手も自分に話しかけられたとは感じない。自分の思いを言うだけでは、会話は成立せず、ことばはただの礫になるだけだと、からだのレッスンに取り組んだ演出家は言う。「ことばが劈かれるとき」から。

2016・6・8



折々のことば　鷲田清一　424

政治的な自由とは、自分がしたいことをすることではなく……自分がしたいと思うべきことができるということである。

シャルル・ド・モンテスキュー

「したいこと」ではなく「したいと思うべきこと」と言うとき、それは公共的な責務を意味する。だがこの「べき」は、熱狂的な信念や政治的な圧力から導き出されもする。だから18世紀フランスの啓蒙思想家は、念を押すかのように、「したいと思ってはならないことをするよう強制されないこと」と言い換えた。「法の精神」から。

2016・6・9



折々のことば　鷲田清一　425

「真実」とか「真相」などの語彙が……とても安易に消費されるようになっている。

森達也

語りはいつもある場所からなされる。だから、それを誰が、どこからしているのかを見定める必要がある。誰もこの社会を上空から偏りのない目で見ることはできない。社会が見通せないことに苛立って、人は真偽、黒白、敵味方を過度に明確にしようとする。やらせや偽装の摘発にやっきになるのも、そういう苛立ちの裏返しなのだろう。映画監督の新作「FAKE」のパンフから。

2016・6・10

折々のことば
４２６～４３０

一寸さきはヤミがいい

山本夏彦

折々のことば　鷲田清一　426

不快の源そのものの一斉全面除去（根こぎ）を願う心の動きは……その対面の機会そのものを無くして了おうとするものである。

藤田省三

心地よいものだけに囲まれていたいという欲望。それは、見たくないものは見えないようにしておく、つまり対面の可能性がないようあらかじめ消去しておきたいという欲望へと膨れ上がる。思想史家はそういう「『安楽』への全体主義」の心性が、知らぬまに社会や政治の隅々に浸透してゆくのを危ぶんだ。「全体主義の時代経験」から。

2016・6・11

折々のことば　鷲田清一　427

私には他人の痛みというのがどうしてもわからないんです。

ある工学研究者

彼の妻は交通事故に遭った後、激しい閉所恐怖症になり、1時間も列車の箱の中にいられない。それで東京から広島の実家に新幹線で帰るときも、数十分おきに扉の開くこだまに乗るしかない。彼は、彼女の恐怖がどういうものかわからないまま、それでもずっと付き添ってきたという。「共感」を口にするよりも、共感できないと思い定めた後にどうふるまうかが、もっと大事。

2016・6・12

折々のことば　鷲田清一　428

がんばる人にご褒美

「とと姉ちゃん」の給仕さん

男性上司からは蔑ろにされ、先輩の女子社員からは邪魔者扱いされ、心が挫けそうになっているNHK連続テレビ小説の主人公。大量の書類整理や清書を命じられて残業していると、老年の給仕さんにキャラメルを1個、そっと手渡される。一人でもいい、ちゃんと見ている人がいることが人を支える。見習ってポケットにいつも飴を忍ばせておこう。5月30日放送分から。

2016・6・14

折々のことば　鷲田清一　429

トランプの遊びのように、マイナスを全部あつめるとプラスに変るという事は、この世の道徳には起り得ない事でしょうか。

太宰治

人に騙されたり、裏切られてばかり。何一ついいことはない。すべてが悪いほうに傾いてゆく。そんなときは「神がいるなら、出て来て下さい」と叫びたくもなる。が、実のところ、もしそれが起こるとしたら、ものごとを判断する基準を百八十度入れ替える《回心》という魂の出来事によるほかないのかも。短編「ヴィヨンの妻」から。

2016・6・15

折々のことば　鷲田清一　430

一寸さきはヤミがいい

山本夏彦

天気予報がよく当たるようになったと、コラムニストは文句を言う。「悪くちを言う楽しみがなくなる」からとぼけるが、本当は、明日のことが先にわかるとその分つまらなくなるからと言いたかったのかも。画家の元永定正さんの口癖は「人生、一寸先は光」。「闇というよりも光と思うた方が楽しうてよろしいやん」とこれもとぼけて。随想集「一寸さきはヤミがいい」から。

2016・6・16

折々のことば
４３１～４３５

月に叢雲（むらくも）、花に風

言い習わし

折々のことば　鷲田清一　431

月に叢雲、花に風

言い習わし

よいことにはとかく邪魔が入りやすい。名月の夜のはずが雲が出て月を隠したり、桜が満開になったとたん風が吹いて花を散らしたり。けれどもそれは人の目。月の立場になれば、福岡・田川の炭坑節にあるように、「あんまり煙突が高いので、さぞやお月さん煙たかろ」ともなろうし、雲や風の立場になれば「私の存在はないほうがいいというわけ？」と言い返したくもあろう。

2016・6・17

折々のことば　鷲田清一　432

私に「あの世」への親近感などない。それはないが、「この世」への違和感ならある。

山田風太郎

晩飯を食うのもあと千回くらいかなと思った作家は、老いの心境をざっくばらんに書き記した。「酒を飲んでいるのは、どこか長生きしたくない望みがあるせいじゃないか」などと。でももし、自分がいま在る場所に漠とした違和感をもってしまうのが「この世」の常だと考えれば、逆に「あの世」もこれまでより親しく感じられるようになるのかも。「あと千回の晩飯」から。

2016・6・18

折々のことば　鷲田清一　433

it's now or never.

ジョン・アーヴィング

傷ついた半生をどう修復するか、たがいに苦悩しつつも深くいたわりあう男女が、残りの人生を生き抜くために、たった一度だけ禁断の関係に踏み込む。義務のように、あるいは儀式のように。２人はｎの音を重ねて「今しかないんだよ」と声をかけあう。人生には、ここで動かなかったら終わりと覚悟を決めなければならない時がある。米国の小説家の長編「ホテル・ニューハンプシャー」から。

2016・6・19

折々のことば　鷲田清一　434

怒りを分散させちゃいけないよ。

萩原健太

そして「そういう怒りのね、根っこに何があるのか、誰がいるのか、そこに向けてかなきゃ」と音楽評論家は続けた。ある会合で出席者が今の政治をめぐり口角泡を飛ばして悪態をつくなかで。当たり散らし、憂さを晴らしあうだけでは何も変わらない。怒りをその場かぎりのものとせず、事態をきちんと吟味し、彫琢してから、しかと爆発させるべきだということなのだろう。

2016・6・20

折々のことば　鷲田清一　435

はっきりいえば、私たちは他人の「涙」に泣くのではなく、他人の抑制に泣くのである

多田道太郎

涙の記憶は誰にも数知れずあるから、他人のそれにもついほだされる。けれどもそのとき人は「泣きたい心持ちをぐっとこらえるその抑制の身ぶり」に涙しているのだと、仏文学者は言う。かつて泣きたくても泣けぬ口惜しさを必死でこらえた自分への憐憫？　実際、抑えきれるのは演じうるということでもあって、それに騙された人も少なくはない。「しぐさの日本文化」から。

2016・6・21

折々のことば
４３６～４４０

「ある」幸せがあるなら
「ない」幸せが
あったっていいじゃない。

稲垣えみ子

折々のことば　鷲田清一　436

私、きっと、偶然を使ってるんですね。

田村恵子

死を受け容れられずにあがいている人の振幅の大きな語りにじっと向きあい、最期まで伴走するのは重い仕事だ。ホスピスのベテラン看護師は、患者さんの部屋に入る前、邪魔が入らないようにふだんはPHSの電源を切っておくのだが、どっしり構えて最後まで聴きとる自信がないときは、「○分経ったらいちど呼んでね」と同僚に声をかけ、わざと電源を入れておくという。

2016・6・22

折々のことば　鷲田清一　437

がんになると「いつかは死ぬ」が「いつでも死ぬ」になる。それじゃあ生きている間、おもしろがりたい。

樹木希林

「全身がんです」と医師に言われた女優は、NHKテレビ「あさイチ」(5月19日)で、どうしてそんなふうに明るくいられるのかと問われ、こう答えた。お迎えが来るのは当たり前、普通に死ねればそのがんは「上出来」だとも。ただ人は、残される人への思いだけは断てない。その時間をも「面白がる」にはどうしたらいいのだろう。

2016・6・23

折々のことば　鷲田清一　438

「ある」幸せがあるなら「ない」幸せがあったっていいじゃない。

稲垣えみ子

モノ、金、健康。もしこれらを手に入れるのが幸福だとすれば、病と死は不幸の極み。人は「不幸にまみれて」一生を終えるほかない。でも、持つことと幸福とは別。そう気づいた元記者は、以後、「ある」幸福へのこだわりを捨て、電気を極力使わずに暮らす。本当に幸福なときには、幸福とは何かという問いも消えるのだろう。TBS系「情熱大陸」(4月3日放送)から。

2016・6・24

折々のことば　鷲田清一　439

ひとは自分が思っているほど、自分のために生きているわけではない

平川克美

父親の介護を続けるなかで、慣れない調理に苦労し、やがてそれが楽しみにすらなったのに、父が逝くと、とたんに料理をする気が失せた。自分だけのために調理をするのが面倒になった。自分がここにあることの意味は他者から贈られる。そのことを身をもって知った経営者の作家は、「自己決定」「自己責任」といった概念の虚しさを思う。「言葉が鍛えられる場所」から。

2016・6・25

折々のことば　鷲田清一　440

その人びとは心から息子娘を愛していた
子供たちは正しいのだということを理論とは別の手段で信じていた

中野重治

戦前、共産主義者たちは官憲から惨たらしい迫害を受けた。そして戦後しばらくして開かれた日本共産党創立25周年の夕べにあたり、当時党員だった詩人・作家は、党員よりもその親たちに、遠く思いをはせた。「その信頼と愛とについて　報いはおろかそれの認められることさえ求めなかった親」たちに。詩「その人たち」から。

2016・6・26

折々のことば
４４１～４４５

がんばらない

鎌田實



折々のことば　鷲田清一　441

がんばらない

鎌田實

長野・諏訪で長く地域医療に取り組む医師は、病院の廊下に飾られたある障害者のことばに心を震わせた。「がんばろう」の一言が、病に懸命に向きあってきた人をどれほど傷つけるかを知った。震災のときもそう。歯を食いしばる人に「がんばって」はむごい。黙って横にいるか、「がんばりすぎないでください」とそっと声をかけるだけで精一杯だった。「がんばらない」から。

2016・6・27



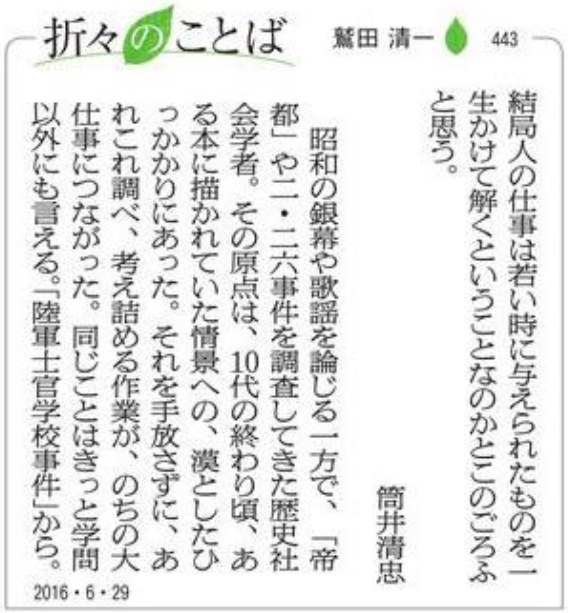
折々のことば　鷲田清一　442

批評性というのは、自分がどんな文脈の中にいて、いかなる役割を果しているのかを、自分から離れて鳥瞰できる想像力のことです。

内田樹

都知事の不正をめぐるメディアの報道ぶりにふれて、「批評性」は「暴力性」とも「攻撃性」や「粘着性」とも無縁なものだと、武道家・思想家は6月15日のツイッターに書き込んだ。報道や社会的発言における知的誠実さは、その発言が意味するところを状況の中にきちんと位置づけえていること、一にこれにかかっているのだろう。

2016・6・28



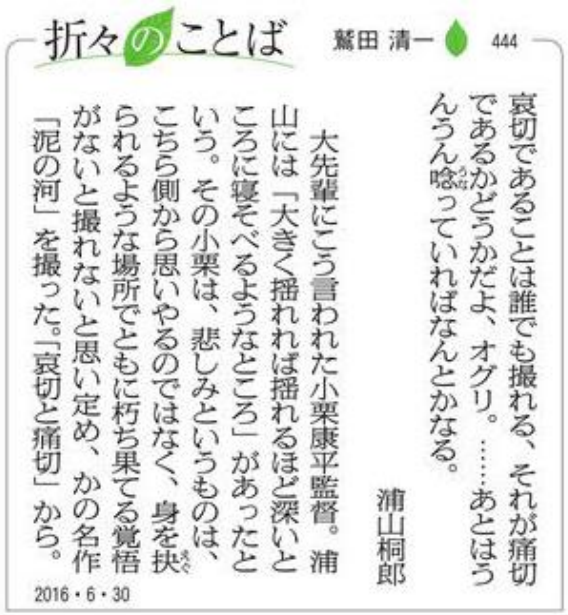
折々のことば　鷲田清一　443

結局人の仕事は若い時に与えられたものを一生かけて解くということなのかとこのごろふと思う。

筒井清忠

昭和の銀幕や歌謡を論じる一方で、「帝都」や二・二六事件を調査してきた歴史社会学者。その原点は、10代の終わり頃、ある本に描かれていた情景への、漠としたひっかかりにあった。それを手放さずに、あれこれ調べ、考え詰める作業が、のちの大仕事につながった。同じことはきっと学問以外にも言える。「陸軍士官学校事件」から。

2016・6・29



折々のことば　鷲田清一　444

哀切であることは誰でも撮れる、それが痛切であるかどうかだよ、オグリ。……あとはうんうん唸っていればなんとかなる。

浦山桐郎

大先輩にこう言われた小栗康平監督。浦山には「大きく揺れれば揺れるほど深いところに寝そべるようなところ」があったという。その小栗は、悲しみというものは、こちら側から思いやるのではなく、身を挟られるような場所でともに朽ち果てる覚悟がないと撮れないと思い定め、かの名作「泥の河」を撮った。「哀切と痛切」から。

2016・6・30



折々のことば　鷲田清一　445

ママ、起きて仕事していいよ

2歳の女の子

毎日のように仕事を家に持ち帰る女性記者が娘を寝かしつけたあとパソコンに向かうのを、当の娘は知っていたらしく、添い寝の最中にこう声をかけられた。ほろりとし、また親の事情を察して気持ちを折り畳む、そんな「いい子」がどんなふうに育ってゆくのか不安にもなったが、その子ももう10歳、「ゆっくり呑んだほうがいいよ」と憎まれ口を叩くことがある。よかった。

2016・7・1

折々のことば
４４６～４５０

僕の求めているのは、悩んでいる
自分をみせびらかすことでなく、
それを笑いとばす、
ユーモアのようなものなのだ。

石田徹也

折々のことば　鷲田清一　446

「あの俳優、知らないうちに見かけなくなったなあ」と言われるような消え方をしたい。

岸部一徳

今をときめく名脇役は、ベーシスト出身。劇ではつねに、物語の伴奏というよりも、抑揚のない低い声で、きれいな物語にならない人生の、その割り切れない部分を引き受ける。ふつうなら主人公の代わりに陰で泣いてやるべき場面でも、主人公の気持ちをあえて突き放す、共感しにくい役どころが多い。誰も主人公になれないふんづまりの時代を演じようとしているのかも。

2016・7・2

折々のことば　鷲田清一　447

All my trials, Lord, soon be over

パハマ諸島の民謡

死の床にある母の傍らで悲しみ、途方に暮れる子どもを慰めるために歌われた古い子守歌の一節。「主よ、これで私の試練ももうすぐ終わるのですね」。身も凍えるほど貧しくて苦しい人生だったけれど、死んだあとは、神が与えたもうた試練もついに昔話になるのだと、母は子に告げる。1960年代、ジョーン・バエズら多くのフォーク歌手によってプロテストソングとして歌われたAll My Trialsから。

2016・7・3

折々のことば　鷲田清一　448

僕の求めているのは、悩んでいる自分をみせびらかすことでなく、それを笑いとばす、ユーモアのようなものなのだ。

石田徹也

ついに自分を肯定できない。そのことにもがき苦しんだ画家。自分が他人にとってしょせん何十万人の中の一人でしかないと「落たんするのでなく、軽さを感じとる」ことで、飛べない自分、屋上に逃げる自分、切り貼りされる自分、ダンゴ虫のように丸まる自分を冷ややかに描く、毒のあるユーモアを手にした。「石田徹也ノート」から。

2016・7・4

折々のことば　鷲田清一　449

ハイ（もう）年ですからノ。年に不足はないガです

伊豆の村人

詩人が、老いて床に臥しがちな遠縁の農夫を見舞うと、跡取り息子が、障子越しにつつぬけになるのを知りつつ、十分すぎるほど生きたと言う。しばらくして農夫が顔を見せ、自分用に採った蜂蜜の瓶を、持って帰れと差し出す。遠慮も気取りもなく、深い沈黙をはさみ込んで、人々のあいだを小川のように流れる会話に、心をほどく。石垣りんの「焔に手をかざして」から。

2016・7・5

折々のことば　鷲田清一　450

もっとも気前のよい人は、いつも一番多く持つことになり、その上尊敬、称讃まで得るものであると……子供たちに知らせなさい

ジョン・ロック

自分が必要とする以上に所有したいという欲望が諸悪の源だと、英国の哲学者は言う。人に分け与えるおおらかさをまず子供に植え付けなさいと。リベラルとは気前がいいこと、自分へのこだわりから解き放たれていること。自由（リバティー）の根底には気前のよさ（リベラリティー）がある。「教育に関する考察」（服部知文訳）から。

2016・7・6

折々のことば
４５１～４５５

「できなくてもしょうがない」は、
終わってから思うことであって、
途中にそれを思ったら、
絶対に達成できません。

イチロー

折々のことば　鷲田清一　451

「できなくてもしょうがない」は、終わってから思うことであって、途中にそれを思ったら、絶対に達成できません。

イチロー

次々と大リーグ記録を塗り替える野手。打率2割そこそこで終わった昨年もそうだが、「壁」にぶち当たったことは山ほどあったはず。だが「壁」を、限界ではなく足がかりとして未知のゾーンに踏み込んでいった。そもそも「壁」というものは、もっと先へという気持ちがなければ現れてこない。「イチロー262のメッセージ」から。

2016・7・7

折々のことば　鷲田清一　452

私たちは、ある場所の中で、ある時間の流れの中で、身体の働きの一部として考える

河野哲也

思考は頭の中でなされる抽象的な作業のように言われるが、じつは人それぞれが位置する特定の場所で、身体の運動として立ち上がる。人が身体ごと住み込む「自分の意図では制御できない」状況のただ中で紡がれる。そして他の場所から立ち起こる思考と交わり、夥しい経験に裏打ちされて、磨かれた単純なことばが生まれる。哲学者の「いつかはみんな野生にもどる」から。

2016・7・8

折々のことば　鷲田清一　453

きのふいらつしつてください。

室生犀星

昨日の今頃やってきて、どうぞ昨日の私にお逢いください、と続く。ただし「行停りになつたけふも／あすもあさつても／あなたにはもう何も用意してはございません」。詩人は女になりきって颯爽と言い捨てる。失った恋の記憶を未練がましく「名前をつけて保存」したりせず、済んだことはさっさと消す「上書き保存」というやつか。詩「昨日いらつしつて下さい」から。

2016・7・9

折々のことば　鷲田清一　454

不完全を厭う美しさよりも、不完全をも容れる美しさの方が深い。

柳宗悦

人はだれしも過ちや矛盾をまぬがれない。完全からはほど遠い。巧みに描かなければ美しくならないような絵が、ついにまずまずというところまでしか行けないのなら、過ちや矛盾を取り去って完全をめざすよりも、完全か否かの分別へのこだわりを捨て、「不完全なままに謬りのない世界に受取られる」ことをこそ願うべしと、民芸の思想家は言う。「美の法門」から。

2016・7・10

折々のことば　鷲田清一　455

「どこにいくのかなあ？」「というより　なにから逃げてるかが　問題よ」

ムーミンとミイの会話

空の異変でも察知したのか、お化けのニョロニョロが逃げ出す。これを見てムーミン谷の仲間も、訳もわからずそれに続く。どうしたものかと思案するムーミンに、ちびっこ娘のミイがこう言う。何かから逃げているだけなのに、どこに行くべきかと、人もよく問題をすり替える。トーベ＆ラルス・ヤンソンのムーミン・コミックス「彗星がふってくる日」（冨原眞弓訳）から。

2016・7・11

折々のことば
４５６～４６０

これでもうさわってはいけない、
というときってあるんですよね

内藤礼

折々のことば　鷲田清一　456

古今東西　人間みなチョボチョボや

小田実

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という、福沢諭吉が「学問のすすめ」の冒頭で引いたことばを彷彿とさせる。人の存在に価値の差はなく、またあってはならないという考えだ。が、作家はこれを、「天賦」のものとして上を仰いで評するのではなく、あくまで人々にまみれるなかで横向きに語る。兵庫・芦屋浜に設置された「小田実の碑」に刻まれたことば。

2016・7・12

折々のことば　鷲田清一　457

同じ権利を持ちたいと思っただけで、男性になりたいわけではありません。

ニキ・ド・サンファル

銃弾で絵の具を飛散させ染め上げたレリーフや彫刻、とてつもなく巨大な女性のボディーや頭部のオブジェを造ってきた美術家。女性であることを、不安や諦めではなく解放や希望として生きたい、「これまでの女性たちと違う生き方をしたい」と語った。そのニキの美術館設立に、後半生を捧げたのがヨーコ増田静江。彼女の生涯を描いた黒岩有希の「ニキとヨーコ」から。

2016・7・13

折々のことば　鷲田清一　458

「心をもつ者」として扱われることによって、またそのことだけによって、心は発生し成長するのだ。

下條信輔

乳児に、ペットに、「心」はあるか？　この問いは間違っていると認知心理学者は言う。私が語りかけ、また私に語りかけてくる者として相手を扱うことの結果として、「心」は生まれてくる。だから「心」は脳における神経生理的な過程として分析されるより先に、交わりという場面で問われねばならないと。「まなざしの誕生」から。

2016・7・14

折々のことば　鷲田清一　459

これでもうさわってはいけない、というときってあるんですよね

内藤礼

作品をつくる中で、「ここだ」というのはわかるけれど、なぜかというのはわからないと、壊れやすいものへの微細な視線でオブジェを制作してきた美術家は言う。つくることは自己表現ではなく、自己を超え出るためにある。だから、つくるという意識からまずは離れ、自分を超えた何かが立ち現れるその瞬間に身を委ねるのだと。インタビュー記録「内藤礼〈母型〉」から。

2016・7・15

折々のことば　鷲田清一　460

人間が……接触恐怖から自由になれるのは、群衆のなかにいる瞬間だけである。

エリアス・カネッティ

異質なものの出現に目を輝かすのではなく、それとの接触を恐れる者は、我先に群れの中に潜り込もうとする。密着すれば自他の境も消えてしまうから。群れの中に自己を消し去りつつ、他の個人ではなく他の群れと対峙する。異質なものに身を開いてゆく文化をこそ、人は長い時間をかけ培ってきたはずなのに。ブルガリア生まれの作家の「群衆と権力」（岩田行一訳）から。

2016・7・16

折々のことば
４６１～４６５

街のショーウィンドーの品物を
歴史博物館の陳列品と
同列に見るのである。

今和次郎

折々のことば　鷲田清一　461

われわれはいかに子供たちによって、いかに動物たちによって教育されることであろう！

マルティン・ブーバー

育てる、教えるという関係は、けっして一方通行の関係ではない。育てる者が育てられる者に育てられるという反転が、そこにはかならず起こる。育つなかで自分が失ってしまったものを、自分以外のものを育てる中で気づかされる。私の場合、人生に意味や理由を求めすぎると幸福より不幸に近づくと、犬から教わった。宗教哲学者の主著「我と汝（なんじ）・対話」（田口義弘訳）から。

2016・7・17

折々のことば　鷲田清一　462

街のショーウインドーの品物を歴史博物館の陳列品と同列に見るのである。

今和次郎（こん）

建築の研究者は、関東大震災で焦土と化した東京で、考古学ならぬ《考現学》の調査を始めた。バラックの建て方、洗濯物の干し方、労働者の野外での休み方、給仕の服装、台所の備品、駅の清掃法などをつぶさに調べ、図解した。民衆の暮らしがゼロからふたたびどのように立ち上がるのかを見ることで、生活に真に必要なものが何かを知るために。「モデルノロヂオ」から。

2016・7・18

折々のことば　鷲田清一　463

どん底には明日があり　頂上には下りしかない

坂本健一

闇市から立ち上げ、開業70年を迎えた大阪の古書店「青空書房」の名物店主が亡くなった。享年93歳。終戦直後の食糧難のさなか、夜学に通いつつ集めた岩波文庫を路上で売るほかなくなったときは、「体から血が奪われていく感じ」がしたという。苦境の下でも、作家から学生まで活字を愛する人びとを支えつつ、最後まで気丈に生きた。本紙7月5日夕刊（大阪本社）から。

2016・7・20

折々のことば　鷲田清一　464

「これってこうだよ」ではなく「それってどうなの？」って訊いてくれるから

ある高校生

彼女は図書室で相談に乗ってくれる司書にこう告げた。「ここまでわかっていればいいよ」と課題をこなすことを優先する教師とは違って、自分で考えたいと思った時に、問題の中にぐいと潜り込むのを手伝ってくれるから知的好奇心が深まると。何かを一から考えようとすれば異なる目が鏡として必要になる。学校司書の成田康子の「高校図書館から」（「みすず」7月号）より。

2016・7・21

折々のことば　鷲田清一　465

詩人は……「あ」が安いから「あ」をたくさん使おうとか、「ら」が高いから「ら抜き」言葉で書こうとか、そんな苦労はないでしょう？

望月通陽

草創期の民芸がうらやましいのは、彼らがいかに貧しくともまっとうな材料が使えたこと。今はその材料もかなり値が張る。故障した製品は、直すより買ったほうが早いという風潮が、健康な制作の地盤を崩してきたと、染色家・造形作家は憂う。谷川俊太郎との対話「魂だけです、さまよっているのは。」（「考える人」夏号）から。

2016・7・22

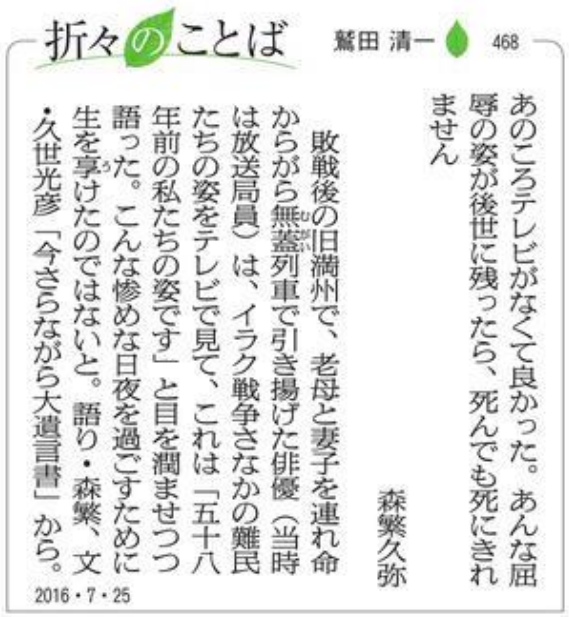
折々のことば
４６６～４７０

世界に対する期待が低いと、
幸福を感じるのも
わりとかんたんなのかも。

柴田元幸











折々のことば
４７１～４７５

涙もろくなった人が、
「年取ったからかなあ」
とよく言うけれど、
「経験値が上がったからかな」
って言うべきだ

中井貴一


折々のことば　鷲田清一　471

オチのない子育て話をする事を人は「親バカ」と呼ぶんですね。気をつけねば。

宮藤官九郎

かいつまんで話せず、何から何まで全部報告する妻の「オチがない」話に少々うんざりしていた夫は、幼子と散歩に行ったあと妻に、あったことを全部喋っている自分に気づき愕然とする。足の指に靴下が引っかかったとか、靴がきつくて入らなかったとか。子どもの行動には脈絡がない。だから報告しようにも要約できない。脚本家の育児奮闘記「俺だって子供だ！」から。

2016・7・28

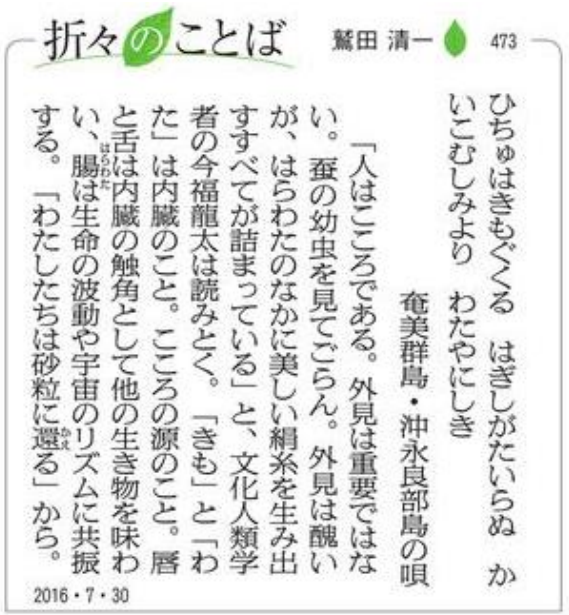

折々のことば　鷲田清一　472

危険なのは実際に専制において行なわれるコントロールではなく……断片化なのです。

チャールズ・テイラー

一つの意思、一つの原理で社会を管理運営しようという動きより、人がたがいに義務を負いあう同じ社会の一員であるという実感が崩れてゆく過程のほうがさらに危ういと、カナダの哲学者は言う。信頼と共感を寄せられる範囲が知らぬまに縮まって、人びとの意識が自分の属する特定小集団の利益を図るほうに向かうからと。「〈ほんもの〉という倫理」（田中智彦訳）より。

2016・7・29

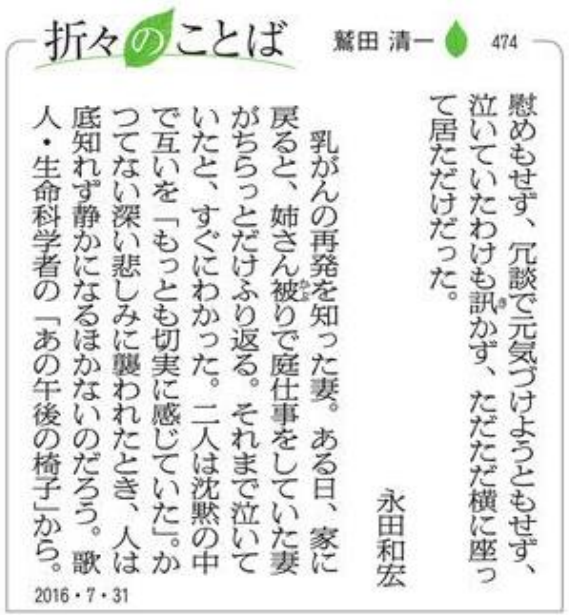

折々のことば　鷲田清一　473

ひちゅはきもぐくる　はぎしがたいらぬ　かいこむしみより　わたやにしき

奄美群島・沖永良部島の唄

「人はこころである。外見は重要ではない。蚕の幼虫を見てごらん。外見は醜いが、はらわたのなかに美しい絹糸を生み出すすべてが詰まっている」と、文化人類学者の今福龍太は読みとく。「きも」と「わた」は内臓のこと。こころの源のこと。唇と舌は内臓の触角として他の生き物を味わい、腸は生命の波動や宇宙のリズムに共振する。「わたしたちは砂粒に還る」から。

2016・7・30

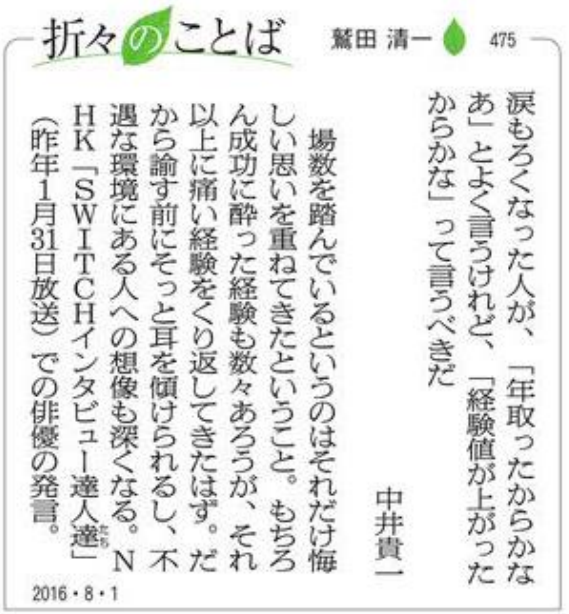

折々のことば　鷲田清一　474

慰めもせず、冗談で元気づけようともせず、泣いていたわけも訊かず、ただただ横に座って居ただけだった。

永田和宏

乳がんの再発を知った妻。ある日、家に戻ると、姉さん被りで庭仕事をしていた妻がちらっとだけふり返る。それまで泣いていたと、すぐにわかった。二人は沈黙の中で互いを「もっとも切実に感じていた」かつてない深い悲しみに襲われたとき、人は底知れず静かになるほかないのだろう。歌人・生命科学者の「あの午後の椅子」から。

2016・7・31


折々のことば　鷲田清一　475

涙もろくなった人が、「年取ったからかなあ」とよく言うけれど、「経験値が上がったからかな」って言うべきだ

中井貴一

場数を踏んでいるというのはそれだけ悔しい思いを重ねてきたということ。もちろん成功に酔った経験も数々あろうが、それ以上に痛い経験をくり返してきたはず。だから諭す前にそっと耳を傾けられるし、不遇な環境にある人への想像も深くなる。NHK「SWITCHインタビュー達人達」（昨年1月31日放送）での俳優の発言。

2016・8・1

折々のことば
４７６～４８０

今の社会で起きている課題の
多くは「よそごと感」が
作り出してる気がするんです。

飛田敦子

折々のことば　鷲田清一　476

お父さん、お金持って帰ってくるだけやないの

井村雅代

小学生のとき、家のことは母任せで仕事に没頭する父への不満を、こう言って母に向けた。いきなり張り倒されたのだが、そのときの母の「怒りに満ちた形相」は今も忘れられないという。家族を支えることと金を稼ぐこととは根本的に違うことを、母は娘にたたき込もうとした。シンクロナイズド・スイミングの指導者に取材した川名紀美の「井村雅代　不屈の魂」から。

2016・8・2

折々のことば　鷲田清一　477

この世界と数行のことばとが天秤にかけられてゆらゆらする可能性

谷川雁

詩においてそういう前提が崩れつつあると、詩人・評論家は憂えた。詩人たちは、ことばにそれほどの重みがあるということに耐えきれないで、詩が滅びたことを、深い「失望」のみならず「安心」と「居直り」の中で受けとめている。そして今、ことばを生業とするもう一方の種族、政治家において、ことばはさらに繕いようもなく空疎になっていないか。「暖色の悲劇」から。

2016・8・3

折々のことば　鷲田清一　478

どんな選択がなされても全面的に支持するのだと覚悟は決めておきたいものです。

森村泰昌

「この覚悟こそ、おとなが若い世代に捧げることのできる、なんというか精いっぱいの『愛』だから」と続く。美術がアートへと霧散してゆくなか、彼はあえて美術家を名のる。美術は「こだわることが美であるような世界」だからと。自分のこだわりを明示することで、若い世代に、先行世代との折り合いなど考えずに前に進めと、応援歌を送る。「美術、応答せよ！」から。

2016・8・4

折々のことば　鷲田清一　479

一番困っている産地にこそ、いままでにはないなにかが眠っているはずなんです。

松下弘

売れている産地からは新しいものは生まれない。これまでなかったような何かをと話をもちかけても見向きもされない。苦しんでいる産地、弱りきっている産地だと、少々むちゃな提案にも、技を生かし、工夫を重ねて協力してくれる。ブランド「コムデギャルソン」の布地を一手に任されたアバンギャルドな生地職人へのインタビュー（「広告批評」１９９４年11月号）から。

2016・8・5

折々のことば　鷲田清一　480

今の社会で起きている課題の多くは「よそごと感」が作り出してる気がするんです。

飛田敦子

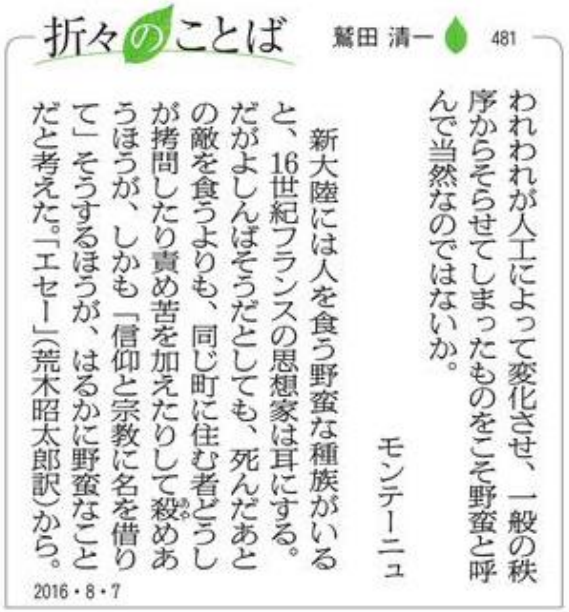
中3で阪神大震災を体験した彼女は、アジア系の少ない留学先で「数が少ないというのは、それだけで圧倒的にしんどい」ことだと知る。帰国後、支えが必要な人と支えたいと思う人をつなぐＮＰＯの仕事に就く。人々の困難を自分と地続きのものと感じるまで「問題を社会化する」ことがないと非当事者のままでしかいられないから。インタビュー集「ＢＥ　ＫＯＢＥ」から。

2016・8・6

折々のことば
４８１～４８５

my best wishes to Japan

ディック・ブルーナ



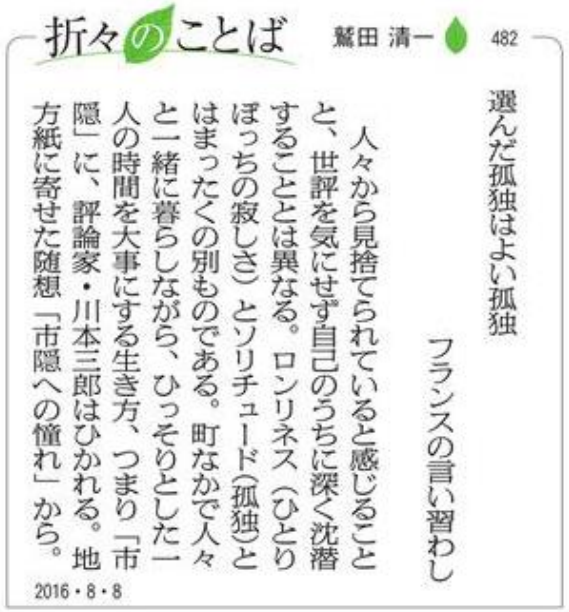
折々のことば　鷲田清一　481

われわれが人工によって変化させ、一般の秩序からそらせてしまったものをこそ野蛮と呼んで当然なのではないか。

モンテーニュ

新大陸には人を食う野蛮な種族がいると、16世紀フランスの思想家は耳にする。だがよしんばそうだとしても、死んだあとの敵を食うよりも、同じ町に住む者どうしが拷問したり責め苦を加えたりして殺めあうほうが、しかも「信仰と宗教に名を借りて」そうするほうが、はるかに野蛮なことだと考えた。「エセー」（荒木昭太郎訳）から。

2016・8・7



折々のことば　鷲田清一　482

選んだ孤独はよい孤独

フランスの言い習わし

人々から見捨てられていると感じることと、世評を気にせず自己のうちに深く沈潜することとは異なる。ロンリネス（ひとりぼっちの寂しさ）とソリチュード（孤独）とはまったくの別ものである。町なかで人々と一緒に暮らしながら、ひっそりとした一人の時間を大事にする生き方、つまり「市隠」に、評論家・川本三郎はひかれる。地方紙に寄せた随想「市隠への憧れ」から。

2016・8・8



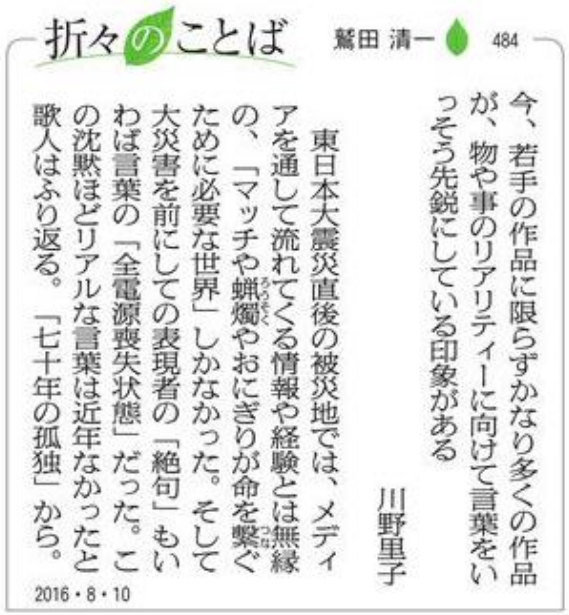
折々のことば　鷲田清一　483

my best wishes to Japan

ディック・ブルーナ

ミッフィーの絵本で知られるオランダの画家を長年取材してきた記者は、東日本大地震の直後、子どもたちにメッセージを送ってほしいと画家に手紙を書く。送られてきたのは、「日本のみなさんへ、心を込めて」という、表現を押し殺した短い定型句。そこには、涙を流すミッフィーの無彩の姿が添えられていた。墨一色に深い悲しみが込められていた。森本俊司「ディック・ブルーナ」による。

2016・8・9



折々のことば　鷲田清一　484

今、若手の作品に限らずかなり多くの作品が、物や事のリアリティーに向けて言葉をいっそう先鋭にしている印象がある

川野里子

東日本大震災直後の被災地では、メディアを通して流れてくる情報や経験とは無縁の、「マッチや蝋燭やおにぎりが命を繋ぐために必要な世界」しかなかった。そして大災害を前にしての表現者の「絶句」もいわば言葉の「全電源喪失状態」だった。この沈黙ほどリアルな言葉は近年なかったと歌人はふり返る。「七十年の孤独」から。

2016・8・10



折々のことば　鷲田清一　485

子供時分の分別が過ぎりゃ、嘘臭い顔の大人にならあ。

朝井まかて

葛飾北斎の妻は初の内孫をあずかるが、どうにも思いどおりにならない。てこずった妻が工房にやってきて、仕事する横でくどくど愚痴りはじめると、北斎は下絵に顔を落としたままこう諫めた。そして「お前えは大抵、人を揉み過ぎるのよ。下手な按摩だ」と、孫に手を焼く妻を軽口たたいて揉みほぐす。天才女絵師といわれた北斎の娘、応為の生涯を描いた小説「眩」から。

2016・8・11

折々のことば
４８６～４９０

能は舞い尽くさず、
あの世で舞う1曲を残す

金剛　永謹

折々のことば　鷲田清一　486

明るみに出ていることの裏にも重要な事実があり、原則には例外があり、できごとには背景がある。

高坂正堯

かく「ものごとはすべて条件附きのものである」と政治学者は言う。そこに十分に深く測鉛を垂らすことのできない思考はだから、甘く一面的になる。情報の氾濫に振り回されて、「混沌のなかに当惑して立ちすくむ」か「事態を誤って単純化する」かしかできなくなる。懐疑に沈むか熱狂に走るかしか。「世界地図の中で考える」から。

2016・8・12

折々のことば　鷲田清一　487

ワーク・ライフ・バランス

現代の標語

これがもし、仕事という公的活動と家族との私的生活とをうまく両立せよという意味なら、言われたくない。一企業の利益のためになすワークもまた私的であり、結局この標語は私的なものに専念せよと人に告げるだけだから。逆に、一市民としての活動に従事するかぎり個人のライフも公的である。そういう公的活動に個人としてもっと時間を割こうという意味なら、聞ける。

2016・8・13

折々のことば　鷲田清一　488

どうして学問や芸術といったそれ自体非政治的な動機から発するいわばいやいやながらの政治活動があっていけないのでしょうか。

丸山真男

民主主義は、「政界」ではなく、政治を職業としない人々の政治的発言と行動によって支えられると、政治学者は言う。自由も「置き物のようにそこにあるのでなく、現実の行使によってだけ守られる」と。投票して後は政治家にお任せというのではなく、日々のどの活動も政治とつながっているとの意識が大事。「日本の思想」から。

2016・8・14

折々のことば　鷲田清一　489

だったら私は泣きわめく女になる。

湯川れい子

戦時下、海軍大佐の夫を病で失い、長男は戦死、特攻死を免れた次男も一時行方不明。それでも母は軍人の妻として一度も涙を見せなかった。「そういう時代に居合わせてしまったから」と言う母に娘がこう返した時、母は初めて落涙したと音楽評論家は語る。敗戦時、「辱めを受けそうになったらこれで自害を」と渡された懐剣は今も押し入れに。本紙記者の取材でのこぼれ話から。

2016・8・15

折々のことば　鷲田清一　490

能は舞い尽くさず、あの世で舞う1曲を残す

金剛永謹

能楽金剛流二十六世宗家は、写真家、白鳥真太郎を前にこう述べた。一つの境地に達すると、これまでは見えなかった別の風景が目の前に広がる。たどり着いたこの場所もまた途中だと思い知る。名人はおのれの不完全をもっともよく知る人のことなのだろう。では、普通の人があの世の1曲として残すものは何なのだろうか。「貌・KAOII　白鳥写真館　これから…」より。

2016・8・16

折々のことば
４９１～４９５

無駄なところを落語から省いたら
全部なくなっちゃう

広瀬　和生

折々のことば　鷲田清一　491

無駄なところを落語から省いたら全部なくなっちゃう

落語にはまともに考えたらけっこう哀れな噺、重いネタがある。それをもちゃかして無駄な噺に裏返すことで、どんなにひどい状況でも、どこかこたえていないようにも見える庶民のしたたかさに寄り添う。「全部、酒落みたいなもんですからね」という桃月庵白酒のことばをうけて。ヘビーメタル専門誌の編集長と噺家たちとの対談集「『落語家』という生き方」から。

2016・8・17

折々のことば　鷲田清一　492

やませ来るいたちのやうにしなやかに　佐藤鬼房

今夏の東北はことのほか暑いが、例年なら太平洋沖から吹く湿った冷風がもくもくと深い霧を発生させ、この地を覆う。この風「やませ」が居座り、夏の盛り、稲の開花時期と重なると、凶作と飢餓をもたらすと気味悪がられてきた。やませの薄ら寒さは「獲物へ背後から這い寄り、そして捕食するイタチの冷たさ」だとは浅川芳直の説明（「俳句」6月号）。句集「瀬頭」から。

2016・8・18

折々のことば　鷲田清一　493

他の人々の生を私たちは私たち自身が磨いたレンズで見るし、彼らは私たちの生を彼らのレンズで見る　クリフォード・ギアツ

異なる文化にふれても、人はついに自分の眼鏡を外せない。だが重要なのはその次だ。すべては相対的だと居直るのでなく、文化の違いを超える普遍的な見方を想定するのでもなく、視線がぐらつき、別のものへと変容するところまで自身を隔てることだと、文化人類学者は言う。「解釈人類学と反＝反相対主義」（小泉潤二編訳）から。

2016・8・19

折々のことば　鷲田清一　494

やかましい　関西の物言い

関西では「うるさい」より「やかましい」と言う。店で騒いでいると、大阪では隣席から「やかましいなあ」の声が。が、そう言う席のほうが実はやかましい。そして双方ますますにぎやかに。京都の店では「お元気でよろしいな」の声。だが艶麗を買っているとはすぐに気づかない。その場限り、後に引かないのが大阪。後でじんわり効いてくるのが京都。ご近所なのにこの差。

2016・8・20

折々のことば　鷲田清一　495

家庭の味はこれというのがありません。それがいちばん難しいですね。　ホスピスの調理師

一人ひとり歩いてきた道が違うから、味の記憶もまた違う。週1度、患者のリクエスト食を出す淀川キリスト教病院（大阪）のホスピスでは、割烹のような自慢の味は出せない。オーダーメイドの調理は「見えないゴールにシュートするようなもの」だと言いつつ、ひたすら患者の記憶にある味に近づこうと汗を流す。フリーの編集者、青山ゆみこの「人生最後のご馳走」から。

2016・8・21

折々のことば
４９６～５００

礼は、頭を下げるときでなく
顔を上げるときこそ丁寧に。

老舗の女将（おかみ）

折々のことば　鷲田清一　496

私は走りながら読む書物はないだろうか？
と真剣に考えたことがある。

寺山修司

人は、時間をもてあます学生時代に、あるいは入院中、服役中に、たぶんもっともよく本を読む。が、それは「人生を何かによって閉ざされているときの代償体験」でしかないと、歌人・演出家は言う。人は、行動から退いた、そんな「人生嫌い」の書物ではなく、入浴しながら、ボクシングの練習をしながらしか読めないような書物にこそ飢えているのだと。「幸福論」から。

2016・8・22

折々のことば　鷲田清一　497

人間が抱く嫉妬のなかで最も暗くて陰湿なのは、対象となる人間の正しさや立派さに対してなの。

宮本輝

心ある大人たちに育てられた戦災孤児は成長して、長く住み込みで働いた先の老婦人にこう言われる。人は、正しいことをまっすぐにできる人のその〝無垢〟に嫉妬することがある。その伸びやかな光に照らされると、意識にいつも屈折を強いてきた自身の境遇ないしは悲しき性に、思いがつい向かうから。小説「骸骨ビルの庭」より。

2016・8・23

折々のことば　鷲田清一　498

「自由の獲得」は劇的な政治変化を伴うのに対し、「自由の喪失」は音もなく徐々に、ほとんど人の気づかぬうちに進行することが多い

猪木武徳

自由とデモクラシーを両立させようという「寛容」の政治体制は、意見の不一致をも受け入れるような精神の緊張を前提とする。だから樹立するには法外な努力を要するが、いったん崩れだすと止めるのが難しい。極論や思考停止に流れ、異なる意見を封殺する「空気」がすぐに社会を覆いはじめる。経済学者の「自由と秩序」から。

2016・8・24

折々のことば　鷲田清一　499

礼は、頭を下げるときでなく顔を上げるときこそ丁寧に。

老舗の女将

京都の旅館の女将にこう教わった。顔を上げるとき相手の姿にゆっくりと目をやること。一期一会のご縁を大切にしたい、心をほどいてごゆっくり、とのメッセージか。すると客も「こちら様」ではなく「あなた様」として迎えられたと思う。それまでの息せき切っていた時間が嘘みたいにゆったりと流れだす。もてなしとは、客人に普段とは違う時間を用意してあげること。

2016・8・25

折々のことば　鷲田清一　500

求められるのは「創造性」よりも、既存のものを活かす「創意」である。……「発明」することではなく、「発見」することである。

大久保賢

未だ誰も聴いたことのない音楽を求め、逆に隘路に入ったと評される現代音楽に向けて、音楽学者はこう記す。「刷新」への強迫の中で見捨てられたものにもまだ可能性は潜んでいると。右肩上がりなどもはや望むべくもない社会に求められているのも、ありあわせのもの、眠っているものを活用する術であろう。「黄昏の調べ」から。

2016・8・26

折々のことば
５０１～５０５

人間はだれでもひとつふたつ
欠けているんですな。
その部分が魅力的になるか、
ならないかの問題なんですな

司修



折々のことば　鷲田清一　501

共通世界の終りは、それがただ一つの側面のもとで見られ、たった一つの遠近法において現われるとき、やってくるのである。

ハンナ・アレント

社会のリアリティーを支えるのは、人々に共通の思いではなく、立場や視点がいかに違ってもみなが同じ一つのものに向きあっているという感覚だと、哲学者は言う。現在の政治状況は、意見は衝突しつつも同じ一つのものを見ているという感覚を、ついに持てないところまで来てはいまいか。

「人間の条件」（志水速雄訳）から。

2016・8・27



折々のことば　鷲田清一　502

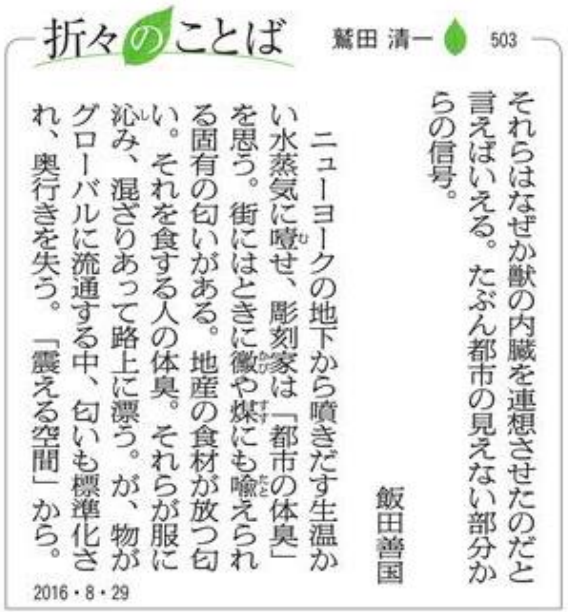
人間はだれでもひとつふたつ欠けているんですな。その部分が魅力的になるか、ならないかの問題なんですな

司修

今は亡き臨床心理家、河合隼雄との語らいの中で、司が「どこか欠けている」と思っていた絵を河合は褒めてこう言った。ただし司が綴った架空の対話の中でのこと。欠けている所に心のかたちが表れる。だからきっかけは歪でもいい、いやそのほうが魅力が備わると、河合なら言ってくれたはずと装幀家は思う。

「本の魔法」から。

2016・8・28



折々のことば　鷲田清一　503

それらはなぜか獣の内臓を連想させたのだと言えばいえる。たぶん都市の見えない部分からの信号。

飯田善国

ニューヨークの地下から噴きだす生温かい水蒸気に噎せ、彫刻家は「都市の体臭」を思う。街にはときに黴や煤にも喩えられる固有の匂いがある。地産の食材が放つ匂い。それを食する人の体臭。それらが服に沁み、混ざりあって路上に漂う。が、物がグローバルに流通する中、匂いも標準化され、奥行きを失う。

「震える空間」から。

2016・8・29



折々のことば　鷲田清一　504

どんどん安くなっていく新品ばかりを買い続けていくとどうなる。全部サラに買い換えたら残された私はどうなる。

バッキー井上

修繕するより新しいのを買うほうが安いというのは、かんに障るけれど本当だ。だが安いのがいいなら誰もバーなんかに行かない。しみる、落ちつく、ゆるむ、泣かせる場所がサラになれば、そこに通う理由も失せる。人は人のみならず物や場所ともつきあってきたのだ。京都・錦の漬物屋店主のコラム紙「昨日も今日もお漬物」から。

2016・8・30



折々のことば　鷲田清一　505

九勝六敗を狙え

色川武大

高校野球なら毎試合全力を投入しないと次に残れないが、プロの勝負は通算で決まる。人生も同じで、何もかもうまく行くわけはないから、どこで勝ちどこで負けるかが肝要となる。そのためには「これを守っていれば勝ち越せる」というフォームを見つけること。実生活では形勢が読みにくいから、よけいにフォームが大事になると作家は言う。

「うらおもて人生録」から。

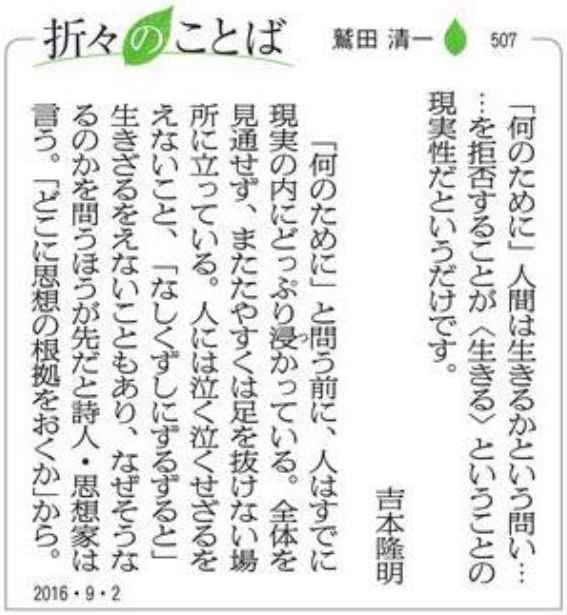
2016・8・31

折々のことば
５０６～５１０

私たちが自分の人生と
思っているものは、
だれかによって見られている
夢ではないのだろうか。

木村敏











折々のことば
５１１～５１５

母は／舟の一族だろうか。
こころもち傾いているのは
どんな荷物を
積みすぎているせいか。

吉野弘

折々のことば　鷲田清一　511

本やコーヒーのような……なくてもいいものがある世の中を考えたい。となると、自分の店だけ栄えればいい、ではなくなるんです

堀部篤史

本がなくても生きられる。けれども本を読めば「自分以外のものに関する想像力」がつく。懐が少し深くなって、世に流通する「安易な物語」が恥ずかしくなる。あれこれ道に迷うことを許容してくれるようなまちの空気を作っていきたいと、京都の書店、恵文社一乗寺店の元店長は言う。木村俊介のインタビュー集「善き書店員」から。

2016・9・6

折々のことば　鷲田清一　512

あの子は魚と絵が好きだからそれでいいんです。

さかなクンの母親

さかな博士は小学生の頃、級友の落書きにしびれ、図書室で調べてタコと知る。毎夕母にタコ料理をねだり、水族館で水槽にかじりつき、魚屋では魚を丸ごと一匹買ってもらう。それを観察して絵に描く。「すごい、飛び出て泳ぎ出しそう」と叫ぶ母と感動を共有できたことが〝魚学〟の道につながった。もっと勉強も、と担任に告げられた時の母の返答。本紙7月2日朝刊から。

2016・9・7

折々のことば　鷲田清一　513

やりがい、生きがいだけでがんばると、つぶれることがある

障害者施設の支援職員

障害者施設は「療育・訓練の場」から「くらしの場」へとようやく捉え直されるようになってきた。が、入所者の可動域をもっと広げてあげたいとの高い志をもって頑張る人は、ときに、入所者の障害が重くてそれができないと、当初の思いとは逆に彼らへの苛立ちや自身への失望をためてしまうことがあると、大阪の施設「金剛コロニー」のベテラン職員は案じる。本紙記者に。

2016・9・8

折々のことば　鷲田清一　514

涙を十七字に纏めた時には、苦しみの涙は自分から遊離して、おれは泣くことのできる男だという嬉しさだけの自分になる。

夏目漱石

どんな苦境も、その景色を「一幅の画」として見たり「一巻の詩」として詠めれば抜け出せると、語り手の画家は言う。ありもしない不幸を描きだしそれに悶える自己を嘆くのではなく、「自分の屍骸を、自分で解剖」するかのようにまずは情感を定型に象るべしと。そんな境地があるならいつか立ってみたいものだが。小説「草枕」から。

2016・9・9

折々のことば　鷲田清一　515

母は／舟の一族だろうか。
こころもち傾いているのは
どんな荷物を／積みすぎているせいか。

吉野弘

母と舟。「荷を運ぶ」という共通の性質をそこに感じると詩人は言う。母と舟をつなぐもう一つのものがある。海。ここにも母が含まれる。そして海は「産み」に通じる。だが詩人は、字の構成や音の類似以上に、母という字の傾きに引かれる。「愛」。それは、人がよろけつつも引き受けてきた重い荷なのだろう。「現代詩入門」から。

2016・9・10

折々のことば
５１６～５２０

知った人間に話せば
相手の耳が腐る。
知らぬ人間に話せば
こっちの口が腐る。
だが、話さずにいれば
胸が腐っちまう。

浅田次郎

折々のことば　鷲田清一　516

言葉には力があります。だからこそ、穏やかに話す人になりましょう。

郡美矢

ほんとうに大事なことは抑え気味の声で話すほうがいいと言われることがある。言葉は意味を伝えるだけではなく、声でふれてゆくから。激しい声は人を圧し、ひるませる。よどむ言葉、ためらいがちの言葉、たどたどしい言葉のほうが、滑らかに流れる言葉より、ときに多くを伝える。国際手話通訳者として活躍する牧師の「あなたは見えないところで愛されている」から。

2016・9・11

折々のことば　鷲田清一　517

自分が自分の生き方を決められてはじめて、ほかの誰かが自由を持てないことへの怒りもこみあげてくるのではないか

井手英策

格差が広がり人々が分断されるなか、保育や教育、介護や介助、医療など、人が「まわりの人に優しくいられる」条件そのものが損なわれてきたのが現在の社会だと財政学者は言う。だからまずは各人の自由を守る条件、つまりは「がんばるための土台」をみなの税で支え、整えることから始めるべきだと。「18歳からの格差論」から。

2016・9・13

折々のことば　鷲田清一　518

思い込みを捨て、思いつきを拾う

小林幸子が銘とすることば

あれこれあって一時歌謡界で干され、ニコニコ動画でしっかり甦った歌手が銘としてきたことば。「演歌歌手だから、この年齢だからという垣根を取り払い、新しいものを取り入れたい」と言う。限界はたいていはそうと思い込んでいるにすぎない。ふりかかった偶然、わけもなくふと浮かび上がったアイデアを面白がれるかどうかが人生を左右する。本紙6月27日夕刊から。

2016・9・14

折々のことば　鷲田清一　519

恋に焦がれて鳴く蟬よりも　鳴かぬ蛍が身を焦がす

山城国の民謡

近世諸国民謡集「山家鳥虫歌」の校注者、浅野建二は、蟬と蛍は「恋情に焦がる虫」として古より対照されてきたと言う。とりわけやるせないのが忍ぶ恋。切なそうにみんみん泣くこともできず心を折り畳むばかりの片恋の心情は、やがて心を届けえぬ自分を憐れむほうへ向かいがちだが、その人への思いはそれでも断ちがたく、「思ひ」が「火」となり身を焦がす。

2016・9・15

折々のことば　鷲田清一　520

知った人間に話せば相手の耳が腐る。知らぬ人間に話せばこっちの口が腐る。だが、話さずにいれば胸が腐っちまう。

浅田次郎

「あんたの話を聞かせてちょうだい」と言う街娼の横で復員兵がこうつぶやく。胸の内にしまい込んでいたら身がもたないことがある。が、誰に向けて語るかで意味はそのつど変わる。聞きたくないだろうな、戸惑うだろうなと思うと語りはよけいゆがむ。とはいえ、宛先もなく宙に浮いたままの語りはさらに辛い。短編「歸鄉」から。

2016・9・16

折々のことば
５２１～５２５

生活をすることとは……
今日の自分と明日の自分との
終わりのない交渉なのだな

津村記久子



折々のことば　鷲田清一　521

本という形で、そこに「双葉町」をつくることなのかなと思います

清水チナツ

原発事故後、郷里を離れた人々。その一人、福島県双葉町の目黒とみ子さんが、宮城県に避難した同郷人から聴き取った話を、みやぎ民話の会の協力を得て本にまとめた。度重なる転居の疲れと心細さ、やり場のない怒りと後悔、先行きへの不安と見切り……。装丁を買って出た学芸員は本を編むなか、こう思わずにいられなかった。「双葉町を襲った放射能からのがれて」から。

2016・9・17



折々のことば　鷲田清一　522

時間というのは、自分の力ではない何かだと私は思う。

高山なおみ

電子レンジなどの器具は使わない。「素材の変化してゆく様子が、肌を伝わってこない」から、素材に無理をかけたくないからと料理家は言う。だからみじん切りや面取りして形を整えるよりも、手でちぎったりすりこぎで丹念に潰すほうが好きと。時間を約めようとしないこと。操るより待つこと。人の苦難も同じで時がしばしば解決してくれる。「高山なおみの料理」から。

2016・9・18



折々のことば　鷲田清一　523

生活をすることとは……今日の自分と明日の自分との終わりのない交渉なのだな

津村記久子

昨日怠けたつけが今日に来るように、昨日の自分が味方になってくれないこともあれば、まめに置き傘をしておく自分の用意のよさに驚くこともある。そこで未来の自分を「文句言いの疲れた客」とみなし、「明日のあんたは今日よりつらそうだから、このぐらいはやっておいてあげる」というふうに動くと、憂鬱の数も少しは減ると作家は言う。「くよくよマネジメント」から。

2016・9・19



折々のことば　鷲田清一　524

民主主義には二度万歳をしよう。一度目は、多様性を許すからであり、二度目は批判を許すからである。ただし、二度で充分。

E・M・フォースター

多数決という手続きから独裁政治が生まれることもあり、「三度も喝采する必要はない」と英国の作家は言う。陰湿な圧力がかかれば人々は「自粛」に向かう。権力にへつらう声は増幅される。少数の意見や立場を擁護するには、制度としての民主主義を凌ぐほどにしたたかな心得と工夫が要る。評論「私の信条」（小野寺健訳）から。

2016・9・20



折々のことば　鷲田清一　525

私は優等生的なコメンテーターであるよりは、不器用な演奏家でありたいと強く願っている。

福鳩亮大

聡明な聴衆、冷徹な批評家であるよりも、ともに歌い、踊り、ときに崖っぷちでも喘ぎつつ考え続けること。自らは滞れずに見ることのできる場所、つまり陸はありえぬと思い定めること。「僕は憑かれた人々を研究するより、憑かれたい」という詩人・人類学者、ミシェル・レリスのことばを思い出す。文芸評論家の「厄介な遺産」から。

2016・9・21

折々のことば
５２６～５３０

たかが服、されど服

戯(ざ)れ言葉











折々のことば
５３１～５３５

ほんとうの寛容さはつねに
戦闘状態にあるはずで、
寛容にする側もされる側も、
どちらもぞんぶんに傷つく。

堀江敏幸

折々のことば　鷲田清一　531

じぶんが、泣いたり、笑ったりする感情をもった人間だったことを何年かぶりに思い出したよ

沖縄芝居の観客

戦後まもなく結成された移動劇団は、久方ぶりの郷土の大衆演劇ということで喝采を浴びた。沖縄の誰もが共有する戦時下の過酷な体験や、旧日本軍、米軍政府への揶揄など、胸をかきむしられるような演目が多かったが、そのことで人々はようやっと歌う心を取り戻しもした。ノンフィクション作家、与那原恵の「首里城への坂道」から。

2016・9・27

折々のことば　鷲田清一　532

味わいすぎた哀しみに寄り添ってくれる実直な人より、険しい未来へ押し出してくれる人がよいということだろうか。

乙川優三郎

いろんなめぐりあわせが折り重なって、失うという体験を澱のようにため込んできた一人の幸薄き女性に、あなたは「優しすぎます、人によっては親切にされると却って辛くなることもあります」と言われた男。胸を突かれてこう思った。いかに気丈な人でも、慈しみの言葉にふれれば堰が切れそうになる。小説「脊梁山脈」から。

2016・9・28

折々のことば　鷲田清一　533

ほんとうの寛容さはつねに戦闘状態にあるはずで、寛容にする側もされる側も、どちらもぞんぶんに傷つく。

堀江敏幸

他人の話に「わかる」と人はたやすく返すが、この優しさは皮相のものだ。そこから発生する事態をともに担う気のない「わかる」はむしろ冷淡であり、簡単にわかられてたまるかという反発を招く。「わからない」と言うとき、人は「自分を棚にあげない勇気の有無」が問われるのだと作家は言う。小説「河岸忘日抄」から。

2016・9・29

折々のことば　鷲田清一　534

生きている理由を……問わずにいられないのは、「問う自分」と「問われる自分」の歩調がどこか合ってないからだ。

神崎繁

「なぜ」という問いには二つの型がある。「何が原因で」と「どんな理由で」。「なぜ生きているのか」という問いは、自分の中にずれや乱れが生まれつつあるときに立ってくる。そうだとすれば、この問いは人生への疑いというより、生きようとする自分への励ましと考えたほうがいいと哲学者は言う。野矢茂樹編「子どもの難問」から。

2016・9・30

折々のことば　鷲田清一　535

生まれることは屁と同じ

深沢七郎

人生、屁のようだとは、滓の滓ということなのか。生きるというのは他人にいやな臭いを振りまくことなのか。はたまた、ちょっとした迂闊もしくは遺漏として笑ってすませるべきものなのか。いろいろ考えさせられるが、生まれるとは産んでもらうことだから、産むほうからすれば痛すぎる一発ではある。作家が生前よく口にしたことば。のちに対談集の表題ともなった。

2016・10・1

折々のことば
５３６～５４０

先生もおらん。
無学で絵の価値もなか。
ばってん、
ムガクは六学とも書きましょうが、
五つばかり学問が多い、ち。
エッヘッヘ。

山本作兵衛











折々のことば
５４１～５４５

ずれているからうまくいく

細馬宏通

折々のことば　鷲田清一　541

人は、ことばを覚えて、幸福を失う。
そして、覚えたことばと
おなじだけの悲しみを知る者になる。

長田弘

人を見つめるようになる。何かができるようになる。自分で動けるようになる。こうして赤子は人々の間でふるまうようになる。人がこの世で初めて覚えた「ことばではないことば」、そう、微笑を忘れて、ことばを操るようになる。「もう微笑むことをしない人たち」にも微笑を返せたあの幸福は何処に？　絵本「幼い子は微笑む」から。

2016・10・7

折々のことば　鷲田清一　542

鼠骨来る　共に午餐をくふ
鼠骨去る　左千夫義郎蕨真来る　晩餐（鰻飯）を共にす

正岡子規

病床で激痛にのたうちまわる俳人を、友人や弟子筋がひっきりなしに見舞う。まるで病床がサロンになったかのよう。代わりに痛むわけにはいかないけれど、傍らでしばし気を散らせることはできる。そこには痛む人を孤立させないという知恵が働いていた。そういう形で、痛む人を支える〈痛みの文化〉があった。「仰臥漫録」から。

2016・10・8

折々のことば　鷲田清一　543

ずれているからうまくいく

細馬宏通

日常のほんのささいなふるまいの中に、奇蹟のような出来事が含まれている。たとえばレジでのレシートとおつりの手渡し。双方が相手の体のサインに反応しつつ、手の方向や速度、つかみ方を調整する。わずかにずれる時間の中でまるでおしゃべりのように微細なやりとりがなされる。介護現場にもそういう奇蹟がいっぱい。元動物学者の観察研究「介護するからだ」から。

2016・10・9

折々のことば　鷲田清一　544

われわれのそばを通り抜けてください、そしてわれわれの幸福を許してください！

ドストエフスキー

他人の不幸をともに悼むためには自分も不幸にならないといけないのだろうか。苦しみのない今の状態を後ろめたく思わないといけないのか。幸福に浸りきっているより、たとえ幸福を失おうとも真実を知るほうがいいと主張する青年に、主人公の公爵はこう返すしかなかった。だが、幸福の像をもてずにどうして不幸な人々に共感できよう。小説「白痴」（米川正夫訳）から。

2016・10・10

折々のことば　鷲田清一　545

誰も、誰かから必要とされていない。必要性がないのに、その人がそこにいるだけで嬉しくなってしまうのが、愛なのではないか。

山崎ナオコーラ

主人公の若い女性は、恋人となるべき異性を探し、いずれつがいとなって結婚することが幸福への道だという通念になじめないでいる。自分の存在には特定の誰かが必要だという、そんな男女の閉じた愛より、「みんなの小さな好意をかき集めて、生きていきたい」と願う。小説「この世は二人組ではできあがらない」から。

2016・10・12

折々のことば
５４６～５５０

重い人が悟ったときには、
ものすごく軽くなる。

高橋睦郎

折々のことば　鷲田清一　546

あのまだるっこいような、圭角のとれた関西弁は、「論争」や「処断」の言葉ではなく、「話し合い」の言葉なのである。

小松左京

関西弁は座談にはいいが、論争や演説には向いていないとSF作家は言う。とはいえ言葉の温さとは裏腹に、大事なことはお上には任さず自分たちで決めるという、かつての町衆の矜持が語調ににじみ出る。私も大阪出身の友人に、発言は次に話が続くような仕方で終えなければならないと言われたことがある。「わたしの大阪」から。

2016・10・13

折々のことば　鷲田清一　547

重い人が悟ったときには、ものすごく軽くなる。

高橋睦郎

表現というのは「自分というガリガリしたものを超えて本当に自由になるため」にあると詩人は言う。ここで「重い」とは自分にこだわるということ。松尾芭蕉などはそういう「重くれ」がひとしお強かったからこそ、ただ単に軽い人以上に「軽み」を大事にした。思いもよらない遠くへと連れて行かれるために、あえて自分を不安定な状態に置いた。「俳句」（10月号）から。

2016・10・14

折々のことば　鷲田清一　548

水清ければ魚棲まず

ことわざ

人は澄んだ水ではなく、濁り水の中に生きている。体の中では菌と共生し、体の周囲にも菌があふれる。清濁あわせのむ、そういうことに馴れていかないと、命は痩せ細る。大人がうわべをつくろい、陰りのない「清らか」で「正しい」姿しか見せないと、子どもはおのれの中の闇や鬱屈とどうつきあえばいいのかわからず、隠れる場所もなくて、ときに歪な行動に出てしまう。

2016・10・15

折々のことば　鷲田清一　549

鎖の強さはいちばん弱い環で決まるのだ。

ギルバート・K・チェスタトン

「こうならなくてよかった」と思えたときにはじめて、人は物事が現にこうあることの意味を悟る。「理想」にかまけていると物事はよく見えない。おのれの不足を思い知る「謙遜」こそが眼を開くのであって、そのとき人は尊大になるどころか「けし粒の前にもひれ伏したくなる」。「大人は小事を喜ぶ」と英国の推理小説家・批評家は言う。「異端者の群れ」（別宮貞徳訳）から。

2016・10・16

折々のことば　鷲田清一　550

町の音はいろいろ入り混っている方がいい。うるさいくらいの方がいい。それは我々の生活に活気がある証拠だからだ。

佐藤愛子

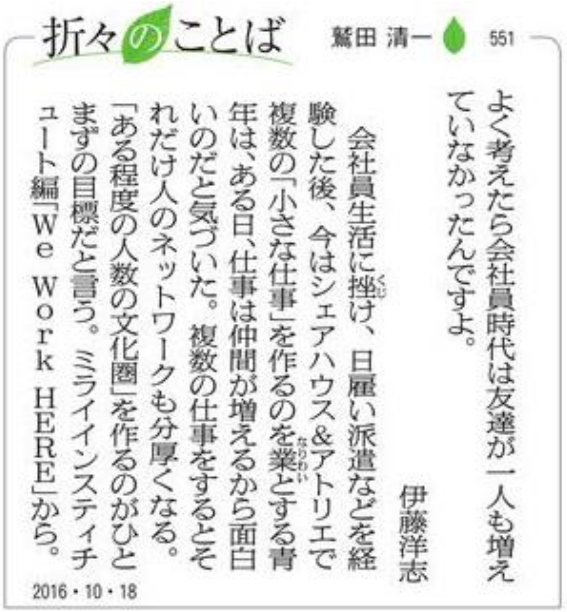
子どもは泣いたり叫んだり歌ったり、とにかくにぎやか。その喧騒をうるさいと怒る人がいれば、「天使の合唱」にいのちの熱を感じ温まる人もいる。がやがやした人いきれを不快に思う人がいる一方で、作家は、「黙々」と物を買い、支払い、袋に詰めて去るスーパーの静けさを、逆に不気味に思う。随想集「九十歳。何がめでたい」から。

2016・10・17

折々のことば
５５１～５５５

生きなければわからないことが
ありました。八十歳を越えてから、
やっといまわかったということが、
たくさんありました。

宮崎かづゑ

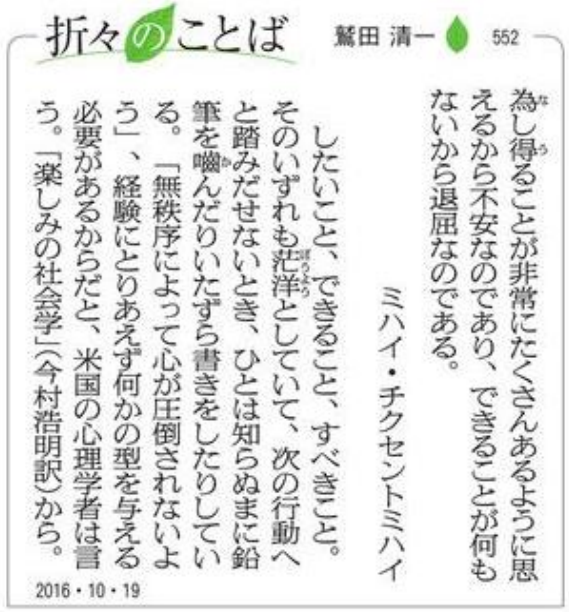

折々のことば　鷲田清一　551

よく考えたら会社員時代は友達が一人も増えていなかったんですよ。

伊藤洋志

会社員生活に挫け、日雇い派遣などを経験した後、今はシェアハウス&アトリエで複数の「小さな仕事」を作るのを業とする青年は、ある日、仕事は仲間が増えるから面白いのだと気づいた。複数の仕事をするとそれだけ人のネットワークも分厚くなる。「ある程度の人数の文化圏」を作るのがひとまずの目標だと言う。ミライインスティチュート編「We Work HERE」から。

2016・10・18


折々のことば　鷲田清一　552

為し得ることが非常にたくさんあるように思えるから不安なのであり、できることが何もないから退屈なのである。

ミハイ・チクセントミハイ

したいこと、できること、すべきこと。そのいずれも茫洋としていて、次の行動へと踏みだせないとき、ひとは知らぬまに鉛筆を噛んだりいたずら書きをしたりしている。「無秩序によって心が圧倒されないよう」、経験にとりあえず何かの型を与える必要があるからだと、米国の心理学者は言う。「楽しみの社会学」（今村浩明訳）から。

2016・10・19


折々のことば　鷲田清一　553

いざ蚊枕／生きるべき、蚊／死ぬべき、蚊／蚊枕に対抗しようと思えば／詩枕千代子になるしかない／「東京だよおっ蚊さん」……

平田俊子

詩集「戯れ言の自由」を読むうち、「蚊」の行列にぐいと引き込まれた。皮膚にまとわりついてくる語音の連なりを追いかけていると、ふと自身のぶれや疼きや震えの、その稜線をなぞっていることに気づく。私の場合、それは「れ」であった。もつれ、ほつれ、やつれ、よじれ、みだれ、まみれ、はぐれ、とぎれ、ささくれ、わるびれ。

2016・10・20


折々のことば　鷲田清一　554

生きなければわからないことがありました。八十歳を越えてから、やっといまわかったということが、たくさんありました。

宮崎かづゑ

あの時にはわからなかったけれど今だとわかるということが人にはある。何かを納得するには、ときに途方もない時間がかかる。10歳で瀬戸内のハンセン病療養所に入園した彼女は、後遺症で苦しむなか、80近くになってはじめて幸せだったとの思いを得る。経験を正面から受けとめるのにこれほどの時間を要した。「長い道」から。

2016・10・21


折々のことば　鷲田清一　555

母は「お金がない」って言わなかったんです。いろんな内職をしたんだけれど、苦しいから内職をするというふうには言わなかった。

辰巳芳子

終戦後、父が旧満州で行方不明のなか、母は進駐軍用のサンドイッチを作って食いしのいだ。でも、これを作るといくら儲かるとは言わず、「ほうらいいだろう、こういう仕事がくるとパンの耳が残る」と娘に言ったという。この屈託のなさがのちの料理家を育んだ。昨日とおなじ「長い道」に収録された宮崎かづゑさんとの対談から。

2016・10・22

折々のことば
５５６～５６０

俺から言わせれば、
日々の生活のなかで
何を買うのかということも
十分に政治的だ。

後藤正文



折々のことば　鷲田清一　556

それ以降……どんなに苦しいことがあっても、自殺を考えることはなくなりました。いちばん好きなひとから憎まれたくないからです

秋亜綺羅（あきあきら）

学生時代、恋人がビルから飛び降りた。原因は「わたし」にあったに違いないのに、看病するなか、激しい憎しみが芽生えた。「わたしを置いて死のうとした」のを「裏切り」だと感じたからだと、詩人は言う。見棄（みす）てられることは悲しいが、大切なひとが憎しみの感情を抱くのはもっと悲しい。詩誌「ココア共和国」（第20号）から。

2016・10・23



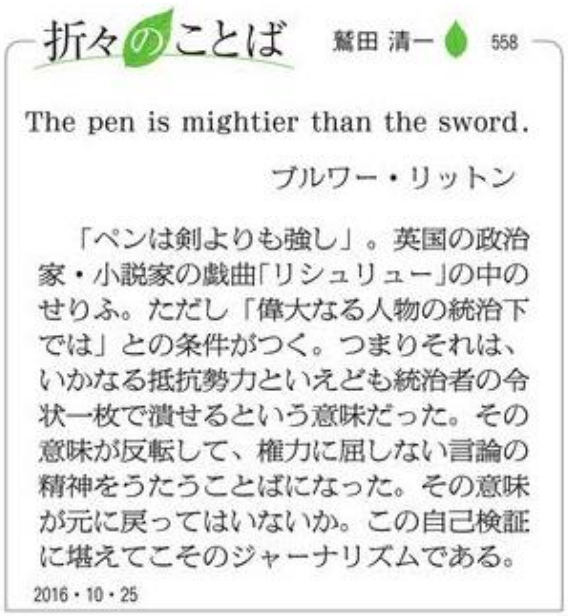
折々のことば　鷲田清一　557

俺から言わせれば、日々の生活のなかで何を買うのかということも十分に政治的だ。

後藤正文

みなが安ければいいという気持ちで物を選んでいると、社会も安っぽくて息苦しいものになる。音楽も暮らしの中から生まれるかぎり、どんな音楽をどんな方法で作り、聴くのかも、社会と地続きであるはず。自分は音楽を、政治と切り離した場所で、誰かを楽しませるためだけにやっているんじゃないと、ロックミュージシャンは言う。「何度でもオールライトと歌え」から。

2016・10・24



折々のことば　鷲田清一　558

The pen is mightier than the sword.

ブルワー・リットン

「ペンは剣よりも強し」。英国の政治家・小説家の戯曲「リシュリュー」の中のせりふ。ただし「偉大なる人物の統治下では」との条件がつく。つまりそれは、いかなる抵抗勢力といえども統治者の令状一枚で潰せるという意味だった。その意味が反転して、権力に屈しない言論の精神をうたうことばになった。その意味が元に戻ってはいないか。この自己検証に堪えてこそのジャーナリズムである。

2016・10・25



折々のことば　鷲田清一　559

ストレートに意見を言ってきますが、人の心に土足で入るようなことはしない。スリッパを履いて入ってくる感じ。

地域航空のキャビンアテンダント

所有機たった1機の小さな航空会社に新社長がやってきた。うまくいかないところがあると、なぜそうなのかと詳しく問う。が、決めつけずに、みなの答えを待つ。すると、部署を超えて「会社全体のことを社員全員が考える」ようになったという。かまってくれるのがうれしかったとも。鳥海高太朗の「天草エアラインの奇跡。」から。

2016・10・26



折々のことば　鷲田清一　560

抑圧はいつも「人の迷惑だ」という発言から始まります。

駒崎弘樹

泣く子を抱く母に「すみません」と言わせる社会はおかしい。「元気な赤ちゃんでよかったですね」と笑って言える社会でなければ。「私ががんばらなきゃ」ではなく「子育てがこんなに大変な社会はおかしい」と、たった1人でも声を上げることから社会は変わってゆくと、社会起業家は言う。実業家・出口治明との男性2人の対談「世界一子どもを育てやすい国にしよう」から。

2016・10・27

折々のことば
５６１～５６５

人生山あり、海ありですよねえー

都はるみ／長嶋茂雄

折々のことば　鷲田清一　561

誰かの支えになろうとしているこの人が、一番支えを必要としていると思いました。

ある女子高校生

患者さんの話を丁寧に聴き、「希望と現実の開きを、苦しみとしてキャッチ」し、患者さんの支えとなるものを傍らでともに育んでゆくのが緩和ケアだと、医師の小澤竹俊さんは言う。が、ついに最期まで支えを見つけられない時は、足がすくみ、動けなくなる。ある高校で講演したあと、生徒の感想文の中のこのことばにふれ、涙があふれたという。本紙1月30日付の記事から。

2016・10・28

折々のことば　鷲田清一　562

なくすのが悲しくなるほど大切なものがあるゆうことをしあわせ言うんだって。

すみれ

ＮＨＫの連続テレビ小説「べっぴんさん」の主人公は「私は今さくら（娘）がいてしあわせです」と続け、母親になる不安を口にする外国人通訳の妻を力づける。人はよく、幸福は「失ってはじめて気づくもの」だとか、「それについて考えないでいられること」だとか言うが、こう考えると、今の暮らしを、幸福をいっぱい貰ってる、と受けとめられる。22日放送分から。

2016・10・29

折々のことば　鷲田清一　563

私は壁のシミを隠すぐらいのものは描きますが、シミの方が美しいかも。

篠田桃紅

「自然の力は人間ごときがまねしようと思ってできるもんじゃない」と続ける。いかに苦しかろうとひたすら描く。同じ「生命の神秘」を抱く生きものとして、謙虚でありつつも、しかし行けるところまで行きたいとの思いからだろう。だから「お変わりなく」とあいさつされるのが苦痛だと言う。今も日ごと研鑽を続ける１０３歳の画家のことば。本紙10月10日の記事から。

2016・10・30

折々のことば　鷲田清一　564

これ以上近づけない距離でもなんでもいいです、いま、わたしは……さわれています

川上未映子

はじめて指の背をふれ合わせた恋人たち。今「わたし」はさわれているんですかと問う女性に、男は、「ふれるというのは、むずかしい状態です……これ以上は近づくことができない距離を同時に示している」からと言う。哲学者のようなその答えに女性はこう返した。愛とは、その埋めがたい距離を超えようとする欲望だと言わんばかりに。小説「すべて真夜中の恋人たち」から。

2016・10・31

折々のことば　鷲田清一　565

人生山あり、海ありですよねえー

都はるみ／長嶋茂雄

都はるみさんは長嶋茂雄さんのラジオ番組に招かれ、彼のこの発言に唸るように共振した。幼少より歌謡界に浸り、「普通のおばさんになりたい」と引退表明した後、復帰し、パートナーの死に遇いつつも、またよみがえる。「谷」に突き落とす重力ではなく、体を押し上げる「海」の浮力にうまく乗るお二人の、つねに向日的な思考がまぶしい。本紙２００９年6月27日の記事から。

2016・11・1

折々のことば
５６６～５７０

とても静かな、
食うか、食われるか。

南木佳士



折々のことば　鷲田清一　566

雲があると、月の表情が優しく見えるよね。みんなお互いを生かしあっているんだね。

亀田誠治

遮るもののない満月よりも、雲に囲まれ、雲の間から光を放つ月のほうが、きれいに見える。まるでたがいを持ち上げる友だちみたい。人の陰でともに静かに笑みをたたえる顔のほうが、人を押しのけて笑いこける顔よりはるかに美しい。品位と謙譲が消えてなくなりそうな時代を愁え、こうつぶやいたのかも。音楽プロデューサーでベーシストのツイッター（10月16日）から。

2016・11・2



折々のことば　鷲田清一　567

とても静かな、食うか、食われるか。

南木佳士

夫の心身の不調を十数年見つづけてきた妻が、夫の快復とともに精神に変調をきたしはじめた。彼は「この身が生きのびるために言葉や態度に載せて排出した毒を吸ってくれる者がいて、だからこそいまこうして生きて在ることの罪業の深さ」を思い知る。支えあうというのは身を削りあうこと。時とともに重しのかかる場所は移る。短編小説集「先生のあさがお」から。

2016・11・3



折々のことば　鷲田清一　568

みな、きちんと語ろうとするときは聞く者がいないし、真剣に聞きたいときは語る者がいないのだ。

南木佳士

面と向き合うと、理解しようと焦って、聴くより先にその人の物語を勝手にまとめだしている。思い浮かぶ記憶も空想の糸で編まれていて、隔たりは埋まらぬまま。そして相手をもっと理解したいと思った時はもうその人はいない。時の移ろいの中で人の関係はいつもちぐはぐで哀しい。昨日と同じ短編小説集「先生のあさがお」から。

2016・11・4



折々のことば　鷲田清一　569

拍手は、明らかに空っぽの抱擁に、空っぽの叩く動作が加わったものとみることができる

デズモンド・モリス

抱いて背中を叩くのは、ヒトのみならずサルにも見られる行動らしい。それは「すべてはうまくいっている」「おまえはうまくやった」という慰めや激励や称賛の信号なのだと、動物行動学者は言う。そして競技や演奏会での拍手。離れているのでじかに抱けないから、代わりに片手に相手の背中の役をさせ、もう一方の手でそれを叩くのだと。「ふれあい」（石川弘義訳）から。

2016・11・5



折々のことば　鷲田清一　570

正義って、普通の人が行うものなんです。偉い人や強い人だけが行うものではないのね。

やなせたかし

目の前に溺れかけている子どもがいたら誰もが迷わず飛び込むだろう。正義とはそういうものだと、「アンパンマン」の作者である漫画家は言う。社会にはそういう粒がたくさんないといけない。こしあんにするとその一粒一粒が消える。飢えた子に自分の顔をちぎって差し出すアンパンマンも、だから絶対粒あんでなければならないと。矢崎泰久編「永六輔の伝言」から。

2016・11・6

折々のことば
５７１～５７５

女性にゲタをはかせているとの
批判があるが、
もともとゲタをはいていた男性に
脱いでもらっただけ

伊藤秀二



折々のことば　鷲田清一　571

あっ、そうか。自分で動けなければ、誰かに動かしてもらえばいいのか

岡田美智男

何でもしてくれるロボットは、介護を必要とする人を受け身にしてしまう。逆に、すぐによろける不完全なロボットは、目が離せず、人はついかまってしまう。人から元気を引き出すのだ。人とロボットとの間にも「委ねる／支える」という関係があってもいい。そろそろ「周囲との関わりをデザインする時代なのではないのか」とロボット学者は言う。「弱いロボット」から。

2016・11・7



折々のことば　鷲田清一　572

美しく散乱する台所、あるいは多少の散乱ぐらいでへこたれない大らかな台所が、私の理想です。

中村好文

台所は「小さな戦場」だ。飛び散る油、吹きこぼし、はねるソース。まな板からは切り落としもどっさり。いや、料理を作るだけではない。作りながら片付けや洗い物のことも考えないといけないし、家族一人ひとりの今日の様子も背中でうかがわないといけない。すかっとまとまらないことも楽しまねば。建築家の「住宅読本」から。

2016・11・8



折々のことば　鷲田清一　573

女性にゲタをはかせているとの批判があるが、もともとゲタをはいていた男性に脱いでもらっただけ

伊藤秀二

当たり前の理屈がすぐに通らないこの国。「女性が4割いるなら、（女性）管理職も4割いるのが当たり前」と、カルビーの社長は言う。女性たちに活躍の場を開いてきた松本晃会長も、業績が落ち込めばこれを原因にされかねず、経営の常道をシンプルに実行してきたと言う。当たり前をまっすぐ当たり前に。本紙10月3日の記事から。

2016・11・9



折々のことば　鷲田清一　574

自分が親になって自分の子どもを見てると、最初の自分の空白の2、3年が、見えてくる

宇多田ヒカル

考えれば怖いことだ。私たちは自分というものの原型がどんなふうに形づくられたかを知らない。まるでブラックボックスのよう。子を育てるなか、子の顔から、「きっと自分もこんな時こんな表情してたんだろうな、親にこうしてもらってたんだろうな」と、まるで霧の向こうを探るように想像するほかないと歌手は言う。NHK「SONGSスペシャル」（9月22日）から。

2016・11・10



折々のことば　鷲田清一　575

傲慢な人々、自卑におちいる人々は、感情に極度に屈従する人々のことである。

スピノザ

傲慢と卑下とは一見反対にみえるが、おのれを見誤り、抱いてしまったその感情を抑えたり、別の方向に導く力をもたない点では同じである。より優れたものを目にしながらも、感情に押し流されて、より劣るものに従っている。そしてその悲しみを軽減しようと、「不幸な仲間をもつこと」へと走ると、17世紀オランダの哲学者は言う。「エティカ」（工藤喜作・斎藤博訳）から。

2016・11・11

折々のことば
５７６～５８０

家事と自分の仕事は、
やり直しが利く。
育児はやり直しが利かない。

穐吉（あきよし）敏子



折々のことば　鷲田清一　576

I have nothing to say
and I am saying it.

ジョン・ケージ

「私には言うべきことが何もない、と言いながらそう言っている」。この矛盾を現代音楽家はよく口にした。沈黙の認識も言葉の力によるということなのか。彼には、ピアノの前に座り、4分33秒間何も弾かずに去る（その間、聞こえるのは周囲の音だけ）という伝説的な作品があるが、「すべきことが何もない」ということをしたのがこの曲なのかもしれない。「サイレンス」（柿沼敏江訳）と原著から。

2016・11・12



折々のことば　鷲田清一　577

いやーこれは綺麗な解き方ですね、誰ですかこれを解いたのは

高校の数学の先生

何をしてもいいと、時間を決めて生徒を「自由」にする教師ではなく、普段は厳格でも、時に生徒の「綺麗な」解答に相好を崩す教師が、「義務としての数学」から解放してくれたと、クリエーターの佐藤雅彦さんは言う。私も高校時代、生徒の反応を気にせず、袖にチョークの粉がかかっても平気で黒板に式を書き続ける物理の先生の背に「自由」を見た。随想集「毎月新聞」から。

2016・11・13



折々のことば　鷲田清一　578

名をのこさなくてもいい。「ぼうず、いい手をもて」

いせひでこ

大好きな植物図鑑がついにばらばらになり途方に暮れる少女が、やっと一人の製本職人を探しあてる。そして丹念な作業の一つ一つを目を丸くして見つめる。本の修復にとりかかった老職人は、昔、父親が言っていたのを思い出す。手間をかけて直せば、本は新しいいのちを生きる。本を通して人にとって大事な知識や物語が伝わる、と。画家の絵本「ルリユールおじさん」から。

2016・11・15



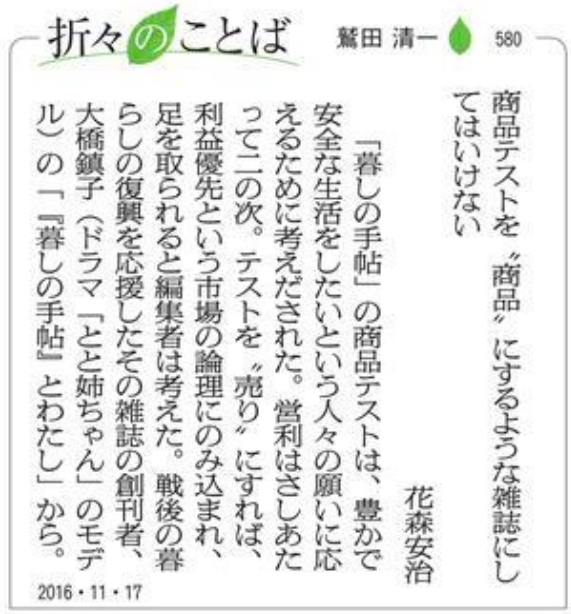
折々のことば　鷲田清一　579

家事と自分の仕事は、やり直しが利く。育児はやり直しが利かない。

穐吉敏子

若くして渡米してからの格闘の日々、子を産んでからの苦労の数々。音楽のために娘を一度は日本の姉に預け、愛情でくるんでやれなかったことを、ジャズ音楽家は自伝「ジャズと生きる」の中で深く悔いる。でも親との関係だけが子の人生を決めるわけではない。現に娘のマンデイ満ちるさんは同じ音楽家として、母として、あなたとは別の形で活躍しているではありませんか。

2016・11・16



折々のことば　鷲田清一　580

商品テストを〝商品〟にするような雑誌にしてはいけない

花森安治

「暮しの手帖」の商品テストは、豊かで安全な生活をしたいという人々の願いに応えるために考えだされた。営利はさしあたって二の次。テストを〝売り〟にすれば、利益優先という市場の論理にのみ込まれ、足を取られると編集者は考えた。戦後の暮らしの復興を応援したその雑誌の創刊者、大橋鎮子（ドラマ「とと姉ちゃん」のモデル）の「『暮しの手帖』とわたし」から。

2016・11・17

折々のことば
５８１～５８５

世界のことがわかってきたような
気になるのは、
わからないものを
切り捨てていくからである。

養老孟司



折々のことば　鷲田清一　581

うらを見せおもてを見せて散るもみぢ

良寛

華やかな一色に染まり、盛りとともに風に吹かれてさっと散る、その散り際がよしと愛でられる桜よりも、寒空に散るもみぢを好む人は多い。傷跡もふくめ、風雨に晒されてきたその姿をまだらに染めつつ、一葉一葉、そっと枝から離れる。陽のほうを向かなかった裏までぽっと染めて、澄んだ冷気に微かなほてりを与える。幼子たちとよく戯れた江戸後期の僧侶の辞世の一句。

2016・11・18



折々のことば　鷲田清一　582

なぐさめるのでも、抱きかかえるのでもなく、互いに共有しえない闇の、その共有しえないということの重さを共有していくこと

田中美津

働き手、母、娘、妻。女性はつねに分断と矛盾を幾重にも負わされてきた。だから「とり乱し」て当然なのに、その痛みをも飼い殺すよう迫られる。ならば逆に「とり乱し」を抑えず、「愚かさ、弱さ、みっともなさという負の人間性でつながっていく」ほかないと、かつてウーマンリブの運動家は言った。「いのちの女たちへ」から。

2016・11・19



折々のことば　鷲田清一　583

いかなる富も、いかなる作品も生み出さないのが、遊びというものの特徴である。

ロジェ・カイヨワ

遊びは生産的でない。その点で労働や芸術とは異なる。遊びは目標を定めて何かを作るのではなく、時間とエネルギーと器用さの「純粋な消費」だと、20世紀フランスの知識人は言う。あそびがなければ歯車が回らないように、人生も社会も、気晴らしや喜びでいっときはじける、そんな隙間や緩みがないと、息をつけなくなる。「遊びと人間」（清水幾太郎・霧生和夫訳）から。

2016・11・20



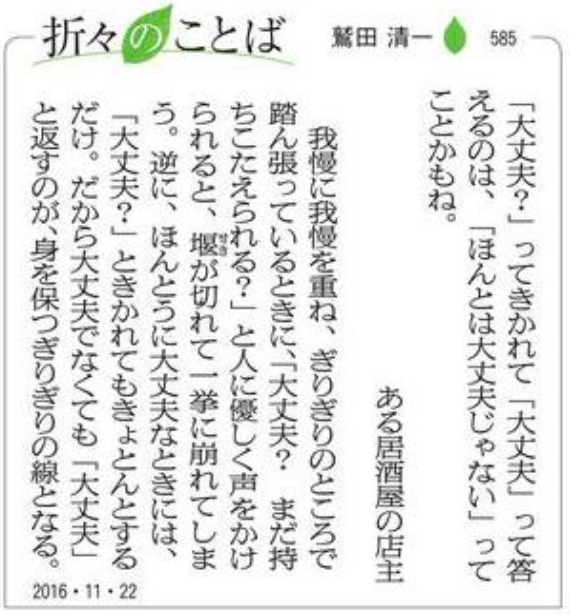
折々のことば　鷲田清一　584

世界のことがわかってきたような気になるのは、わからないものを切り捨てていくからである。

養老孟司

昆虫採集で諸地域を訪れる解剖学者は、自然のことは今もってわからないことばかりだと言う。「進歩」なんぞもだから信じられなくなると。わからないけれどこれは大事と知ること。わからないものを前にして、わからないままそれに正確に対処できること。生きるにはこの方が重要なのだろう。地方紙に寄せた随想「ブータン再訪」から。

2016・11・21



折々のことば　鷲田清一　585

「大丈夫？」ってきかれて「大丈夫」って答えるのは、「ほんとは大丈夫じゃない」ってことかもね。

ある居酒屋の店主

我慢に我慢を重ね、ぎりぎりのところで踏ん張っているときに、「大丈夫？　まだ持ちこたえられる？」と人に優しく声をかけられると、堰が切れて一挙に崩れてしまう。逆に、ほんとうに大丈夫なときには、「大丈夫？」ときかれてもきょとんとするだけ。だから大丈夫でなくても「大丈夫」と返すのが、身を保つぎりぎりの線となる。

2016・11・22

折々のことば
５８６～５９０

おわりよければすべてよし

言い習わし











折々のことば
５９１～５９５

無言は
強い質問である

御厨貴（みくりや たかし）


折々のことば　鷲田清一　591

冷蔵庫　奥に行くほど　ミステリー

埼玉県・49歳・女性

久しぶりに冷蔵庫の奥にまで手を伸ばすと、思いもかけない物が出てくる。すっかり変色してたり、かちかち、ぶよぶよ、にゅるにゅるになってたり。元が何かわからない物も。賞味期限はまだとの油断の結果？　衝動買いのつけ？　ダンナに先に食べられないよう隠しておいた罰？　いよいよ呆けて洗濯機と間違えた？　おおこわ。奥さまを題材にした川柳選「おくせん」から。

2016・11・28


折々のことば　鷲田清一　592

無言は
強い質問である

御厨貴（みくりやたかし）

人に質問してその答えがそつのない帳尻合わせに聞こえるときは、さらに突っ込んだ質問をするよりも、いったん黙り込んだほうがいいと、長年政治家のインタビューに取り組んできた政治学者は言う。そんな答えを待っていたのではない、そこは本当のところどうなのか、という強い聞き返しになるから。質問を受ける側にも同じ思いはある。「人を見抜く『質問力』」から。

2016・11・29

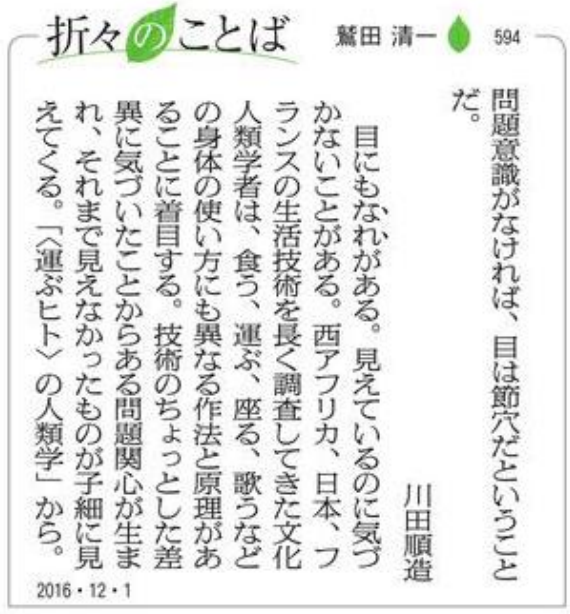

折々のことば　鷲田清一　593

「きみはどう思うんだ」
「前例がない」

上司のことば

寂しいせりふだ。決断できずおろおろするだけのそのうろたえが、はたまた責任追及が自分に向かわないように謀るその下心が、丸見えで。姑息というのか、「決める」ということを放棄している。だがそのことで安全地帯に立てるわけがない。以後、どのことばも見透かされ、素通りされるから。率いるべき人がまずは自己保全に走るという甲斐性の痩せこけがなんとも侘びしい。

2016・11・30


折々のことば　鷲田清一　594

問題意識がなければ、目は節穴だということだ。

川田順造

目にもなれがある。見えているのに気づかないことがある。西アフリカ、日本、フランスの生活技術を長く調査してきた文化人類学者は、食う、運ぶ、座る、歌うなどの身体の使い方にも異なる作法と原理があることに着目する。技術のちょっとした差異に気づいたことからある問題関心が生まれ、それまで見えなかったものが子細に見えてくる。「〈運ぶヒト〉の人類学」から。

2016・12・1


折々のことば　鷲田清一　595

親の介護とは、親を送るということは、自分の成長の完了じゃないか

伊藤比呂美

独居する老父の介護にカリフォルニアから熊本に足しげく通う。米国から入れた電話に返される言葉はまるで「心の拷問」のよう。神経と時間のやりくりは理不尽な試練のよう。だが、落ち込みと虚脱と思い直しのはざまで、父娘が時空を超えて出会う瞬間がある。もはや糊代さえ残されていない関係の中に、人生の深いやるせなさが滲む。詩人の介護日記「父の生きる」から。

2016・12・2

折々のことば
５９６～６００

よくおぼえておきなさい。
恩というものは他人に
着せるものではない。
自分が着るものだということを、
な……

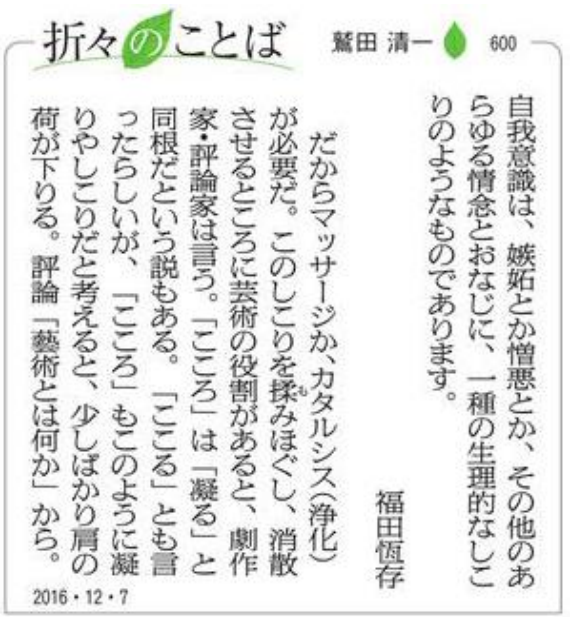
池波正太郎











折々のことば
６０１～６０５

でもなぜ、人間は自分と違うものを許せないんだろう

川上弘美

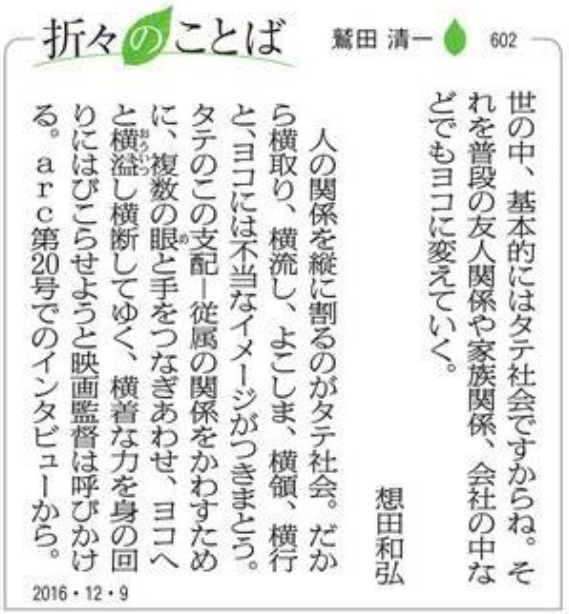

折々のことば　鷲田清一　601

誰かが私に一杯のお茶をくださったなんて、これが生まれてはじめてです

ある病院の患者

人にお茶を淹れてもらうとき、その人は義務感から淹れたのかもしれないし、ティーセットを自慢したかったのかも、親密になるよう仕向けたのかもしれない。何のためでもなく、ただある人に一杯のお茶を淹れることとしてあって、それ以上でも以下でもないという単純な事実に、患者は胸を熱くした。精神科医Ｒ・Ｄ・レインの「自己と他者」（志貴春彦・笠原嘉訳）から。

2016・12・8

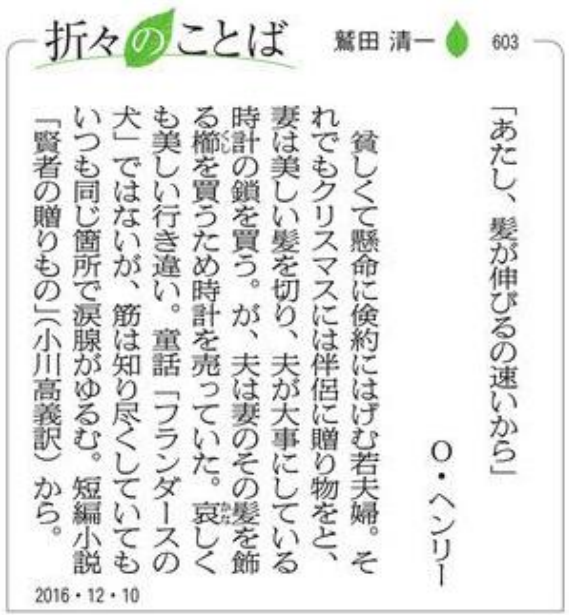

折々のことば　鷲田清一　602

世の中、基本的にはタテ社会ですからね。それを普段の友人関係や家族関係、会社の中などでもヨコに変えていく。

想田和弘

人の関係を縦に割るのがタテ社会。だから横取り、横流し、よこしま、横領、横行と、ヨコには不当なイメージがつきまとう。タテのこの支配―従属の関係をかわすために、複数の眼と手をつなぎあわせ、ヨコへと横溢し横断してゆく、横着な力を身の回りにはびこらせようと映画監督は呼びかける。ａｒｃ第20号でのインタビューから。

2016・12・9

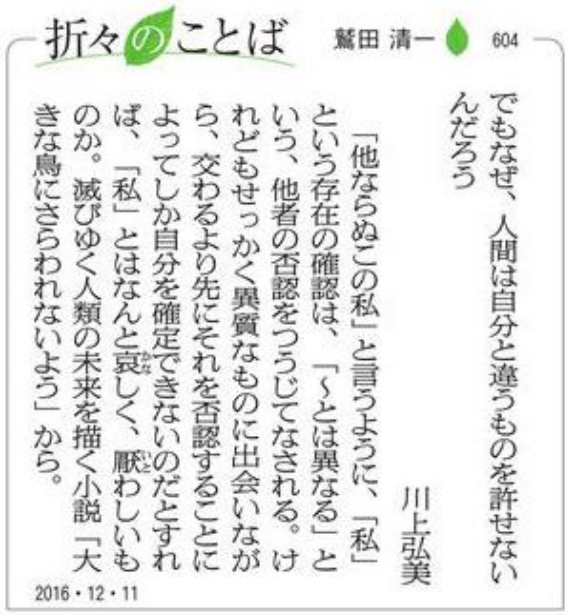

折々のことば　鷲田清一　603

「あたし、髪が伸びるの速いから」

Ｏ・ヘンリー

貧しくて懸命にはげむ若夫婦。それでもクリスマスには伴侶に贈り物をと、妻は美しい髪を切り、夫が大事にしている時計の鎖を買う。が、夫は妻のその髪を飾る櫛を買うため時計を売っていた。哀しくも美しい行き違い。童話「フランダースの犬」ではないが、筋は知り尽くしていてもいつも同じ箇所で涙腺がゆるむ。短編小説「賢者の贈りもの」（小川高義訳）から。

2016・12・10


折々のことば　鷲田清一　604

でもなぜ、人間は自分と違うものを許せないんだろう

川上弘美

「他ならぬこの私」と言うように、「私」という存在の確認は、「～とは異なる」という、他者の否認をつうじてなされる。けれどもせっかく異質なものに出会いながら、交わるより先にそれを否認することによってしか自分を確定できないのだとすれば、「私」とはなんと哀しく、厭わしいものか。滅びゆく人類の未来を描く小説「大きな鳥にさらわれないよう」から。

2016・12・11


折々のことば　鷲田清一　605

歌ノ本體、政治ヲタスクルタメニモアラズ、身ヲオサムル爲ニモアラズ、タヽ心ニ思フ事ヲイフヨリ外ナシ

本居宣長

歌には、政道や修身に役立つもの、非道や身の禍に通じるものもあるが、歌の本領は心を飾らず「意ニマカス」ところにある。恋の歌が多いのも、恋が人の心をひどく揺さぶるから。善心を粧う歌は偽りだが、善心を粧いたいと思う心に偽りはなく、それをありのままに詠むべしと、江戸中期の国学者は言う。歌論「排蘆小船」から。

2016・12・13

折々のことば
６０６～６１０

人生を長編小説のように
感じたのは、
いつの年代までだったろうか。

落合恵子

折々のことば　鷲田清一　606

何も分らない子供を相手に、食物や飲物をすすめる競争をするとなれば、医者は料理人の敵ではないであらう。

田中美知太郎

同じように、人びとに気に入られ、彼らの「快」に応えるだけなら、巧みな弁論術があればよく、何がほんとうに彼らのためになるかを考えての慎重かつ苦渋の決断や、その裏づけとなる論証は必要でなくなる。プラトンの「ゴルギアス」の議論を下敷きに、聞こえのいい言葉に注意を促す哲学者の論文集「善と必然との間に」から。

2016・12・14

折々のことば　鷲田清一　607

人生を長編小説のように感じたのは、いつの年代までだったろうか。

落合恵子

親の介護を終えて自身も老い、人生を短編小説どころか短い詩の一節のように思うようになったと作家は言う。記憶はトレースした写しのようなものだから、実際の経験とはどこかずれる。そういう上書きを重ねるうち、やがて諦めなり思い定めなりが筋を単純にしてゆく。逆に、記憶がとっ散らかって筋が立たないこともあるが。「『わたし』は『わたし』になっていく」から。

2016・12・15

折々のことば　鷲田清一　608

「あたしこれ好きかも！」

若い人の言い回し

好き嫌いは本人がいちばんよく知っているはずなのに、よくこんなふうに言う。未知の自分を発見した喜び？　自己の対象化？　判断の延期？　実はこれ、アナログの中にとどまっていたいという欲求だと、国語学者の金田一秀穂は解釈する。好きに近いが大好きでもなく、といって単なる程度の違いでもない、曖昧な気分の表明だと。「金田一家、日本語百年のひみつ」から。

2016・12・16

折々のことば　鷲田清一　609

権力者がジョークの流布を見逃すことができるなら、その権力は、あきらかに安定している

宮田光雄

政治を揶揄するジョークがどれほど流布しているかは、公的言論の制限の程度、要は政治体制の「函数」といえる。笑いは権力側からの「脅しの威力の幾分かをもぎとる」。が、もっと重要な意味は、独裁者を前にして「意気消沈したり、諦めてしまったりする自分自身の内なる危険」に、おのれを鼓舞して立ち向かうところにあると政治学者は言う。「ナチ・ドイツと言語」から。

2016・12・17

折々のことば　鷲田清一　610

floccinaucinihilipilification

斎藤秀三郎「英和中辞典」

私にとってこの辞典は調べる辞典ではなく読む辞典だ。初版は大正４年。引かれる熟語の訳が都々逸風で楽しく、大学受験のときはいい憂さ晴らしになった。久しぶりに開いて、「Fast bind, fast find. 始末厳重なれば失ふ事無し」という例文が２度出てくるのを発見。興に乗って頁をめくるうち、この法外に長い単語に出くわした。「価値なきものと見積ること」。私の小さな発見への返答か？

2016・12・18

折々のことば
６１１～６１５

先に形を整えることに
ならないように、ということで
鏡は使わないことに
なってるんでしょう。

五世・井上八千代

折々のことば　鷲田清一　611

時間よりも、むしろ何を何回やったかという「回数」のほうが、大事なんです。

横尾忠則

恋人たちの逢瀬でも客商売でも、1回の時間より、何度会えるか、来てくれたかが大事。人生もどれだけ時間が残っているかより、回数券をどれだけもっているかが大事。くり返しの中に人は何かを見つけると美術家は言う。そういえば、お百度参りも千羽鶴も南無阿弥陀仏も、反復にこそ意味がある。ウェブサイト「ほぼ日刊イトイ新聞」の糸井重里、細野晴臣との鼎談から。

2016・12・19

折々のことば　鷲田清一　612

詩でも小説でもコピーでも、言葉を使っている人は、どこかのところで泥んこになれない気がします。

糸井重里

「わかられちゃう」仕事をしてるからだとエッセイストは言う。わかるとは理に沿って切り分けること。そしてそこを渡り歩く。が、誰よりその限界を知るのが言葉の人。詩人の佐々木幹郎は「噛んでも噛んでも噛み切れないものしか俺は信じない」と私に言った。昨日と同じ「ほぼ日刊イトイ新聞」の横尾忠則、細野晴臣との鼎談から。

2016・12・20

折々のことば　鷲田清一　613

沈黙している人だけが聴いているのであって、口を閉じない者には何も聞こえません。

ヨゼフ・ピーパー

沈黙とは口をつぐむことではなく、「口を開けばとぎれてしまうような深い心の通いあい」のことだとドイツの哲学者は言う。人を懐深く受け入れるには、鎧を脱いでいちど自分を緩める必要がある。だがそれは、事のなりゆきに心置きなく身を委ねられる「信頼」なしには難しい。まずは日頃よりそういう関係を周囲との間で育んでおかねば。「余暇と祝祭」（稲垣良典訳）から。

2016・12・21

折々のことば　鷲田清一　614

先に形を整えることにならないように、ということで鏡は使わないことになってるんでしょう。

五世・井上八千代

舞の井上流では、稽古のとき鏡を見ない。「左稽古」で習う。差し向かいになって、師匠が左右反対の手をしてくれる。「何も考えず身体で覚える良い方法」だという。そういえば子どものころ通った書道塾でも、先生は私の手を取り逆さまに大きな字を書いてくれはった。肩肘の動きと速さを体で覚えるようにと。「京舞つれづれ」から。

2016・12・22

折々のことば　鷲田清一　615

「もうちょっと普通にしていれば」とテレビの人が言っていたが、その「もうちょっと普通」が出来なかった。

西川美和

ヒール（悪役）と呼ばれ、周囲も持て余す中、栄光への途をあえて外した朝青龍。「抑えの利かない業」に火がつき、土俵の上をのたうつ姿を、映画監督は食い入るように見つめた。そういう破格を許さない昨今、彼が生きているから自分も生きられると思える、火傷の痕だらけの力士を懐かしむ。「映画にまつわるｚについて」から。

2016・12・23

折々のことば
６１６～６２０

仮名の実　詩の石
またたく芥（あくた）
たましいの　染みの中

福田尚代



折々のことば　鷲田清一　616

空の箱には、たくさんものが入るように、不幸な家庭に育った人は、幸せをたくさん詰め込めます。

美輪明宏

人生においてかけがえのないものを根こそぎ奪われるというような体験を重ねてきたが、自分という箱だけは失わなかった人だけに、言葉の響きが分厚い。たしかに富者がしばしば財の増減に神経をすり減らすのに対し、貧者にはときにおどろくほど気前のいい人がいる。もちろん財だけの問題ではない。歌手・俳優の「花言葉」から。

2016・12・24



折々のことば　鷲田清一　617

God be with you till we meet again

讃美歌405番

「神ともにいまして」という題で知られる讃美歌。「また会う日まで、また会う日まで、神のまもり　汝が身を離れざれ」とくり返される。日本では教会で葬儀のときによく歌われる。送別の歌なのに長調なのが不思議だったが、悲しみの淵に沈む人を支えられるのは、信仰と希望と連帯だからだろう。英語のGoodbyeはこのGod be with youが縮まったもので、God b'w'yとも書かれたという。

2016・12・25



折々のことば　鷲田清一　618

上野発の夜行列車　おりたときから
青森駅は雪の中

石川さゆり「津軽海峡・冬景色」

この歌は、三木たかしが先に旋律を作り、それに阿久悠が詞をつけた。音律は六・六という「弾けた調子」の後に七・七・五の正調がくる。この挑発に応えるところから演歌でもポップスでもない新しい歌謡が生まれた。あの頃は作詞家も作曲家も「腹に一物持って裏切り合っていた。だから良い曲が生まれた」と、音楽プロデューサーの三田完は著書「歌は季につれ」の中で言う。

2016・12・26　JASRAC 出 1615714-601



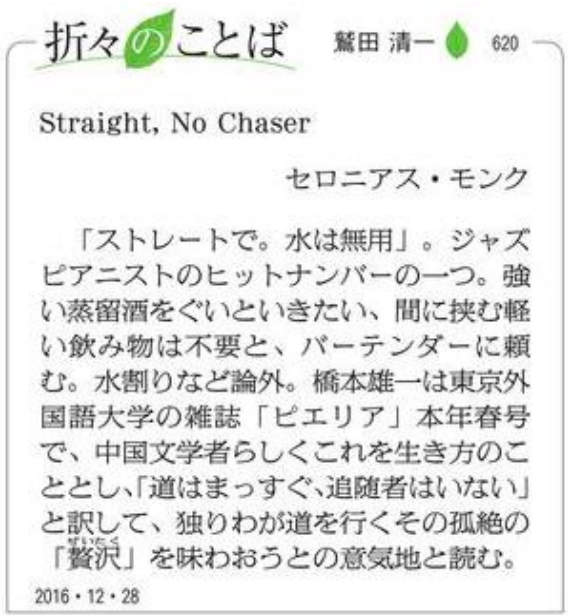
折々のことば　鷲田清一　619

仮名の実　詩の石　またたく芥　たましいの
染みの中

福田尚代

短詩のようなこの回文のほかに300字を超える回文もある。どれほどの集中が要ったかと思う。が、「流れ出したわたし誰かな」ともあるように、集中というより、魂の霧散や漏洩なのかもしれない。世界はその最小単位まで言葉の微細な粒子と溶けあっていて、それらを攪拌するなかに、「言葉の精霊」たちが立ち現れてくる。美術家の作品・回文集「ひかり埃のきみ」から。

2016・12・27



折々のことば　鷲田清一　620

Straight, No Chaser

セロニアス・モンク

「ストレートで。水は無用」。ジャズピアニストのヒットナンバーの一つ。強い蒸留酒をぐいといきたい、間に挟む軽い飲み物は不要と、バーテンダーに頼む。水割りなど論外。橋本雄一は東京外国語大学の雑誌「ピエリア」本年春号で、中国文学者らしくこれを生き方のこととし、「道はまっすぐ、追随者はいない」と訳して、独りわが道を行くその孤絶の「贅沢」を味わおうとの意気地と読む。

2016・12・28

折々のことば
６２１～６２５

個性的な作品を作りたいと
思う作者は個性の弱い人です。

山田洋次



折々のことば　鷲田清一　621

観念は生き物であって、鮮度を失わずに俎の上にのせることにはある職人的熟練を要する

中井久夫

刻々と変化する状況を正確にキャッチするのに、厳格な方法論はときに邪魔になる。状況に耳を澄ますとき、聴くほうの耳が事の軽重を選別してはならない。聴くべきことを教えてくれるのは状況のほうだから。よく聴くためには、その微細な変化に臨機応変に向き合わねばならない。思考にも場数とそこで磨かれたセンスが要る。精神科医の「徴候・記憶・外傷」から。

2016・12・29



折々のことば　鷲田清一　622

破れてなかみのなくなった畳が畳であり、菜のない食事が食事であり、玩具のない遊戯が遊戯である。

野間宏

それでも子どもたちは「笑いをはじかせている」と作家は言う。なのに大勢が一所に集まるとなぜ「暗い顔」になるのかとも。弁当を持って来られない子どもが同じ教室で絵本を見るふりをしている様子がとにかく切ない。閉山に沈む筑豊の炭鉱町で極貧の生活を送る子らを撮った土門拳の写真集「筑豊のこどもたち」に寄せた文章から。

2016・12・30



折々のことば　鷲田清一　623

「悩む存在」が生まれることを回避するのではなくて、それをつくり出すのを得意とするのが、アーティスト……なんじゃないか。

藤浩志

まちづくりはコンサルタントのような専門家の提案に沿って問題を考え、解決を図るのではなく、住民が悩みながら進めていくものだと美術家は言う。そのとき、行政からの期待を飄々とかわし、代わりに「地域の無意識」を浮上させる触媒として働くのがアートだと。ＡＡＦネットワークとの共著「地域を変えるソフトパワー」から。

2016・12・31



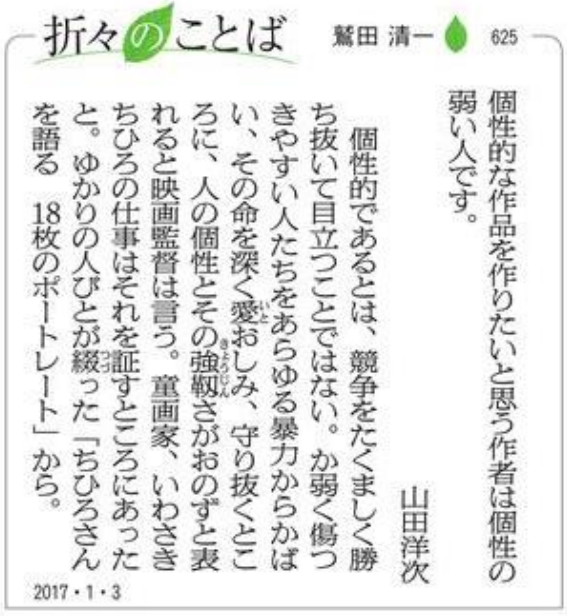
折々のことば　鷲田清一　624

Happy New Ears

英語の語呂合わせ

今年こそ耳の人になろう。長く圧し殺されてきた声、出かけては呑み込まれた声、ぼそっと漏らされた短すぎる声、恐る恐る絞り出されたくぐもった声、今にも途切れそうな声。それらにじっと耳を傾けられる人に。「聡明」には耳がある。「省庁（廳）」にも。そこは天の声、民の語を聴く場所だった。その声を最もよく聴く人が「聖」。天声人語（vox populi vox dei）は「民の聲は神の聲」という意味。

2017・1・1



折々のことば　鷲田清一　625

個性的な作品を作りたいと思う作者は個性の弱い人です。

山田洋次

個性的であるとは、競争をたくましく勝ち抜いて目立つことではない。か弱く傷つきやすい人たちをあらゆる暴力からかばい、その命を深く愛おしみ、守り抜くところに、人の個性とその強靱さがおのずと表れると映画監督は言う。童画家、いわさきちひろの仕事はそれを証すところにあったと。ゆかりの人びとが綴った「ちひろさんを語る　18枚のポートレート」から。

2017・1・3

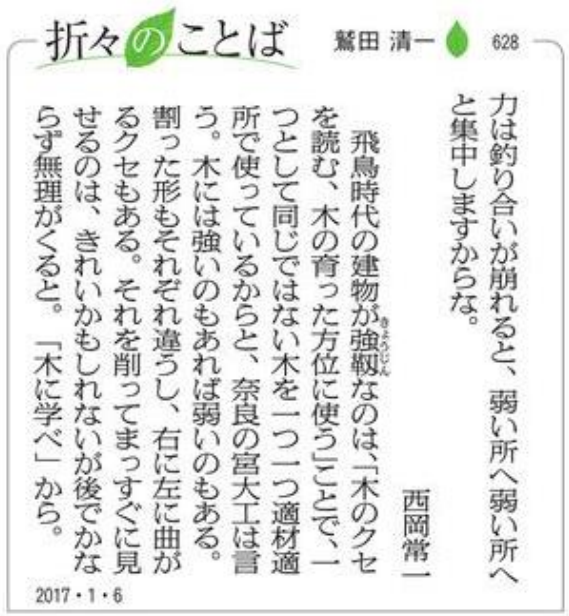
折々のことば
６２６～６３０

力は釣り合いが崩れると、
弱い所へ弱い所へと
集中しますからな。

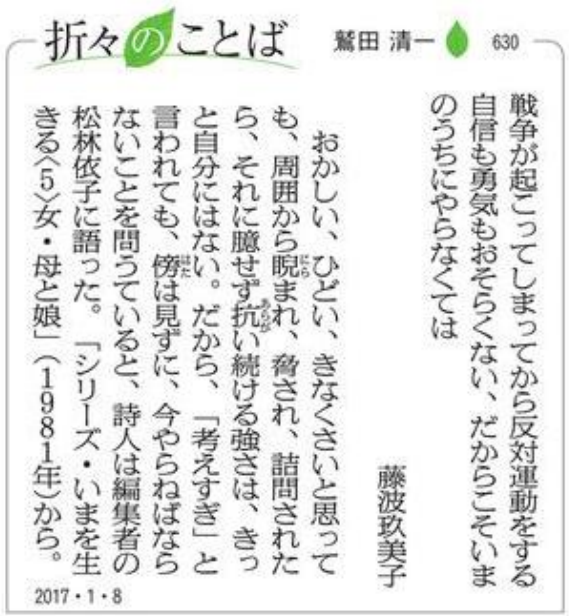
西岡常一











折々のことば
６３１～６３５

背に腹は代えられぬ

言い習わし



折々のことば　鷲田清一　631

アフロでもかどは痛いんじゃ

受験生の暗記法

G8（主要8カ国）のメンバー国、米・仏・ロ・加・独・伊・英・日を、今時の受験生はこんなふうに覚えるのだという。へえーと思いながら、でも、どでかく膨らませた髪形で突っぱる若者もじつは髪の先っぽまでひりひり疼かせているんだと、つい深読みしたくなる。そう勘ぐりだすと、「苺パンツの明智光秀」（1582年、本能寺の変）も、ちょっぴりもの悲しく聞こえてくる。

2017・1・9



折々のことば　鷲田清一　632

お前は常に自分が正しいと思っているだろう。しかし正しいことを言うときは人を傷つけるということを知っておけ。

竹下登

正しいことをあまりに真っすぐ言われると、誰も表だっては反論できない。正しいその主張の陰で立場を失う人、窮地に立つ人のことを思えば、たやすくはそれを口にできないはずだ。以後、そんな半端な自分をきつく責めさいなむことにもなろうとも。石破茂衆議院議員はかつて元首相にこう諭されたという。石破議員の講演録から。

2017・1・10



折々のことば　鷲田清一　633

覚悟ってのは、どこかでぽきりと折れちまったりする。納得ってのは、どんなに曲げられても、折れやしねえんだよ。

北方謙三

「折れたら、折れたところで納得する」と続く。腹をくくるより、肚がすわっているほうが強靭ということか。たしかに判断や決断と納得や得心とは水準が違う。だから人は「話はわかるけど納得できない」とか、逆に「わからないけど納得はできる」と言う。長編小説「楊令伝」中の、再起を謀る元梁山泊軍団の隊長たちの会話から。

2017・1・11



折々のことば　鷲田清一　634

だから私はここに来て、人々が投げあった石をキャッチする役目を託されているの

法廷に通う黒人女性

人種差別に起因する不当な投獄や極刑が今なお残る米国。黒人死刑囚の冤罪を晴らすため奮闘する弁護士、B・スティーヴンソンは、法廷に足しげく通う黒人女性と出会う。彼女は、大切な人を殺められた人だけでなく、被告の家族もまた悲しみの淵にあることを知り、その彼らにも寄り添うことで、石を投げる人から守ろうとしていた。「黒い司法」（宮崎真紀訳）から。

2017・1・12



折々のことば　鷲田清一　635

背に腹は代えられぬ

言い習わし

せっぱつまったとき、自分を守るため他を二の次とすることになってもやむをえないと人は言う。背が内臓を護る人体の外壁だとすれば、腹は、いのちを養うその臓器を包む内側。が、ほかの生き物なら他に対してまずはひた隠しにするその柔い〈内〉をたがいに触れあわせる習慣をもヒト社会は育んできた。抱擁と握手。「胸を開いて」「腹を割って」。そう、信頼という文化を。

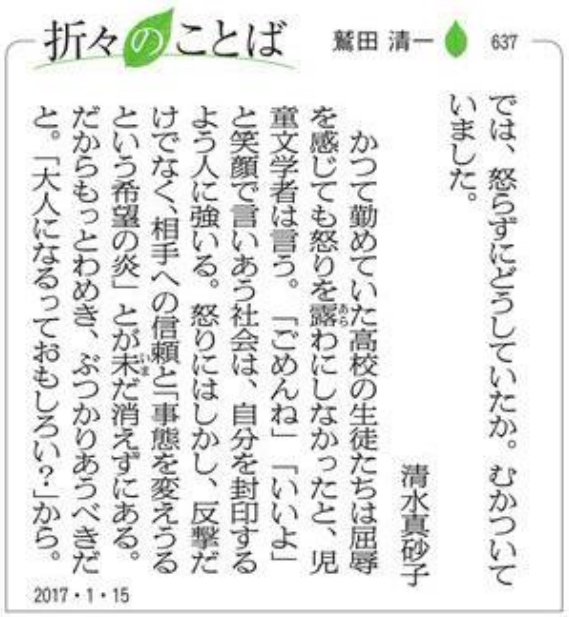
2017・1・13

折々のことば
６３６～６４０

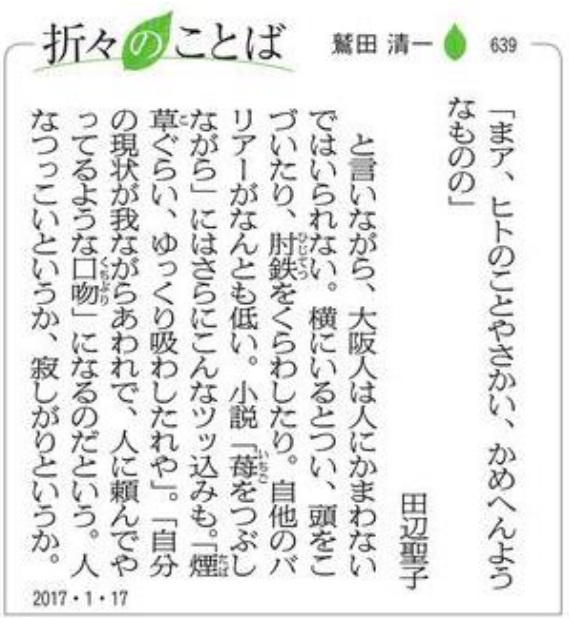
では、怒らずにどうしていたか。
むかついていました。

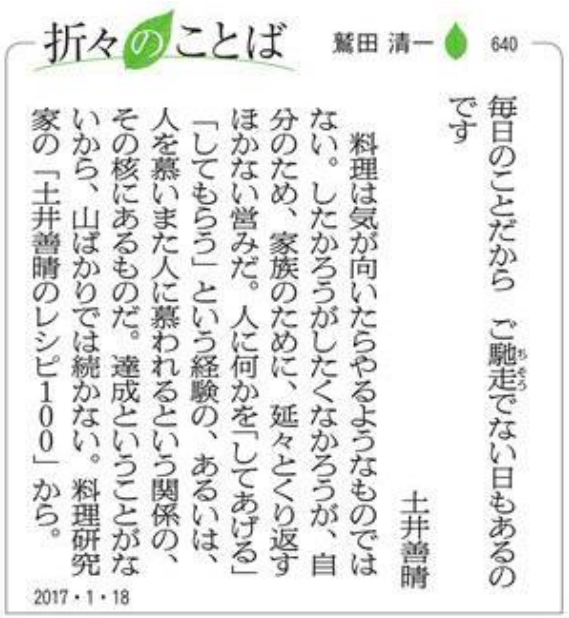
清水真砂子











折々のことば
６４１～６４５

ただ存在すること。
そのこと自体がもうすでに声なんだ、
ということを信じたいんです

斎藤陽道


折々のことば　鷲田清一　641

根本的な新しさはひとつしかない。そしてそれはつねに同じ新しさである。すなわち死。

ヴァルター・ベンヤミン

市場では、かつてなかった新しいものへと人びとの欲望をかき立てることでしか生き延びられない。新しいものはしかし、より新しいものの出現とともに朽ちる。飽きられてしまう。となると、永遠に古びないものとしては、どうあがいても体験できない自己の死と、もう一つ、絶対に共有できない他人の体験しかなくなる。批評家の遺稿「セントラルパーク」（久保哲司訳）から。

2017・1・19


折々のことば　鷲田清一　642

不安はね、たった1本の、丁寧な線で倒せるんだよ。

相澤いくえ

気は弱いし、お金もこれといった特技もなく、将来に何の展望ももてずにくすぶっている美大の後輩たちを励まそうと、ある女子学生がひそかに細かな作業を積み重ね、巨大な卒業作品を作る。手をひたすら動かすことで自身の不安を払いのけたその経験を伝えようと。そして「誰かにがっかりされたくないんだよね」と告げて卒業する。漫画「モディリアーニにお願い」から。

2017・1・20

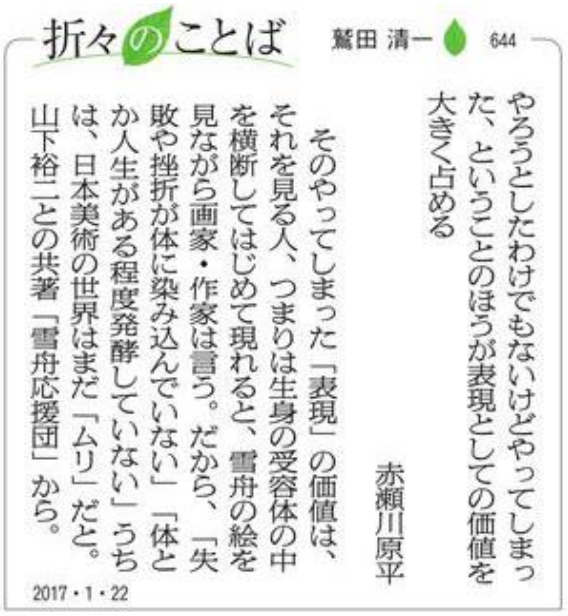

折々のことば　鷲田清一　643

ただ存在すること。そのこと自体がもうすでに声なんだ、ということを信じたいんです

斎藤陽道

数枚の写真がある。横たわる生後2カ月の赤ちゃんに、犬、猫、オウムがそれぞれ、匂いを嗅ぐかのようにそろーっと近づく。彼らは「おのおのの方法で節度を保ちながら生命体と向き合っていた」。それこそ私たちが忘れ去っている「対話の作法」だと、写真家は言う。ろう者のその彼がかつて筆談での対話で語ったことば。「JOURNAL東京迂回路研究」第2号から。

2017・1・21


折々のことば　鷲田清一　644

やろうとしたわけでもないけどやってしまった、ということのほうが表現としての価値を大きく占める

赤瀬川原平

そのやってしまった「表現」の価値は、それを見る人、つまりは生身の受容体の中を横断してはじめて現れると、雪舟の絵を見ながら画家・作家は言う。だから、「失敗や挫折が体に染み込んでいない」「体とか人生がある程度発酵していない」うちは、日本美術の世界はまだ「ムリ」だと。山下裕二との共著「雪舟応援団」から。

2017・1・22


折々のことば　鷲田清一　645

君の将棋は今、行き詰まっている。でも、それがいいんだ。中途半端に活躍するよりいい

升田幸三

行き詰まっているというのは、これまでとは違う困難に直面しているということ。これまでのやり方では処理できない、もっと根本的な問題に遭遇しているということ。その意味では、今こそ将棋との向き合い方がごそっと入れ替わるような好機にあると、棋士の大先輩は後輩に告げたかったのだろう。本紙夕刊「人生の贈りもの・加藤一二三」（昨年11月18日掲載）から。

2017・1・23

折々のことば
６４６～６５０

全部を満たす訳じゃないけれど、
この部分だけはこの人が確実に
満たしてくれるという人が
無数にいてこその人生です。

吉本ばなな

折々のことば　鷲田清一　646

食べ物のように朽ちていく、腐っていく気配が全く感じられないからです。

小桧山聡子

いのちの循環ではなく、コピー・ペーストの連続で生まれるまち？　東京の建物群を見ていると心がざわつくと料理家は言う。便所もそう。土に還せば微生物が分解してくれ、やがて土の栄養にもなるその便が、土に戻らず、水洗トイレから一気にどこかへ消えていくのが怖いと。「トーキョーペーパー・フォー・カルチャー」第15号での山伏・坂本大三郎さんとの対談から。

2017・1・24

折々のことば　鷲田清一　647

世界地図の上に、自分の動いた赤い線を引いてみたいだけなのだ

五木寛之

小説「青春の門」の若き主人公は、何かのためにではなく、許された航路に沿ってでもなく、意味は後からついてくると無謀な旅を選ぶ。ソ連に密航、あわやのところで難を逃れ、めぐり逢った少女と次に欧州をめざす。国家の庇護を失うのではなく拒む、〈自由〉へのもう一つの難民の形？　第8部「風雲篇」から。1969年に連載開始、長い中断の後、今月第9部が始まった。

2017・1・25

折々のことば　鷲田清一　648

彼らは本物がいないと成立しない。そして絶対に本物を越えることはない。それを分かっていながら、ひたすら己の芸を磨く。

三谷幸喜

そこに憧れると、モノマネ芸によせて劇作家は言う。私もそう。あそこまで考えつめた人がいる、その地点まで何とか行ってみたいとの思いが私をこれまで駆ってきた。かつて喜劇王と呼ばれたエノケンこと榎本健一に憧れ、真似どころかその人になりきろうとした役者・エノケンを主人公とする劇「エノケソ一代記」の公演パンフから。

2017・1・26

折々のことば　鷲田清一　649

全部を満たす訳じゃないけれど、この部分だけはこの人が確実に満たしてくれるという人が無数にいてこその人生です。

吉本ばなな

いつも密着している友だちは、決裂すると傷も深い。オール・オア・ナッシングの関係だから、別の人にごそっと入れ替わりもする。逆に、私をある部分で満たしてくれる人には代わりがないと、作家は言う。その交わりの中で、私の弱みと強み、自分の輪郭も見えてきたのだから。「小説トリッパー」昨年冬号での語り風の随筆から。

2017・1・27

折々のことば　鷲田清一　650

○○さんが、ワリー言いよったが昨日ミテタと。

高知あたりの言い回し

あの人は具合が悪いと聞いていたが、昨日亡くなったそうな、を土佐弁でこう言う。ミテルは、人が死ぬこと、物がなくなること。「満たす」の古い形で、いっぱいにするという意味だそうだ。死をこのように、終了ではなく満期と考えると、死への心がまえも変わる。竹村義一「土佐弁さんぽ」から。そういえば、しこたま酒を呑んだあとの最後の酌も「お積り」と言う。満願だ。

2017・1・28

折々のことば



鷲田清一

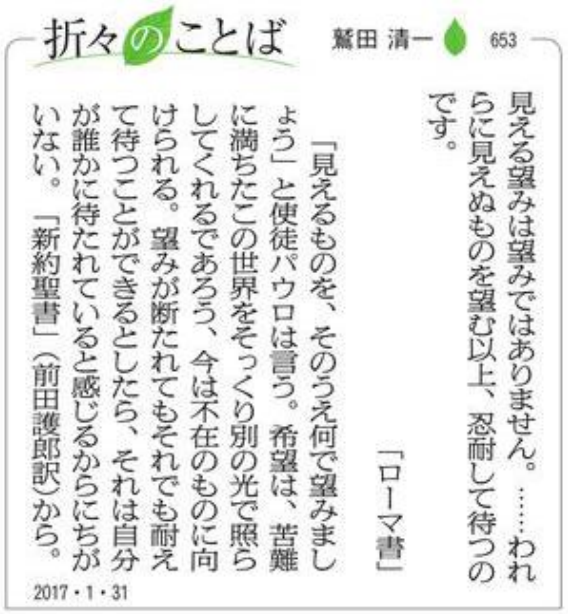
折々のことば
６５１～６５５

ほかの人間を
所有したがるひとがいるでしょ。
所有なんかできるわけないのよ。
ものですら人間は本質的に
所有できないんだから。

ピーコ











折々のことば
６５６～６６０

悩みってほんとは
すごくシンプルなことを
あーだこーだ言い訳することから
始まるのね

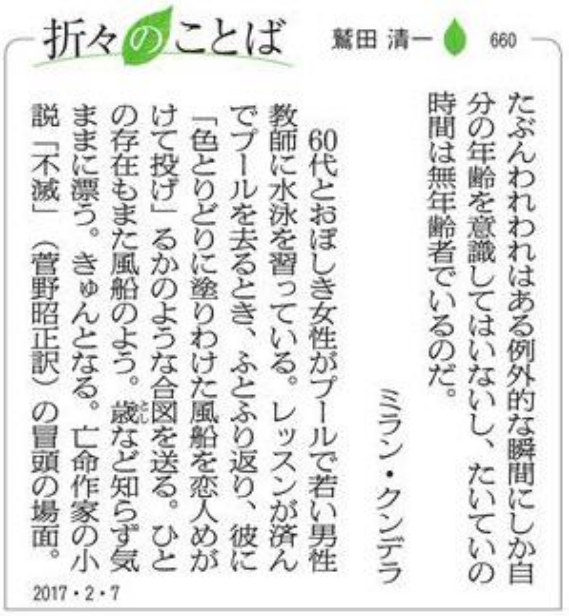
安田弘之











折々のことば
６６１～６６５

全員が同じスキを持っているという
安心感が、彼らを無防備にさせる。

ナンシー関



折々のことば　鷲田清一　661

ペットに話しかけている人は珍しくないが、犬や猫が幼稚なのではなく、飼い主の方が自分の幼稚性を楽しんでいるところがある。

谷川晃一

人には感知できない宇宙からの微細な信号にばっと反応する。もっともらしい意味づけなど必要とせずに夢中で何かと戯れる……。人には動物が何を思っているのかわからない。自分たちが忘れているそうした生きものとしての感受性を内に甦らせるためにこそ、人はおそらく芸術を必要とするのだろう。画家の随想集「雑めく心」から。

2017・2・8



折々のことば　鷲田清一　662

こちらが涙の目で睨みつけている師の目にも、そのとき涙が光っていた

高橋和巳

京都大学の中国文学科、なかでも吉川幸次郎教授の演習はたいていが一対一でなされ、その訓練は「苛烈をきわめた」という。学生の一人だった中国文学者・作家は、あまりの厳しさに、ついに師を睨み返した時のことを、友人のフランス文学者、杉本秀太郎にこう語ったという。「とことん」を経験することが学問や職人仕事の芯を作るということか。杉本の「洛中生息」から。

2017・2・9



折々のことば　鷲田清一　663

全員が同じスキを持っているという安心感が、彼らを無防備にさせる。

ナンシー関

「日常社会の価値規準とはズレたところ」で恍惚となる人々が群れ集う「別天地」。ドッグショー、宝くじの抽選会、昼の公開生放送番組、「サロンパス臭」が漂うキックボクシング戦の会場。「自己抑制のタガ」が外れるそんな場所に潜入した消しゴム版画家は、その無邪気なまでの「異常さ」を愛おしみつつも怯む。同じことはときに「国民」にも起こる。「信仰の現場」から。

2017・2・10



折々のことば　鷲田清一　664

人は、利己心が相手の中にまるで見えない時にも、自分が本当に愛されているかどうかを、深刻に思い悩むものなのだ

平野啓一郎

〈愛〉とは献身と身勝手とが渾然一体となっているもの。だから、相手が私のことを優しく気づかってくれるより、逆にひとりよがりに快に浸ってくれるほうが、より強く愛されていると感じもする。他人が横にいても無防備に自己の快に集中できるほど、私のことを信頼してくれているのだと思えるから。小説「かたちだけの愛」から。

2017・2・11



折々のことば　鷲田清一　665

情念の衝動に対立したり阻止したりできるのは、ただ反対の衝動だけである。

デイヴィッド・ヒューム

政治上の対立はよく理知と感情のそれとして語られる。が、理知は感情に優越するものではないと英国の哲学者は言う。理知は、人の判断は導けても意志そのものを動かすことはできない。意志を動かすのは情念であり、例えば嫌悪や憤りといった激しい情念を憐憫や慈しみという穏やかな情念が凌ぐとき、それが「精神の強さ」なのだと。「人間本性論」（石川徹ほか訳）から。

2017・2・12

折々のことば
６６６～６７０

目の前の楽しさで気を紛らわせる
よりも、こういうときにしか聞こえて
こないメロディーとか
辿（たど）り着かないこととかが
あるんだから

蜷川幸雄

折々のことば　鷲田清一　666

若い、というだけでもつらいことなのに、体当たりをくわしたりヘタリ込んだりする街の通りがないというのは気の毒としか……

中島らも

1980年代、この作家・コピーライターは、路上でしゃがみ込むヤンキーの「野良犬の目線」が気に入っていた。が、地方ではしゃがむのにぴったりのストリートがなく、浜辺や畦道でそうするしかなかった。そのちぐはぐを憐れむことばにふれて、つい今どきの〈青春〉のふんづまりをいろいろ連想してしまう。「恋は底ぢから」から。

2017・2・14

折々のことば　鷲田清一　667

目の前の楽しさで気を紛らわせるよりも、こういうときにしか聞こえてこないメロディーとか辿り着かないこととかがあるんだから

蜷川幸雄

大学受験に失敗して落ち込んでいる時、気晴らしに友だちと遊びに行こうとしたら演劇家の父にこう言われたと娘は言う。その場だけ楽しんでやり過ごすのは絆創膏のようなもの。以後、凹んだ時は「これがあったからここに辿り着いたんだ」と思えるまで自分を掘るようになったと言う。写真家・蜷川実花の「オラオラ女子論」から。

2017・2・15

折々のことば　鷲田清一　668

そこに所属しているという意識から、そこを自分が所有しているという意識に変わったとき、共同性は排他性へと変質する。

星野智幸

つまり「つながりを持てることが喜びだったのに、どこまでが仲間かという線引きが始まる」のだと、作家は言う。他の人たちと思いを共有しているという感覚は、自分は疎外されているという負の感情を癒やすが、同じその「物語」を共有しない人々の排斥へと容易に裏返る。「新潮」1月号に寄せた文章「一瞬の共同性を生きる」から。

2017・2・16

折々のことば　鷲田清一　669

利用者のみなさんと一緒にぼーっとしているときがあって、そういう何もない時間が怖くないというか。

沖田都

民家を再利用した介護施設の新人スタッフはすぐにその空気になじめた。理由は、同僚たちが「みんなはどうか知らんけど」と言いつつ「私は」と話しているから。食事はみなが交替で担当するので味が毎日違うから。基本的にみな「ええねん、ええねん」で進んでいくからだと。施設を運営する僧侶・釈徹宗の「お世話され上手」から。

2017・2・17

折々のことば　鷲田清一　670

そんなことはない、その瞬間はわからなくてもいいじゃないですか

耕治人

妻は認知症で施設に、夫は口内の腫れ物の治療で病院に入る。妻を介護してきた夫は妻が心配でならない。妻の介護員が夫を見舞うよう計らってくれた時、会いたいが会うと涙でものが言えなくなるし、会っても妻は事態を理解できないはずだと躊躇する夫に、知人が傍らでこう言った。かけた言葉は意識をかすめなくても身体に沈澱して残る？　小説「そうかもしれない」から。

2017・2・18

折々のことば
６７１～６７５

人は、
見晴らしがよくなった瞬間をこそ、
もっとも恐れるべき
なのかもしれない。

三浦雅士



折々のことば　鷲田清一　671

たまたま立ちつくしたところから始め、茫然と立ち止まったところで一休みするというのも、哲学のふつうのあり方なのである。

野矢茂樹

哲学とは人があたりまえのようにやってきたことの意味を考え、掘り下げ、人として生きるために本当に大事なことを探すこと。ただし、誰も一つの場所からそれを見通すことはできない。だから扉だらけの家のように、どこから入ってどこから出てもいい、そんな風通しのよさが哲学には必要だ。哲学者の「語りえぬものを語る」から。

2017・2・19



折々のことば　鷲田清一　672

身体や大地に描き、やがてそれらは消えてしまう。残らないものにこそ、価値があるのだ

石井竜也

オーストラリアの先住民、アボリジニーの絵からこのことを学んだと、アーティストは言う。人は採取し製作したものを貯めようとする。貯めると次に護ろうとの意識が働く。が、護るのは内に閉じること。貯める、殖やすことが人をしだいに幸福から遠ざけてきたのでは？　宇宙に向けて感覚を全開するアボリジニーのアート展「Ｏｎｅ　Ｒｏａｄ」の図録に寄せた文章から。

2017・2・20



折々のことば　鷲田清一　673

最後にかわした言葉が心残りだった、ということにならないように

田部井淳子

見るのはもうこれが最後かもしれないと思うと、その姿がとても愛おしくなる。死を意識することは、人や生き物にていねいに向きあう態度を養ってくれるのだろう。つねに死と隣り合わせでいた登山家だからこそ、家族がどこかに出かけるときも、まさかの事故の時のため、その日の服装をしかと脳裏に焼き付けるようにしてきたという。「それでもわたしは山に登る」から。

2017・2・21



折々のことば　鷲田清一　674

人は、見晴らしがよくなった瞬間をこそ、もっとも恐れるべきなのかもしれない。

三浦雅士

「あとから考えだした理屈が、逆にその行為の理由になる」ことがよくあると評論家は言う。たとえば神社仏閣に手水所があるように、人は昔も手を洗っていた。が、「清潔」という観念の出現とともにそれは衛生上の理由からということになり、その社会的、象徴的な意味が陰に退けられてしまう。歴史の解釈、社会制度の改造においても同じ注意が要る。「身体の零度」から。

2017・2・22



折々のことば　鷲田清一　675

大津波や原発事故をもし「未曽有の出来事」と言うなら、それに対しては「未曽有の物言い」が用意されなければならないはずだ。

畠山直哉

大津波の後、なんだか以前より複雑な人間になったようだと、写真家は言う。「本当にこれでいいのか？」と「わからない」を交互につぶやくばかりだと。これまでの語り口では歯が立たない。時間や歴史の感覚はもう粉々になっている。止まった時間をどう動かすのかと問いつつ立ち尽くす。写真集「陸前高田２０１１－２０１４」から。

2017・2・23

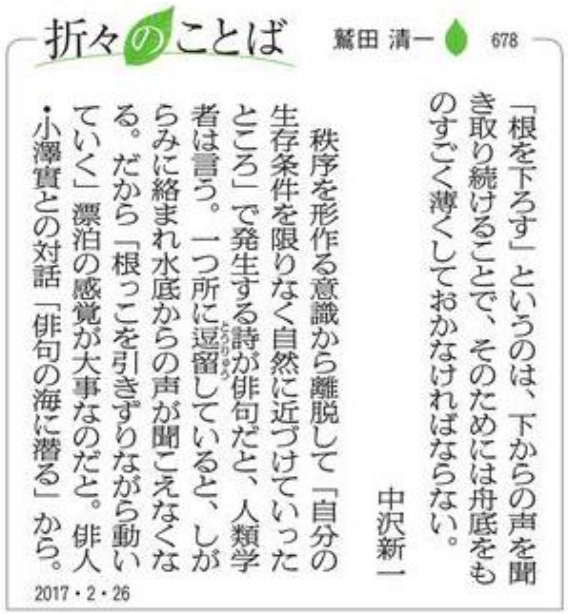
折々のことば
６７６～６８０

人間がこれほどやっかいなのは、
しゃべるからだからね。
言葉があるからうるさいの。

中野孝次











折々のことば
６８１～６８５

こんなことやって狂ってるだろう？
でもこれをやらなきゃ
本当に狂っちゃうんだよ

「佐藤たね屋」店主

折々のことば　鷲田清一　681

こんなことやって狂ってるだろう？　でもこれをやらなきゃ本当に狂っちゃうんだよ

「佐藤たね屋」店主

大津波に流され荒野のようになった陸前高田。自力でプレハブを建て、一軒ぽつんと種苗店を営む佐藤さんは、震災後独習した英語と中国語で、日々憑かれたように手記を綴る。日本語だと要らぬことも書いてしまうから。記録がなくならないよう異郷にまで届けたいから。彼はある日、自分を撮り続ける映像作家・小森はるかにこう語った。映画「息の跡」の監督ノートから。

2017・3・1

折々のことば　鷲田清一　682

アホか、おまえは！

人類学の研究会で

１９７０年代、国立民族学博物館を交点とする関西の人類学者たちの集いでは、こんな連帯（？）の罵声が飛び交ったと友人は言う。異なる地域の生活文化を知るためなら何でも食い、何でも験す、若い研究者たちの容赦なき相互批判。誰もが〝とりすました学問〟など無用と息巻いていた。自分をこれまで象ってきた文化の頑迷な基盤を必死で切開し、揺さぶろうとしていた。

2017・3・2

折々のことば　鷲田清一　683

テクストの外などというものは存在しない

ジャック・デリダ

いかなる歴史的事実も語られたもの、つまりはテクストとしてしかありえない。事実はつねに解釈され、編集されて伝えられる。とすれば私たちが報道にふれるとき、なぜこの出来事が報じられ、あの出来事はスルーされたのかも注視しなければ。スルーされた事実もまた別のテクストから知るほかないと肝に銘じつつ。フランスの哲学者の「グラマトロジーについて」から。

2017・3・3

折々のことば　鷲田清一　684

役者やっていて一番嬉しいことは、おれと一緒のシーンに出たやつがよく見えること。

火野正平

自分が輝くよりも、自分が横にいることで隣の人がもっと輝くのを歓ぶ俳優。自分が歓ぶのではなく、他人を歓ばせて自分も歓ぶということをあたりまえのようにできるようになるのは年の功か。その彼には「若くなるには、時間がかかる」という本もある。たしかに年をとってようやく「サマになる」人もいる。年齢はただの記号でしかない？　「人生下り坂最高！」から。

2017・3・4

折々のことば　鷲田清一　685

いま私たちに必要なのは……《借り》を伝えていくことである。

ナタリー・サルトゥー＝ラジュ

借りは、金銭的もしくは経済的な場面で使われることが多い語だが、それ以上に、恩や負い目という意味も含むもっと広い観念として、人と人を結びつけ、互いに足りないところを補いあう文化を培ってきた。養育をはじめとして、誰もがその存在を他者に、前世代に負う。借りはじかにではなく別の人、次世代に返せばいいと哲学者は言う。「借りの哲学」（高野優監訳）から。

2017・3・5

折々のことば
６８６～６９０

絶望するのと同じ能力、
その未来を想像するという能力が
あるから、人間は希望をもてる。

松沢哲郎

折々のことば　686

鷲田清一

はじめのころは木の枝で撫でとったけど、最後のほうは友達やったと思う。

梅佳代

写真家が久しぶりに実家に帰ると、拾われた犬がいた。気まぐれでやんちゃっ子で、すでにしっかり家族の一員となっている。が、やがて、年老いてよぼよぼになって、ある日、父の顔をじっと見、しばし寄り添ったあと、姿を消した。人はおのれの生涯の始めも終わりも知りえない。犬の短い生を見つめるなかで、自らの来し方行く末に思いをめぐらせる。写真集「白い犬」から。

2017・3・6

折々のことば　687

鷲田清一

一方は繋で石のなかに物語を彫り刻み、他方は、区切り、韻律、半諧音によって人間の記憶のなかに物語を彫り刻む。

アラン

建築と詩についてフランスの哲学者はこのように書いた。建物の装飾はその構造に「服従」し、詩の韻律や脚韻は記憶に「奉仕」する。芸術においては、「ひとつたりと余計な石を置くまい」という、石工のメチエ（職人の技）がまずもって貫かれるべきで、想像力ははしゃぎ回ってはならないのだと。「プロポ」（山崎庸一郎訳）から。

2017・3・7

折々のことば　688

鷲田清一

ただ透明な気と気が／触れあっただけのような／それはそれでよかったような／いきものはすべてそうして消え失せてゆくような

茨木のり子

自他がせめぎあうところに二つを分かつ膜ができる。膜をはさんでこっちに私、向こうにあなたが立つ。ほんとうは私もあなたも存在せず「素敵な気がすうっと流れただけ」かもしれないのに。もし膜がすきまだらけだったら、もっと通いあえたのに、人はそのすきまを塞ぐことでしか自分を護れないと思っている。詩集「歳月」から。

2017・3・8

折々のことば　689

鷲田清一

しまいには外食で食べるものすべてが柔らかすぎると感じて、噛み切れないほどの固いものは何処かにないかと飢えてさえいた。

鴻池朋子

東北の震災後、自分がこれまでやってきた芸術と、いわば「仮死状態」にあった「自分という動物」との関係を突きつめることなしに制作することはできなくなったと、秋田県生まれの美術家は言う。「自由」とか「自己表現」といったやわなことばに「うっとり」しつつ描くことはもはや自分には不可能だと。「どうぶつのことば」から。

2017・3・9

折々のことば　690

鷲田清一

絶望するのと同じ能力、その未来を想像するという能力があるから、人間は希望をもてる。

松沢哲郎

チンパンジーはつねに「今、ここ」を生きている。だから一瞬ぱっと目の前に示された数字を丸覚えするのは上手だが、ずっと先のことに思いをはせたりはしないので、絶望もしない。これに対してヒトは、過去や未来といった不在の時に心をたなびかせる。だから、過ぎし日を懐かしみ、後悔もすれば、行く末を案じ、祈りもする。霊長類学者の「想像するちから」から。

2017・3・10

折々のことば
６９１～６９５

めんどうくさいという気持ちに、
どうしても負けてしまうのだ。
これはもう一種の犯罪……
他人ではなく自分自身に対する
犯罪だ。

穂村弘



折々のことば　鷲田清一　691

泣きながらご飯食べたことある人は、生きていけます。

坂元裕二（脚本）

子どもの頃、自分を使った詐欺で世間を騒がせた父。その臨終の知らせを受けてもどうしても病院に向かえず、かわりにカツ丼をもりもり食べる女性に、年上の同居者がこう語りかける。悔しい、情けない、もうもたない……と思っても、とにかく何かを口に入れていれば、いずれきっと体に助けられる時がくる。TBS系のテレビドラマ「カルテット」（1月31日放送）から。

2017・3・11



折々のことば　鷲田清一　692

大ごとじゃったよ
大ごとじゃ思うとった　あの頃は
大ごとじゃ思えた頃がなつかしいわ

こうの史代

気がつけば、時代は悪いほう、悪いほうへと流されている。それに抗うのは難しい。が、それ以前にそれに気づくのはさらに難しい。日々の暮らしの中に生まれる些細な変化、そこに時代の禍々しい影がさしていることがある。ぼんやりしていると、ついそれも見過ごしてしまう。戦時下の生活を描いた漫画「この世界の片隅に」から。

2017・3・12



折々のことば　鷲田清一　693

めんどくさいという気持ちに、どうしても負けてしまうのだ。これはもう一種の犯罪……他人ではなく自分自身に対する犯罪だ。

穂村弘

片づけのように、しなければとわかっていても、このままだと危ういとの予感があっても、目先のめんどくささに負け、ついに動かない。小銭を落としても、ちゃんと捜さずに「なかったこと」にしてしまう、そんな「つるんとした無感覚」は、社会との向きあい方についても言える？　歌人のエッセー集「野良猫を尊敬した日」から。

2017・3・13



折々のことば　鷲田清一　694

「幸せ」な時とは　情報が取捨選択されて視野がすごく狭まった状態なのだ。

永田カビ

人が幸せな気分でいるのは、「その幸せなことだけしか考えてない状態」、つまりは「幸せに水をさす事実は認識してない状態」だと、漫画家は言う。だから逆に、落ち込んだりもがいたりしているときは、この世には不幸しかないと思ってしまう。そうこんどは見たくないものしか見えない。人の心はなんとも頑なだ。心をぎりぎり掻きむしられる漫画「一人交換日記」から。

2017・3・14



折々のことば　鷲田清一　695

だってママ、私しか子供育ててないもんね。間違いとか、あるもんだよ。私だって生きてるの、初めてだし

舞城王太郎

男子中学生との交際をめぐり言い争う小5の娘と母。思い直して、子供の一般的なイメージをあなたに押しつけてしまったようねと言う母に、娘はこう返す。子供であること、あったことの意味は、一度きりの経験では摑めない。母と娘の聡明すぎる心理劇はやがて〈私〉をめぐる哲学劇と化してゆく。小説「秘密は花になる。」から。

2017・3・15

折々のことば
６９６～７００

今の子供たちの最大の不幸は、
日常に自分たちの意思で
何かが出来る、余白の時間と
場所を持てないことだ。

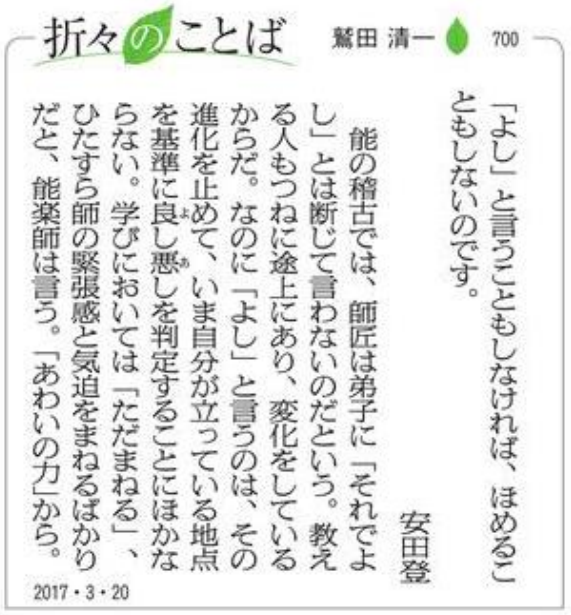
安藤忠雄











折々のことば
７０１～７０５

人のことばは揺れる。

浜田寿美男











折々のことば
７０６～７１０

弁当が手紙の代わりを
つとめてくれた

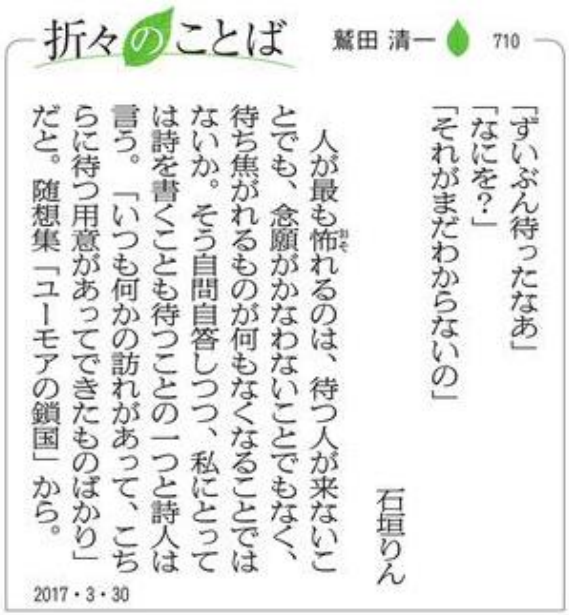
渡辺俊美











折々のことば
７１１～７１５

そのとき、自然と孤独なふりを
できるのが灯台のいいところ。

吉田篤弘

折々のことば　鷲田清一　711

そのとき、自然と孤独なふりをできるのが灯台のいいところ。

吉田篤弘

「考える」とは、いつもの場所を離れ、誰もいない所で「何やら遠くの方にあるもの」をうかがうこと。自分にとってそこは灯台だと、作家は言う。人は「ちょっとでも寂しく」ならないと「考えるべきこと」を考えないものだから、誰にもそんな場所が必要だ。それに、そこは、寂しすぎればすぐにいつもの場所に戻れる所でもあるしと。物語集「という、はなし」から。

2017・3・31

折々のことば　鷲田清一　712

ホラは他人を喜ばすためにふくもの
ウソは自分のためにつくもの

ある父親

ウソはだめだが、ホラならいっぱい吹きなさいと、童話作家の富安陽子は若い頃、父に言われた。それで母になっても、怪談で息子たちを固まらせたり、彼らの級友にいたずらを仕掛けたりして楽しむ。ホラは「不思議を待つ力」を養う。ホラは世界を美味しいパンのように膨らせるパウダーだ。この童心を護るためにこそ人はおとなになるのかも。講演「お話の種の育て方」から。

2017・4・1

折々のことば　鷲田清一　713

よのなかは　〈こども〉と〈もと　こども〉で　できている

富安陽子

元はみな子どもであった。どんな子どももいつかは元子どもになる。というか、人はおとなになっても内に子どもを宿している。どどっと感動する力、凄まじい好奇心と集中力、微細な変化を見逃さない感覚のアンテナは、芸術や科学に必要な資質でもある。干からびた成熟ではなく、ぐじゅぐじゅの未熟が大事。これが文化を突き動かす。童話作家の絵本「もと　こども」から。

2017・4・2

折々のことば　鷲田清一　714

世界はどんどんどんどん第三者を意識した会話になっていっている

北山修

昔、友人に向けて作った歌が大ヒットし、巷に流れたときの強いとまどいを、精神科医は、歌集ではなく愛しい人のために詠まれた防人歌を例に出しつつふり返る。同じものを見つめながら思いをそっと通わす、そういう第二者との関係がまずないと人は崩れるのに、今は「自己」理解の過程がすぐに「みんな」という外からの視線に晒されてしまうと危ぶむ。「最後の授業」から。

2017・4・3

折々のことば　鷲田清一　715

わたしは、ぬけたような青空は好みません。まるでお椀でふたをされた感じで、窮屈です。それより少し薄曇りの空がいい。

熊谷守一

瑕一つない均質の生地で覆われているようで息が詰まるから？　遠近法がきかない透明な青の深みに吸い込まれそうで不安になるから？　なのに、庭に掘った深い穴の底から見上げる空は「円くぬけて」いるみたいで面白い。「人の好みって変なものですね」と自分でも言っている。「画壇の仙人」といわれた画家の言行録「蒼蠅」から。

2017・4・4

折々のことば
７１６～７２０

平和な世の中は、
みんなものすごく口論してるんです。
……関わりたくない人や見たくない
ものが、みーんな表に出てきます。

阿藤智恵



折々のことば　鷲田清一　716

とはいえ、お花見があってこその桜である。

勝木俊雄

桜の名所案内ではなく、桜の文化論でもなく、〈生き物〉としての桜の研究と保全に尽くしてきた樹木学者の著書「桜」から。染井吉野は寿命が短い、剪定してはならないといった俗信を一つ一つ正しつつ、自生するのではない栽培品種は特に、育てる人間の理解と手入れなしには生き存えるのも難しいと説く。見る者としてはただ、散り際の、その潔すぎるところがちと怖い。

2017・4・5



折々のことば　鷲田清一　717

「はなしにならない」〈はなし〉はありうるが、「かたりにならない」〈かたり〉は……元来ありえない

坂部恵

まとまりのない〈はなし〉はありうるが、起承転結のまとまりのない〈かたり〉はありえない。そこには筋立て、つまりなまのままではない事態の捉えなおしがかならず含まれる。そして筋立てが、編まれ、構成されるものであるからには、当然そこには嘘や偽り、隠蔽も忍び込む。そう、語りは騙りでもある。哲学者の「かたり」から。

2017・4・6



折々のことば　鷲田清一　718

劇的な解決を望むのではなく、部品を点検しボルトを締め直すように、一つ一つの問題に向き合うしかない。

中島岳志

完全な制度というものはない。今日ではあたりまえに見える制度も、きしみやひび割れ、腐蝕や破綻を未然に防いでおこうという、無名の人びとによる日々の丹念な手入れと手当てとによって持ち堪えてきた。「そういう平凡な努力の積み重ねが非凡なんです」と政治・歴史学者は言う。本紙夕刊「一語一会」（昨年9月1日掲載）から。

2017・4・7



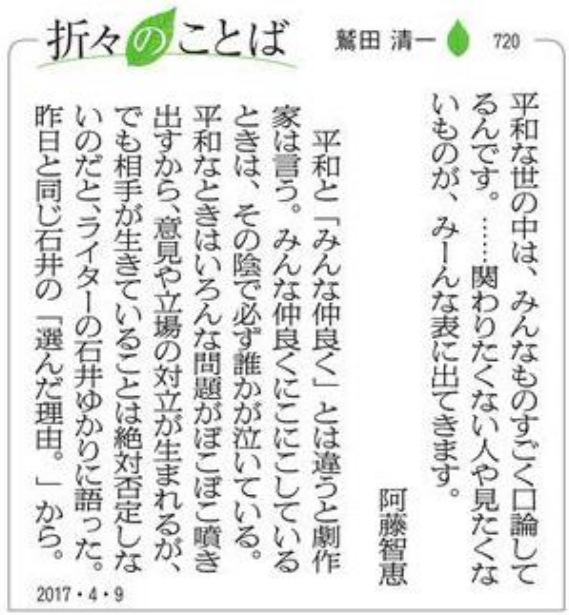
折々のことば　鷲田清一　719

自分の中の「NO」を知っていることが、羅針盤となることもあるのだ。

石井ゆかり

多様な職種の人に人生の分岐点をきくライターの著書「選んだ理由。」から。ある写真家は、かつて勤め人だった時、妻に今の仕事をずっと続けるつもりかと問われ、もちろんと答えると、「は？　つまらん」と言い放たれた。この反撃に「フツウはこうする」に流されないのが自分の性分だったと気づいたのだろう。「やりたくない」ことを一つ一つ外したのち、今の道を選んだ。

2017・4・8



折々のことば　鷲田清一　720

平和な世の中は、みんなものすごく口論してるんです。……関わりたくない人や見たくないものが、みーんな表に出てきます。

阿藤智恵

平和と「みんな仲良く」とは違うと劇作家は言う。みんな仲良くにこにこしているときは、その陰で必ず誰かが泣いている。平和なときはいろんな問題がぼこぼこ噴き出すから、意見や立場の対立が生まれるが、でも相手が生きていることは絶対否定しないのだと、ライターの石井ゆかりに語った。昨日と同じ石井の「選んだ理由。」から。

2017・4・9

折々のことば
７２１～７２５

やっぱり　おれは
おおかみだもんな
おおかみとして　いきるしかないよ

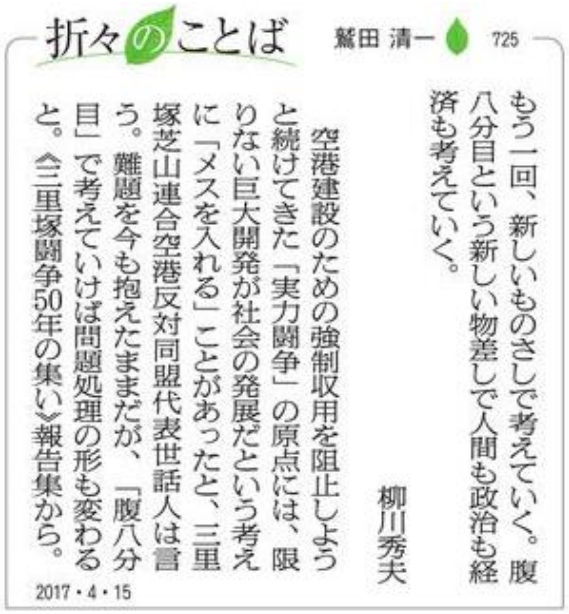
佐々木マキ











折々のことば
７２６～７３０

続けるという行為は、得てして
新しいことに取り組むよりも
エネルギーのいることなのかも
知れない。

山中隆太

折々のことば　鷲田清一　726

なんでも食べられるという利点が、エサみたいなビジュアルのガッカリ飯を生み出す。

トミヤマユキコ

ホテルや宴会場でのバイキング。あれもこれもと欲張っているうちに、「なにこれ、エサ？」みたいに「素人感丸出しのゴチャゴチャプレート」になっていくと、大学講師も務めるライターは言う。きれいに盛りつけるにはそれなりのセンスと訓練が要る。学びも、「浅く広く」より「チャーミングに偏っていく」ことから始めよと。清田隆之との共著「大学1年生の歩き方」から。

2017・4・16

折々のことば　鷲田清一　727

理解し合えるはずだという前提に立つと、少しでも理解できないことがあった時に、事態はうまくいかなくなる

村上龍

対話は、他人と同じ考え、同じ気持ちになるためになされると考えると、いずれかが理解を断念したとき、対話は閉じられる。理解できなくてあたりまえ、むしろ語りあえば語りあうほど相手と自分との違いがより微細に見えてくる、それを対話だと考えれば、理解しえずとも共にいられる場所は少し広がる。小説「ラブ&ポップ」から。

2017・4・17

折々のことば　鷲田清一　728

わざわざ正しいって言わなくちゃならないのは　たいして正しくないからね。

「ののちゃん」の藤原先生

「まちがいだって言わなくちゃいけないのもたいしたまちがいじゃないからよ」と続く。「食べれる」はまちがいで「食べられる」が正しいと言う子に、担任の先生がこう返す。何ごとにつけてもどこか「テキトー」な藤原先生。模範解答につい寄りかかろうとする優等生にちくり、愛の一刺し。いしいひさいちの漫画「ののちゃん」（本紙2000年2月3日朝刊）から。

2017・4・18

折々のことば　鷲田清一　729

人間が本当に生きようとすると、恰好が整わなくなって化け物のようにならざるをえない

色川武大

怪しげな口上で物を売る人がいる。いつも同じ場所に陣取る正体不明の人もいる。そしてある日忽然と姿を消す。が、気がつけばまたあたりをうろついている。そんな「風物詩」のような人がいくらでもいた昭和の東京・神楽坂。人はみな歪なところを隠し持つが、身を晒して生きるときも生きる意欲を失ったときも、その歪がいやでも表に出る。短編集「怪しい来客簿」から。

2017・4・19

折々のことば　鷲田清一　730

続けるという行為は、得てして新しいことに取り組むよりもエネルギーのいることなのかも知れない。

山中隆太

災害に備える。体験を伝える。世間や自分の中の「引き潮」に抗ってそれを続けるにも根気がいる。それに湯気の残るスープを温め直すのは容易だが、冷えたスープを加熱するには何倍もの熱量が必要だ。それを覚悟で被災者の一人は手記を再開した。手記集「阪神・淡路大震災　わたしたちの20年目」から。編集も次世代に受け継がれている。

2017・4・20

折々のことば
７３１～７３５

It’s Only Rock’n’Roll (But I Like It)

ザ・ローリング・ストーンズ

折々のことば　鷲田清一　731

It’s Only Rock’n’Roll(But I Like It)

ザ・ローリング・ストーンズ

1974年にリリースされた英国のロックバンドの曲のタイトル。「たかがロックンロール。でも好きなんだ」。ロックンロールを「たかが」と突き放し、すぐに「でも」と引き取るところに、高みからの物言いへの反撥がある。そういえばサザンの桑田佳祐も自身の歌詞集に「ただの歌詩じゃねえか、こんなもん」と題をつけた。あえて「歌詩」と書くところに歌手の密かな意地が透かし見える。

2017・4・21

折々のことば　鷲田清一　732

ゼミナールは、私にとって、（軽い）錯乱の対象であって……この対象に惚れ込んでいる

ロラン・バルト

ゼミナールはラテン語の「種」（セーメン、ドイツ語ではザーメン）に由来する。ゼミナールは種が蒔かれる場所、教師も学生もなくそれぞれに弾ける場所なのだ。そこでは確定した何かが伝授されるのではなく、解らしきものはみな宙吊りにされる。足場を崩され、めまいに襲われる。そしてそういう交感が何にも代え難い悦びとなる。「テクストの出口」（沢崎浩平訳）から。

2017・4・22

折々のことば　鷲田清一　733

思いが止まらない

大樋陶冶斎（十代大樋長左衛門）

金沢の陶芸家、十代大樋長左衛門は御年89歳。代を譲ったあとも新作展を開く。なぜそんなに次々と作品が創れるのかと取材で問われ、こう答えた。後日、テレビでそのインタビューを見て、とぼけてだろう、「そんなこと言ったか？」と、子息の十一代に聞いたという。父の年齢だからこそ言えることば、自分がこれを言ったらむしろ怪しまれると、名跡を担う子息は思う。

2017・4・23

折々のことば　鷲田清一　734

ふくおかさんは、なんぴゃっかい、なんぜんかいと「何も　することがない。」とほりつづけました。

森村泰昌

「何もすることがない。」とドリルで大きな板にひたすら刻みつけた人がいる。生きがいになることを何も見つけられない人は、無理に捜さず、その「ない」をそのまま形にする作業を続けていればいいと美術家は言う。それが作品（ワーク）になる。芸術の神様はけっしてあなたを見捨てないと。絵本「たいせつな　わすれもの」から。

2017・4・24

折々のことば　鷲田清一　735

不在や不明にそそぐ愛こそが表現の基本だと思うのだけれど。

田中泯

人の生は「見えない事態、語られない言葉、現わせない言動、飛び出さない衝動」に満ちているのに、人は「どうして歴史に残る物や事を作ろうとするのだろう」と、ダンサーは問う。個々の生身の体の中で起こっている〈いのち〉の不可解な蠢きにもっとまみれ、煽られ、のけぞれと言わんばかりに。岐阜の芸術祭「ＩＮ　ＴＨＥ　ＣＵＢＥ　２０１７」に寄せた審査員メッセージから。

2017・4・25

折々のことば
７３６～７４０

よくぞ今まで生きてこられましたね。
今、生きている自分を
褒めてあげてください

柳田邦男











折々のことば
７４１～７４５

正しい大きさの感覚が、
認識を正しくするのだ。

長田弘

折々のことば　鷲田清一　741

テレビ出身の人の歩幅はどうしても狭くなるんですが、映画の人の歩幅は大きいんです。

松方弘樹

どんな仕事に就くときもスケールというものが大事、と無頼派の俳優は語る。とても叶わないと思うものにまず挑むほうが、自分にもできそうな等身大の課題から始めるより、のちのち大成する。「小芝居」を器用にこなすのではなく、ためと余白のある「大きな芝居」をめざすには、長丁場の現場で泥まみれになるほうがいい。伊藤彰彦との共著「無冠の男　松方弘樹伝」から。

2017・5・1

折々のことば　鷲田清一　742

Class is a state of mind,
not money. We are upper class.

ある母親

ＮＨＫラジオ講座「実践ビジネス英語」の米国人出演者は、幼い頃「うちは中流階級なの？」と母親に訊いた。彼女の答えは「階級は心の持ちようであって、お金ではないの。うちは上流階級よ」。「よい人間」になるため知的な理解力を磨くのが上流階級だと。だが、長じて娘は、お金を使うこと、貯めることの意味をきちんと教えておくのも大事だと思うようになる。講座テキスト（３月号）から。

2017・5・2

折々のことば　鷲田清一　743

正しい大きさの感覚が、認識を正しくするのだ。

長田弘

帽子にもクロッカスにも、一角獣という想像上の生きものにも、「正しい大きさ」がある。それに照らして人は自分の大きさを知るのだが、テレビカメラはものの像をズームで好きに調節して伝える。憂うべきは、そのことで「想像されたものの正しい大きさの感覚」まで損なわれたことだと詩人は言う。人の存在が大きくなりすぎている？　随想集「幼年の色、人生の色」から。

2017・5・3

折々のことば　鷲田清一　744

若いとき、ひなげしの花びらを通して輝く光に心を奪われる時間があったろうか。

メイ・サートン

年齢によって人は異なる現実にふれる。不死身の青春、生業に忙しい中年を経て老いを迎え、こんどは「生きること自体」を玩味するようになる。若者に「手を貸す」喜びももてるようになる。そういう変化と成長のなかにこそ人生の「冒険」はあるのに、どうして「若さ」にばかり人はこだわるのかと、米国の詩人・小説家は訝しむ。「夢見つつ深く植えよ」（武田尚子訳）から。

2017・5・4

折々のことば　鷲田清一　745

だいたい子どもというものは、「親の目が届かないところ」で育っていくんです。

河合隼雄

これに「先生の目が届かないところで」もつけ加えたい。子供の自治が成り立つ場が今、社会のあちこちに埋め込まれているか？　子供は仲間とともに、ときに少々怖い目にもあいつつ、してよいことといけないこと、どこまで人を頼りにできるかを学ぶ。これに親が信頼感をもてるかどうかに子供の成長は懸かっていると、臨床心理家は言う。「Ｑ＆Ａこころの子育て」から。

2017・5・5

折々のことば
７４６～７５０

バラを
かけがえのないものにしたのは、
きみが、バラのために費やした
時間だったんだ

サン＝テグジュペリ

折々のことば　鷲田清一　746

生活上の多くの悲劇は、距離を置いて見るとしばしば喜劇となります。

斎藤環

人を避けているのか、挨拶しても無視されるばかりの向かいの夫婦にストレスを溜める相談者に、精神科医は、同じように「奇妙な隣人」の出現に困惑し、狼狽する例を漫画や小説から引きつつこう答える。思いもしないところから生じた悲劇的状況も「一歩引いたところから俯瞰する」眼をもつと、ときに反転して漫画のように見えだすと。4月23日付本紙朝刊から。

2017・5・6

折々のことば　鷲田清一　747

光は闇を消滅させる。ものによっては消す影もあるが、浮き立たせ明らかにする影もある

アピチャッポン・ウィーラセタクン

見えているのに見ていないものがある。関心の外にあったり、知るのが怖かったり。タイの映像作家は、さまざまの光源を配置し、影に影を重ねるなかで、人と社会の揺らめく姿を明滅させる。夢の淵を、忘却された死者たちを、政治的にブロックされた惨禍を。歴史の形と記憶は刻一刻、変化しうつろう。展覧会《亡霊たち》の図録に寄せた文章「不可視性」（中野勉訳）から。

2017・5・7

折々のことば　鷲田清一　748

みんな見舞いに来てくれるんやけど、みんなのほうが痛いねん

ある高齢の日雇い労働者

大阪の釜ケ崎で生活保護を受けつつ暮らす男性は、末期がんで入院中の自分を見舞ってくれる仲間を思って、知人の看護師にこう漏らした。病院食にありつける自分とは違い、次の食事をどうするか心細い思いでいるその心情を慮ってか、他人との残されたわずかな糸でさえ切れるという不安を思いやってか、生きることは死ぬことより難儀だと思い知るところがあってか……。

2017・5・9

折々のことば　鷲田清一　749

私どもは、学校を知的修練の売り場とは決して考えなかった。

内村鑑三

「修練を積めば生活費が稼げるようになるとの目的で、学校に行かされたのではなく、真の人間になるためだった」と続く。教育は、これに精進すればこんな見返りがあるという論法でなされるものではない。次の世代が正しく、そして確実に生き延びられるよう、自らのもてるあらゆる知恵を伝えることにある。明治のキリスト教思想家の「代表的日本人」（鈴木範久訳）から。

2017・5・10

折々のことば　鷲田清一　750

バラをかけがえのないものにしたのは、きみが、バラのために費やした時間だったんだ

サン＝テグジュペリ

心通わせたバラに思いをはせつつ、「『なつく』って、どういうこと？」と問う王子に、キツネは「ほかの誰ともちがうきみの足音が、わかるようになる」ことだと言う。人が誰かの思いの宛先であり続けているということ、つまり、自分は誰かに気遣われている、忘れ去られていないという感覚が、その人の存在を代わりのきかないものにする。「星の王子さま」（河野万里子訳）から。

2017・5・11

折々のことば
７５１～７５５

私が語るどんな言葉よりも、
私の隣りで10分間座っている方が
いろいろ分かってもらえるんじゃ
ないか。

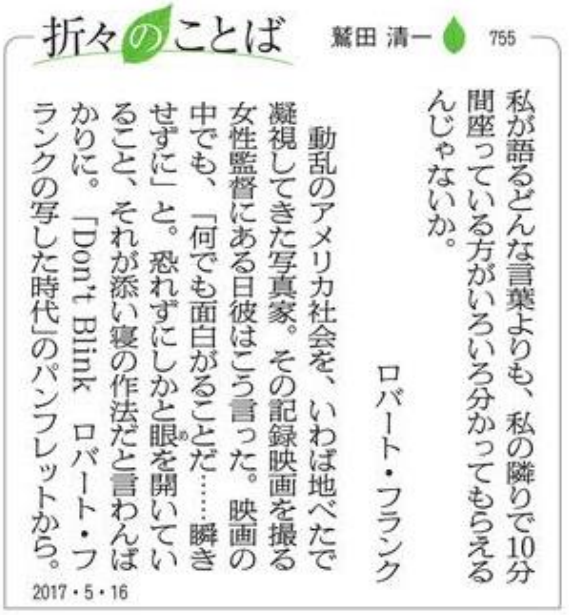
ロバート・フランク











折々のことば
７５６～７６０

「うらやむ」と「ねたむ」の違いを
知っていますか

現代文の先生







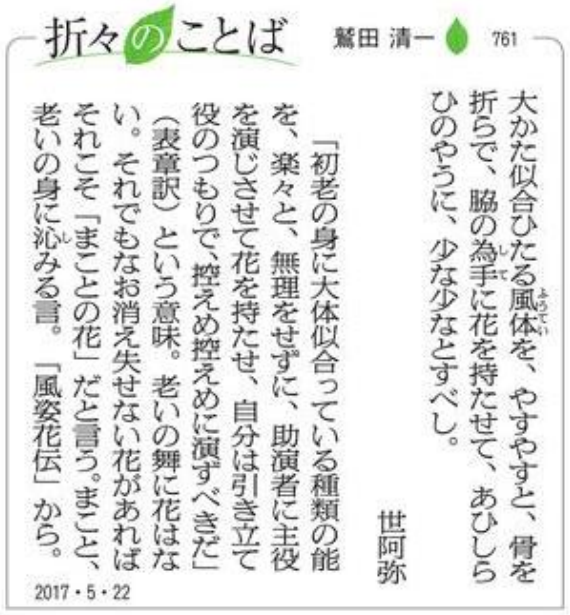




折々のことば
７６１～７６５

足音が畑の肥料になる。

ある父親









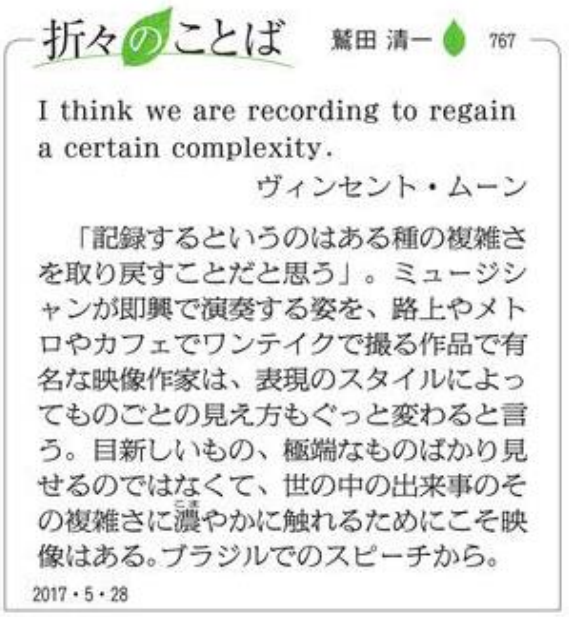


折々のことば
７６６～７７０

野に雑草という名の草がないように、工場には雑用という名の仕事はない

小関智弘











折々のことば
７７１～７７５

大人が介入すると、
整理整頓されちゃうんで。
その場を取り繕って、
綺麗（きれい）に
おさめようとするから。

水橋文美江（脚本）

折々のことば　鷲田清一　771

聖地はわずか一センチたりとも場所を移動しない。

植島啓司

一センチというのは修辞的な表現であろうが、この世とあの世の境にあるものはちょっとしたずれもゆるがせにできない。位置の過剰なまでの正確さという、宗教人類学者があげる聖地の特徴に、手術後の寝台を思い出す。傾きを細かに調節できるベッドの角度がそれこそ一度でも違えば激しい痛みが走るのだった。冥界に吸い込まれる寸前だったからか。「聖地の想像力」から。

2017・6・1

折々のことば　鷲田清一　772

注意を集中し、ただ黙って聞いていてくれるというのは、それだけでも大したことだと思います。

松浦寿輝

語りを黙して聞く。それは受け身の行為ではないと、詩人・仏文学者は大学退職時の講演「波打ち際に生きる」で言う。耳を澄ますことが、心地よい波動となって、語る者に返される。昼と夜、意識と無意識など、異質なものの間（あわい）の「心もとなさ」を愛（め）おしむのが私の仕事だったとの回想がまさに波打ち際として現れた、幸福な別れの辞。

2017・6・2

折々のことば　鷲田清一　773

なぜ生きてるかつて、
さあね――。

金尚鎔（キムサンヨン）（訳・金素雲（キムソウン））

都会での名利を捨て、田園での簡素な生を愛（め）でる韓国詩人の詩「南に窓を」の最終行は、逐語訳だと「笑いましょう」となるが、日韓のはざまで韓国近代詩の翻訳に尽くした金素雲の訳は「さあね」とはぐらかす。人は生きる理由や意味を求めずにいられないが、安らぎはむしろ理由や意味への問いから下りることで得られる？　林容澤（イムヨンテク）著「金素雲『朝鮮詩集』の世界」から。

2017・6・3

折々のことば　鷲田清一　774

大人が介入すると、整理整頓されちゃうんで。その場を取り繕って、綺麗（きれい）におさめようとするから。

水橋文美江（脚本）

生みの母を受け入れられない中学生に、同じ施設で育った16歳の少年は、自分を捨てた親と対峙（たいじ）する姿をあえて見せようとする。そしてその現場についてきた児童福祉司にこう告げる。受け入れやすい物語に掬（すく）い取られ、痛みも歪（ゆが）められるのを拒んで。母とは何かを問う、日本テレビ系の連続ドラマ「母になる」（5月10日）から。

2017・6・4

折々のことば　鷲田清一　775

人生の主役が変わった気がする…

富士屋カツヒト

漫画以外に取り柄（え）がないのに踏ん張りきれず、せっかく得た雑誌連載も打ち切りになる。妻の妊娠を機に働きに出るも、体が悲鳴を上げて再び無職に。生まれた子が腕の中で懸命にミルクを飲む姿を見つめ、漫画家はこう思う。育児でも介護でも、人は、こちらに迎える、あちらに送るという人生の務めをどう果たすかを問われる。漫画「打ち切り漫画家（28歳）、パパになる。」から。

2017・6・5

折々のことば
７７６～７８０

生きている時間のほうが長い
どんなに短い人生だったとしても
生きていた時間のほうが長い

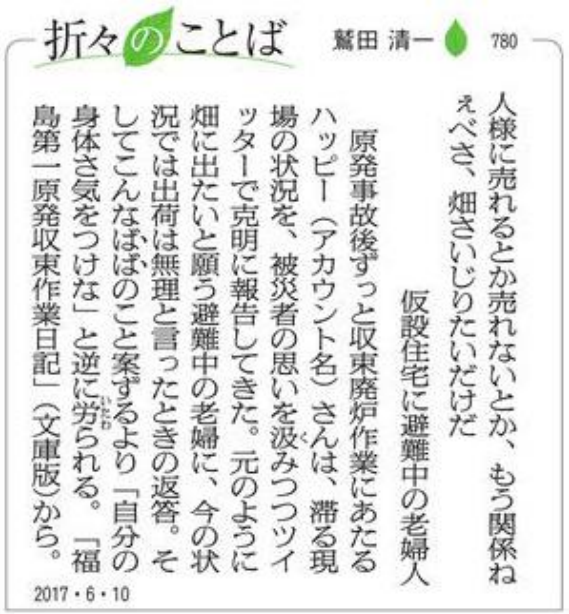
益田ミリ







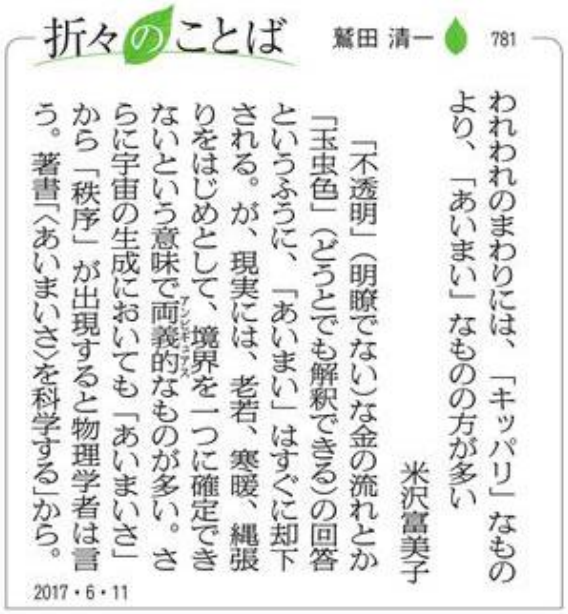




折々のことば
７８１～７８５

われわれのまわりには、
「キッパリ」なものより、
「あいまい」なものの方が多い

米沢富美子


折々のことば　鷲田清一　781

われわれのまわりには、「キッパリ」なものより、「あいまい」なものの方が多い

米沢富美子

「不透明」（明瞭でない）な金の流れとか「玉虫色」（どうとでも解釈できる）の回答というふうに、「あいまい」はすぐに却下される。が、現実には、老若、寒暖、縄張りをはじめとして、境界を一つに確定できないという意味で両義的なものが多い。さらに宇宙の生成においても「あいまいさ」から「秩序」が出現すると物理学者は言う。著書〈あいまいさ〉を科学する」から。

2017・6・11

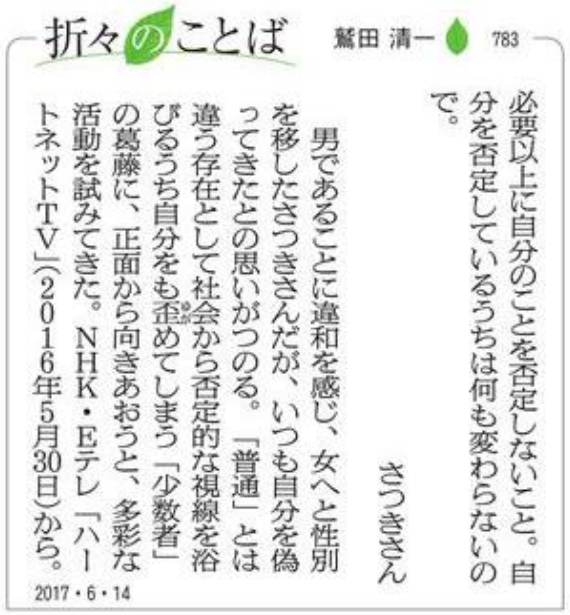

折々のことば　鷲田清一　782

私は自分の人生を棒に振れなかった、ということだろう。今夜は牛の屍体を喰うた。

車谷長吉

詩人・高橋順子の著書「夫・車谷長吉」から。凄みのある私小説で知られる作家の車谷から、結婚前、会ったこともないのに立て続けにもらった絵手紙の一節。四十半ばの彼は、野垂れ死にするつもりでさまよい歩いた土地を再訪した時の思いをこう綴っていた。肉を「屍体」と記すなど次々と来る手紙の「ただならぬ気配」とその「繊い神経」に戸惑い、すぐに返事を出せなかった。

2017・6・13


折々のことば　鷲田清一　783

必要以上に自分のことを否定しないこと。自分を否定しているうちは何も変わらないので。

さつきさん

男であることに違和を感じ、女へと性別を移したさつきさんだが、いつも自分を偽ってきたとの思いがつのる。「普通」とは違う存在として社会から否定的な視線を浴びるうち自分をも歪めてしまう「少数者」の葛藤に、正面から向きあおうと、多彩な活動を試みてきた。NHK・Eテレ「ハートネットTV」（2016年5月30日）から。

2017・6・14


折々のことば　鷲田清一　784

おい、ヒマやろ……ヒマなはずや。

木村重信

美術史の教授からこう畳みかけられた若き日の陶芸家、柳原睦夫は、ある講演の仕事を回された。当日なんと教授が会場にいる。その後、家に連れて行かれ、たらふくご馳走になる。そして今晩も泊まれと。強引な教授、実は若い作家の暮らし向きを案じ、世に必死で売り込もうとしたのかも。昔はこんな面倒のみかたがあった。91歳で逝った木村を偲ぶ会での柳原の回想から。

2017・6・15


折々のことば　鷲田清一　785

経験は物語られることによって初めて経験へと転成を遂げる

野家啓一

心の内を赤裸々に吐露する「告白」も、社会の姿を粉飾なしに描写する「写実」も、叙述の形式こそ違え「真実をありのままに描く」ことを素朴に信じている。が、文学も科学も歴史もそれぞれに物語られるもの。「素顔」もまた仮面の一つでない保証はない。過去の経験を厚く濃やかに象り、語り伝える術が、昨今、ひどく痩せ細っていないかと哲学者は問う。「物語の哲学」から。

2017・6・16

折々のことば
７８６～７９０

ときに「変人」と
呼ばれるような人の力が、
社会には必要です。

奥山恵美子



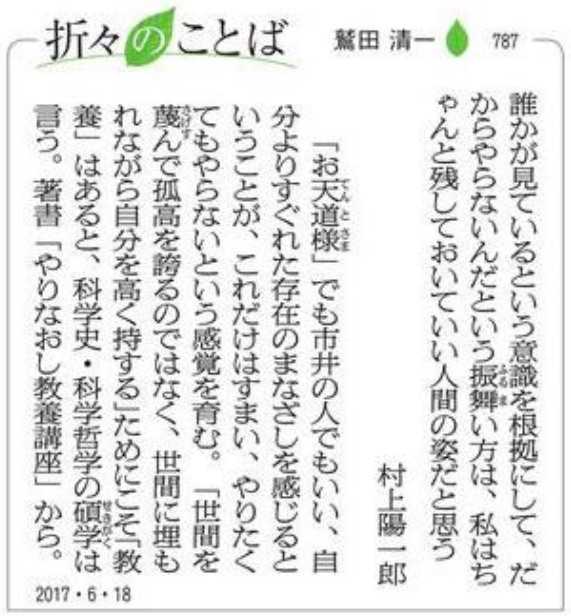
折々のことば　鷲田清一　786

町内会的なコミュニティを包み込んで維持する、その力を持つのが宗教だ

橋本治

キリスト教会の葬儀でお手伝いをするご婦人方が、炊き出しをする町内の世話役のようだったと作家は言い、そこに市民生活にしかと棲み着いた宗教の姿を見る。孤立した魂を救済するにも、「社会から孤立してしまった人間に必要なのは、その人を受け入れてくれる社会だ」という当たり前のことを忘れないように、と。随筆「人と社会と宗教と」（「一冊の本」6月号）から。

2017・6・17



折々のことば　鷲田清一　787

誰かが見ているという意識を根拠にして、だからやらないんだという振舞い方は、私はちゃんと残しておいていい人間の姿だと思う

村上陽一郎

「お天道様」でも市井の人でもいい、自分よりすぐれた存在のまなざしを感じるということが、これだけはすまい、やりたくてもやらないという感覚を育む。「世間を蔑んで孤高を誇るのではなく、世間に埋もれながら自分を高く持する」ためにこそ「教養」はあると、科学史・科学哲学の碩学は言う。著書「やりなおし教養講座」から。

2017・6・18



折々のことば　鷲田清一　788

政治を笑い、宗教を笑うことができるのは、とても幸せな社会である

釈徹宗

説法と落語の密接な関係を論じた宗教学者・僧侶の著「落語に花咲く仏教」から。落語のユーモアはお偉方に射す権威をちゃかす。またその篤信者たちにおける「信仰の偏り」を脱臼させる。秩序をまぜかえす「落とし咄」はしかし、江戸時代には僧自ら本堂で語っていた。民衆のどまん中、その低い場所から語りだされる仏教の教えにはこういう良い加減の懐の深さがあった。

2017・6・19



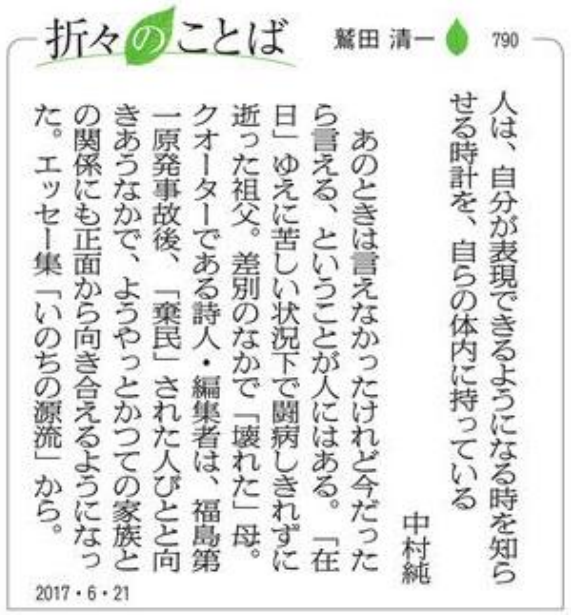
折々のことば　鷲田清一　789

ときに「変人」と呼ばれるような人の力が、社会には必要です。

奥山恵美子

複合文化施設「せんだいメディアテーク」の職員との懇談中、初代館長でもあった仙台市長がこう語った。社会をよりよいものに変えてゆくには、型破りな人の存在が欠かせない。なじみすぎたルールを変えるためにも、次世代のことを心底案じる人びとが集うためにも、突拍子もない発想で人びとの思考を脱臼させるような人が平然とそこにいる、そんな場所をまずは創らねば。

2017・6・20



折々のことば　鷲田清一　790

人は、自分が表現できるようになる時を知らせる時計を、自らの体内に持っている

中村純

あのときは言えなかったけれど今だったら言える、ということが人にはある。「在日」ゆえに苦しい状況下で闘病しきれずに逝った祖父。差別のなかで「壊れた」母。クオーターである詩人・編集者は、福島第一原発事故後、「棄民」された人びとと向きあうなかで、ようやっとかつての家族との関係にも正面から向き合えるようになった。エッセー集「いのちの源流」から。

2017・6・21

折々のことば
７９１～７９５

上手な職人が使用した
道具というものは
美しく残るものです。

土田昇

折々のことば　鷲田清一　791

何も彼も知りぬいていて何にも知らぬ顔をしていることが、村の中にあるもろもろのひずみをため直すのに重要な意味を持っていた。

宮本常一

うちは三代にわたって何一つ悪いことはしていないと、「暗夜胸に手をおいて」はっきり言い切れる人がいたら申し出てほしい……。かつて村の寄りあいで誰かが頑なに意を通そうとすると、すぐに老人がこう言って諫めたと民俗学者は言う。すると村人はたいてい口をつぐみ、譲りあいの緒も見いだせた。「忘れられた日本人」から。

2017・6・22

折々のことば　鷲田清一　792

音楽が音楽であるのは、それを音楽と受けとる耳があるからだ。

相倉久人

「聴く耳さえあれば、波の音や街の雑踏も立派に音楽として成立する」と、音楽評論家は言う。音楽は、奏でる人、聞こえる音と、それに耳を傾ける人の共同作業としてある。このことは、深い悲しみの中に沈む人の語りについても言える。言葉は、聴く人の、祈るようにして待つ耳があってはじめて、ぽろりとこぼれ落ちる。「ＦＭｆａｎ」（２０００年第21号）のＣＤ評から。

2017・6・23

折々のことば　鷲田清一　793

上手な職人が使用した道具というものは美しく残るものです。

土田昇

酷使せずここぞという時にのみ使ったから？　丁寧に手入れされてきたから？　いい道具は使う時に無駄な力が入らないから？　いずれにせよ疎かに扱われなかったから。大事にとの思いは、道具職人の丹念で正確な仕事への敬意からくる。同じように建物や室内も、佇まいからその空間が敬意をもって使われてきたかどうかがわかる。刃物店主・研究家の「職人の近代」から。

2017・6・24

折々のことば　鷲田清一　794

人間の心というものは、かかる大変に押詰った場合において、なお幾分の空地があるという事が、かえって甚だ悲しく思われた。

小出楢重

洋画家は子供の頃より、つまらないことに遭遇すると途端に心の中でチャンチキチンと囃子が鳴りだしたという。例えば算術の授業で、いくらの買物をして釣銭がどうこうという問題が出たとき、釣銭なんかいらないよという思いとともに。が、父の臨終にあってもこの囃子が聞こえたときは、やはり少しこたえた。随筆「雑念」から。

2017・6・25

折々のことば　鷲田清一　795

人間は自分自身がはりめぐらした意味の網の中にかかっている動物である

クリフォード・ギアーツ

まばたくといった目の単純な動き一つとっても、そこには幾重もの意味が絡みついている。異文化どころか自文化を理解するにも、この錯綜した意味の脈絡の丹念な読みが必要だ。文化を解釈するのは、消えかけた字、不可解な省略や訂正、含みのある注釈などでいっぱいの原稿を読むようなものなのだと、米国の文化人類学者は言う。「文化の解釈学」（吉田禎吾ほか訳）から。

2017・6・26

折々のことば
７９６～８００

方言がおとしめられるのは、
わからないからではなく、
わかればことなのである。

田中克彦

折々のことば　鷲田清一　796

人間てね、親が徘徊して困ってると言う時は泣くけども、人が自分とおんなしことを話すと笑うんですよ。

高見国生

認知症の親の介護をする者同士が悩みを話していると、「ああ、あの人も同じか」と知って、自分を大勢の中の一人として見られるようになると、「認知症の人と家族の会」の前代表理事は語る。自分に距離がとれると、自分を嗤う余裕も得られる。人はこういう形でも知らぬまに支えあっている。本紙6月8日付のインタビューから。

2017・6・27

折々のことば　鷲田清一　797

How many deaths will it take till he knows that too many people have died?

ボブ・ディラン

「いったいどれだけの人が死ねば、あまりに多くの人を亡くしたと悟るのだろう」。それは非業の死を告げる紙切れ？　だが、墜ちてきても誰も拾おうとせず、またどこかへ舞ってゆく。知らされても誰も正視せず、答えは宙に浮いたまま。取り返しのつかない事態がその後に？　半世紀経っても今を歌っているかのよう。米国の歌手の曲「風に吹かれて」から。

2017・6・28

©Copyright 1962 by Special Rider Music

折々のことば　鷲田清一　798

通の客は最後まで一言も発しない。

太田和彦

いい居酒屋は、主人が席の全部を見渡せる設えになっており、客からもつねに主人の姿が見える。だから注文はたいてい眼で、酒がなくなれば徳利を上げるだけでいいとデザイナーは言う。けれども他の客の会話はきっと、聞くでもなく聞こえている。同じデザイナーの佐藤卓は、いい居酒屋では自分の「輪郭がなくなるような感覚」があると。「ｄａｎｃｙｕ」7月号での対談から。

2017・6・29

折々のことば　鷲田清一　799

方言がおとしめられるのは、わからないからではなく、わかればこそなのである。

田中克彦

方言は「規範からはずれた、くずれたことば」ではない。地のことばはそれぞれにちゃんと生きている。人が「標準」をでっち上げるから、傍系として蔑まれてしまうのだ。聞いてもわからない遠いことばは方言とはいわれない。博多弁にぞっこんの私は、福岡に出張した日は、駅のホームで地の人の声音にふれたくていつも数本やり過ごす。言語学者の「ことばと国家」から。

2017・6・30

折々のことば　鷲田清一　800

クマに限らず野生動物たちがたじろぐのは、不意を突かれる行動や対応である。

田口洋美

野生動物を威嚇するには「不規則性」が最も効果があると、人里に出没する野生動物への対応をめぐって、狩猟文化研究者は語る。人びとの無関心や社会からの酷薄な要求にじかに晒されている現代の若い世代も、ある意味これと似た状況にあるのでは？　意識の表面が保護膜でくるまれることもないまま、不意の接近におびえているように思えて。『クマ問題を考える』から。

2017・7・1

折々のことば
８０１～８０５

なにをくよくよすることがある。
……突きとばされて転（ころ）いだら、
ついでにひとりで起きあがって
歩くとこを見せてやらにゃいかん。

壺井栄

折々のことば　鷲田清一　801

なにをくよくよすることがある。……突きとばされて転いだら、ついでにひとりで起きあがって歩くとこを見せてやらにゃいかん。

壺井栄

小説『岸うつ波』で主人公の女性が、母の代わりに育ててくれた祖母から言われた言葉。古い仕来りの中で「内縁の妻」「連れ子」「てなし子」などと指さされ、狭い所に追いやられても、それに耐えかつ抗って生き抜いてきた女三代の険しい人生を、主人公の眼から描く。一度きりの人生を「悔いや嘆きに終らせてはならぬ」と心に決めて。

2017・7・2

折々のことば　鷲田清一　802

当たり前のことに気がつくのに時間がかかる……年を取ることのいいことのひとつです

福岡伸一

遺伝子の一つを削除してもマウスに何の異変も見られない……。若き日のこの気づきが、欠損が生じても新たな均衡を立ち上げる回復力や可塑性こそ生命を生命たらしめているものだという「動的平衡」の研究につながったと、生物学者はふり返る。人生も日々の「修復」が基本？　NHK・Eテレ「SWITCHインタビュー達人達」（6月3日）での音楽家・坂本龍一との対談から。

2017・7・3

折々のことば　鷲田清一　803

「お腹いっぱいになった？」　アタマを撫でられたような、懐かしいこの響き。

クミコ

温かい食べ物が喉を通って胃に溜まるとき、人は満ち足りを感じる。かつてそういう満足を養育者からくり返し享けたという体験が、人の愛着や安心という感情と、他者への厚い信頼とを育んできた。生計の糧を「食い扶持」と言い、稼ぎがあることを「飯が食える」と言うのも、きっとこの充足感と無縁ではあるまい。歌手のブログ「だって人生は片道切符」（6月3日）から。

2017・7・4

折々のことば　鷲田清一　804

「さま」をつけるまで行きつけない。手前でことぎれる。ああ、おつかれ。

小池昌代

〈この世を生き抜くためには／挨拶はひとつでいい／「お疲れ」だけで事足りる〉。この3行で締めくくるトーマ・ヒロコの詩「ひとつでいい」を引きつつ、詩人は「若い世代のこの疲れ方、尋常のものではない。もはや個人の疲れは超えた。これは時代の疲労なのだ」と言う。疲れは、納得できないまま生きるところにつきまとう感情なのだろう。編著『通勤電車でよむ詩集』から。

2017・7・5

折々のことば　鷲田清一　805

のぼさん、のぼさん……サア、もう一遍痛いというてお見

正岡子規の母

俳人の子規（幼名・升）は晩年、脊椎カリエスに侵され体じゅう膿が溜まる。褥瘡も惨く、激痛にのたうつ息子を看病する母は、ずっと「しかたがない」としか言わなかったが、ついに事切れた子規にこう声をかけた。やっと楽になれたのだろうが、私は傍でもっと一緒に苦しんでいたいとの親心。森まゆみの『子規の音』から。臨終の様子は河東碧梧桐の『子規の回想』にも。

2017・7・6

折々のことば
８０６～８１０

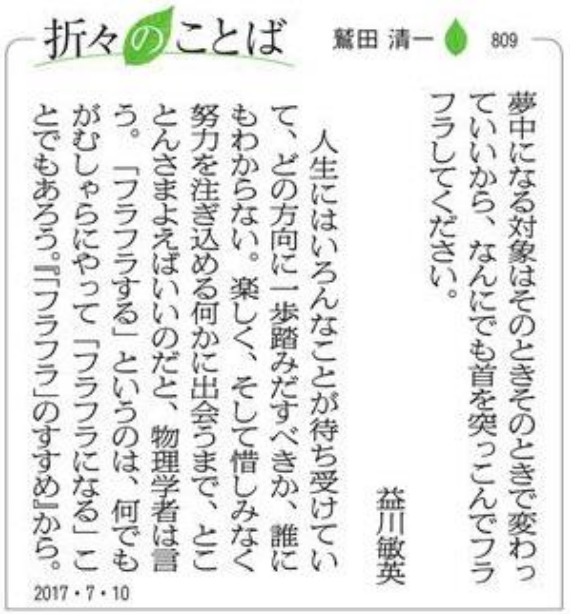
出来れば理由は聞かないで欲しい。
大切なことには、理由がないのだ。

伊勢真一











折々のことば
８１１～８１５

悲しいことを泣き叫ぶ以外の方法を
もっている生き物に生まれたかった

最果（さいはて）タヒ

折々のことば　鷲田清一　811

困っている人と動物がいたら、学校や仕事に遅れてもいいから助けなさい

ベッキーさんの父

「幸せですか？」。顔を見るとかならずそう訊くタレントの（英国人の）お父さん。仕事で遅くに帰宅するとお風呂を入れ、寝坊した時は履きそうな靴を3足、玄関に並べておいてくれる。世間の声に惑わされずに、きみはいま幸福か、辛い思いをしていないかと、いつも娘のことを案じている。こういう眼差しによって人は支えられる。本紙5月19日付の「おやじのせなか」から。

2017・7・12

折々のことば　鷲田清一　812

どっしりといのちと向かい合うのは、それなりの体験をしてきたひとが多い。

小笠原望

「切なさ」が心にないと介護はできないが、「優しさ」だけでも無理。介護は「一緒に泥まみれになる世界」だからと、高知・四万十川のほとりの医院を拠点に、長年在宅医療に取り組む医師は言う。大量の便が出た紙おむつを替える時、ベテランのヘルパーさんは思わず「おめでとうございます」と声を上げるとか。その瞬間、雑然とした部屋に光が射す。『診療所の窓辺から』より。

2017・7・13

折々のことば　鷲田清一　813

思うにね、あれは〝ワシらの成人式〟ですよ！

木山英求（李英求）

のちに広島カープから韓国プロ野球界に移籍する内野手が10代だった頃、在留外国人は14歳から外国人登録と証明書の常時携帯が義務づけられていた。一人で市役所に向かい、申請の手続きを済ませた。海の両側で「在日」として理不尽な体験を重ねるも、やがて両方を見られる〝第三の文化〟の住民だと思うに到る。文筆家、鄭仁和の『いつの日か海峡を越えて』から。

2017・7・14

折々のことば　鷲田清一　814

完全なドイツ人、完全なユダヤ人がいるだろうか？　それは単なる抽象概念でしかない。

プリーモ・レーヴィ

アウシュヴィッツからの帰還者の一人が、樹脂を納入したドイツの会社に苦情の手紙を書く。その回答にかつて強制収容所に勤めていた人物の名を見つけ、個人的な手紙を書き送る。相手をドイツ人の、死刑執行人の「代表」と見るのではなく、彼からの返信を慎重に吟味する。人が本当に愛しまた憎むのは、国民ではなくあなたなのだ。短編小説集『周期律』（竹山博英訳）から。

2017・7・15

折々のことば　鷲田清一　815

悲しいことを泣き叫ぶ以外の方法をもっている生き物に生まれたかった

最果タヒ

悲しいから泣いている？　そんな解釈はひもじすぎる。悲しみはもっと艶やかに滲むもの。「赤い色」に惹かれて抽象的な絵を描く人がいるように、「りりらん」という音の響きに誘われて不思議な文章を書く人がいるように。「もやもやしたものをもやもやしたまま」手渡そうとする言葉は、次行へのありきたりの予感をたえず裏切る。詩集『死んでしまう系のぼくらに』から。

2017・7・16

折々のことば
８１６～８２０

大衆が見たがるものを
提供しているのは、
大衆自身である。

尾原宏之


折々のことば　鷲田清一　816

心の一番奥底にある傷を刺激せねば、この恐怖には勝てぬと段蔵は思い極めた。

土橋章宏

東北の貧しい小藩が、幕府老中の陰謀で、5日以内に参勤せよとの、端から無理な命を受ける。藩主らは知恵を絞り這々の体で江戸城にたどり着く。が、最後のところで幼少以来のある恐怖に身を固まらせる藩主。護衛の任にあたる忍者が即座に思いついた策がこれ。心の奥にしまい込んできた痛い傷の想起が、人を奮い立たせる最後の劇薬となる。小説『超高速！　参勤交代』から。

2017・7・17

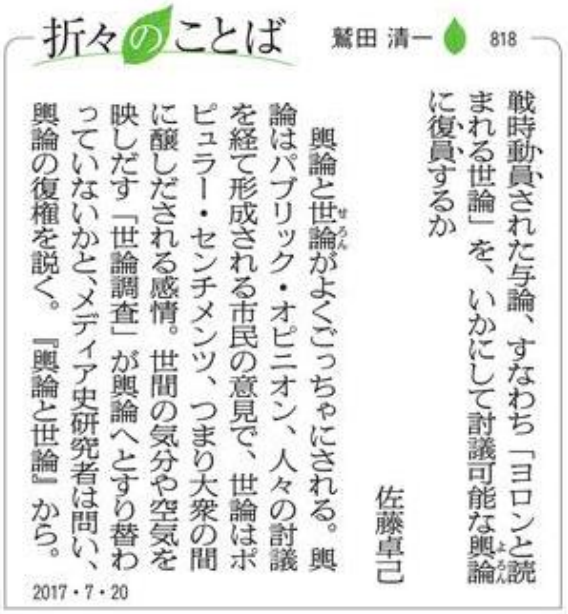

折々のことば　鷲田清一　817

大衆が見たがるものを提供しているのは、大衆自身である。

尾原宏之

戦後、NHKで「日曜娯楽版」や「のど自慢」などの番組を立ち上げた丸山鐵雄（政治学者・眞男の兄）の、「本当の大衆の歌」を求めた格闘を、政治思想史家はこう評す。メディアによる大衆の指導と大衆への迎合とをともに斥けたが、組織の中では、大衆が大衆をいたぶる構図にも、企業が大衆に「唄わせる」構図にも、ついに抗いきれなかった。『娯楽番組を創った男』から。

2017・7・19


折々のことば　鷲田清一　818

戦時動員された与論、すなわち「ヨロンと読まれる世論」を、いかにして討議可能な輿論に復員するか

佐藤卓己

輿論と世論がよくごっちゃにされる。輿論はパブリック・オピニオン、人々の討議を経て形成される市民の意見で、世論はポピュラー・センチメンツ、つまり大衆の間に醸しだされる感情。世間の気分や空気を映しだす「世論調査」が輿論へとすり替わっていないかと、メディア史研究者は問い、輿論の復権を説く。『輿論と世論』から。

2017・7・20


折々のことば　鷲田清一　819

耳と眼はいずれも……流儀は異なっているにしても、距離をおいた触覚の器官である。

ミケル・デュフレンヌ

魚は水圧の変化で何かの接近を感じるという。この皮膚感覚に聴覚の起源があるように、視覚も光の振動、光の反射に対する生体の皮膚感覚にあると、フランスの美学者は言う。だとすれば、見ること、聞くことの中から、物の肌理や音の粒にじかに触れるという経験を取り出すこと、それに画家や音楽家はずっと挑んできたということになりそうだ。『眼と耳』（桟優訳）から。

2017・7・21


折々のことば　鷲田清一　820

文学者の生原稿を読む時は……耳を澄ませてその文章の底に流れている語調とリズムをできるだけ注意深く聴き取ること

坂本忠雄

かつて小林秀雄から「読みの浅さ」を警められた文芸誌「新潮」の元編集長は、以後「眼で字面を追う」のでなく、文にこう向かうよう自らに課したと言う。言葉はいのちの弾みを圧縮したもの。その息遣いごと抱擁するのでなければ、言葉に託されたものを聞きそびれてしまうということか。『小林秀雄と河上徹太郎』のあとがきから。

2017・7・22

折々のことば
８２１～８２５

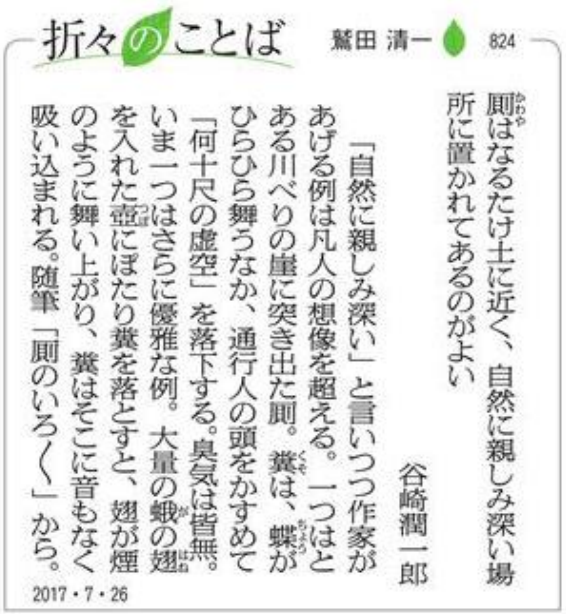
「もちろん、できっこない！……
ところが（彼は）
それをやってのけた」

ロアルド・ダール







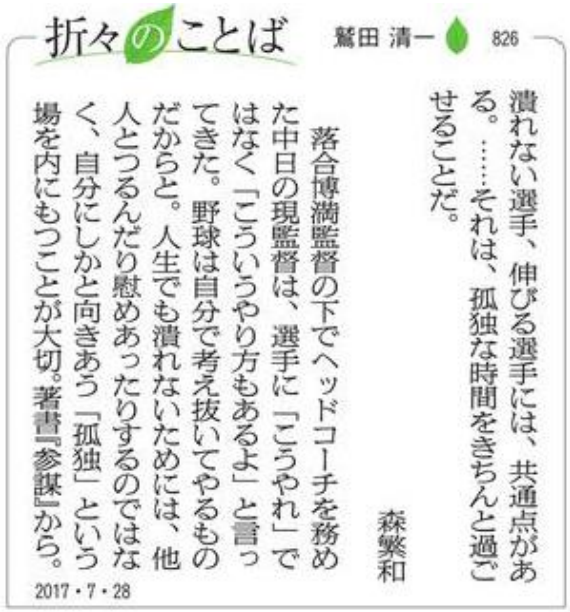




折々のことば
８２６～８３０

世の中には
「誤解をしたくてたまらない」という
きわめて独特な決意を持って
生きている人々が意外にも多い

金哲（キム・チョル）


折々のことば　鷲田清一　826

潰れない選手、伸びる選手には、共通点がある。……それは、孤独な時間をきちんと過ごせることだ。

森繁和

落合博満監督の下でヘッドコーチを務めた中日の現監督は、選手に「こうやれ」ではなく「こういうやり方もあるよ」と言ってきた。野球は自分で考え抜いてやるものだからと。人生でも潰れないためには、他人とつるんだり慰めあったりするのではなく、自分にしかと向きあう「孤独」という場を内にもつことが大切。著書『参謀』から。

2017・7・28

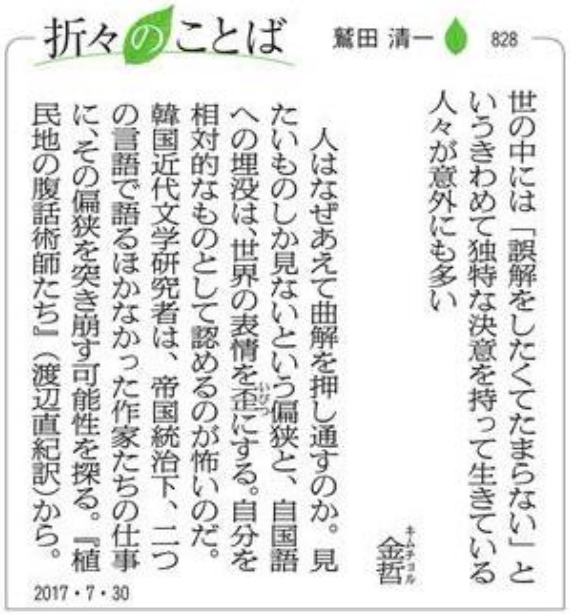

折々のことば　鷲田清一　827

いい加減な誉めかたをするのは、かわいそうなことだ。

植草甚一

ジャズ奏者、エリック・ドルフィーの吹くフルートやバスクラリネットには「死地におもむくような」切迫感があったと、評論家は言う。分類不能な前衛の試みは理解可能な型にはめて評されがちで、レギュラーバンドももてない悲運を舐めた。晩年には「あそこへ」「どこへ」「昼食のため外出中」といった曲を吹いた。エッセー集『ぼくたちにはミンガスが必要なんだ』から。

2017・7・29


折々のことば　鷲田清一　828

世の中には「誤解をしたくてたまらない」というきわめて独特な決意を持って生きている人々が意外にも多い

金哲

人はなぜあえて曲解を押し通すのか。見たいものしか見ないという偏狭と、自国語への埋没は、世界の表情を歪にする。自分を相対的なものとして認めるのが怖いのだ。韓国近代文学研究者は、帝国統治下、二つの言語で語るほかなかった作家たちの仕事に、その偏狭を突き崩す可能性を探る。『植民地の腹話術師たち』（渡辺直紀訳）から。

2017・7・30


折々のことば　鷲田清一　829

「世間」の天秤は決して一方に跳ねあがったッぱなしにならないものだ

里見弴

世間を隅から隅まで知り尽くしたかのように言う「苦労人」、世渡り上手な「世間師」、権勢に乗じて世間を掌中に収めたかと勘違いする「指導者」。『世間』を甘くみてかかった仕事に、成功なり勝利なりの、完き姿をとったものは嘗て一つもない」と小説家は言う。世間はでたらめに動きはするが、天秤の竿が垂直に突っ立ったまま動かなくなることもまたないと。随筆「世間」から。

2017・7・31


折々のことば　鷲田清一　830

どこか生煮えだったり、あんまり完璧にしすぎないって主義があるもんですから。

仲條正義

資生堂のPR誌「花椿」のアートディレクターを40年以上にわたり務めたグラフィックデザイナーは、品の良いレイアウトや流行りものはあえて尽けてきたと言う。整いすぎると次の身動きが難しくなる。わずかな弛みや綻びがあれば、そこに割り切れない思いをそのまま注げる。時代に添い寝するのではなく、その奔流を巧くかわす技？　雑誌「ブルータス」7月1日号から。

2017・8・1

折々のことば
８３１～８３５

ものをつくる人には、
人が気づかないようなところを
掘り下げる役割がある

荒井良二

折々のことば　鷲田清一　831

非常の際に臨んで、その人の真実が顕れる

森銑三

「徳川の遺臣」としてその生涯を全うしようとした成島柳北は、晩年、新聞社の社長など新聞人として活動する。明治政府による弾圧下、記者ともども投獄されたとき、他の在獄者がこぞって「しょげ」あるいは「高ぶる」なか、彼一人「平素の態度を失わなかった」。おのれが定めた矩に沿い自身を限定できてはじめて人は真の自由を得る？　近世学芸史家の『明治人物閑話』から。

2017・8・2

折々のことば　鷲田清一　832

ものをつくる人には、人が気づかないようなところを掘り下げる役割がある

荒井良二

問題を前にして人はつい一つの答えを求めるが、それは「さまざまな可能性を狭める」と絵本作家は言う。だから絵本作りのワークショップでも、作品を作るより「？」を持って帰る」ことを大事にしている。すると「この手があったか！」と唸らされるようなものが出てくると。いつもと違う「引き出し」をいくつ持てるかに幸福はかかっている？　『ぼくの絵本じゃあにぃ』から。

2017・8・3

折々のことば　鷲田清一　833

「泣く時はほんまに泣いてしもたらあかんねんな、ちょっとボケ気味に、とぼけるように言うほうが悲しみは表現できるもんや」

六代　豊竹呂太夫

人形浄瑠璃文楽太夫は、松竹新喜劇の先代渋谷天外と藤山寛美の「泣き笑い」の芝居からこう学んだと言う。語りにおいては「聴いてはる人の逆を突くような行き方が大事や」と。悲しみを抑え込む、その心根のほうがいっそう悲しい。浄瑠璃は人の心をその二重底ごと語る。国文学者・片山剛との共著『文楽・六代豊竹呂太夫』から。

2017・8・4

折々のことば　鷲田清一　834

グルーヴする瞬間というのは、プレイヤー同士が互いに相手のことをおもんばかって我慢に我慢を重ねているとき……なんだ。

大野雄二

グルーヴは、たまらなく気持ちがいいという、昔の「イカす」、今の「ヤバい」に近いちょっと神がかりなノリのこと。そういうときは普段どおりやっても凄い演奏になるのだが、誰かが一人勝手に興奮してこらえきれないと、演奏は破綻してボロボロになると、作曲家・ジャズピアニストは言う。『ルパン三世 ジャズノート&DVD』から。

2017・8・5

折々のことば　鷲田清一　835

大切なのは、名前じゃないよ。つけた名前をどれだけたくさん呼ぶかさ。

原正和

名前は自分で決めたいなと言う女の子に父親がある男の話をして聞かせる。彼は念願の子どもを授かって、さてどんな名前をつけるか悩みに悩む。ふと思いついた、島で一番美しいパール（真珠）の名も、娘はもっと大切な存在だから満足がいかない。とうとう名前を探す旅に出た父は、遭難時、救ってくれた男にこう諭される。童話作家の『お父さんと お話のなかへ』から。

2017・8・6

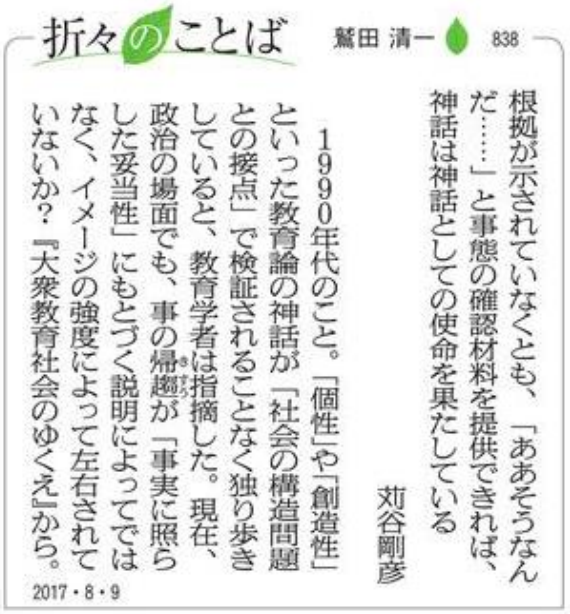
折々のことば
８３６～８４０

誰だって笑って気持ちよく働ければ、
それがいいと思っています。
でも、はじめからそこを目指すと
駄目なんだと思います。

武藤北斗











折々のことば
８４１～８４５

普段できないことは、
災害のような非常時には
なおのことできない。

遠藤恵子

折々のことば 841

鷲田清一

島に隔離されると、サイズの大きい動物は小さくなり、サイズの小さい動物は大きくなる。

本川達雄

大氷河時代、大陸ではマンモスがのし歩いていたが、孤島ではゾウは仔牛ほどの、ネズミは猫ほどのサイズになった。捕食獣が餌の不足で減って、身を護るために大きく、物陰に隠れるために小さくなる必要がなくなった。哺乳類が「無理のないサイズ」に戻ったのだと動物生理学者は言う。グローバル化は生きものには適さないということか。『ゾウの時間 ネズミの時間』から。

2017・8・12

折々のことば 842

鷲田清一

かなふはよし、かないたがるはあしゝ

千利休

客と亭主は茶会にどのような心持ちで臨めばよいかと問われ、利休はこう答えたという。茶の湯の心に通じた者同士ならよいが、未熟な人たちが向きあう場合、互いに心をうかがい迎合しようとするので、ともに道を間違うと。相手の心に叶おうとするのは諂いにほかならず、この「無理」が趣向をつくりものにする。茶道研究家・筒井紘一の『利休聞き書き「南方録 覚書」』から。

2017・8・13

折々のことば 843

鷲田清一

みなさまの　温ったきゃぁ気持ちが　心に沁みでってば　陸前高田をこれからも　めんこがってけらっせん

阿部和明

震災後、仮設で営業する鮨屋の大将が遠来の客に配る名刺大の感謝状の一節。将来が不安で毎夜睡眠薬の世話になるが、「お客さんの顔見たら、辛いこと忘れてスイッチが入ってピエロになれる」と言う。ワサビてんこ盛りの「なみだ巻」、涙のお代は２００円と。ＮＮＮドキュメント'17「うったづぞ陸前高田　人情仮設の鮨」（6月4日）から。

2017・8・14

折々のことば 844

鷲田清一

あんたには在る。おれたちには無い。在るひとに、無いひとの気持ちは解らないよ

ある高齢のホームレスの男性

震災と原発事故で避難生活を強いられている人の痛苦と、出稼ぎで郷里を離れたまま帰る家を失くした人の痛苦を繋ぐ「蝶番」のような小説『ＪＲ上野駅公園口』。そのあとがきで柳美里は、取材中に返された言葉を引く。思えば彼女自身も20年前の芥川賞受賞時、「私は日本人でも韓国人でもない。家族もない。そのないということを、書き続ける上で大切にしたい」と語っていた。

2017・8・15

折々のことば 845

鷲田清一

普段できないことは、災害のような非常時にはなおのことできない。

遠藤恵子

災害時の避難生活では、下着やトイレの問題、異様な気配に怯える幼児のケア、性犯罪の増加など、大ぶりな視線からは外れる難事が多々ある。そして何より日頃からの地域内のつながりが試される。だから被災地の支援や避難所の運営には女性のリーダーが欠かせないのだと、せんだい男女共同参画財団の理事長を長く務めた家族社会学者は、私との語らいの中で声を強めた。

2017・8・16

折々のことば
８４６～８５０

見えるものをそのまま写し取るのはとてもいいことだが、記憶のなかに留まったものを描く方がもっとよい。

エドガー・ドガ



折々のことば　鷲田清一　846

必要なのは激越なオリジナリティではなく、微妙な変化だ。

鴨下信一

テレビドラマ「ふぞろいの林檎たち」で有名な演出家は、落語や歌舞伎、映画を例にとりつつ、「本歌どり」こそ芸術創造の原点だと言う。まず型がありさらにそれをずらすから、観客もどこがどう変わったかがきちんと摑める。暮らしも日々その型の手入れを続け、かつ少しずつ手直ししてゆくことで保たれるのだろう。TBSの「調査情報」昨年7・8月号の「TV日記」から。

2017・8・17



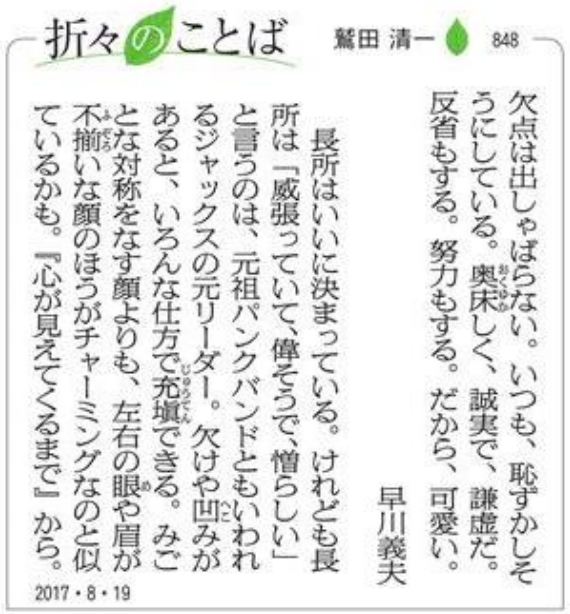
折々のことば　鷲田清一　847

見えるものをそのまま写し取るのはとてもいいことだが、記憶のなかに留まったものを描く方がもっとよい。

エドガー・ドガ

何かの絵を描くとき、画家たちはしばしば、現場でささっと線描したスケッチを横に置く。見えるより以上のものに共振していた手の動きを甦らせようとしてか。フランスのこの画家は、視覚による複写よりも、五感と想像力と記憶との協奏に信頼を置いていた。J・リウォルド『印象派の歴史』（三浦篤・坂上桂子訳）での引用から。

2017・8・18



折々のことば　鷲田清一　848

欠点は出しゃばらない。いつも、恥ずかしそうにしている。奥床しく、誠実で、謙虚だ。反省もする。努力もする。だから、可愛い。

早川義夫

長所はいいに決まっている。けれども長所は「威張っていて、偉そうで、憎らしい」と言うのは、元祖パンクバンドともいわれるジャックスの元リーダー。欠けや凹みがあると、いろんな仕方で充塡できる。みごとな対称をなす顔よりも、左右の眼や眉が不揃いな顔のほうがチャーミングなのと似ているかも。『心が見えてくるまで』から。

2017・8・19



折々のことば　鷲田清一　849

言い切れる正しさなんて、臨床にはないのではないか

徳永進

人工呼吸器の装着、胃瘻栄養、鎮静剤の使用等の是非に、一つの答えはありえない。一人ひとりにそれぞれ事情があり、また感謝と訴訟がいつ入れ替わるやもしれない臨床の現場では、言葉は煮え切らずに淀むばかり。その煮え切れなさを人生や社会を見つめなおす作法へと裏返したらと、鳥取の「野の花診療所」でホスピスケアに取り組む医師は言う。著書『どちらであっても』から。

2017・8・20



折々のことば　鷲田清一　850

おもしろいかつまらないかをなんとか自分でわかるようになりたいと思った。

津村記久子

バイト先の喫茶店で、ある婦人が置き忘れた本を手にとり、はじめて本らしい本に目を通した若い女性の思い。上空に舞い上がろうとせず、感触を確かめながら少しずつ襞を横に拡げてゆくこの思考を信じたい。短篇「サキの忘れ物」から。この言葉、掲載誌「文藝」秋号の編者の言葉、《「社会」から離脱し、「私」の中に〈社会〉をつくること。それが「文学」》だとの思いとも響きあう。

2017・8・21

折々のことば
８５１～８５５

個々の楽器が
それぞれ十分に鳴っているのが
全体にとってベストとは限らない。

鈴木秀美



折々のことば　鷲田清一　851

個々の楽器がそれぞれ十分に鳴っているのが全体にとってベストとは限らない。

鈴木秀美

通奏低音とは「響きの土台」を作るもの。旋律を支える低音に和音をつけてゆく。そして上声部が自由に歌えるよう緩急をつけ、間合いをとる。「一つになって聞こえる」こと、そのために何を優先するかの判断が重要で、自分の楽器がちゃんと鳴っているかは二の次、三の次だとチェリストは言う。人の集団でもしんがりや黒衣、縁の下役が大事。『通奏低音弾きの言葉では、』から。

2017・8・22



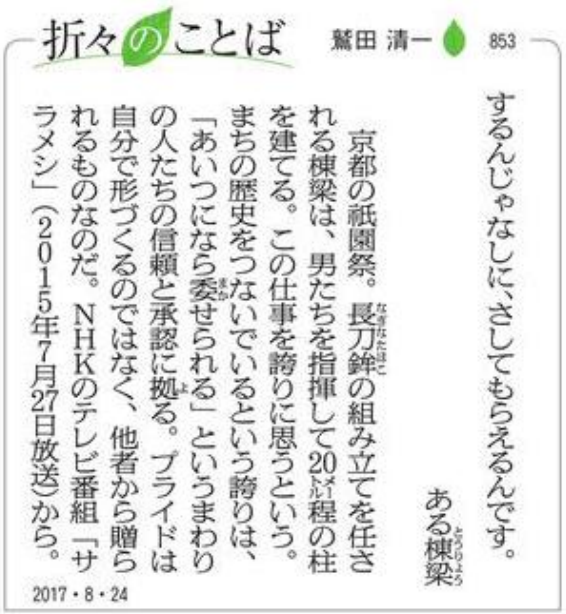
折々のことば　鷲田清一　852

「悪」を名指しにすること……ではなく、われわれをつなぎ合わせる代わりに引き離し、ぶつけ合う「弱さ」が問題なのです。

リヒャルト・ｖ・ヴァイツゼッカー

ナチスへの抵抗を呼びかけたミュンヘン大学生のグループ「白バラ」が封殺されてから50年後、当時のドイツ大統領は同大学でこう訴えた。市民は「私生活に籠もり」、文化人は「空論に傾斜する」。みなが「政治にうんざり」となり、連帯の糸が切断されている、社会のその脆弱さを克服せねばと。演説集『言葉の力』（永井清彦編訳）から。

2017・8・23



折々のことば　鷲田清一　853

するんじゃなしに、さしてもらえるんです。

ある棟梁

京都の祇園祭。長刀鉾の組み立てを任される棟梁は、男たちを指揮して20メートル程の柱を建てる。この仕事を誇りに思うという。まちの歴史をつないでいるという誇りは、「あいつになら委せられる」というまわりの人たちの信頼と承認に拠る。プライドは自分で形づくるのではなく、他者から贈られるものなのだ。ＮＨＫのテレビ番組「サラメシ」（２０１５年７月27日放送）から。

2017・8・24



折々のことば　鷲田清一　854

知らなかった？　お父さんは花粉症だし、お母さんはちくのう症だし、アイちゃんはダウン症。みんな大変なんだよ。

武田愛さんの母

仙台市立太白小学校に通う娘に、自分はダウン症なのかと訊かれ、母が返した言葉。だんだんみなとともに頑張れなくなるアイちゃんに戸惑う級友たちも、私は黄色、私は青と、人それぞれに自分を発色させる仕方が違うと考え、「にじ色」が組の合言葉になった。新聞記者・高倉正樹の『アイちゃんのいる教室　6年1組にじ色クラス』から。

2017・8・25



折々のことば　鷲田清一　855

よろよろって、面白いですよ。あるべきところに辿り着くんですよ、たぶん。

黒田勇樹

事務所との契約が切れた俳優は、それを「落ちぶれ」とはつゆ思わずコールセンターなどで働くうち、個人ホームページに仕事が入り始め、舞台にも出るように。一度コケたら立ち上がれない社会の仕組みを飄々とかわして、受け身でよろよろ歩き続ける。その中でしたたかな批評性をも体得した。フリーライター・武田砂鉄の『コンプレックス文化論』でのインタビューから。

2017・8・26

折々のことば
８５６～８６０

これはいい手だと思って指す手は、
あまりいい手じゃないことが
多いんですね。

羽生善治

折々のことば　鷲田清一　856

誰かを困らせちゃうようなことも、その人の魅力だと思えるんです。

佐藤啓太

浜松市で障害福祉サービス事業に取り組むNPO法人クリエイティブサポートレッツのスタッフは、知的障害のある人、子ども、高齢者、我流の音楽家たちの入り交じる「オーディション」を開催した。それぞれの過剰なまでのこだわりに煽られて、「人生に一度ぐらい、スポットライトにあたってもいいじゃない」と呼びかけた。『雑多な音楽の祭典「スタ☆タン!!」記録集』から。

2017・8・27

折々のことば　鷲田清一　857

これはいい手だと思って指す手は、あまりいい手じゃないことが多いんですね。

羽生善治

いい手と思って指す手は、相手にしても狙いが明確なわけで、可能性の幅は広がらない。感覚的に確信のもてない手、ということはにわかに読みのきかない意外な手の応酬のほうが、将棋では深みのある名局になりやすいと、棋士は言う。人との語らいも思わぬ展開になる時が楽しい。細胞生物学者で歌人の永田和宏の対談集『僕たちが何者でもなかった頃の話をしよう』から。

2017・8・28

折々のことば　鷲田清一　858

宝物みたいだったんだ
宝物みつけたみたいに嬉しかったんだ

よしだよしこ

歌手のオリジナル曲「高野君の焼き鳥屋」から。福島県いわき市の焼き鳥屋で、店主がふとつぶやいた言葉に彼女は衝撃を受ける。「昔原発で働いてた」彼は、福島第一原発近くの郷里で3週間両親を捜し歩き、ついに父母の亡骸が見つかった時のことを、焼く手を止めずに微笑みつつこう語る。その悲しみに想像が追いつかない。その追いつかなさの意味を、歌手はくり返し歌で問う。

2017・8・29

折々のことば　鷲田清一　859

僕ら役者は毎日舞台で躁うつやってるようなもんだから、気楽にやんなさいよ

加藤剛

俳優の竹脇無我さんは躁うつ病で療養中、俳優仲間の加藤さんからこんな手紙をもらったという。生きるとはいくつもの役を演じるようなもの。だから気分の浮き沈みも、自分とうまく折り合えないのも、人の常。一つの役をまじめに演じすぎないようにとの助言か。竹脇さんとアナウンサー・小川宏さんの対談「男たちのカムバック宣言」（『婦人公論』2003年7月22日号）から。

2017・8・30

折々のことば　鷲田清一　860

You may say I'm a dreamer
But I'm not the only one

ジョン・レノン

国境も財産もない、だからたがいに殺しあう理由もない、そんな世界を想像してごらん……。こう言うと人は「僕のことを夢追い人だと思うかもしれない／でも僕ひとりじゃないんだ」と、英国の歌手は唄う。こうした夢をともに紡ぎ続ける中でしか、人が自由に行き交える世界は保てない。ＥＵ首脳会議のトゥスク常任議長も６月、英国のＥＵ残留を願ってこの箇所を引いた。名曲「イマジン」から。

2017・8・31　JASRAC　出 1710242-701 ©by LENONO MUSIC

折々のことば
８６１～８６５

ぼくにとって
デザインがおもしろいのは、
すぐに受けいれられるものではない、
ということがあります。

三宅一生


折々のことば　鷲田清一　861

魂鎮めでなく、魂起こし

栗原彬

「海からの大量殺戮」ともいうべき水俣病の東京展（1996年）に寄せて、政治社会学者はこう書いた。水俣病が国・企業や同時代人に突きつけた問いは、「賠償」や「和解」で済むものではない。「患者」一般ではなく、受難者一人ひとりの遺影を前にして、官庁や企業の人も個々に名をもつ人に戻ってゆく、そうした次元でしか魂の救済には届かないと。『「存在の現れ」の政治』から。

2017・9・1


折々のことば　鷲田清一　862

暑さというものを、勘定に入れて下さい。

古川緑波

エノケンとともに一世を風靡した喜劇役者は、戦後、浅草でお盆興行「お化け道中」を打ち、客を大いに沸かせるが、批評家に「客に媚び」た手抜きの芝居と酷評される。これに、夏のさなかにやる芝居をマトモに評されても「困っちまう」と切り返した。戦時中、愛国者ぶって笑いを片っ端から貶した癖の抜けない小心者の土俵になんか上がるものかと。『ロッパ随筆　苦笑風呂』から。

2017・9・2


折々のことば　鷲田清一　863

ぼくにとってデザインがおもしろいのは、すぐに受けいれられるものではない、ということがあります。

三宅一生

快適さばかりめざすのでなく、本当にこれでいいのですか、もっと別な生き方があるのではないですかといった提案が、優れたデザインにはあるとファッションデザイナーは言う。服なら形ができるだけ単純で、着る人と作る人が「半々に責任をもちあう」ようなのがいいとも。『三宅一生　未来のデザインを語る』（聞き手・重延浩）から。

2017・9・3


折々のことば　鷲田清一　864

星さん、よう光ってはるわ

佐々木正美の母

戦時中、疎開先で極貧の生活を送るなか、学校で必要な費用を心細い面持ちで告げると、母は「一緒においで」と言い、近くの商店に金を借りに行った。帰り道、母は夜空を見上げこう言った。天の下では人の差はあってないようなもの。母は自分の子も人の子も隔てなく面倒をみた。人を超えたものへの眼差しに人の品位は宿る。児童精神科医の『出会いでつむぐ私の半生』から。

2017・9・4


折々のことば　鷲田清一　865

道ひとすじに打ち込む姿は美しいかもしれないが、でも道が2本、3本あって、「これも、あれも」という生き方もいいではないか。

永江朗

出版不況が続くなか、あえて小さな出版社を興す人たちがいる。出版を始めるのは簡単だが、出版を続けるのは難しい。が、それは出版だけで食べていこうとするから。反対に、雑貨販売やエージェント業など兼業で賄えば「ゼニカネの勘定だけでなく何かをすること」ができるとフリーライターは言う。『小さな出版社のつくり方』から。

2017・9・5

折々のことば
８６６～８７０

ものを考えるということは、
嘆きの歌をうたっている
ということではない。

桑原武夫



折々のことば　鷲田清一　866

本を読むにはエネルギーが必要です

中川李枝子

オビや目次を眺め、頁を繰っているうち、ある文章に目がとまる。引き込まれもすればがっかりもする。が、ひたすらそれをくり返す中で、すごい本、つまらない本を嗅ぎわけるこつを憶える。楽して未知の世界はこじ開けられない。課題図書を読むだけ、言われて感想文を書くだけでは「幸福発見の貴重な技術」は身につかないと、児童文学作家は言う。『子どもはみんな問題児。』から。

2017・9・6



折々のことば　鷲田清一　867

誰だって人間に点数をつけようとすると、あんなつまらない顔になる。

松本隆

あるバンドのオーディションを受ける仲間に付き添った高校生のつぶやき。元「はっぴいえんど」のドラマー、作詞家の青春小説『微熱少年』から。受験、就職と、人は人生で何度も品定めされる。一見、選ぶ側が優位にありそうだが、その彼もいつ落ちこぼれるやもしれない。人を選ぶのは、ある条件を満たさないと受け容れられない、そんな寂しい社会を肯定することだから。

2017・9・7



折々のことば　鷲田清一　868

描き続けていると、絵のほうから色々なことを教えてくれるようになる。物理現象や量子論とかまでも、絵の感覚でわかってくる。

荒木飛呂彦

色んなものにそつなく目配りするより、一つのことをとことん究めるほうが、別領域のものについても正確な判断ができるようになる。絵や音楽、文学や科学も、それぞれの流儀で世界を探究する緻密な努力だから。連載30周年を迎えた漫画「ジョジョの奇妙な冒険」の作者の、第41回全国高校総合文化祭での講演（8月1日）から。

2017・9・8



折々のことば　鷲田清一　869

ものを考えるということは、嘆きの歌をうたっているということではない。

桑原武夫

大切なものが壊れてゆく。取り返しのつかないこと、後になって必ず悔いるようなことが起こりつつある……。そうと思うならそれを食い止めるために算段するのが知性だと、フランス文学者は言う。「いいものがいいものとして存続することはきわめて難しい」。京都の景色や風情について述べたものだが、同じことは社会の制度についても言える。随想集『昔の人　今の状況』から。

2017・9・9



折々のことば　鷲田清一　870

遊びを遊ぶ

安田武

凧あげ、蟬とり、竹馬、お手玉、綾とり、花いちもんめ。すっかり見かけなくなった昔の児戯には二つの特徴があった。自然を相手に「ゆっくりと、のびやかに」遊ぶこと。勝ち負けを競うものではないこと。遊びは「合理性を拒否する」ものなのに、余暇として計画したりすれば、遊びを再び合理性の中に閉じ込めることになると、評論家が一昔前警めていた。『遊びの論』から。

2017・9・10

折々のことば
８７１～８７５

不思議なことに、この社会では、
ひとを尊重するということと、
ひとと距離を置くということが、
一緒になっています。

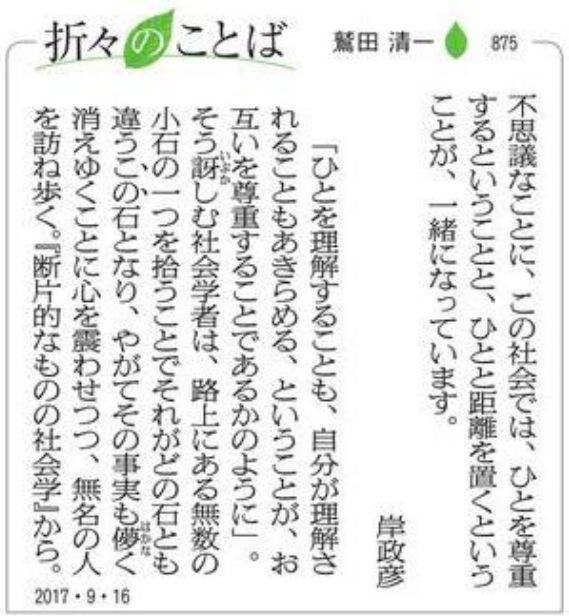
岸政彦











折々のことば
８７６～８８０

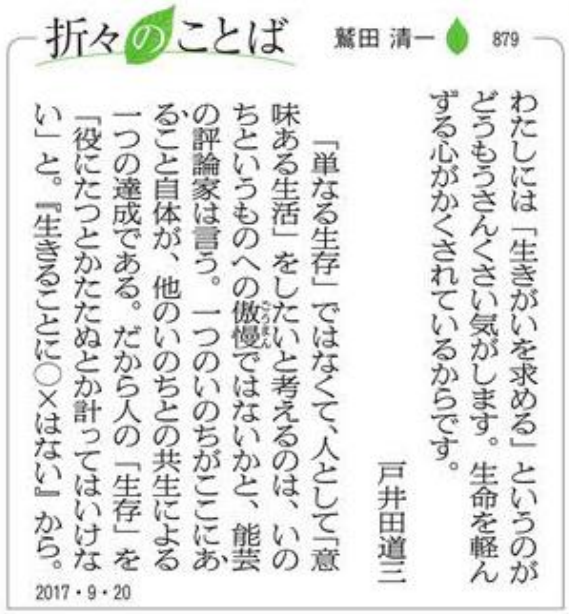
たとえば人についても、
あの人が好き、と言うよりも、
あいつは好きだなあ、
という感じがありますよね。

佐伯一麦（かずみ）











折々のことば
８８１～８８５

本当の孤独は、
誰かと一緒にいるときに
感じるんですよね。

白石一文

折々のことば　鷲田清一　881

今、いのちがあなたを生きている

真宗大谷派東本願寺

２０１１年に催された親鸞聖人の七百五十回御遠忌のテーマ。私が自らのいのちを生きるのではなく、いのちが私を生きていると考えるよう呼びかけた。これにふれて思い出したのが、臨床心理学を専攻する友人の、「身体こそ魂なのであって、魂という容れ物の中を〈私〉が出入りする」という謎めいた言葉。共通するのは、身体を「私の所有物」とする考えを斥けていること。

2017・9・22

折々のことば　鷲田清一　882

死者のすごしてきた人生のキャンバスの上に残る、描かれざる余白を、われわれは恣意的にぬりつぶすわけにはいかない。

霜山徳爾

死の翳は生と対立するものではない。もし人が死ねないとしたら人生はなんと疎ましいものになるかと、臨床心理学者は言う。たしかに人の死とともに亡骸は腐りゆく。が、亡き人の「面影」は人びとの中で生き続ける。消え去ったものとしてではなく、残された者に、折にふれて生の意味を問いかけるものとして。『人間の限界』から。

2017・9・23

折々のことば　鷲田清一　883

戦争が起こらない限り、デモクラシーを鎮圧することはできない。

坂野潤治

だが「一旦戦争が起こってしまえば、戦争が終わるまで、デモクラシーには出番がない」と続く。昭和の日中戦争は軍部の独裁政権がデモクラシーを鎮圧した後に起こったのではない。デモクラシー勢力が躍進していったその「頂点」で勃発した。そして民意はあっけなく「厭戦」から「好戦」へと転じた。戦争を止める契機は何か、日本近代史家は著書『帝国と立憲』で執拗に問う。

2017・9・24

折々のことば　鷲田清一　884

この仕事をするのはべつにきみでなくていい。

ある上司

「代わりはいくらでもいる」と言い足しもする。冷ややかな物言いだ。できるかできないかで人を判断する視線は、いつか必ず自分に返ってくる。心身のちょっとした不調が続けば、同じ言葉をさらにその上司から向けられもする。同じ「代わり」を言うなら、「きみができないんなら誰かが代わりにやってくれるよ」と言いたい。その誰かは「代理」であっても「代替」ではない。

2017・9・25

折々のことば　鷲田清一　885

本当の孤独は、誰かと一緒にいるときに感じるんですよね。

白石一文

白石の小説『ほかならぬ人へ』文庫版の解説を書いている編集者は、失恋した時、白石からこの言葉をもらったという。赤の他人は無関係な人。他方、身近の他人とは始終、意識が交差するので、軋みが生じるたびに理解の限界を思い知らされる。でも差異がより微細に見えてくることが人を理解することだと考えれば、ここでの孤独はむしろしみじみと味わうべきものとなる。

2017・9・26

折々のことば
８８６～８９０

腑（ふ）に落ちない

言い習わし

折々のことば　鷲田清一　886

腑に落ちない

納得できないこと、合点がいかないことを、人はこう言う。受け容れることのできないことは「呑めない」、感心できないことは「戴けない」、油断がならないことは「食えない」とも言う。だから「腹を割って」話すこともできず、つい相手の「腹を探る」ことに。ごそっと、あるいはぐねぐねとうねり、うごめく内臓の波動と、魂の波長とは、どこか深く siしあっているらしい。

2017・9・27

折々のことば　鷲田清一　887

言い習わし

俺たちは会話して、心に刺さった小さいとげを抜いているんだ

イスタンブールの運転手

女優・劇作家のわかぎゑふが、旅行中に知りあった運転手に「トルコの人はお喋りが好きだね」と言った時に返ってきた言葉。人の心は繊細で、すぐ傷がつく。刺さった棘は放っておくと血管を巡りやがて心臓に突きささる。だからそのつどこまめに抜いておくんだと。我慢を重ねるのは徳ではなく毒？　わかぎの脚本・演出による劇「向日葵のかっちゃん」の公演パンフレットから。

2017・9・28

折々のことば　鷲田清一　888

ことばには、他人の言い方が誤用だと思ってしまうと、なぜかそれを黙って見過ごせないという、おかしな魔力がある

神永暁

国語は制度。用法にも規範がある。が、そこに慣習はあっても正解はない。用法を違えていても意が通じるなら、そうした意味の拡張には温かく接したほうがいいと、辞書編集者は言う。「忸怩たる思い」の忸怩も、自らの恥ずべき行いに顔を赤らめること。悔しい、もどかしいという意味は元々なかった。『さらに悩ましい国語辞典』から。

2017・9・29

折々のことば　鷲田清一　889

朝に口論を使うんですよ。すると夕方はいつもより元気になるんです。

ある私立大学の学長

長く病気を患い沈みがちの妻に、朝出かけしなにあえて口論を仕掛けるそうだ。普通なら一日胸くそ悪いはずだが、彼は妻の意地や負けん気を引き出すためと言う。そして「炊飯器のスイッチ、入れといてね」というふうに頼み事もいくつかしておく。突き放したり寄り添ったり、まるで磁石のような関係を長らく続け、労りあってきた間柄だからこそ使える手ではあろうが。

2017・9・30

折々のことば　鷲田清一　890

魔を呼ぶ

井波律子の母

中国文学者の母には一つだけ、怖れる迷信があった。鏡に覆いをかけないでいると「魔」を呼び込むというのだ。鏡の前で自分が二つに裂かれるからか。化粧は、自分が別の自分へと移行する危うい途中だからか。となると、人前で平然と化粧する人は、素なる自分がすでに粧いの産物であるという、もっと怖い事実を知っているのかもしれない。『中国文学の愉しき世界』から。

2017・10・1

折々のことば
８９１～８９５

避けることが遠ければ
尊ぶことがいよいよ重く、
接することが近ければ
軽んずることがますます甚だしい

穂積陳重（のぶしげ）

折々のことば　鷲田清一　891

避けることが遠ければ尊ぶことがいよいよ重く、接することが近ければ軽んずることがますます甚だしい

穂積陳重

他人を実名で呼ぶことを避ける習慣を「忌み名」という。古くから、名で呼ぶことはその人に触れることだと思われてきた。そしてじかに触れないよう、尊ぶべき人は「頭」「社長」「先生」と呼び、蔑むべき人には思い切り近づいて、彼が自身を指して言う「おのれ」で呼んだ。明治・大正期の法学者の『忌み名の研究』（穂積重行校訂）から。

2017・10・2

折々のことば　鷲田清一　892

甘く無条件に受け容れるというよりも、その人のものは徹底してその人に返してあげる。

向谷地生良

北海道浦河町の精神障がい者施設「べてるの家」では、器物を壊したり、壁に穴を開けたりすると修理代金をしっかり請求される。「ここは責任をとらせてくれるのがいい」と、張本人の一人が私に語った。人間には跨ぎ越してはならない苦労があるのに、それをこれまで引き受けさせてもらえなかった人たちのそのチャンスを護るのが「べてる」だとソーシャルワーカーは考える。

2017・10・3

折々のことば　鷲田清一　893

よしとする　生きたあかしが　何もない

浅利桂子(73)

たいていの人は生きた証しなど持てず、未練や後悔を抱えつつ亡くなってゆくし、持てば持ったで後は思い出とともに生きてゆくしかない。ならばぽんとこう突き放したほうがいっそ爽やか。何かを言い切ることで得られる軽やかさというのも、人生への一つの折り合いのつけ方。シニア向けのミニコミ新聞「みやぎシルバーネット」9月号の川柳の投稿欄から。お題は「おりあい」。

2017・10・4

折々のことば　鷲田清一　894

好きなことに限りなく近いことで暮らすということは、抵抗しまくることだ。

山下陽光

自分の儲けは最小に、従業員には最大の支払いをし、発送する商品には手紙を添える。「資本主義の人」が見向きもしないそんな経営をする手作りのファッションブランド「途中でやめる」の主宰者。やりたくない仕事は無理にせず、「敵がいなくて、稼げないけれど楽しい」働き方を説き、工夫を重ねる姿は、ゆるゆるなのになぜかやけに堅実に映る。『バイトやめる学校』から。

2017・10・5

折々のことば　鷲田清一　895

重荷はみんな自分が背負いこんでしまう旧い日本の女の生き方を、先生はよくわかっていない

ある年配の女性

こういう意味の「辛辣な言葉」を、感想として読者から送られた歴史学者の安丸良夫は、女性のそういう葛藤をこそ描いたつもりだったのでひどくこたえたと、『出口なお』（朝日選書版）のあとがきに記す。悔しさは当の読者ではなく自分にこそ向かったはずだが、自著の最後でこういう破れを認めるのはなかなかできることではない。

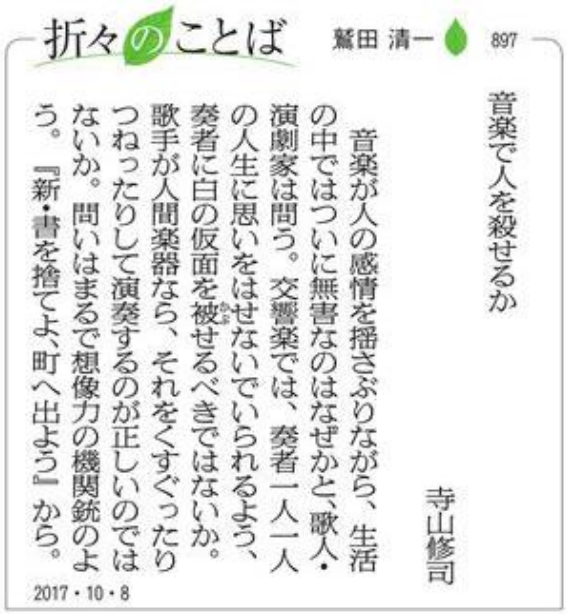
2017・10・6

折々のことば
８９６～９００

音楽で人を殺せるか

寺山修司











折々のことば
９０１～９０５

学校制度は
チャンスを平等にしたのではなく、
チャンスの配分を独占してしまった

イヴァン・イリッチ











折々のことば
９０６～９１０

たとえ、ひとりでも
いい　かんがえなら、
みんなで　だいじにするのが、
みんしゅしゅぎの　いい　ところだろ。

かこさとし

折々のことば　鷲田清一　906

お父さんだってな、詩人だったんだ

松本圭二

家族旅行の最終日。ニューヨークの街を独りでぶらつきたい父と、父の突発的な行動が心配で同行する小学3年の娘は、古本屋巡りをした後、路上詩人たちのパフォーマンスに出くわす。その時の父のつぶやき。たぶん「詩人だった」とは思っていない。自分が在りそこなってきたという想いの中にこそ〈詩〉は立ち上がると信じている。詩人の小説集『さらばボヘミヤン』から。

2017・10・18

折々のことば　鷲田清一　907

それなしで人が生きていけないものについて考えるのが、哲学です。

森口美都男

カント哲学の研究者だったわが恩師が、学生を諭す時によく口にした言葉。それなしで生きていけないものには、家族や社会、さらに愛や掟や信仰といったものもあろう。私は「知」の根拠を問うことから始めたが、やがて衣服も間違いなくその一つだと思い、一時期その主題にのめり込んだ。別の教授からは「世も末だ」と言われたが、私は師の教えを守ったと今も思っている。

2017・10・19

折々のことば　鷲田清一　908

たとえ、ひとりでも　いい　かんがえなら、みんなで　だいじにするのが、みんしゅしゅぎの　いい　ところだろ。

かこさとし

「それを　まちがえると、かずが　おおいやつが、かってに　いばったり、わるい　ことを　しだすんだよな」と続く。政治の基本は数の力ではなく、少数でも優れた意見を尊重すること。いうなれば言葉のまこと。選挙を前にこのことを心に刻んでおきたい。工学博士の児童文学者の絵本『こどものとうひょう　おとなのせんきょ』から。

2017・10・20

折々のことば　鷲田清一　909

名刀とは一度も実用されず、そのみごとな鍛え肌を目にしただけで世がおさまるほどのものを言うのです

千代鶴是秀

明治生まれの鍛冶の名工の恐るべきことばである。それができるまでの工程に一点の無駄も曇りもない、そういう〝必然〟だけで作られており、他のありようなど考えられないからか。たしかに人にもそういうことがある。あの人がそこにいるだけで、一言も口にせずとも混乱した場がおさまるような。土田昇著『職人の近代』から。

2017・10・21

折々のことば　鷲田清一　910

自分のデッドラインさえ超えていれば、デカイ顔をしていられるのだ。

ムッシュかまやつ

「プライドを捨てず、自然体でいられるギリギリのラインを設定して、それより下にはいかない」と決めてしまえば、気後れすることなく生きてゆけると、元ザ・スパイダースの歌手は言う。しかもその線はできるだけ低めにと。世間に合わせず自分の波長はこれだと決めると、自分の感性を傷めずに「とぼけた顔して」生きてゆける。音楽と交遊をめぐる自伝『ムッシュ！』から。

2017・10・22

折々のことば
９１１～９１５

私が思う「貧しい人」とは、
限りない欲を持ち、
いくらあっても
満足しない人のことだ。

ホセ・ムヒカ

折々のことば 911

鷲田清一

「もったいない」が「手間がかかっている」という価値に変わるんです。

平井達雄

京都に「おこうこのぜいたく煮」という惣菜がある。何のことはない、残った沢庵を煮干しとともにぐつぐつ炊いただけのおかず。ふだんは茶漬けと香の物で済ました昔の庶民の質素な食事は、ちょっとした工夫でささやかなご馳走に生まれ変わった。今では惣菜店の一品に。「始末の心」を贅沢に裏返す知恵。小学校で同級だった京漬物の老舗「西利」の副会長が教えてくれた。

2017・10・23

折々のことば 912

鷲田清一

私が思う「貧しい人」とは、限りない欲を持ち、いくらあっても満足しない人のことだ。

ホセ・ムヒカ

5年前の国連会議の演説で「世界一貧しい大統領」と注目を集め、今は農園暮らしを楽しむウルグアイの前大統領はこう語る。人はモノを金で買った気でいるが、実はその金を稼ぐために費やした人生という時間で買ったのだ。買い物と引き換えに人生の残り時間が目減りすれば元も子もない。その点私は「質素なだけで、貧しくはない」と。本紙昨年4月1日付のインタビューから。

2017・10・24

折々のことば 913

鷲田清一

宮城は現在も現実に立ち向かう。

宮城県のポスター

過去の過酷な体験はいつまでも過去になってくれない。それに、日が経つにつれて思わぬ新しい難問が次々と行く手に立ちふさがりもする。東北の大震災の後も昨年の熊本の大震災の後も、多くの人びとが仮設の住宅や店や工場で日々「いま」の課題に懸命に取り組む。笑みさえ浮かぶその不屈の表情が、それをまなざす者を逆に励ます。「震災復興ポスター」シリーズの合言葉。

2017・10・25

折々のことば 914

鷲田清一

学者とはまさしく鬼であったのだ。

黒田日出男

中世社会では学者は「人」を作る秘術を知る者と思われていたと、中・近世史家は言う。学者は「社会とさまざまに対峙する鬼」のようなもの。その「鬼とみまごう創造的な業（研究）」を、身を擦り切るまで果たしてこその学者だとし、大学には鬼が棲める朱雀門や羅城門のような空間が必要だと言う。本紙１９９８年4月8日夕刊（東京本社版）の随想「桜の下の大学論」から。

2017・10・26

折々のことば 915

鷲田清一

自分の顔は私にとって、もっとも遠い闇である。

市川浩

自分の顔はじかに見ることができない。誰かと向きあっている時、思いもしない感情や無意識が顔面に浮かんでいるかもしれないのに、当の私だけがそれを知らない。無防備なことだ。身体だって一部しか見えない。つまり身体も、その全体を私は想像するほかない。とすれば、身体は私が最初に着るイメージの服のようなもの？　哲学者の『〈私さがし〉と〈世界さがし〉』から。

2017・10・27

折々のことば
９１６～９２０

内面と外面のむすびつきの
たが がはずれているのが
人間なのである。

野村雅一











折々のことば
９２１～９２５

本当に叫びたいこと、
一人一人の腹の底の、
血の吹きだすような訴えに、
社会は応えてくれない。
だからひどくバラバラ。
責任がない。

岡本太郎



折々のことば　鷲田清一　921

本当に叫びたいこと、一人一人の腹の底の、血の吹きだすような訴えに、社会は応えてくれない。だからひどくバラバラ。責任がない。

岡本太郎

「結局は疎外感だけが残る」と続く。一見何でもやれそうに見える社会だが、人はただ「許された範囲内でもがいている」だけ。息抜きや憂さ晴らしにかまけていないで、その孤立をもっと突きつめよと、前衛芸術家は檄を飛ばす。何ができるか、できないかではなく、何をしたいか、どうありたいかに重心を移せと。『原色の呪文』から。

2017・11・2



折々のことば　鷲田清一　922

朝に見て昼には呼びて夜は触れ確かめをらねば子は消ゆるもの

河野裕子

口もとを拭い、肌を洗い、むずかる声に安心する。迷い子になるのではないか、神隠しにあうのではないかと、この瞬間も子を案じる母の想いは、ぬめりと湿りで嘘せんばかり。娘の紅は長じてみずからも歌人となり、裕子の遺した歌の数々に「微細な陰影や湿り気に命を与えるような短歌の生理」が滲み出ていると懐かしむ。永田和宏・淳・紅編『あなた　河野裕子歌集』から。

2017・11・3



折々のことば　鷲田清一　923

棚ぼたというのはないですから、動いて、もがいているうちに何かに突き当たる

エヌエスオカムラの副社長

創業直後に多額の損失を出し、12年かけて解消した岩手県釜石市の経営者が、「希望」にふれてこう語った。労使関係論の研究者、中村圭介が「広報かまいし」2008年9月1日号で引いている。希望は人から与えられるものではない。苦境の中で、重なるリスクにも臆することなく挑み、もがいた果てに、ようやっと一条の光として出会うもの。人には希望をひらく力がある。

2017・11・4



折々のことば　鷲田清一　924

赤ん坊がこんなに柔らかいとは思ってもみなかった。これだけ柔らかく世界と接していられることが羨ましくもあり、怖い感じもした。

中村太郎

「簡単に心を開きそうもない人間」のほうが安心だと言う青年が、知りあったばかりの女性から赤ん坊を少しの間預かってと頼まれる。自分の被膜が損なわれること、破られることにずっと怯えてきた彼は、世界と融けあう無防備な生きものの感触にうろたえる。覆面作家の短編小説「慎ましく世界を破壊すること」（「群像」10月号）から。

2017・11・5



折々のことば　鷲田清一　925

ああ顔は憶えていなかったけど、確かにこの子の着ている服は私が毎日洗った服だ

エクアドルの婦人

アンデスの山奥で撮った子どもの写真を10年後、その母親に見せたところ、知らないと言う。彼らはアルバム写真というものを持っていなかった。顔とは、訴え、懇願し、突き刺し、貼りつき、まとわりついてくるもので、単に視覚的な画像ではないことを、写真を見慣れた私たちはすっかり忘れているらしい。渡邉博史の写真集『私は毎日、天使を見ている。』のあとがきから。

2017・11・6

折々のことば
９２５～９３０

僕はね、何でもまず
百回を目標にしています。
ときをためる暮らしの目標ですね。

津端修一

折々のことば　鷲田清一　926

「ホラー嫌いの人間」というのは突飛な怪物やバケモノより不気味な「人の顔」を一番怖がるんですよ

江口夏実

自分の顔を模した大量の仮面を作る薄気味悪い作家の作品を、すべて買い取る地獄の閻魔の補佐・鬼灯。お面は不気味の穴、底に沈むのはどうも自分らしい。精神分析医のフロイトも、不気味なものとは、久しく抑圧されてきた「親しい」もので、それが突然回帰してきたところに生じる感情だとしていた。漫画『鬼灯の冷徹』第25巻から。

2017・11・7

折々のことば　鷲田清一　927

プロレスに惹かれるということは、ひとつの思想であると思わなければ意味がない。

村松友視

プロレスラーが肉体をカタに生きているなら、論じるほうも自らをカタにする覚悟が要る。言葉で遊ぶのではなく、まずは人が危ぶむまでにそれに耽ること、そして骨が透けて見えるまで身を削ぐ中でやっとつかみ取ったものを書き物の軸とすること。内でむずむずうごめいているものを、思考のアンテナにまで鍛え上げねば。直木賞作家の『私、プロレスの味方です』から。

2017・11・8

折々のことば　鷲田清一　928

僕はね、何でもまず百回を目標にしています。ときをためる暮らしの目標ですね。

津端修一

郊外のニュータウンの設計を任された建築家は、雑木林を風の通路として残す案を提示するも、もっと住居をと拒まれる。ならばと、土地の一部を購入し、自ら植栽し、畑を耕す。自然と交わって生きるベストポジションが見つかるまで、作業を一つ一つ丁寧にくり返す。その時間の澱こそ人生の賜物。妻との共著『ききがたり　ときをためる暮らし』（聞き手・水野恵美子）から。

2017・11・9

折々のことば　鷲田清一　929

国家と密着するのが「あたりまえ」になると、自由に息を吸うことがどんな感覚だったのかさえ忘れてしまう。

松村圭一郎

エチオピア社会を調査する文化人類学者は、言論統制は厳しいが「戸籍」という制度をもたないこの国と比べ、日本が本当に自由な国と言えるかと問う。誕生と死、単一の名と性別の登録を義務づけられ、それを前提に「私」のあり方が象られるので、自分の存在を揺さぶる範囲もひどく狭まってくると。『うしろめたさの人類学』から。

2017・11・10

折々のことば　鷲田清一　930

敵として恨んだ米兵が、かえって教えを説いた先生よりも親切であった。

仲宗根政善

沖縄で負傷兵の看護に動員された女子生徒を引率する教員の仲宗根は、敗走する中、深手を負った生徒を置き去りにした。無惨な戦いの後、米軍に救助された生徒と病院で再会し、こう思う。そして「日本国家全体が犯した罪が、具体的には自分を通じてあらわれた」とおののく。瀕死の生徒は、苦悩する彼に、感謝のことばさえ口にした。『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』から。

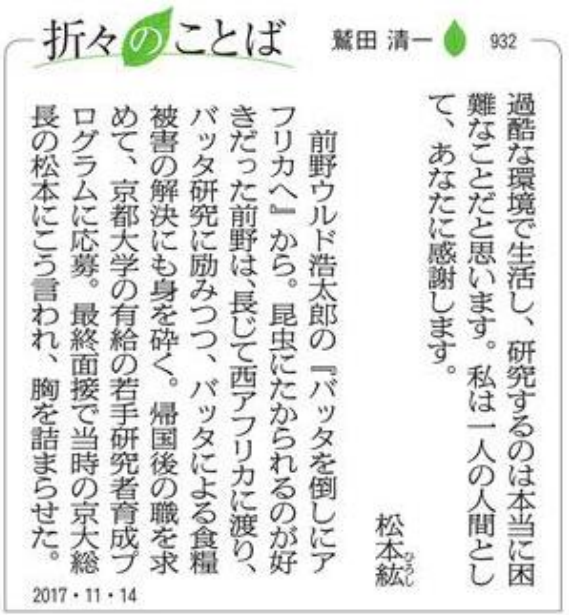
2017・11・11

折々のことば
９３１～９３５

鳥の魂は空で、空の身体は鳥だ。

岩田慶治







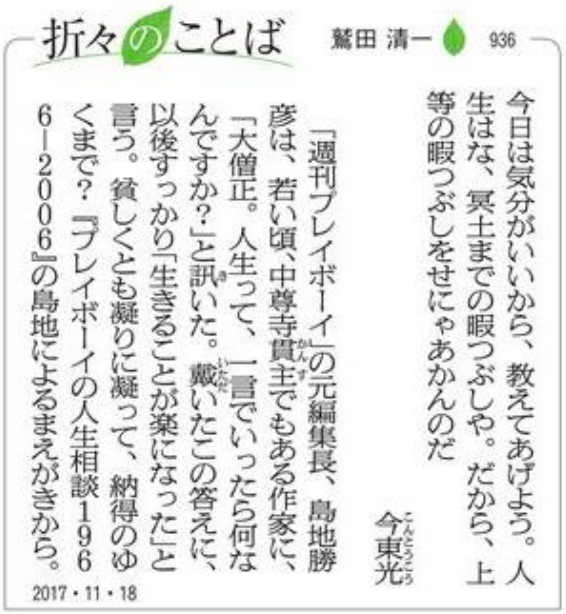




折々のことば
９３６～９４０

今日は気分がいいから、
教えてあげよう。
人生はな、冥土までの暇つぶしや。
だから、上等の暇つぶしをせにゃ
あかんのだ

今東光（こんとうこう）











折々のことば
９４１～９４５

われわれは確実に知ることも、
全然無知であることもできない

パスカル

折々のことば　鷲田清一　941

われわれは確実に知ることも、全然無知であることもできない

パスカル

私たちの存在はじつに中途半端。世界を知ろうにも世界はあまりに複雑で、とてもその全体を理解することはできない。だがまったく知らないでいることもできない。だから世界を少しでも正確に捉えたければ、他人の考えによく耳を傾けて複眼を得るか、問題を解くための補助線を一つでも多くもつことが必要となる。17世紀の思想家の『パンセ』（前田陽一・由木康訳）から。

2017・11・23

折々のことば　鷲田清一　942

全体、改革といふことは、公平でなくてはいけない。そして大きい者から始めて、小さいものを後にするがよいヨ。

勝海舟

「改革者が一番に自分を改革するのサ」と続く。改革は部下に命ずる前に、まずは「大きい者」、つまり改革を命じる者が率先してなすべきだと、江戸城を無血開城に導いた幕臣は言う。いかなる改革も、それを進める過程で、改革者においてすでにそれが芽吹いているのでなければ成就しないということだろう。談話録『氷川清話』から。

2017・11・24

折々のことば　鷲田清一　943

いろ〳〵むつかしい議論もありませうが、私が一身にかけて御引受けします

西郷隆盛

江戸城の明け渡しをめぐる談判で、官軍の将、西郷隆盛は、幕府の重臣、勝海舟の話に一点の疑念も浮かべず耳を傾けた後、こう述べたという。普通の将なら「いろ〳〵喧しく責め立てるに違ひない」ところ、西郷は万事を呑み込み、腹に収めて泰然としていた。正座した膝の上にじっと手を載せ、騒るところ微塵もなかったと、勝は回想する。昨日と同じ勝の『氷川清話』から。

2017・11・25

折々のことば　鷲田清一　944

三〇人の子どもを一人の保育者がうけもつより一五人を二人でうけもったほうがいいということが、それほど大それた理想であろうか。

松田道雄

小児科医が『育児の百科』にこう書いてちょうど50年。次世代を育てる仕事は長く苛酷な条件の下に置かれたままだ。「保育者の労働条件が、とりもなおさず、子どもたちの保育される条件である」のに、この「つつましい理想」の実現は遅々として進まない。何が大事かを定める価値の遠近法がこの国ではひどく歪になっていないか。

2017・11・26

折々のことば　鷲田清一　945

「君ハドコノネコデスカ」
「カドノ湯屋ノ玉デス、ドウゾ、ヨロシク」

大佛次郎

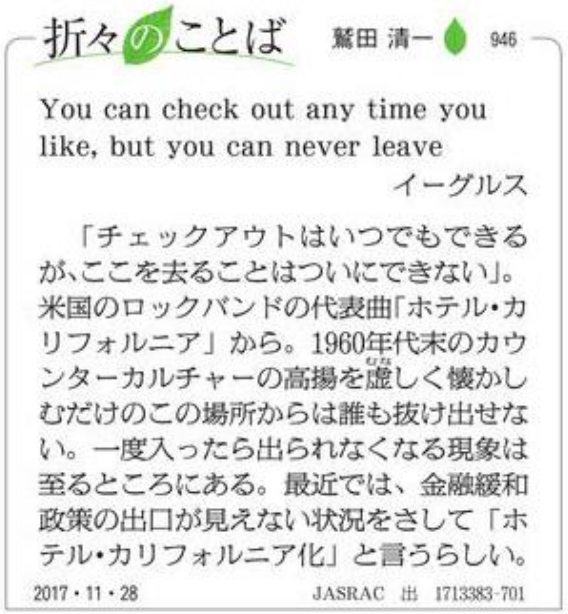
猫を人の家に放り込んで去る輩がいる。可哀想と引き取ってとうとう14匹に。それに匿名のお願いの手紙が付いてたりすると、その偽善に腹が立つ。よく庭に遊びに来る小猫にある日、「君ハドコノ……」と荷札に書いて付けたら、次に遊びに来た時、荷札にきちんと返事が書いてあった。「この世に生きる人間の作法、かくありたい」と作家は記す。随想集『猫のいる日々』から。

2017・11・27

折々のことば
９４６～９５０

You can check out any time you like,
but you can never leave

イーグルス



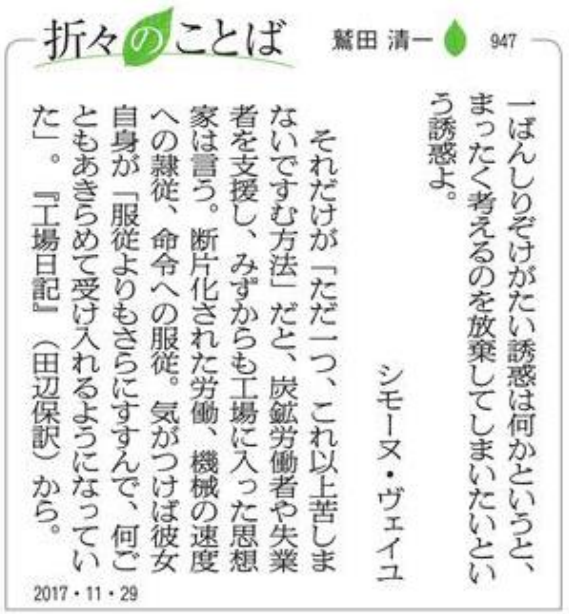
折々のことば　鷲田清一　946

You can check out any time you like, but you can never leave

イーグルス

「チェックアウトはいつでもできるが、ここを去ることはついにできない」。米国のロックバンドの代表曲「ホテル・カリフォルニア」から。1960年代末のカウンターカルチャーの高揚を虚しく懐かしむだけのこの場所からは誰も抜け出せない。一度入ったら出られなくなる現象は至るところにある。最近では、金融緩和政策の出口が見えない状況をさして「ホテル・カリフォルニア化」と言うらしい。

2017・11・28　JASRAC 出 1713383-701



折々のことば　鷲田清一　947

一ばんしりぞけがたい誘惑は何かというと、まったく考えるのを放棄してしまいたいという誘惑よ。

シモーヌ・ヴェイユ

それだけが「ただ一つ、これ以上苦しまないですむ方法」だと、炭鉱労働者や失業者を支援し、みずからも工場に入った思想家は言う。断片化された労働、機械の速度への隷従、命令への服従。気がつけば彼女自身が「服従よりもさらにすすんで、何ごともあきらめて受け入れるようになっていた」。『工場日記』（田辺保訳）から。

2017・11・29



折々のことば　鷲田清一　948

「自分」と仲良くするためには、まず自分がカッコ悪い、情けないと思っていることは、人目のあるなしに関わらず絶対にしないこと。

園子温

映画監督は一時期、海外で物乞いをして暮らしていた。ある日、酔っぱらいから100ドル札をいっぱい投げつけられたが、拾わなかった。それに手を出せば、いちばんの「良き理解者」であるもう一人の自分をがっかりさせるから。そいつと肩を叩き合いながら「人生の後半で得をしたい」のだと言う。『けもの道を笑って歩け』から。

2017・11・30



折々のことば　鷲田清一　949

周りの人が「板尾にこういうことをさせたい」というのが正しいんやなと思うようになりました。

板尾創路

若い頃は笑いがとれないのは向こうが悪いと思っていた。「自分を信用して腹を立てるくらいじゃないと、周囲に負けちゃう」という強い思いはたしかに大事。が、歳を重ね、周りにこづかれ凹まされる中で自分のできも学ぶのだと悟ったと、芸人・俳優でもある映画監督は言う。京都のフリーマガジン「おっちゃんとおばちゃん」11号から。

2017・12・1



折々のことば　鷲田清一　950

スタートする位置がまちまちなのがいいとこ

ボートレース場の観客

ボートレースでは選手は一列に並んでスタートしない。岸壁ぎりぎりまでいったん下がり、加速するのもいれば、ラインぎりぎりの所を選ぶのもいる。好位置は自分なりに工夫して決めるのだ。休みの日に東京・平和島のレース場で女性記者が隣の年配客から教わった。人生の出発点は自分では選べないが、そのバラバラの位置からどう工夫して進んでいくかはボートに学べる。

2017・12・2

折々のことば
９５１～９５５

人間には、冷たい冷たい芯が
あるね。それに気付いたら、
あまり触れてはいけないよ、
責めてはいけないよ。
それは人自体の弱さなんだ。

名越康文


折々のことば　鷲田清一　951

人間には、冷たい冷たい芯があるね。それに気付いたら、あまり触れてはいけないよ、責めてはいけないよ。それは人自体の弱さなんだ。

名越康文

「だからそれぞれ、独りになる時間が必要なんよ」と続く。人は自分さえよければという冷酷さを隠し持っている。それから目を背けてはならないが、そればかり見ていてもいけない。そういう負の面を他人や環境のせいにするのはさらにいけない。自分をむやみに冷たい存在にしてしまうから。精神科医のツイッター（10月20日）から。

2017・12・3


折々のことば　鷲田清一　952

年を取ると人生って言葉自体がだんだんどうでもよくなるから、役に立つも立たないも死んでしまえば皆同じって心境になります。

安田登

役に立つか立たないか。それで、ものや人のあり方を評価する社会は、どこか貧相でみみっちくて、心を寒くする。評価の軸がいつも外にあるから、内なる誇りも保てない。シュメール語を勉強したりして、親から「お前は役に立たないものばかり覚えて」と言われ続けてきた能楽師は、今の心持ちをこう語る。6月17日のツイッターから。

2017・12・4


折々のことば　鷲田清一　953

冒険の現場というのは概ね退屈で、冒険に行くだけでは面白い文章が書けないことが多い

角幡唯介

冒険の現場は人が思うほど劇的ではない。苛酷をきわめる北極探検も「雪の上を歩いた。寒かった。飯を食った。寝た。」の22文字ですむ。これが何十日も続くのが冒険で、だから遭難でもしないかぎり面白い話にはならないと探検家は言う。私たちの日常もきっとそう。日々無事に過ごすだけでも大仕事なのに、それをことばにするとなんか凡庸になる。『探検家の憂鬱』から。

2017・12・5


折々のことば　鷲田清一　954

ユーモアって、どうにもできない状況に対して唯一できること。

宇多田ヒカル

出口なしの塞がれた状況でも、「これ、なんも変えられないけど、ユーモアでなんとか自分のものにしちゃおうとか、それでオッケーにしよう」といったことがあると、歌手は語る。ユーモアの背後にはその意味で悲痛な叫びがあるが、他方でユーモアはそうした叫びに向けられる《理性の微笑》でもある。NHK「SONGSスペシャル」（2016年9月22日）での発言。

2017・12・6


折々のことば　鷲田清一　955

忘却の強制である「忘れなさい」と忘却の欲求である「忘れたい」とが協力して多くのことが忘れられた。

西川祐子

「終戦」と「戦後」体制の谷間の約7年間。移行期にみえるその占領期は戦争の継続であり、「戦後」もさらにその占領の続きではなかったかと、文学研究者・女性史家は問う。人びとの斑模様の記憶に分け入り、行政文書を読み込み、記憶と記録に再び血を通わせてゆく。私たちの戦後をもう一つの戦前にせぬために。『古都の占領』から。

2017・12・7

折々のことば
９５６～９６０

食べ物をいくら残しても
叱られない時代はきたが、
それは同時に胃袋でない形の
新しい飢えの始まりでもあった。

たかとう匡子

折々のことば　鷲田清一　956

知る、理解する、というサイエンスの別の機能との関係から切り離された技術は、厄災の源になる。

千葉聡

「害虫」のカタツムリを駆除するために、カタツムリを食べるカタツムリを「自然にやさしい生物農薬」として導入した結果、関係のない他種のカタツムリが全滅した。人間の都合が、生物が長い歴史の中で築いた均衡を壊す「最終兵器」となったと生物学者は言う。小生物の観察を進化の大論争へとつなげる科学読本『歌うカタツムリ』から。

2017・12・8

折々のことば　鷲田清一　957

経験というものはさまざまな風に煮えこぼれるもので、われわれに現在の方式をさまざまに修正させてゆくものである。

ウィリアム・ジェイムズ

どうにも動かせないかに見える習慣や仕組みも、かつて人が工夫して設けたもの。おびただしい経験を重ね、それを創りだした活動が休止しているにすぎない。経験の「煮えこぼれる」ような力がそれを動かすのであって、このやり方しかないと決め込んでしまえば道は開けない。米国の哲学者の『プラグマティズム』(桝田啓三郎訳)から。

2017・12・9

折々のことば　鷲田清一　958

変化はとてもゆるやかにあらわれたので、日常という闇にまぎれて、人びとを驚かすことはなかった。

ジャン・ジオノ

不毛の地といわれた南仏の山岳地帯で、来る日も来る日も植樹を続けた一人の名もない農夫。この見えない手入れのおかげで、後にこの村へ移り住んだ人たちは自然の恵みを享受しえた。人は戦争という途方もない破壊にのめり込む一方で、「神の行いにもひとしい創造」をなしもすると作家は言う。絵本『木を植えた男』(寺岡襄訳)から。

2017・12・10

折々のことば　鷲田清一　959

縮むことができるのは、もう大きくなっている人々であり、坂道を下ることができるのは、すでに坂を上った人々だ。

ブレイディみかこ

子どもの貧困はコミュニティーの相互扶助の仕組みを厚くすることでしか解決しない。私たちはこれから成長してゆく子どもたちのためにもっと「醜く足掻く」べきで、社会の収縮を前に財政緊縮をのうのうと説いている場合ではないと、英国在住の保育士・ライターは言う。エッセー「下り坂をあえて上る」(「一冊の本」11月号)から。

2017・12・12

折々のことば　鷲田清一　960

食べ物をいくら残しても叱られない時代はきたが、それは同時に胃袋でない形の新しい飢えの始まりでもあった。

たかとう匡子

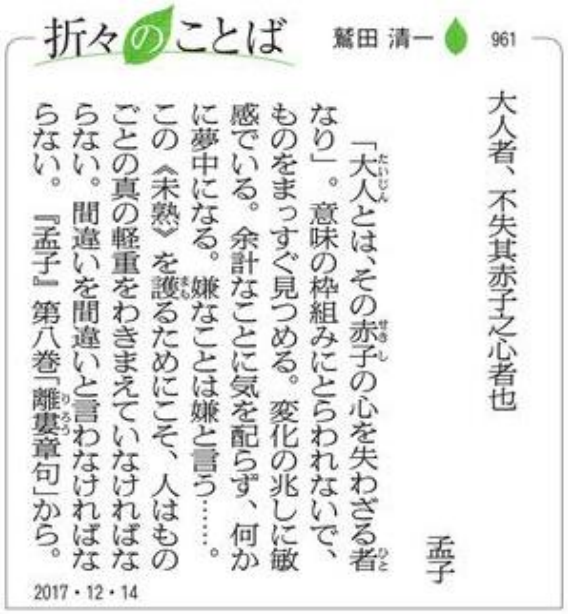
ひもじさには二つの形がある。一つは窮乏の生活からくる空腹であり、一つは強い不安や鬱屈からくる心のやつれである。「先進国」といわれる国では、ひもじさ、つまり存在の乏しさは前者から後者へと移行した。それが今、もういちど反転して貧困が重い足かせになりだしている。詩人で元国語教師の『私の女性詩人ノートⅡ』から。

2017・12・13

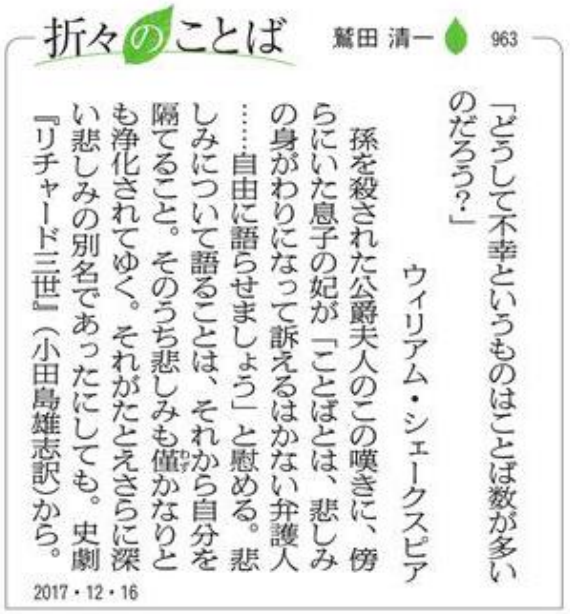
折々のことば
９６１～９６５

捨てるという仕方をつうじて
学ぶ事柄は、実はとても多い。

河本英夫











折々のことば
９６６～９７０

内と外との区別は、
自と他との区別が入りこんでくる
ところでのみ可能になる

ガブリエル・マルセル

折々のことば　鷲田清一　966

人間は動物に戸籍をもちながら、できるだけ動物から逃走し、動物性を拒否し、動物であろうとしない、奇妙な逆説的動物だった

山内昶

ヒトは、食物を摂取し、排泄するという代謝をし続けないと生き存えられない。生殖によって種の再生産も続けねばならない。なのにその食と性にさまざまの禁制をかけてきた。他の動物のように自然に適応し、それと共棲する可能性もあったのに、自然を改変し制御する道を選んだからだと、文化史家は言う。『タブーの謎を解く』から。

2017・12・19

折々のことば　鷲田清一　967

人生は、手遅れのくり返しです。

ある僧侶

あの時はわからなかったけど今だったらわかるということが、人生にはよくある。自分のしたことが、他人に思いも寄らぬ仕方で受けとめられ戸惑う。他人の人生に意図せぬ屈折や傷を与えてしまい、そのことも後になってようやっと知る。気づいた時はもう取り返しがつかない。経験というのはたいていそんなふうに起こる。母の年忌に、ある僧の言葉として住職から伺った。

2017・12・20

折々のことば　鷲田清一　968

自分が普遍的なもののなかにいるという意識がないのがいまの状況だと思います。

石井柴郎

これは私のもの、だからそれをどうこうしようと私の勝手だ、という理屈が自明のごとく主張される。が、私的所有が認められるのは、税金を納め「お上」に裁定されたからではなく、コミュニティーの運営は自分たちで責任をもつという「公共」の精神の中に「私」が組み込まれることによってだと、法制史家は司馬遼太郎との対談で言う。司馬の対談集『土地と日本人』から。

2017・12・21

折々のことば　鷲田清一　969

内と外との区別は、自と他との区別が入りこんでくるところでのみ可能になる

ガブリエル・マルセル

白い球面に○を書く。円周のいずれの側を内とし外とするかは、それだけでは決定不能である。円周のいずれの側に自分を置くかによって内／外は決まる。排外主義は自分のいるこの「内」からのみ発する視線であって、こちらの「内」と向こうの「内」とが共存できるのは、互いの「内」をよく想像できる時だけだ。フランスの哲学者の『存在と所有』（渡辺秀・広瀬京一郎訳）から。

2017・12・22

折々のことば　鷲田清一　970

感覚について言えば、不平不満が「形容詞」には渦巻いているようでもある。

森山卓郎

色名は無数にあるのに、まずい、辛い、苦い、酸っぱいなど、味覚を表す形容詞は意外に少ない。昔の人は素材をそのまま食し、どうもいけない、というヤバい味をおもに「○○い」と表現したからではないかと日本語学者は推理する。痛いや痒い、暑いや寒いもそう。感覚とは微かな異変の察知のことを言うのかも。連載エッセー「日本語ノート」（「船団」第115号）から。

2017・12・23

折々のことば
９７１～９７５

いまは「ためになる」とか
「役に立つ」以外のものは
存在しちゃいけないような
風潮があるけれど、
私はそれがどうにも不快なんです

中野翠

折々のことば　鷲田清一　971

サンタクロースがいなければ……人間のあじわうよろこびは、ただ目にみえるもの、手でさわるもの……だけになってしまうでしょう。

フランシス・P・チャーチ

サンタクロースってほんとにいるの？1897年、「ニューヨーク・サン」新聞に寄せられたある少女の質問に、記者はこう社説で答えた。見えないものはみな、人間が頭の中で拵え上げたものだなどとは言えないと。ほんとうに大事なものは見えないものからなっている。『サンタクロースっているんでしょうか？』（中村妙子訳）から。

2017・12・24

折々のことば　鷲田清一　972

目が覚めたときわたしの顔が、わたしの夢の痕跡を残しているのかしらって、考えたことがあるわ

治療分析を受けたある女性

人はときに放心したような顔つきになる。そういえば、雨蛙やヒラメのように「外界の色に応じて皮膚の色が様々に変る」奇妙な病気を想像したのは短編小説「飢えた皮膚」の安部公房だった。ともに絵空事とは言い切れないリアリティーがある。精神分析家、P・フェディダの論考「涙を流すとすべてがなくなる……」（塚原史訳）から。

2017・12・25

折々のことば　鷲田清一　973

After all, tomorrow is another day.

マーガレット・ミッチェル

「だって、あしたは今日とは別の日だから」。波瀾万丈の人生、主人公は愛する夫に去られた後、こうひとりごつ。小説『風と共に去りぬ』（鴻巣友季子訳）の最終行だ。明日は明日、今日を引きずらないから気を取り直すこともできる。とはいえ、報われそうもない地道な努力も、明日につながると信じられるから続けられると、逆の言い方もできるかも。「明日は明日の風が吹く」と訳されたこともある。

2017・12・26

折々のことば　鷲田清一　974

いまは「ためになる」とか「役に立つ」以外のものは存在しちゃいけないような風潮があるけれど、私はそれがどうにも不快なんです

中野翠

落語のいいところは、損得と関係なしに「存在を楽しく許している」ところ。ものごとには表と裏、底と天井、さらには抜け穴すらあって、それを覗かせながら笑いに転化させる落語は、心の機微の分かるオトナになるための格好の教材。損得より大事な物差しがあることを教えてくれるとコラムニストは言う。『この世は落語』から。

2017・12・27

折々のことば　鷲田清一　975

小さい幸せ見つけるのうまいな

加瀬健太郎の妻

写真家が休みに一家で温泉に行く。倹約のため、夕食を部屋でとるのを諦め訪れた変哲もない中華屋で「火山が噴火したみたい」な焼きそばにありつき、「よかったなここにして！」と大喜び。幸福は小さく、小刻みに。すると日に何度も幸せな気分になれる。人と思わず顔を見合わせることも増える。夫をとっさにこう評した奥さんも素敵。『お父さん、だいじょうぶ？日記』から。

2017・12・28

折々のことば
９７６～９８０

年だからもう転べないのです
矢部さんはいいわね
まだまだ何度でも転べて

矢部太郎の大家さん



折々のことば　鷲田清一　976

年だからもう転べないのです　矢部さんはいいわね　まだまだ何度でも転べて

矢部太郎の大家さん

お笑いコンビ・カラテカのボケ役は、おっとりと上品な物腰の大家さんと仲良し。手をつないで散歩に出た時、年老いた彼女が覚束ない足どりを詫びてこう言った。年がいくと悔いがあってももうやり直せない。やり直しできるのは若者の特権。なのに、一度躓いて無能との烙印を押されればそこで終わり。やり直しを許してくれない社会はむごい。矢部の漫画『大家さんと僕』から。

2017・12・29



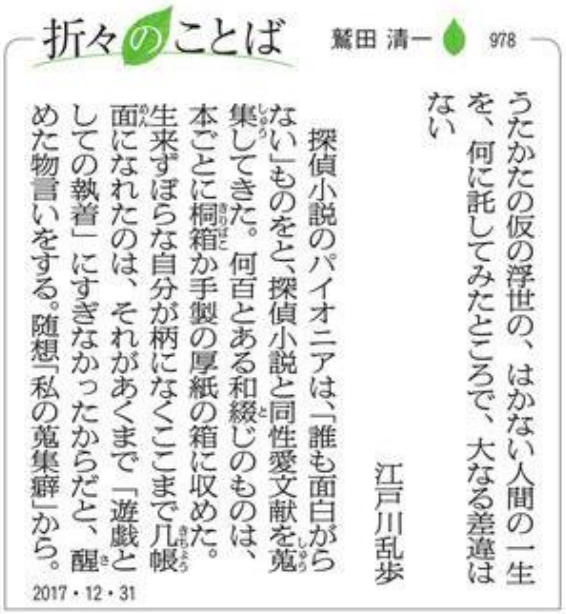
折々のことば　鷲田清一　977

わからないことの意味を広げておきたいですよね。

アルバイトの若者

仙台のとある公共施設で3年間、嘱託で働いていた若者が、この年末で職場を離れた。施設管理の担当だった。同じフロアに企画を担当する部署があり、その華やかさがちょっぴり羨ましかったが、どこかお気楽にも見えた。最終勤務日の前夜、居残って企画の仕事を初めて間近で見、その厳しさを知った。これでようやく職場の全体が見えた。次に就く仕事の心構えができた。

2017・12・30



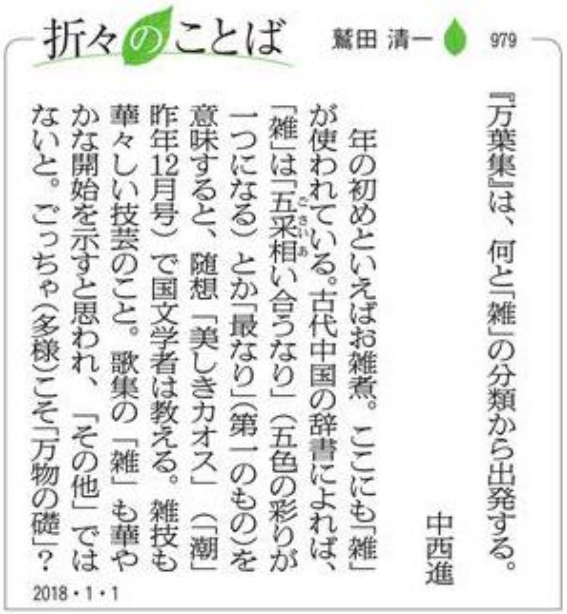
折々のことば　鷲田清一　978

うたかたの仮の浮世の、はかない人間の一生を、何に託してみたところで、大なる差違はない

江戸川乱歩

探偵小説のパイオニアは、「誰も面白がらない」ものをと、探偵小説と同性愛文献を蒐集してきた。何百とある和綴じのものは、本ごとに桐箱か手製の厚紙の箱に収めた。生来ずぼらな自分が柄になくここまで几帳面になれたのは、それがあくまで「遊戯としての執着」にすぎなかったからだと、醒めた物言いをする。随想「私の蒐集癖」から。

2017・12・31



折々のことば　鷲田清一　979

『万葉集』は、何と「雑」の分類から出発する。

中西進

年の初めといえばお雑煮。ここにも「雑」が使われている。古代中国の辞書によれば、「雑」は「五采相い合うなり」（五色の彩りが一つになる）とか「最なり」（第一のもの）を意味すると、随想「美しきカオス」（「潮」昨年12月号）で国文学者は教える。雑技も華々しい技芸のこと。歌集の「雑」も華やかな開始を示すと思われ、「その他」ではないと。ごっちゃ（多様）こそ「万物の礎」？

2018・1・1



折々のことば　鷲田清一　980

自分の人生を決めた年齢と同じ年齢の子に届く言葉をもちえなかったら、何の書き手か。

坪内稔典

すねとひねくれとてれのまじる軽妙な句を詠む俳人が、ある集いで口にした重い言葉。何が出てくるかわからない小学生くらいの歳の子の言葉の地平にいつも足を置いていたいと言った。私の場合は、日々わめき、さまよう中、鬱憤ばかりをつのらせていた高校生の頃、理解できないまま胸にぐさっと突き刺さる言葉に出会った。そのさまよう魂たちの間に私も言葉で立ちたい。

2018・1・3

折々のことば
９８１～９８５

月に吠(ほ)える犬は、
自分の影に怪しみ恐れて
吠えるのである。

萩原朔太郎

折々のことば 鷲田清一 981

おとなに　なってしまったら、わからなく
なることも　たくさん　あるはずだ。

森村泰昌

大人にならなければわからないことがある、と大人たちは言うけれど、その逆はもっと大事だ。夕陽を見てその美しさに声が出なくなることがある。ゴミの山を前にしてなぜ人間だけがゴミを出すのか考え込むこともある。「はっと驚き、おやっとまどい、そうだったのかと発見」する、そういう気づきが芸術なのだと、美術家は言う。絵本『たいせつな　わすれもの』から。

2018・1・4

折々のことば 鷲田清一 982

テストの単位が『点』ってなんかなんなので『円』にしてみました。

「ののちゃん」の藤原先生

点数は、ある一つの基準で割り出したもの。別の基準からすれば別の評価が出てくる、その程度のもの。ののちゃんのクラス担任はいたずらで点数を円建てにする。するとぴかぴかの満点がとたんに安っぽくなる。漫画の批評力はこのように、力まずに対象のポイントを崩してしまうところにある。いしいひさいちの漫画「ののちゃん」（本紙２０１１年1月18日朝刊）から。

2018・1・5

折々のことば 鷲田清一 983

月に吠える犬は、自分の影に怪しみ恐れて吠えるのである。

萩原朔太郎

影に向かって吠えるのは切なくも詮なきこと。「私は私自身の陰鬱な影を、月夜の地上に釘づけにしてしまひたい。影が、永久に私のあとを追つて来ないやうに」と、1行置いて続く。うちの犬は時折縁側に座り、静かに庭を眺める。愛への渇きや捨てられた悲しみに疼くのではなく、自身を温かく包む光に思いをはせているのだったらいいのに。詩集『月に吠える』の「序」から。

2018・1・6

折々のことば 鷲田清一 984

Can I find a trick recalling pi easily?

円周率の覚え方

3.1415926……。円周率(π)の初め８桁である。これを覚えるのに英語では字数で文を作る。それがこの「π(パイ)を簡単に覚える秘訣はありますか？」という文章だと友人に教わった。他にこんな文章も。May I have a large container of coffee?（大きな器でコーヒーをいただけますか？）。日本語だと語呂合わせで、「産医師異国に向こう」で始まり100桁まで行くのがあるそうだ。

2018・1・7

折々のことば 鷲田清一 985

ソクラテスのような存在は、教室では場違いだということになる。

飯田隆

哲学の問いを駆動するのは、日々の生活の中に淀む疑問であり、迷いであると哲学研究者は言う。ソクラテスはだからそこを離れず「台所の言葉」（哲学者・大森荘蔵）で語ったのだと。哲学は誰も答えを知らぬ問いをめぐり延々と続けられる対話であり、真理を知ったと思い込む者が教壇で語るものではない。普段使う日本語に哲学の言葉としての可能性を探る『新哲学対話』から。

2018・1・8

折々のことば
９８６～９９０

人がマインドコントロールを
受けやすいのは、
情報が過剰に与えられている
状態か、極度に不足している状態

岡田尊司

折々のことば　鷲田清一　986

当事者間に懇願したり、恩恵を与えたり、融通をきかせたりする余地がないことのほうが、不安なのである

川島武宜

日本人のこういう法意識は、近代民法の理念からずれていると法学者は言う。欧米人が契約の段階で内容が精緻でないと不安で「虫めがね的契約書」を交わすのに対し、日本人は争いをまるく収めることを優先する。第三者による仲裁より当事者間の合意による調停を好む。が、この「まるく」の感覚が今や心許ない。『日本人の法意識』から。

2018・1・9

折々のことば　鷲田清一　987

これが怠惰であるにせよ性急さであるにせよ、ともかく知性は、このためにしばしば誤った方向に導かれます。

ジョン・ロック

「これ」とは知性がその探究を「最短の道」を選んで進める傾向をいう。他人の証言を簡単に信じたり、賛否両論を検討せずに一つの議論で満足したり、流布する考えにすぐ追従したり。この忍耐のなさによって知性はよく「思い上がり」と「自説固執」の道を辿ると警める。17世紀英国の哲学者の『知性の正しい導き方』（下川潔訳）から。

2018・1・10

折々のことば　鷲田清一　988

人がマインドコントロールを受けやすいのは、情報が過剰に与えられている状態か、極度に不足している状態

岡田尊司

情報が過多だと、世界は暗示や徴候に満ちあふれ、無秩序なものとなる。人は肝心の情報がどれか見えづらくて不安になる。情報が過少だと、限られた情報をもとに妄想を膨らませてしまう。いずれにせよ精神が大局を見る眼と思考のための空きを失い、誘導への免疫力も失って誤作動しやすくなる。精神科医の『回避性愛着障害』から。

2018・1・11

折々のことば　鷲田清一　989

問題になる前から問題視するのは良くないのではないか

木ノ戸昌幸

施設でスマホを充電しようとしたのを仲間に咎められた通所者が終礼時にみなに謝ったことに愕然とした施設長は、安易に振りかざされる正義は、回り回って自分の首を絞めてゆくと書く。NGやアウトではなく、OKやセーフの「余白」を世界にもっと増やしたいと。京都の障害福祉NPO・スウィング発行「Swing-ing」第23号に載せた文章「ケツの穴の小ささについて」から。

2018・1・12

折々のことば　鷲田清一　990

大切なところに出す人間はどういうふうに選ぶかといいますと、ものすごく疲れ果てたときに笑顔のいいやつを出せっていうんです。

辻静雄

弟子を修業に出す時に、精根尽き果てても目だけはちゃんと相手を見て気持ちよく挨拶している者を選ぶと、料理研究家は言う。この目が「本人が社会で受け入れられるか受け入れられないかの瀬戸際の防波堤になる」からと。そんな目を持てるのもきっと仕事に納得しているから。そしてこれは親方の徳。『料理に「究極」なし』から。

2018・1・13

折々のことば
９９１～９９５

死と隣合せに生活している人には、
生死の問題よりも、
一輪の花の微笑が身に沁みる。

太宰治

折々のことば　鷲田清一　991

架空の世界に遊ぶ力が、実は現実を生き抜く支えになることを知っていたのだと思います

小野和子

私たちの先祖は「むかしむかし」で始まる虚構の物語を無数に考えだし、「愛情こめてそれを語る」ことで、厳しい現実を耐え抜いてきた。「嘘かほんとか知らないよ」という前提があるから、まるで他人事のように語るから、逆に思いを深く込められた。半世紀にわたり東北地方の民話を採集・編集する活動を主宰してきた女性の随想「ほらくらべ」（ミルフイユ05「技と術」）から。

2018・1・14

折々のことば　鷲田清一　992

先にこけて自分の体の上に太夫をのせてやるのが三味線弾きです。

六世鶴澤寛治

引っ張れば引き留めもし、寄り添えば逆らいもする。文楽の三味線は、太夫の語りとのつかず離れずの呼吸が難しい。太夫が転びかけたら、先に転んで太夫が先に起き上がれるようにしてやる。相方の癖や思いを読み切って先へ先へと出るのが仕事だと、豪放な撥さばきでならした名手は言う。これぞケアの極意？　元ＮＨＫアナウンサーの『山川静夫の文楽思い出ばなし』から。

2018・1・15

折々のことば　鷲田清一　993

死と隣合せに生活している人には、生死の問題よりも、一輪の花の微笑が身に沁みる。

太宰治

いつすべてが止むかと心細い思いでいる人には、赤子の寝息だって、犬の遠吠えだって、蟻の行列だって、真夜中の竹林のそよぎだっていいのだ。何かいのちの弾みのようなものが伝わってくれば。いのちが明滅する気配にふれていられれば。寄せては去る、その微かなくり返しが心を慰める。灰色の論は要らない。結核療養所を舞台にした書簡体の小説『パンドラの匣』から。

2018・1・16

折々のことば　鷲田清一　994

「嫌ちがう、無理なだけ……難しいねん」

渡辺あや（脚本）

子どもの時に震災に遭い、今は東京に住む女性が、追悼の集いに参加しようと13年ぶりに神戸を訪れる。同じ境遇の男性と出会い、不器用に言葉を交わしながら夜の街を歩く。途中、亡くなった友だちの親を訪ねかけて足がすくむ。なぜ私じゃなくあの子が、あの親が……。今も整理がつかない。割り切れない。思いは千々に乱れる。ＮＨＫドラマ「その街のこども」劇場版から。

2018・1・17

折々のことば　鷲田清一　995

元気出せ！　ねえちゃん

道ですれ違ったおっちゃん

昔、劇団の稽古に通っていた主婦の田中昌代さん。演技にも人間関係にも行き詰まり、うつむき加減で歩いていた時、自転車に乗ったある男性からすれ違いざま声をかけられた。突然のこの声に生き返ったと懐かしむ。おっちゃんだってほんとはしょげていたのかも。見知らぬ人と人とのそんな遭遇がかつてあった。真宗大谷派東京教区編『わたしの出会った大切なひと言』から。

2018・1・18

折々のことば
９９６～１０００

ええばっかりの人間はおらん。
悪いばっかりの人間もおらん

ある母親









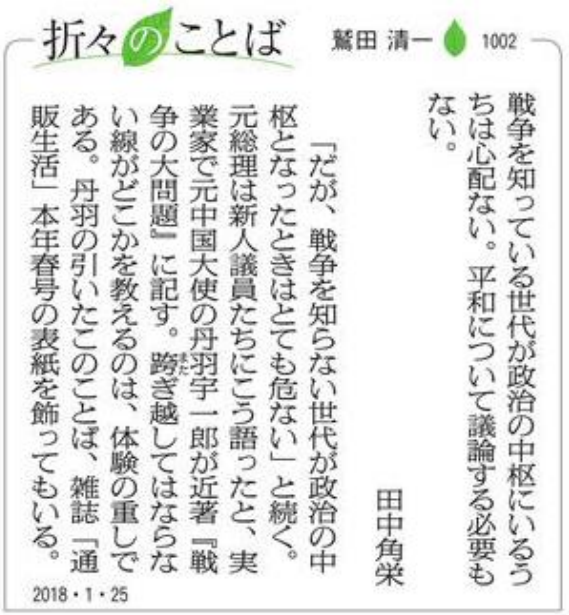


折々のことば
１００１
～１００５

戦争を知っている世代が
政治の中枢にいるうちは心配ない。
平和について議論する必要もない。

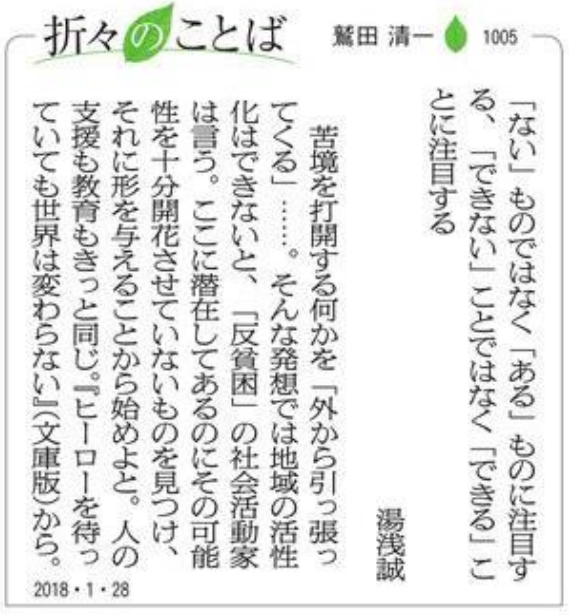
田中角栄











折々のことば
１００５
～１０１０

猫はあげして、じっと我々のことを
見ちょーだろ。
あれは人間が幸福かどうかを、
観察しちょーとこだけん

水木しげる

折々のことば　鷲田清一　1006

少なさは寂しいことでも貧相なことでもありません。

華道家元池坊には「数少なきは心深し」との言い伝えがあり、絢爛な造形よりも一、二輪の花、葉、枝と、最小限のボリュームでなされる表現を愛でてきたと次期家元は語る。生け花は生きものを切り、矯めることで、つねに生死の境に立つ。その緊張がさまざまな思いを一所に凝縮させるからこそ慈しみも深くなるのだろうか。本紙1月10日朝刊のインタビュー「花で語る」から。

池坊專好

2018・1・29

折々のことば　鷲田清一　1007

悲しさを表現するのに、涙を流せばいいというもんじゃない。リアルな人間の振る舞いはそんなに単純なものではありません。

小松政夫

か細い声を出し、眉間に皺を寄せればシリアスな演技になるというのはひどい勘違いだと、コメディアンは言う。家族の葬儀で笑みさえ浮かべ気丈にふるまっていた人が何かの拍子に決壊する。読経の最中に腹が鳴る、おならが出る……。そのちぐはぐこそ人生。付き人として尽くした師匠、植木等の思い出を綴る『昭和と師弟愛』から。

2018・1・30

折々のことば　鷲田清一　1008

生きているそのあいだ、なるたけ多くの「終わり」に触れておく。そのことが、人間の生を、いっそう引きしめ、切実に整える……

いしいしんじ

人は自分という存在の始点も終点も知らないし、知りえもしない。自分がどこから来てどこへ行くのか。いずれも霧の中だ。でも、人の生が「終わり」を孕んでいるのは確か。だとすれば、旅にせよ、茶事にせよ、小さな「終わり」をくり返し「からだの芯へ収める」ことで、中途としての人生にも光が射す。作家の『且坐喫茶』から。

2018・1・31

折々のことば　鷲田清一　1009

水遣りを放棄したのに、花は届けられた。

山口ミルコ

退社してすぐガンが発覚し、闘病生活に入った編集者。肩書はなくなり、髪も貯金も急減し、ついに何者でもなくなると心細い思いでいた時、以前担当していた作家から仕上がった小説が届く。心底情熱を傾けたものは、途中で降りることになっても必ず誰かが後を継いでくれる。「欠席、可」。そう思い定めると、以後何事にもビクビクしなくなったと言う。『毛のない生活』から。

2018・2・1

折々のことば　鷲田清一　1010

猫はあげして、じっと我々のことを見ちょーだろ。あれは人間が幸福かどうかを、観察しちょーとこだけん

水木しげる

戦地で酷い目にあったので、あとは好きな絵だけで生きると決めるが、稿料は雀の涙。やっと食えるようになれば、今度は「仕事中毒の妖怪」にとり憑かれる。幸か不幸か訳がわからなくなったと漫画家は言う。人を観察するうち、「好き」の力が強ければ何事もしのげると悟る。『水木サンの幸福論』の、娘・武良悦子による「解説」から。

2018・2・2

折々のことば
１０１１
～１０１５

うれしいプレッシャーですよ。
これを味わえるの、
僕だけですからね。

武豊

折々のことば　鷲田清一　1011

うれしいプレッシャーですよ。これを味わえるの、僕だけですからね。

武豊

昨年12月24日の有馬記念。これを限りに引退する駿馬、キタサンブラックに乗る騎手はレース前、NHKの取材にこう答えた。苦労と同じで、プレッシャーも撥ねつけるのではなく自分だけに与えられた宝物と考える。すると「最後の一戦、飾らせてあげたい」という余裕も出る。でもこんな心境になるまでに、いったいどれほどプレッシャーに押し潰されてきたのだろう。

2018・2・3

折々のことば　鷲田清一　1012

魚釣りは、何月何日から何の魚を釣ると決めておかずに、季節の草花によって魚を釣る

昔の人の教え

「金馬急病につき休演」とあれば「また釣りか」とあきれられるほど釣りに入れ込んでいた三代目三遊亭金馬は、この言葉をひきつつ、「草花は一番陽気を知る。それと同時に魚も動き出す」と言う。桃の花が咲くと鯉の口があき、山百合が咲くと鮎が釣れなくなると。釣りの面白さも奥深さも、自然は人の意には従わぬというこの一点にある？　金馬の『江戸前の釣り』から。

2018・2・4

折々のことば　鷲田清一　1013

私たちはすこしずつ、孤独が、かつて私たちを恐れさせたような荒野でないことを知った

須賀敦子

教会の片隅で、司祭も信徒もなく人々が自由に集う共同体を夢見て発足したイタリア・ミラノの小さな書店。その消息を綴る作家は、そこを行き交う人々の交友を支えたのは、別々の途を歩むそれぞれの孤独だったとふり返る。随想『コルシア書店の仲間たち』から。評論家の松山巖は文庫版の「解説」で、「孤独とは他人を全身で認め、恋うること」と、返歌のように記す。

2018・2・6

折々のことば　鷲田清一　1014

今日も、明日も、明後日も、順調に問題だらけ

向谷地悦子

北海道・浦河で夫とともに精神障がい者たちの支援にあたる元看護師は「これからも、新たな苦労が次々に生まれてくるでしょう」と続ける。でも動じない。彼らと、苦労や弱さを取り除くのでなく共有し、「大切な苦労」の主役となって、自分で自分を助ける手立ても講じられるようになったから。富坂キリスト教センター編『行き詰まりの先にあるもの』に寄せた文章から。

2018・2・7

折々のことば　鷲田清一　1015

あの頃はぼくにとって、靴というものが全世界だった。

ガッサーン・カナファーニー

パレスチナの作家の小説「路傍の菓子パン」（奴田原睦明訳）から。パレスチナ難民の児童たちを受け持つ若い教員は、靴磨きをして家族を養う少年にかつての自分を重ねこう語る。彼は、憐れんだ少年の身の上話が嘘だと知り落胆するが、嘘で固めないと生存が成り立たないほどに苛酷な現実のなか、その嘘を許容することで、2人の会話は切なくも軽妙なものに変わってゆく。

2018・2・8

折々のことば
１０１６
～１０２０

あなたが捨てたもので、
あなたが作られている。

高谷廉（たかや れん）

折々のことば　鷲田清一　1016

「お前、どうしてぶつからないの？」
「息でわかるもん！」
菅洋志（すがひろし）と盲学校の児童

盲学校に通う子どもたちと森で遊ぶ写真家が、子どもたちの気持ちに近づこうと、手をつなぎ、目を閉じて歩くなか、どんと木にぶつかった時のやりとり。別の子は耳でわかる、鼻でわかるとも言う。一つの感覚が閉じても、別の感覚のアンテナがそれ以上に敏感に辺りを探る。身体に備わる途方もない可能性に写真家はあっけにとられる。写真集の『聞（き）こえるかい森の声』から。

2018・2・9

折々のことば　鷲田清一　1017

善良さにも、ある程度の気骨は必要だ――そうでなければ、善良さは何も生まない。
ラルフ・ウォルドー・エマソン

自分の中にある無慈悲や冷酷さから目を逸（そ）らすために、はるか遠方にいる人たちに情けをかけるのはやめたほうがいい。が、たとえ遠く離れていても、心の契りを交わした人のためならば自分は牢獄に入ることも厭（いと）わないと、19世紀米国の思想家は言う。信念と実行を伴わない善意はしばしば、見捨てや責任逃れに、それと気づかれないまま裏返る。『自己信頼』（伊東奈美子訳）から。

2018・2・10

折々のことば　鷲田清一　1018

あなたが捨てたもので、あなたが作られている。
高谷廉（たかやれん）

いつかまた使えるかと取っておいたが、結局はゴミに出すという物は多い。そこで美術家たちと市民が、紙袋やコピー用紙などの雑がみで婚礼衣装や怪獣を、さらに百貨店の花柄の包み紙で植物図鑑を作る。仙台市環境局などが1月に開催した《せんだい資源ナーレ》で、美術家はリサイクルの思想を作品「SOURCE」に添えてこう書きつけた。過去の挫折についても言えるか。

2018・2・11

折々のことば　鷲田清一　1019

問題が難しければ、シメタこれは他の連中にできないぞと考え、問題が易しければ、シメタこれはオレにできるぞと思うことだ。
森毅

一度の試験で「実力」など出し切れない。受験には要領と度胸が大事だし、運もついて回ると数学者は言う。だからつねに楽観的であれと。そういえばどこかでこうも書いていた。答案はラブレターを書くように書け。実際、消しゴムで消した跡をすかして受験者の思考の道筋を探ろうとする採点者もいると。『ものぐさ数学のすすめ』から。

2018・2・12

折々のことば　鷲田清一　1020

たぶん、親になるということは、「強さ」や「弱さ」ではかることのできない「新しい何か」を手に入れること、なんでしょうね。
ヨシタケシンスケ

妻の出産にうろたえ、赤ちゃんの世話にまごつき、微妙に変化した妻との関係に戸惑いつつ、自分の中に起こる微（び）かな変化も探る新人パパ。守るべきものを持つことで強くなったのか、臆病になったのか、「むずかしい」と言い、こう書く。競争でも厭（いと）け引きでもなく、聴きあい、かまいあう関係？　イラストエッセー『ヨチヨチ父』から。

2018・2・13

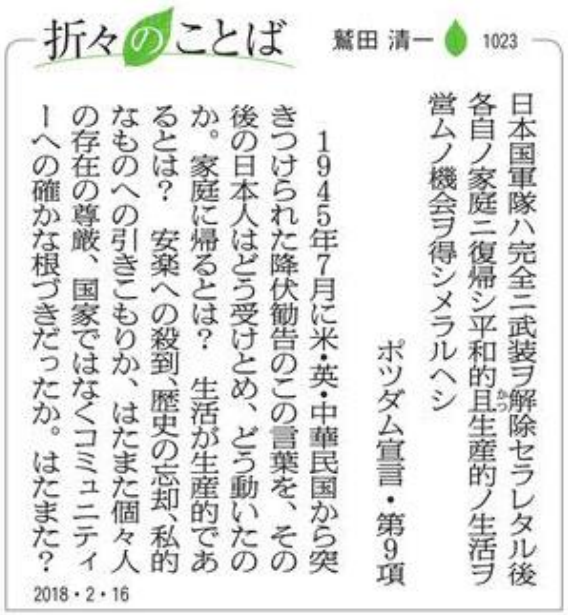
折々のことば
１０２１
～１０２５

病（やまい）、市（いち）に出せ

徳島県・旧海部（かいふ）町の
言い習わし











折々のことば
１０２６
～１０３０

論破禁止

高橋源一郎



折々のことば　鷲田清一　1026

論破禁止

高橋源一郎

明治学院大学・高橋ゼミの方針は何かと問われ、作家はこう答えた。「誰かを論破しようとしている時の人間の顔つきは、自分の正しさに酔ってるみたいで、すごく卑しい感じがするから」と。対話は、それをつうじて各人が自分を超えることを希ってなされる。相手へのリスペクト（敬意）と自己へのサスペクト（疑念）がなければ成り立たない。1月15日のツイッターから。

2018・2・19



折々のことば　鷲田清一　1027

ディベートは、話す前と後で考えが変わったほうが負け。ダイアローグは、話す前と後で考えが変わっていなければ意味がない。

平田オリザ

ディベート（討論）とダイアローグ（対話）の違いについて訊ねたとき、劇作家から即座に返ってきた答え。対話は、共通の足場をもたない者のあいだで試みられる。呼びかけと応えの愉しい交換であり、吐露と聴取の控えめな交換であり、埋まらない溝を思い知らされたあとの沈黙の交換でもある。討論よりおそらくはるかに難しい。

2018・2・20



折々のことば　鷲田清一　1028

ヒットして最大公約数のファンを得ることは、本当に好きな人を減らすんだな。

大江千里

人気のシンガー・ソングライターは47歳でそのキャリアを捨て、渡米して音楽学校に学び、今はじっくりジャズの演奏に取り組む。移動も機材の準備もまた自分でやるようになって、本当に音楽を届けたい相手もよく見えるようになった。「アメニティグッズみたいな」快適さとは別の、生きる手応えを求めたことで。「東洋経済オンライン」（1月31日配信）のインタビューから。

2018・2・21



折々のことば　鷲田清一　1029

自身の「業」の重量で、解体の方向へ傾いてゆくありさまは、もはや、地球がこれ以上の生命をのせきれない極点をみているようである。

金子光晴

葉にびっしり産みつけられた卵は毛虫となって葉を穿ち、剝ぎ取る。ひたすら押しのけ、からみ、肥えてゆく。一つのいのちが栄えるとは、別のいのちが朽ちること。人もまた、競争や扶養という関係の中で、他者を憔悴させることによって生き残る？詩人にはこれらが、「共生」ではなく「犠牲」の充満と映る。詩集『人間の悲劇』から。

2018・2・22



折々のことば　鷲田清一　1030

光の射さない穴蔵であると同時に闇を照らす灯台でもあるという、ほかに類のない場所

ヘンリー・ヒッチングズ

「本屋」とはそのような場所だと、英国の作家・批評家は言う。人生の相談所・避難所であり、若者が背伸びする場所であり、はぐれ者を惹きつける場所であり、新しい情熱を見つける場所であり、「薬局」の役目もすれば「イデオロギーの火薬庫」にもなる。世界各国の作家たちの書店をめぐる随想をみずから編んだ『この星の忘れられない本屋の話』（浅尾敦則訳）の序文から。

2018・2・23

折々のことば
１０３１
～１０３５

群れたり、慣れたり、頼ったりすると、迎合しなくてはなりません。
力を抜いて心を空っぽにすることができなくなります。

堀文子



折々のことば　鷲田清一　1031

群れたり、慣れたり、頼ったりすると、迎合しなくてはなりません。力を抜いて心を空っぽにすることができなくなります。

堀文子

だから、ほめられそうになれば逃げると、日本画家は言う。「誰かと一緒にいて感じるさびしさ」や「感性の違う人と過ごすつらさ」は、独りぼっちよりしんどいもの。つねにマニュアルなしの生き方を求め、70を前にイタリアにアトリエを構え、さらに中南米やヒマラヤを訪ね歩く。『99歳、ひとりを生きる。ケタ外れの好奇心で』から。

2018・2・24



折々のことば　鷲田清一　1032

私たちは少し、この世界にも他人にも自分にも期待しすぎてはいないだろうか？

山田太一

一人でできることも衆知を集めてできることもたかが知れている。人の生の通奏低音は「無力」であると、脚本家は言う。可能性を極点まで探るのもいいが、すると「自他への不満をかかえ、追い立てられるように生を終る」ことになる。可能性があってもどこかで断念することも大事。「力点」を違えるな、と。自身が選んだ作家たちの文章集『生きるかなしみ』の序文から。

2018・2・25



折々のことば　鷲田清一　1033

病気になっても病人にはならない。

田部井淳子

女性として世界初のエベレスト登頂をなしとげた登山家は、抗がん剤治療を受ける中、夫とこう言い続けたという。「つらいのを忘れちゃっていい気分だけが残るから」と点滴の合間をぬって山小屋に通い、東北の高校生たちを富士登山に招待した。人生、「すり足でも一歩一歩でも前に進めと。NHKのドキュメンタリー番組「田部井淳子人生のしまいかた」（昨年12月16日）から。

2018・2・26



折々のことば　鷲田清一　1034

深いつもりで　浅いのが知恵
浅いつもりで　深いのが欲

福寿園で使われている「つもり十訓」から

福寿園は京都の製茶の老舗。「つもり」とはとんだ勘違いのこと。おのれを顧みて自重することのないこと。世の中には、謙虚という徳を横柄な口ぶりで説く人は少なくないし、懐疑の必要をつゆ疑わずに主張する人も珍しくない。同様の言葉は全国にいろいろあるようで、「高いつもりで低いのが教養。低いつもりで高いのが気位」という言い回しを耳にしたこともある。

2018・2・27



折々のことば　鷲田清一　1035

「人生なんて明日のことわかんないんだもん。先のこと知って逆算して芝居されても、いいことないのよ」

大石静（脚本）

テレビ朝日系の帯ドラマ劇場「トットちゃん！」（昨年12月5日）から。劇中で、黒柳徹子に「そんなに書くのが遅いの？」と問われ、脚本家の向田邦子は「早く台本を渡すと役者さんが考えすぎるのよ」と答える。誰も未来を見通せないから、言葉に詰まったり、表情が曇ったり、行動に迷いが出たりする。人生のリアルはその不確定にある。

2018・2・28

折々のことば
１０３６
～１０４０

山よりでっかい猪（しし）は出ん

ことわざ

折々のことば　鷲田清一　1036

大体において日本人は、ものを考えるときに基礎となるものを文章の形として考えるよりも単語だけでものを考える。

田中美知太郎

人は言葉を、その意味を問いつめることなく手ざわりだけで使ううち、何となくわかった気になる。だから「自由」についても、「護らなければいつ失われてしまうかわからない」ことや、自由を行使するのもそれをせずに控えるのも自由、というところにまで思いが及ばない、と古典哲学の研究者は言う。講演集『人間であること』から。

2018・3・1

折々のことば　鷲田清一　1037

彼にはひとつになる以前の半分ずつの経験があったから、いまでは充分に思慮深くなっていた。

イタロ・カルヴィーノ

戦地で大砲に撃たれ、体を縦二つに割られた子爵。帰還後、一方の半身は残忍のかぎりを尽くし、他方は困窮する人々への奉仕に身を捧ぐ。体が再び一つになった子爵。その思慮深さは、人間においてはつねに相容れぬものがせめぎ合うとの洞察からくると、甥は思う。イタリア人作家の寓意小説『まっぷたつの子爵』（河島英昭訳）から。

2018・3・2

折々のことば　鷲田清一　1038

お茶を飲むしかありません。ですから、私の対話にはお茶が必要です。

樋野興夫

病理医の『がん哲学外来へようこそ』から。苦しみを分かちあいたいと思うなら、まずは話してもらうこと。人は苦しみを語ることで僅かながらもそれに距離を置ける。聴くことの意味はそこにあるが、話すほうは、話しても他人には所詮伝わらず、苦しみの意味を問うても答えはないと知っている。だから聴く側も、無理を強いずにただただ待つほかない。茶碗に手でも添えて。

2018・3・3

折々のことば　鷲田清一　1039

割り切った仕事ならたやすいが、思い入れるとぐっと難しくなる。

ジョン・マエダ

日系アメリカ人のデザイナーは、豆腐店を営む父の、手抜きを許さぬ仕事ぶりを見て育った。父は「儲ける」ことに興味はなく、「職人の技」に徹していた。それが何かと訊ねると、「愛しむように仕事をすること」だと答えた。物であれ人であれ、それへの愛しみに、憔悴はともなっても半端はない。B・バーモントとの共著『リーダーシップをデザインする』（友重山桃訳）から。

2018・3・4

折々のことば　鷲田清一　1040

山よりでっかい猪は出ん

ことわざ

野生の獣が突然現れても、どんなにでかい図体をしていても、それが潜んでいた山ほどは大きくない。最初は怖ろしくて体ががくがく震えるだろうが、じたばたせずに悠然と構えていたら、そのうちどこかに失せる。事を過大に見過ぎておろおろするうち事を見誤る。それに何よりみっともない。関西の人気ラジオパーソナリティー、中村鋭一が昔、番組の中でよく口にしていた。

2018・3・5

折々のことば
１０４１
～１０４５

犠牲になった人と、
助かった人の間に明確な理由や
共通の法則などありはしない

山村武彦

折々のことば 鷲田清一 1041

生まれてはじめて人間あつかいされました。

コウジさん

小学校もろくに通えず、読み書きのできない少年は、ぐれて少年鑑別所送りに。26で天麩羅店を始め、やがて授かった子どもの顔を見つめ「俺はなんにもおしえてあげられない」と涙を流す。そして夜間中学に通い始め、こう書けるまでに。昨今、学校は生きづらい場所として語られるが、人の静かな回復を支える場所でもある。夜間中学の元教師、松崎運之助の『学校』から。

2018・3・6

折々のことば 鷲田清一 1042

どの数字にもストーリーがあります。

ある会社の営業部長

つねに数字を問われるこの部署の長は、業績が好調だったことをたたえる訓示でこう語った。大きな数字を残した社員だけでなく、付き合いのなかった企業に食い込んだり、取引先との信頼を深めるべく地道な努力を重ねたりした社員をもねぎらった。数字の大小でなくその意味を問う。こういう上司の下でなら、後ろで支える事務職も働きがいがある。知人から聞いたいい話。

2018・3・7

折々のことば 鷲田清一 1043

お前が永いあいだ深淵をのぞきこんでいれば、深淵もまたお前をのぞきこむ。

ニーチェ

自分が否定するものと闘ううち、人はしだいに相手に似てくると、19世紀ドイツの哲学者は『善悪の彼岸』（信太正三訳）で言う。そのとき人は、これまで想像もしなかった化け物が自分という存在の「深淵」に潜むのを知って愕然とする。別の著作『ツァラトゥストラ』（吉沢伝三郎訳）でもこの「深淵」にふれ、「人間は、生を深く洞察するに応じて、苦悩をも深く洞察する」と書く。

2018・3・8

折々のことば 鷲田清一 1044

犠牲になった人と、助かった人の間に明確な理由や共通の法則などありはしない

山村武彦

防災アドバイザーの『南三陸町　屋上の円陣』から。大津波で生死を分けたのは、ちょっとしたタイミングや居場所の差だったという。小さな偶然がやがて必然へと裏返る。私がこの人たちの許に生まれたのは偶然だが、彼らを父母としたことが後の人生を決定的に左右するように。生き残った人は、その理不尽、亡き人への後ろめたさを抱え込んで、今日も生きる。

2018・3・9

折々のことば 鷲田清一 1045

哲学者どうしの挨拶は、「どうぞ、ごゆっくり」であるべきだろう。

ヴィトゲンシュタイン

生き方、世界の見方を変えるには、これまで身につけてきた思考の初期設定を書き換える必要がある。そこでは、急がされずに、滑りのよい言葉に流されずに、ああでもないこうでもないと道筋をじっくり探り、考え抜くタフさが要る。凭れかかれるものがないままにどこまで立ち続けられるかが試されるのだ。思考はいつもジグザグに進む。『反哲学的断章』（丘沢静也訳）から。

2018・3・10

折々のことば
１０４６
～１０５０

他人に語らない部分にこそ、
社会が注目すべきものが
逆に映し出されると考えています。

金菱清（かねびしきよし）



折々のことば　鷲田清一　1046

世界は人間なしに始まったし、人間なしに終わるだろう。

クロード・レヴィ＝ストロース

途中から世界に現れ、やがて先に消えてゆく人類には、その世界に「修復不能な損傷を惹き起すいかなる権利」もない。人類は世界の主ではない。世界の中で自分が占める位置を知るために、人類は自らの背後にもう一つの眼をもつ必要がある。その眼をフランスの民族学者は、のちに世阿弥の「離見の見」に倣い「はるかなる視線」と呼んだ。『悲しき熱帯』（川田順造訳）から。

2018・3・11



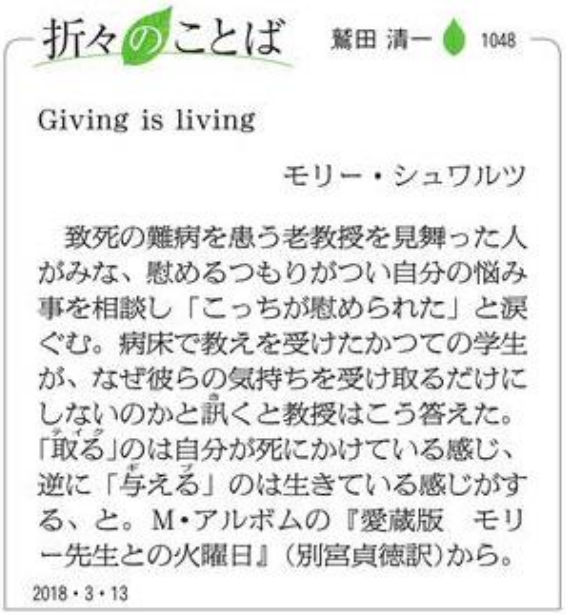
折々のことば　鷲田清一　1047

あんたら頭で考えとる。そやからあかんにゃ。

松井利夫

陶芸家が、若い人たちの頭でっかちな作品を評しこう言った。先に手で考えよ、と。「かんがふ」とは「かむかふ」こと、つまり、ものを迎え入れ、それと身を交わすことだとの説もあるように、手で物をつぶさに、丹念にまさぐらないといけない。じっさい人は、歩幅や拡げた両腕の幅、掌の親指と小指の隔たりを物差しに、ものの大きさを測り、おのれの小ささを思い知ってきた。

2018・3・12



折々のことば　鷲田清一　1048

Giving is living

モリー・シュワルツ

致死の難病を患う老教授を見舞った人がみな、慰めるつもりがつい自分の悩み事を相談し「こっちが慰められた」と涙ぐむ。病床で教えを受けたかつての学生が、なぜ彼らの気持ちを受け取るだけにしないのかと訊くと教授はこう答えた。「取る」のは自分が死にかけている感じ、逆に「与える」のは生きている感じがする、と。M・アルボムの『愛蔵版　モリー先生との火曜日』（別宮貞徳訳）から。

2018・3・13



折々のことば　鷲田清一　1049

他人に語らない部分にこそ、社会が注目すべきものが逆に映し出されると考えています。

金菱清

「当事者の話を聞くことで何か分かる」と思い、聞きたいことだけを聞くところに「インタビューという手法の敗北」があったと、今も東北の被災地を訪ね歩く社会学者は言う。聴き取りとは本来、おのれの理解の彼方にあるものに気づき、絶句することから始まるのだろう。ジャーナリストのR・L・パリーとの対談《霊や夢として「今」に存在する》（「ＡＥＲＡ」3月12日号）から。

2018・3・14



折々のことば　鷲田清一　1050

池の底には泥がある。かきまわさなければ、上のほうの水は透明なままだ。だから泥を攪うときは慎重に、少しずつ掬う。

陳浩基

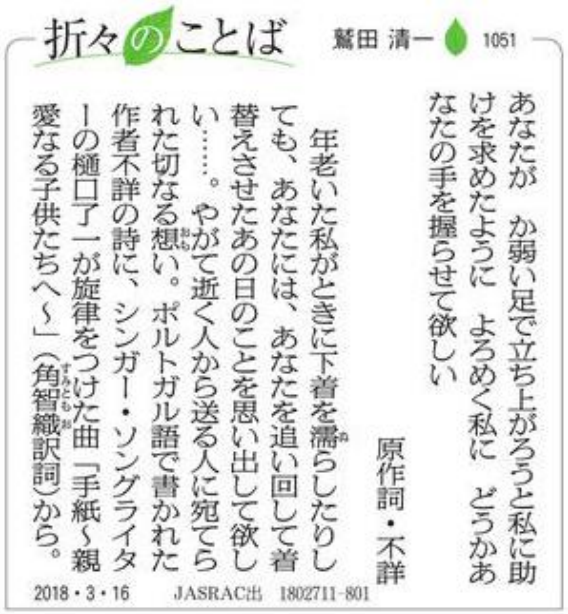
香港警察を舞台にしたミステリー『13・67』（天野健太郎訳）から。マフィアのボスを追う刑事は、「黒に黒をぶつけ」てマフィア同士に潰し合わせる手も考えるが、市民の安全を考え、思い止まる。摘発は照準を正確に定めてなされるべきで、大きくかき混ぜると澄んだ水まで濁らせる。社会や組織の健やかな部分まで損なうことになる。

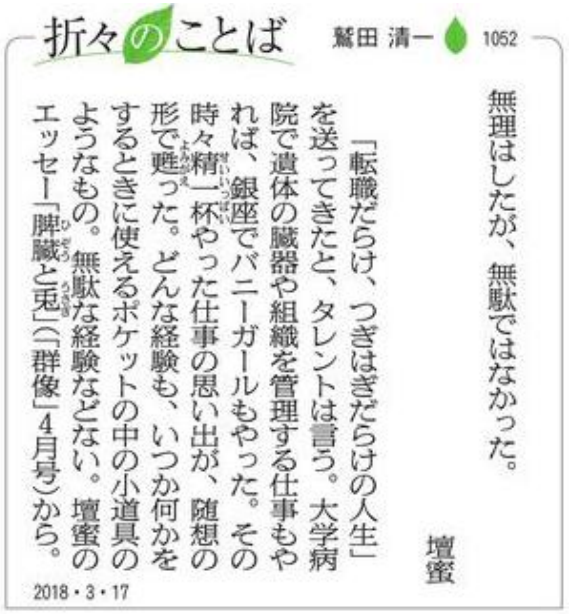
2018・3・15

折々のことば
１０５１
～１０５５

無理はしたが、無駄ではなかった。

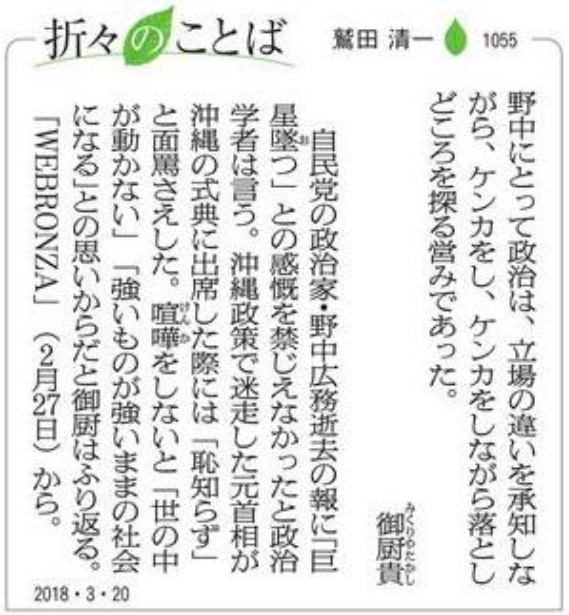
壇蜜









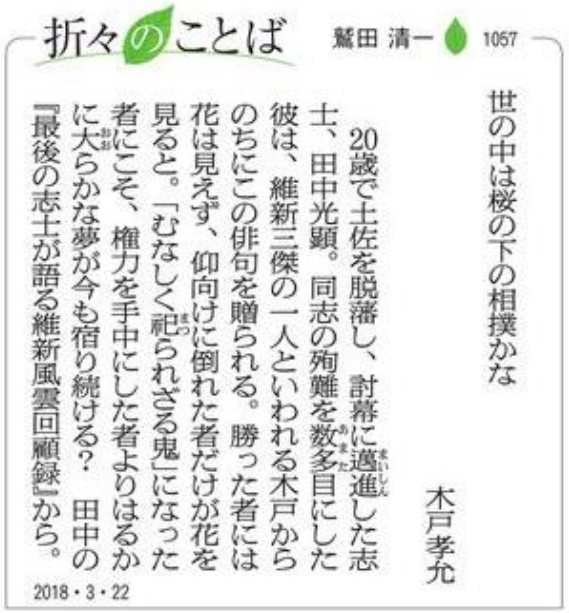


折々のことば
１０５６
～１０６０

世の中は桜の下の相撲かな

木戸孝允











折々のことば
１０６１
～１０６５

「無い」という状態を
知っているからこそ、
「有る」ことがありがたい。

磯田道史

折々のことば　鷲田清一　1061

俺は息してるだけ

高橋秀実の従兄

ノンフィクション作家が幼い頃、従兄の部屋で遊んでいると、彼はよく弟のいいところを指折り数え、「すげえべ」と褒めた。妬かないのと訊くと、従兄は真顔でこう答えた。この謙遜の言葉にふれて、以後、生きている間ずっとしているのは息で、「生きがい」や「自己実現」などオマケみたいなものだと思えるようになり、人生がぐっと楽になったと言う。『結論はまた来週』から。

2018・3・26

折々のことば　鷲田清一　1062

「無い」という状態を知っているからこそ、「有る」ことがありがたい。

磯田道史

すぐに散る桜の愛おしさも、震災で気づかされたただ「有る」ことのありがたさも、ここに理由があると歴史学者は言う。「ただ生きているだけ」の人生を人はつい否定的にとらえるが、多くの宗教が教えるように、「ただ生きている」というのは何かの欠如ではなく、それこそが一つの奇蹟的ともいえる達成なのである。国文学者・中西進との対談「天災と人災」（「潮」4月号）から。

2018・3・27

折々のことば　鷲田清一　1063

みっともないことはするな。

宮原秀夫

この情報ネットワーク学者は大阪大学の総長だったとき、ことあるごとに職員たちにこう語りかけた。私はそれまで、言葉を生業とする者として、人前の挨拶では二度と同じ話はしないという主義を通してきたが、この総長の下で働くなかで、大事なことはくり返しきちんと口にすべきことを学んだ。その言葉には、往年の大阪の〝シティボーイ〟の矜持がしかと息づいていた。

2018・3・28

折々のことば　鷲田清一　1064

「すみませんが、カーネギーホールへはどうやったら行けるのでしょう?」ミュージシャンは答える、「練習あるのみ！」

アメリカの古いジョーク

ニューヨークの音楽家たちがよく口にするジョーク。バイオリンを抱えた女性にこう訊かれ、ある男性はとっさに「アップタウンを五十七丁目まで行って……」と答え、後でひどく悔しがった。誰もがかくも眩しい場所を共有している文化はそれこそ眩しい。ジャズベース奏者、ビル・クロウの『ジャズ・アネクドーツ』（村上春樹訳）から。

2018・3・29

折々のことば　鷲田清一　1065

近代の住宅計画に欠落していたのは経済です。

山本理顕

「勤務」（賃労働）が働くことの普通の形になることで、つまり職住一致という暮らしのあり方が崩れることで、住宅は「家族」だけのプライベートな場所に、そして生産せずに消費するだけの空間になった。なんと「寂しい空間」かと建築家は憤る。それぞれの生業を同じ空間で支えあうということなしに、地域コミュニティーに地力は備わらない。仲俊治との共著『脱住宅』から。

2018・3・30

折々のことば
１０６６
～１０７０

本人が大切にしていることを、とるに
足らないことと一方的に判断しないで、
この行為こそが文化創造の
軸であると考えています。

久保田翠



折々のことば　鷲田清一　1066

わたしがいい俳優だと思う人は自分が「どうなっちゃうんだろう」っていう状態にいくことを、つねに求めていると感じます。

市原佐都子

身体で感じる時代への違和を軸とした表現に、劇団「Q」を拠点に取り組む劇作家・演出家は、自分をコントロールできずに怖がったまま舞台に立つ俳優に強く惹かれると言う。その不安と不気味の中から、作家の想像をも裏切るリアルが立ち上がるからか。演劇研究者・岩城京子による作家たちのインタビュー集『日本演劇現在形』から。

2018・3・31



折々のことば　鷲田清一　1067

3つ目の耳を持ち、彼ら（患者たち）が言っていることでなく、言わないでいること（言えないでいること）を聴きなさい

ジョアン（緩和ケア専門ナース）

英国のホスピスを訪れた神宮寺（長野）の住職、高橋卓志に、「死を支える」ことの意味についてナースはこう述べた。苦しみは何より忘れたいもの、消したいもの、語るのが辛いもの。だから、苦しむ人のその引きこもりごと聴かねばならない。これは「生を支える」場面でも言えること。神宮寺の寺報「未来への遊行帳」終刊号から。

2018・4・1



折々のことば　鷲田清一　1068

あの戦時中に、戦後というものがありうるということに、氏の一言で私は眼を開かれた

堀田善衞

評論家の河上徹太郎が敗戦の2年前、ある席で「戦後の準備をしなければならない」と呟いた。「戦後」と「準備」で何を思い描いたのかはついに聞けなかったが、と作家は回想する。逼迫した出口なしの状況においても〈外〉は必ずあるということか、どんな破局的な事態にあっても後の処理を考えておかねばということか。希望か、責務か。随筆集『誰も不思議に思わない』から。

2018・4・2



折々のことば　鷲田清一　1069

本人が大切にしていることを、とるに足らないことと一方的に判断しないで、この行為こそが文化創造の軸であると考えています。

久保田翠

一日中、ケースに鍵を入れて打ち鳴らす息子。重度の知的障害をもつ彼・壮の「たけしルール」を基準として福祉施設を運営してきたNPO法人代表は、これを「問題行動」ではなく表現未満の「個人の熱意」と捉え、人びとの分断を超える社会のあり方を追求する。芸術選奨文部科学大臣新人賞贈呈式（3月13日）でのスピーチから。

2018・4・3



折々のことば　鷲田清一　1070

だいたい、私、若気の過ちを通過していない人間を信用しない性質なんで。

山田詠美

おさまりのよいイメージの鋳型の中に自分をすっぽり嵌めることに強く抗い、ときにふてくされるのも、「若気」のしるし。背伸び、分不相応、勘違いこそ若い時の特権だ。その抵抗はもちろん過ちと紙一重。だが、バランスを崩してでも体を張るという経験をしたことがない人は、いざという時、身をすぼめるだけ。力になってくれない。作家のエッセー集『吉祥寺デイズ』から。

2018・4・4

折々のことば
１０７１
～１０７５

若いウグイスは、
声の良い成鳥から
鳴き方を学ぶといいます。

内館牧子

折々のことば　鷲田清一　1071

Wie aus der Ferne

楽譜上の指示表現

《遠くからやってくるように》という、シューマンらが楽譜に書き込んだドイツ語の指示。フランスの元実務官僚でもある文筆家、M・シュネデールは、遥か遠くから聞こえる音ほど、逆に〈私〉の内深くから〈私〉に触れてくると言う。世界も〈私〉も不確かに移ろうもの。その消滅に抗う声、いや「消滅そのものの声」が音楽だからだと。著書『グレン・グールド　孤独のアリア』(千葉文夫訳)から。

2018・4・5

折々のことば　鷲田清一　1072

切ないから出てってください

ある大家さん

俳優の竹中直人のエッセー集『少々おむづかりのご様子』から。学生だった頃、酒呑みで毎晩のように人を集めどんちゃん騒ぎをしていた友人が、大家さんからこう告げられ、アパートを出たという。身をもてあましてバカ騒ぎに興じる若い世代のそのいのちの滴りが、人生を収める段になった老婦人には眩しすぎたからか。先が見えずに悶えていたかつての自分に重ねてか。

2018・4・6

折々のことば　鷲田清一　1073

若いウグイスは、声の良い成鳥から鳴き方を学ぶといいます。

内館牧子

だからこそ「大人が良い声で鳴き続けないといけない」と脚本家は言う。表面を取り繕い、平然と嘘をつき、「敵」をでっち上げて罵詈雑言を浴びせる、そんな大人の声は耳障りだ。それに自分がとうの昔に見果てた夢を子どもたちに押しつけた上で、今どきの子どもにはそれがないと嘆く。そんなお喋りはもうやめたほうがいい。本紙3月27日朝刊の《リレーおぴにおん》から。

2018・4・7

折々のことば　鷲田清一　1074

「至らない自分を消す」というところに、いわゆる渋好みの本来があるのではないかしら

岩下尚史

服選びについて作家はこう説く。渋味というのは、弛んだまま凭れあう、そんな関係の甘さの否定である。でれでれし、ちまちました自分を消してゆく、その心の張りの中に艶が出てくる。その点でただの地味とは異なる。でもそれは大人の心得。「若いうちはどうせ何者でもない」のだから、見かけ倒しであっても「気障なくらいがちょうどいい」とも。『大人のお作法』から。

2018・4・8

折々のことば　鷲田清一　1075

時間は幾らでも出来るわけだが、「閑」にはならない。

河野与一

稀代の人文学者は、教職を離れた時、こう思った。ギリシャ語のスコレー(閑)はスクール(学校)の語源とされるが、学校を去って時間が増えても閑になるわけではない。それは時間ではなく空間の問題だと言う。時代を透徹した眼で見るには、全体を俯瞰しつつ、しかも出来事に沿って自由に移動できる、そういう余裕のある距離感が必要だと。随想集『新編　学問の曲り角』から。

2018・4・10

折々のことば
１０７６
～１０８０

真の贅沢（ぜいたく）というものは、
ただ一つしかない、
それは人間関係の贅沢だ。

サン＝テグジュペリ

折々のことば　鷲田清一　1076

真の贅沢というものは、ただ一つしかない、それは人間関係の贅沢だ。

サン＝テグジュペリ

飛行士でもある作家は、僚友たちから得たこの教訓を証するような事例をのちに目にする。長い奴隷生活から解放された老男性。新天地で自由を味わうなか、「世界がいかに自分と無関係」かを思い知る。そこで持ち金すべてを町の子らへの贈り物に使う。彼らの「希望の重量」が自分にかかることでやっと、自らの存在を量れたのだった。『人間の土地』（堀口大學訳）から。

2018・4・11

折々のことば　鷲田清一　1077

子どもに対する愛情では「誰から愛されたか」だけでなく、どれだけの愛情を受けてきたかが重要かなと思っています。

轟麻衣子

保育・介護サービス「ポピンズ」社長の言葉。ハフポスト日本版（昨年12月27日）から。〈私〉が今こうしてあるのは、過去に誰かに養われたから。親とは限らない。何の条件もつけずに世話してもらったこの経験が、いつか自分がどれほど他人を憎むようになろうとも、最後のところで〈人〉への信頼を失わないでいさせてくれる。

2018・4・12

折々のことば　鷲田清一　1078

俺はもう生きてるんじゃない、ただ残ってるだけなんだぞ

西條八十

昭和歌謡曲を牽引したこの詩人の長男（八束）の妻は、父が晩年こう口にしたと証言する。「芝居が終わって誰もいなくなった舞台の上に一人ポツンと立ってる」みたいだと。作詞家として時代に添い寝しただけなどと世の毀誉褒貶に晒されもしたが、人生そのものが余分、という境地に最後は立ったのだと思いたい。歴史社会学者・筒井清忠の編著『西條八十と昭和の時代』から。

2018・4・13

折々のことば　鷲田清一　1079

暮らしを犠牲にしてまで守る、戦うものはなんにもなかった。

花森安治

戦争が終わってすぐ町に並んだのは露店、まっ先に眼についたのがフライパンの山。軍用資材の残りで作ったそれが、朝日を浴び光っていた。何より大事なのは台所だ、暮らしだ。これだけは侵してはならないと確信したと、雑誌「暮しの手帖」の創刊者は語る。これからはもう寝間着に着替えて眠れるとも。「僕らにとって8月15日とは何であったか」（『一億人の昭和史4』）から。

2018・4・14

折々のことば　鷲田清一　1080

それが未だ見ず名も知らない人の心を、わずかに温め幸せな気分をもたらすなら……この世に存在する確かな意味と資格を持つ

十五代　樂吉左衛門

樂家の現当主は、こよなく優美な本阿弥光悦の茶碗「乙御前」についてこう語る。片や、樂家初代長次郎の、造形上の作為をぎりぎりにまで削ぎ落とした漆黒の茶碗に、「飲めるものなら飲んでみろ」とばかりに無言で「激しく世に対峙する様」を見る。この二つの極に、十五代の作陶に懸ける思いがぴんと張られている。『光悦考』から。

2018・4・15

折々のことば
１０８１
～１０８５

戦争とか争いごとって、
すべて自分が正義であるという人
が起こすじゃないですか。

石田衣良



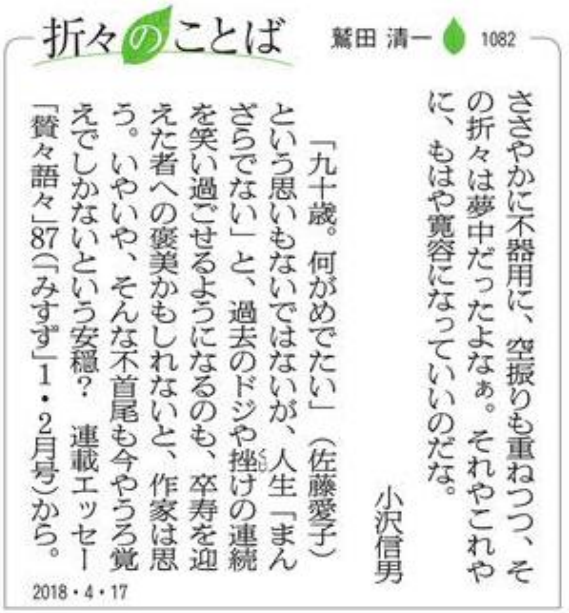
折々のことば　鷲田清一　1081

ぼくたちがいるのは、すべてがわかった世界ではなく、何がわからないかがわかりにくくなった世界なのだ。

宮内悠介

国境を越える時の「何が待っているかわからない」という感覚が好きと、作家は言う。わからないものがそこにあると感じると、自分の中の「わからない」も増え、可能性が広がる。なのに情報検索のツールが身近になり、人はすぐわかったつもりになる。それが世界を狭める。本紙4月2日朝刊の随想《「未知」はいくらでもある》から。

2018・4・16



折々のことば　鷲田清一　1082

ささやかに不器用に、空振りも重ねつつ、その折々は夢中だったよなぁ。それやこれやに、もはや寛容になっていいのだな。

小沢信男

「九十歳。何がめでたい」（佐藤愛子）という思いもないではないが、人生「まんざらでない」と、過去のドジや挫(くじ)けの連続を笑い過ごせるようになるのも、卒寿を迎えた者への褒美かもしれないと、作家は思う。いやいや、そんな不首尾も今やうろ覚えでしかないという安穏？　連載エッセー「賛々語々」87（「みすず」1・2月号）から。

2018・4・17



折々のことば　鷲田清一　1083

戦争とか争いごとって、すべて自分が正義であるという人が起こすじゃないですか。

石田衣良

「いつでも正義の側にいたい」と思うのが人の常だが、自分は単純な善悪、正邪の物語を書こうとは思わないと作家は言う。〈正義〉と〈愛〉は異なる。〈正義〉が顔の見えない人々の集合に向けられるのに対し、〈愛〉は特定の誰かに向かう。〈正義〉が人々のあるべき姿に照準を合わせるのに対し、〈愛〉は人の現にある状態に注がれる。「青春と読書」4月号でのインタビューから。

2018・4・18



折々のことば　鷲田清一　1084

「ここから先は他人には触れられたくない」というものを持っているのが、普通の人であり「生活者」です。

原一男

「ゆきゆきて、神軍」など、とんがった人ばかり撮ってきた映画監督は、アスベスト禍の裁判闘争を8年がかりで追うなか、内にしまい込まれた悲しみと、公にそれを語ることの間で揺れ動く住民のその苦渋から目を外せない。そして「感情のディテール」を描くのが映画だと改めて思う。「現代思想」3月臨時増刊号でのインタビューから。

2018・4・19



折々のことば　鷲田清一　1085

「助けて！」って言う言葉をかけられたことある？

中本忠子(ちゅうこ)

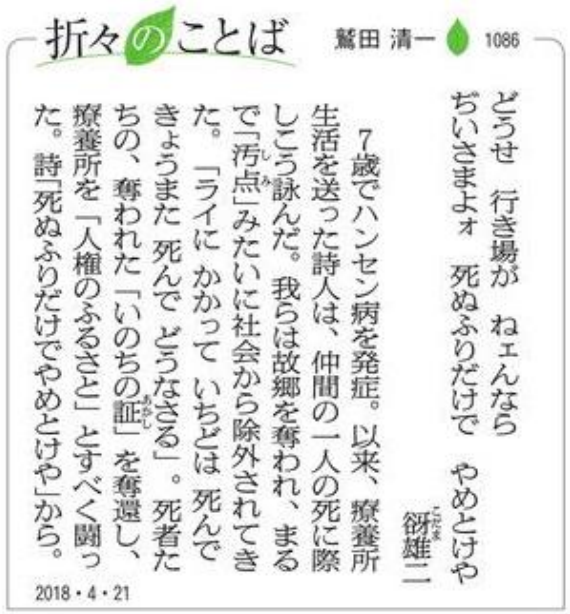
その経験がない人に「何を言ったってわかりゃせん」と、長年子どもたちに無償で食事を供してきた元保護司は語る。電気もガスも止められた家の子。暴力団の家族の仕事、母の薬物注射を手伝わされる子。そんな「重たい」環境にいるから、来ても「よう来たの」としか言わない。お腹(なか)いっぱいになればいずれ「聞きたくないことまで」話しだすからと。『あんた、ご飯食うたん？』から。

2018・4・20

折々のことば
１０８６
～１０９０

電車が人身事故で止まった時、
車内で誰かが舌打ちしたりする
光景が、すごく怖いんです。

稲葉俊郎



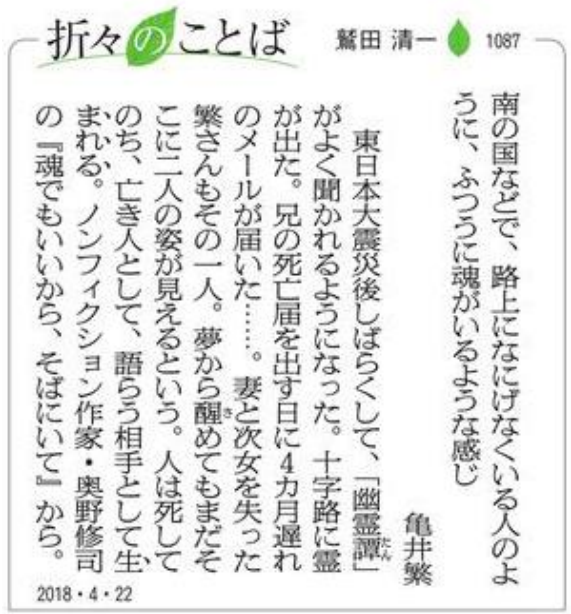
折々のことば　鷲田 清一　1086

どうせ　行き場が　ねェんなら
ぢいさまよォ　死ぬふりだけで　やめとけや

谺雄二

7歳でハンセン病を発症。以来、療養所生活を送った詩人は、仲間の一人の死に際しこう詠んだ。我らは故郷を奪われ、まるで「汚点（しみ）」みたいに社会から除外されてきた。「ライに　かかって　いちどは　死んできょうまた　死んで　どうなさる」。死者たちの、奪われた「いのちの証（あかし）」を奪還し、療養所を「人権のふるさと」とすべく闘った。詩「死ぬふりだけでやめとけや」から。

2018・4・21



折々のことば　鷲田 清一　1087

南の国などで、路上になにげなくいる人のように、ふつうに魂がいるような感じ

亀井繁

東日本大震災後しばらくして、「幽霊譚（たん）」がよく聞かれるようになった。十字路に霊が出た。兄の死亡届を出す日に4カ月遅れのメールが届いた……。妻と次女を失った繁さんもその一人。夢から醒（さ）めてもまだそこに二人の姿が見えるという。人は死してのち、亡き人として、語らう相手として生まれる。ノンフィクション作家・奥野修司の『魂でもいいから、そばにいて』から。

2018・4・22



折々のことば　鷲田 清一　1088

他人のオーダーに応えるということは、仕事の基本である。

押井守

仕事は自分のためだけにするものではない。それを通じて誰かの暮らしを支えること。集団の維持に不可欠なある役を担うこと。人は「注文に応えて」生きる。ただし注文を額面どおりに受け取っていいかは別の問題。注文者の思いを超えてその言葉に託されたミッションに応えるのでないと、業務と言えても仕事とは言えないだろう。映画監督の『ひとまず、信じない』から。

2018・4・23



折々のことば　鷲田 清一　1089

一人の思想は、一人の幅で迎えられることを欲する。不特定多数への語りかけは、すでに思想ではない。

石原吉郎

「一人がついに脱落しても、なにごともなくささえつづけられて行く思想」なんぞ「私に、なんのかかわりがあるか」と、詩人は書く。思想の名に値するものは、私を撃つ。そのすべてが同意可能というわけでなくても、私を情動ごと突き上げる。この私の胸ぐらを摑（つか）み、激しく揺さぶるかのように迫ってくる。『石原吉郎詩文集』から。

2018・4・24



折々のことば　鷲田 清一　1090

電車が人身事故で止まった時、車内で誰かが舌打ちしたりする光景が、すごく怖いんです。

稲葉俊郎

テレビでは、心を揺さぶるドラマもニュースやCMで不意に中断される。感情が細切れにされ、しかも人はそれに慣れる。他人の死ですらただの「情報」になって、人を悼む気持ちがすっと立ち上がらなくなると大学病院医師は憂う。心に病をもつ人も実はそういう事実に深いダメージを受けているのではないかと。音楽家・大友良英との対話『見えないものに、耳をすます』から。

2018・4・25

折々のことば
１０９１
～１０９５

「性格悪くていいよ」
「どーしてお母さん」
「だっていい子は自分のもの
好きな人にみんなゆずるじゃない」

西原理恵子

折々のことば 鷲田清一 1091

病気になって復活したあとにすごくいい演奏をする人っているんですね。

大友良英

対談の相手、大学病院医師・稲葉俊郎の、体の弱い人とは「体に対して敏感で、感受性の高い人」だとの発言に、音楽家はこう返す。病気になると、人は体調の変化に耳を傾ける。気圧や湿度の変化、空気の動きにも敏感になる。音楽は、楽器と体と空間とが共鳴しあうもので、たんに耳の快感としてあるのではないということか。昨日と同じ『見えないものに、耳をすます』から。

2018・4・26

折々のことば 鷲田清一 1092

さすが学問の力だねぇ

與那嶺貞の仕事仲間

まるで精緻な刺繍を思わせる「読谷山花織」。幻の布ともいわれた沖縄のその織物の復元がようやく叶った時、それをやり遂げた與那嶺に、仲間の一人が涙をこぼしてこう言った。精緻を極めた復元の作業を根っこで支えたのは、幾何学など、実業学校で身につけた知識だった。学問のこういう〝尊さ〟を、私たちは久しく忘れ去っていないか。作家・澤地久枝の『琉球布紀行』から。

2018・4・27

折々のことば 鷲田清一 1093

「性格悪くていいよ」「どーしてお母さん」
「だっていい子は自分のもの好きな人にみんなゆずるじゃない」

西原理恵子

そう、「幸せになるのもゆずっちゃう」。だから「人の犠牲になってまで幸せを逃さないでね」と母は子に言う。でもその母は憶えている。幼い頃、祖父母が、刺し身ならトロを残し、美味しいと大喜びする孫を見て喜んでいたことを。だからこう続けた。「あなたが笑うとあなたの大切な人が笑うよ」。漫画『毎日かあさん』12から。

2018・4・28

折々のことば 鷲田清一 1094

大切なのは、封じられた沈黙が、打ち捨てられた空白が、そこにあるということなのです

姜信子

安寿と厨子王の悲痛な物語は、説経節や瞽女唄などとして、全国各地で脈々と謡いつがれてきた。理不尽に踏みにじられた数多のいのち。作家はその無念の跡を訪ね歩き、「その沈黙に、深い祈りを注ぎ込まねばならぬ」と言う。被差別者、被爆者、ハンセン病者への思いを重ねつつ。近代的な「解放」の物語への書き換えを拒みつつ。『平成山椒太夫』（絵・屋敷妙子）から。

2018・4・29

折々のことば 鷲田清一 1095

論理的に可能なことが、人を納得させる理屈にはならないのが、生き難さの根本でもある

西川勝

看護の現場では、患者さんのことを理解したいとの願いが潰えること、「理解を超える不気味な力」を前に立ち竦むことが、嫌というほどあると看護師は言う。人をその座ごと動かすのは気分や情動。が、それは自分でもうまく制御できない。血流や内臓のうねりなど、生理にまで深く根を下ろしているからか。「納得」をだから「腑に落ちる」と言うのか。『ためらいの看護』から。

2018・4・30

折々のことば
１０９６
～１１００

アメーバなんて嬉（うれ）しいじゃないか。ひとつになったりふたつに分かれたり…変幻自在。自由奔放に生きている。素晴らしいじゃないか

岡本太郎

折々のことば　鷲田清一　1096

咳をしても一人

尾崎放哉

順調だった人生路から外れ放浪の旅に出た俳人が、最後に辿り着いた小豆島の庵で詠んだ句。肺を病んでぜえぜえ咳き込むも、音は虚空に響くのみ。「一人」とつぶやくのも、打ち棄てられているとの思いを断ち切れずしてか、あるいは未だ「一人」と意識する未練がましさを笑ってか。「入れものが無い両手で受ける」という句の切迫にもたぶん同じ苦笑いが。『尾崎放哉句集』から。

2018・5・1

折々のことば　鷲田清一　1097

生まれて初めてヘビメタのコンサートに行き、最高だったわ

70代の女性

似た者同士が集う狭い人間関係の外へ出ようと、行く場所、会う人、食べものまで、コンピューターに無作為に選ばせるソフトを開発した米国のIT芸術家、M・ホーキンスさん。それを試した女性からのコメント。本紙3月31日朝刊beから。人の感覚にはどんな隙間があるかわからない。辛抱ばかりの人生だったわが祖母は、血まみれのプロレスのテレビ中継に噛りついていた。

2018・5・2

折々のことば　鷲田清一　1098

アメーバなんて嬉しいじゃないか。ひとつになったりふたつに分かれたり…変幻自在。自由奔放に生きている。素晴らしいじゃないか

岡本太郎

前衛芸術家が構想した大阪万博の太陽の塔。内部の《生命の樹》の究極のイメージはこの原生生物にあったと、展示に関わった千葉一彦は回想する。いつも同じであるより、別の存在になるほうが楽しい。膨らみ縮み、合体し分離する。そこに生命の原形があると岡本は考えた。平野暁臣著『「太陽の塔」岡本太郎と7人の男たち』から。

2018・5・3

折々のことば　鷲田清一　1099

「おじょうさん　はなれててくださいな」
「これからまっかな血がとびちることになりそうです」

野比のび太

一度は言ってみたい口上。ライターに筋書きを書いた紙を入れ点火すると現実がその通りになる「ひみつ道具」の「シナリオライター」。しずかちゃんを救おうと使うが、「おしょうさん　はなれててくだちいな」「これからまっかな皿が…」と誤字でトホホな結果に。調子づくとつい足許が疎かになる。藤子・F・不二雄『ドラえもん』8巻から。

2018・5・4

折々のことば　鷲田清一　1100

〈やわらかい〉音とか、〈つやのない〉音とか、〈かわいた〉音といった言い方にも理由がある。

モーリス・メルロ＝ポンティ

色は眼で見る、音は耳で聴くと言うのは誤りではないか。人は、鳥が飛び立ったばかりの枝にそのしなやかな張りを見る。走り去る車の音に舗石の硬さや凹凸を聴く。その一つ一つが、外に現れた事物の「内的構造」にほかならず、それを支点として諸感覚は交流しあうのだと、哲学者は言う。『知覚の現象学』（竹内芳郎ほか訳）から。

2018・5・5

折々のことば
１１０１
～１１０５

言葉以前の世界の消息を
言葉によって伝えること、
つまり言葉で言葉を破ること。

長谷川櫂（かい）

折々のことば　鷲田清一　1101

民主的な社会に暮らす方法を学びたいのならば、オーケストラで演奏するのがよいだろう

ダニエル・バレンボイム

楽団の各パート（受け持ち）は、あてがわれた単一の機能を担う部品（パーツ）とは違って、他の演奏者の思いを量りつつ、追従したり、けしかけたり、互いに応じあう中で曲を作ってゆく。そう、他の人のために場所を残しながら、同時に自分の場所を主張すると、ピアニスト・指揮者は言う。A・グゼリミアン編『バレンボイム／サイード　音楽と社会』（中野真紀子訳）から。

2018・5・6

折々のことば　鷲田清一　1102

言葉以前の世界の消息を言葉によって伝えること、つまり言葉で言葉を破ること。

長谷川櫂（かい）

ここに俳句というか、詩歌一般の妙があると、俳人は言う。世界をすっぽり覆う言葉を剝（は）がし、言葉の向こうにふれること。そのために「ぼーっとする」、つまり「集中ではなく、心を遊ばせる」必要がある、と。俳句は、世界の、そして〈私〉の存在に隙を空ける。「や」などをはさみ、切れを入れる。じゃあ人生で、「一息つく」だけでなく切れを入れるとは？『俳句の誕生』から。

2018・5・8

折々のことば　鷲田清一　1103

夫婦には一般論とは別の世界があるのだ。

山藤章二

似合いのペアかと思えばすぐに別れる。相性が悪そうでも何十年と保（も）つ。仲裁の労をとろうものならとんだ「三枚目」になると、イラストレーターは苦笑い。が、夫婦が一般論で説けないならそこに生まれた子にも一般論は無用だ。これは愉快な道理。でもそこからは、自己のありようは育った〝環境〟のせいにできないとの厳しい結論も出てこよう。『はじめての八十歳』から。

2018・5・9

折々のことば　鷲田清一　1104

いまや統合の過剰というよりもむしろ分断の深化によって自由に対する制約や剝奪（はくだつ）が惹（ひ）き起こされている

齋藤純一

自由を脅かすものへの人々の抵抗は、何を脅威と感じるかで形を変える。抵抗はかつて国家による強制や動員に向けられたが、現在、脅威はむしろ、問題関心を共有できないという、人々の分断のほうにあると、政治思想史家は言う。安全の過度の強調も「自己隔離」として人々の間で隔たりを拡（ひろ）げるよう作用していると。『自由』から。

2018・5・10

折々のことば　鷲田清一　1105

ベッドつきの車椅子用トイレを発見すると、「どんどん外に遊びにおいで」。そう言われているようで実にうれしいのだ。

神足裕司（こうたりゆうじ）

病気の後遺症で要介護5になったコラムニストが仲間と花見を楽しもうと訪れた新宿御苑。車椅子を使う人への心配りがあちこちに。「できない」ことは、行動の環境が「できる」側から組み立てられているからできないだけのことが存外多い。介護職員や家族への思いを綴（つづ）ったwebコラム「コータリさんからの手紙」（4月12日）から。

2018・5・11

折々のことば
１１０６
～１１１０

褒められた喜びというのは、
「ちゃんと見ていてもらった」
という喜びでもあった。

苅谷夏子



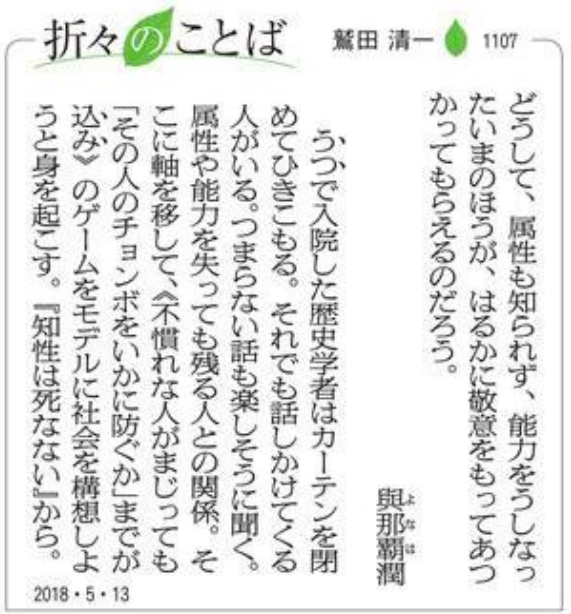
折々のことば　鷲田清一　1106

聞けば気の毒、見れば目の毒

ことわざ

知らずにいれば済むことをなまじ知ったがために、心がひどく揺らいでしまうこと。これを裏返せば、人はそれほどに他人の悲しみを悲しむということ。忍びないという思いと、悲しむその人に身をすべて捧げるまではできないことの疚しさ。でもその悲しみの理由は自分と無関係でないと考え、半端と知りつつ、「毒」と知りつつ、その場に赴くのが、ボランティアの活動なのかも。

2018・5・12



折々のことば　鷲田清一　1107

どうして、属性も知られず、能力をうしなったいまのほうが、はるかに敬意をもってあつかってもらえるのだろう。

與那覇潤

うつで入院した歴史学者はカーテンを閉めてひきこもる。それでも話しかけてくる人がいる。つまらない話も楽しそうに聞く。属性や能力を失っても残る人との関係。そこに軸を移して、《不慣れな人がまじっても「その人のチョンボをいかに防ぐか」までが込み》のゲームをモデルに社会を構想しようと身を起こす。『知性は死なない』から。

2018・5・13



折々のことば　鷲田清一　1108

もしかしたら、今の状況は、人生をより楽しくするためのものなのかもしれない

平尾誠二

ボールは楕円形、前に投げてはならないなど、「理不尽」な設定がラグビーには多い。人生も同じ。ゲームに見立て「理不尽」を「おもしろみ」として捉えれば、状況を変えてゆけると、往年のスーパースターは言う。ボールをどのタイミングで放すかが重要だというのも、きっと、「理不尽」を一人で抱え込むなと教えているのだろう。『生きつづける言葉』(撮影・岡村啓嗣)から。

2018・5・14



折々のことば　鷲田清一　1109

才能っていうのはさ、ものすごく好きだっていう気持ちなんじゃないか。

宮下奈都

調律の仕事の難しさにふと怖じけづき、自分には才能がないのではないかと悩む若者に、先輩の一人が、才能は必要に決まっていると言い切った後、こう続けた。若者は、突然ピアノが弾けなくなった少女を支えようと仕事を続ける中、才能のようなあるかないかもわからないものでなく、「もっと確かなもの」をこの手で探り当てていこうと思い定める。小説『羊と鋼の森』から。

2018・5・15



折々のことば　鷲田清一　1110

褒められた喜びというのは、「ちゃんと見ていてもらった」という喜びでもあった。

苅谷夏子

昭和を代表する国語教育者・大村はまの元生徒で、今は大村の記念会の事務局長を務める苅谷は、ふだんは気難しげな大村が時折すごい「熱量」で褒めたのは、生徒一人一人をしかと見続けていたからだと言う。誰かに見守られることで逆に独り立ちできるということがある。そのことを、苅谷はのちに飼い始めたフクロウとのつき合いの中で噛みしめる。『フクロウが来た』から。

2018・5・16

折々のことば
１１１１
～１１１５

人から命令されたらノーと言え。
もし頼まれたら
少々無理はしても聞いてやれ。

足立病院院長・畑山博の父

折々のことば　鷲田清一　1111

自由の本質的なデカさが、ハンパないの
友川カズキ

その一点で詩人の北村透谷やアナキストの大杉栄、辻潤に惹かれると、フォーク歌手は言う。「自分を見捨てることすらできる才能。本当にひとりぼっちになっちゃえる才能」が凄いと。人生の枠は大きすぎるくらいがいい。重要なのは、そこに自分を放り投げ「ジタバタする」こと、その疼きの中からそれを超える何かを摑みだすこと。痛いが眩しい。『友川カズキ独白録』から。

2018・5・17

折々のことば　鷲田清一　1112

「うん」「うん」って相槌を入れていくと、相手がリズムに乗ってきてバンバン話し出すいとうせいこう

対話がうまくいくかいかないかは、相手の発言への応じ方にかかっていると、作家・クリエーターは言う。相槌を打つ時も声色を変えると対話はさらに動いていくと。そういえば昔、臨床心理家の河合隼雄さんから、相手が言い淀んでいる時は「ほう」「ほうーっ」といろんな声音で返したらいいと教わったことがある。精神科医、星野概念との対談本『ラブという薬』から。

2018・5・18

折々のことば　鷲田清一　1113

そこではお尻が出てもいいんです
星野概念

些細なことに傷つく。自分が認められていない気がする。そんな「うっすら」と辛い思いに人は悩む。でも「弱音を吐いてもいいと思えるまでの峠ってけっこう高い」と言う作家・クリエーターのいとうせいこうに、精神科医はこう返す。相談したってどうにもならないと決めつけるより、ちゃんと油断できる場所を見つけるほうが先だと。昨日と同じ対談本『ラブという薬』から。

2018・5・19

折々のことば　鷲田清一　1114

建物が壮大であればあるほど、それを支える礎石の重みも増す
良知力

現代世界を大きく動かしたマルクス主義も、複数の近接した思想や社会運動が軋みあう、ある歴史的な磁場の中で彫琢されたと社会思想史家は言う。その正統の思想が自らの限界に向きあう時にこそ、歴史の陰に葬り去られた同時代の思想家たちや運動を支えた名もなき人々の営為は救い出される。そこから生まれたかもしれぬ別の可能性とともに。『マルクスと批判者群像』から。

2018・5・20

折々のことば　鷲田清一　1115

人から命令されたらノーと言え。もし頼まれたら少々無理はしても聞いてやれ。
足立病院院長・畑山博の父

傾きかけた京都の古い産婦人科病院の後継者となる決断を促したのは、亡き父のこの教えだった。畑山は小児科を併設し、母親支援や障害児保育にも取り組んで市民の厚い信頼を得た。上には唯々諾々とは従わず、横には進んで手を差し伸べる。「主権在民」の理念を貫くのもこうした気概ではなかったか。思想史家・中島啓勝によるインタビュー（本紙京都版、5月13日）から。

2018・5・21

折々のことば
１１１６
～１１２０

なんでもないことは流行に従う、
重大なことは道徳に従う。
芸術のことは自分に従う

小津安二郎

折々のことば　鷲田清一　1116

本名を名のらないということは、酒を飲んでも酔えないということだ

李成植

かつて定時制高校で教えた生徒が卒業式の答辞でこう述べたと、詩人、金時鐘は記す。家郷への思慕に生きる上の世代からも同胞の集落からも切れ、「日本人の生活のかげりの部分で孤絶して」いた彼は、この状況こそ自分の〈在日〉の原点だと思い定めた。寸断されたままでは自分を弛めもできない。止まり木がないと飛ぶこともできない。金の随想『クレメンタインの歌』から。

2018・5・22

折々のことば　鷲田清一　1117

なんでもないことは流行に従う、重大なことは道徳に従う。芸術のことは自分に従う

小津安二郎

時代の流れにあわせてカラーで撮ることにした映画「彼岸花」でも、カラーだからこそ色を省いてやろうと思ったと、映画監督は言う。オーヴァーラップや移動車の使用もそう。理屈にあわなくても「嫌いだからやらない」。他はゆるがせにできてもこれだけは譲れないと。映画評論家の岩崎昶・飯田心美との鼎談「酒は古いほど味がよい」（キネマ旬報1958年8月下旬号）から。

2018・5・23

折々のことば　鷲田清一　1118

それは、巨大な岩で造られた聖堂の礎石の、はるか深い底から聞こえてくる、流水のかすかなこだまだった。

トム・ハーパー

昔、岩だらけの荒野に一箇所、小さな泉があり、巡礼者はそこで命を癒やした。彼らは石を積み上げ感謝の標としたが、やがてそれが大聖堂となり、教派が争う中、泉も囲い込まれた。夜に忍び込んだ人たちがそこで耳にしたのは？　〈恵み〉を領る人々を諫めたカナダの司祭による寓話『いのちの水』（訳・中村吉基、絵・望月麻生）から。

2018・5・24

折々のことば　鷲田清一　1119

方言使う賢い人がいちばん怖い、最強やなと思います。

津村記久子

中央との距離を意識して「小細工」するのはみっともない。中央との関係で自分を測るのは、評価軸が自分の内にないということ。だから足許がもたつく。正しいことを正しいと地声で言えないと、生き方も浮つく。作家はこのなまの地声にふれたくて、サッカーJ2リーグの「極地戦」を観に各地へ赴き、声援に耳をこらす。編集者・ライターの江弘毅との共著『大阪的』から。

2018・5・25

折々のことば　鷲田清一　1120

「ツッコミ」は「拾う」であり、その後のコミュニケーションに接続すること。ぴしゃりと一言で「これが正解だ」と示すのではない。

江弘毅

大阪語の作法の妙はそこにあると、編集者・ライターは言う。相手が答えに窮するような発言で話を途切れさせるのではなく、つまらん話もうまく拾ってやって、話が回ってゆくよう発言を終えること。「言いっぱなし」にしないこの作法は「最高に民主的やぞ」と。昨日と同じ、作家・津村記久子との共著『大阪的』から。その一例を明日。

2018・5・26

折々のことば
１１２１
～１１２５

考えることは
雨乞いのようなものである。

野矢茂樹



折々のことば　鷲田清一　1121

「おめでとう。めっちゃきれいやったでー。」「ありがとう。そんなん言うてもらえてうれしいわぁ。先週整形しといてよかったわぁ。」

結婚式にて

花嫁のこの受けには「整形間に合ってよかったなぁ」と返す。「元からきれいだよ」ではなく。国語学者・澤村美幸が衝撃を受けたある結婚式での会話だ。友人のほめ言葉をボケで受ける花嫁に、「おもろい」言葉をさらに被せて話を転がしてゆく大阪人のもてなしの作法である。同じ国語学者・小林隆との共著『ものの言いかた西東』から。

2018・5・27



折々のことば　鷲田清一　1122

速くできる、手が抜ける、思い通りにできる。……ありがたいことですが、困ったことに、これはいずれも生きものには合いません。

中村桂子

「便利さ」とそのために開発された機器の「豊かさ」を進歩の印と思い込む人は多い。が、生の充実とはまさにこの逆。思い通りにならないものを手塩にかけて育むこと、時間を「飛ばす」のではなく「紡ぐ」こと。自分も生きものの一つという原点を見据えるためにも、農業を学べと生命誌研究者は言う。『科学者が人間であること』から。

2018・5・28



折々のことば　鷲田清一　1123

政治とは、情熱と判断力の二つを駆使しながら、堅い板に力をこめてじわっじわっと穴をくり貫いていく作業である。

マックス・ヴェーバー

奉仕へのひたむきな情熱と、距離を置いて状況を目測する冷徹な判断力。相反するこの二つは、起こりうるあらゆる責任を引き受ける強靱な意志の中でのみ一つに結び合わされると、ドイツの社会学者は言う。逆に、外面ばかりを整える「空虚なジェスチュア」の背後には内的な脆さしかないと。『職業としての政治』（脇圭平訳）から。

2018・5・29



折々のことば　鷲田清一　1124

考えることは雨乞いのようなものである。

野矢茂樹

考えることは論理的な営みだと思われがちだが、論理は「考えるための下ごしらえ」に役立つだけ。考えるとは今の考え方ではうまく解けないもやもやを晴らすことだから、予め従うべきどんなマニュアルもないと哲学研究者は言う。問題をじっくり育て、あちこちにアンテナを張って、これまでにない発想が舞い降りてくるのを待つほかないと。エッセー集『哲学な日々』から。

2018・5・30



折々のことば　鷲田清一　1125

我々はただ一方の害ばかりを恐れて、急いでたくさんの花に咲く二葉を摘んでしまった

柳田國男

イツワリとウソ、ゴマカシとデタラメは、かつて明確に区別されていた。一方は人を欺く虚言。もう一方は空言。それらを区別せず、子供の無邪気な作り話まで戒めると、空想の力が奪われると民俗学者は言う。子供がつくウソに快く騙され「彼のいたいけな最初の智慧の冒険」を成功させることも必要だと。虚言がはびこると子供の育ちの機会まで奪われる。『不幸なる芸術』から。

2018・5・31

折々のことば
１１２６
～１１３０

自己を破壊することが
できるとしても、
その破壊の仕方が、
つねに自己を表現してしまう

大岡信

折々のことば　鷲田清一　1126

人間の発音行為が全身によってなされずに、観念の喉によってひょいとなされるようになってからは、音楽も詩も、みなつまらぬものに

武満徹

吃音におけるドド、ヌヌといった音の反復は、声に出そうとして言葉と格闘せざるをえない肉体の挙動の一つだと、現代音楽家は言う。ため息や叫びと同じく「意味が言葉の容量を超える時におこる運動」であり、ときに「論理性を断ちきり」もする。詩や音楽が生まれるのも同じその運動からだと。『音、沈黙と測りあえるほどに』から。

2018・6・1

折々のことば　鷲田清一　1127

歳とってこだ惰げねえ目に遭うどは思わねがった

福島県南相馬市の住民

原発事故後、南相馬に移住した作家の柳美里は、自分が育てた米や野菜を食えず、スーパーに買いに行くのが情けないと言う住民の呟きに心を打たれる。手仕事でつながる丁寧な暮らしを肌で感じて、「絶望をすり抜ける小道があるとしたら」こういう生活の中だと確信し、この春本屋を開いた。東北学院大学公開講座でのトーク「南相馬からみた震災」（聞き手・郭基煥）から。

2018・6・2

折々のことば　鷲田清一　1128

遠いところ、弱いところ、小さいところに種があるのです。

播磨靖夫

障がい者の自立支援は、独り立ちを促すのではなく、障がいのあることがもはや「負」の価値とはならない社会のあり方をめざすと、奈良の福祉施設「たんぽぽの家」の理事長は言う。その雛形は社会の中心から外れた場所に蓄えられており、それが支援する側の自己理解にも変容を促す。施設をサービスではなく社会変革の拠点にしたいと。偶々乗り合わせた新幹線の車中で。

2018・6・3

折々のことば　鷲田清一　1129

儀式的にふるまおうとすると、それを破るように涙が込み上げてくるのです。

門脇健

長い介護の後、老母を亡くしたご住職。湯灌や葬儀の準備は淡々と、ときに家族みなで「和気あいあい」とできたのに、通夜の勤めや弔問客に挨拶をする段になって思わず慟哭する。身についた仕事は体も勝手に動く。その隙をついて、抑えていた感情が堰を切ったのか。人を失う悲しみは、日常に戻った時にじわりと沁みだす。大谷大学の「哲学科教員ブログ」（5月8日）から。

2018・6・4

折々のことば　鷲田清一　1130

自己を破壊することができるとしても、その破壊の仕方が、つねに自己を表現してしまう

大岡信

芸術はよく「自己表現」として語られる。これに対し「自己なんてものの表現は退屈なものさ」という思想に詩人・評論家は共鳴する。が、自己の破壊は表現よりさらに難しい。破壊にもやり方があるから。「私」を人の内奥にある実体ではなく、表現のスタイルと考えれば、「私」はたぶんもっと見えやすくなる。「文体は人なり」という言葉もある。評論集『肉眼の思想』から。

2018・6・5

折々のことば
１１３１
～１１３５

本とともに読みなさい。

ティム・インゴルド

折々のことば 鷲田清一 1131

わたしの　せなかの　からの　なかには　かなしみが　いっぱい　つまって　いるのです

新美南吉

でんでんむしはある日「たいへんな　こと」に気づく。このままではもう生きていけないと友だちに告げると、誰もが「あなたばかりじゃ　ありません」と言う。みなそれぞれの悲しみを抱えるからこそ、いたわりあうこともできる。でんでんむしは「わたしは　わたしの　かなしみを　こらえて　いかなきゃ　ならない」と心に決めた。童話「でんでんむしの　かなしみ」から。

2018・6・6

折々のことば 鷲田清一 1132

ボラもなあ、あやつたちもあの魚どもも、タコどももぞか（可愛い）とばい。

石牟礼道子

「海の上はほんによかった」と、漁師の妻は口を引き攣らせつつ語る。夫と二人で櫓を漕ぎつつ、波をなだめ、「ほーい、ほい、きょうもまた来たぞい」と魚を呼ぶ。そのつましくも満ち足りた二人ながらの暮らしを水俣病が絶つ。漁ができず舟も売った。それが「なんよりきつか」と、そして夫のことを「もぞか（いとしい）」と口惜しがる。詩人・作家の『苦海浄土』第一部から。

2018・6・7

折々のことば 鷲田清一 1133

時間の流れにも思いがけない段差があり、ガクンと老いこんだりするものだ。

池内紀

歳をとると、思いがけない段差に足をとられつんのめることがある。同じく幼い頃も、自分が世界の何につまずいているのかうまく分析できないまま、何かにのめり込む。この二つの段差は意外に似た顔つきをしていて、「最初の一歩が行く末をそれとなく暗示している」ことがよくあると、ドイツ文学者は言う。15人の表現者の幼年時代を綴った『みんな昔はこどもだった』から。

2018・6・8

折々のことば 鷲田清一 1134

本とともに読みなさい。

ティム・インゴルド

知るというのは、世界を操作するために知識を机上に蓄えることではなく、環境の気配に耳を澄まし、知覚をはじめ世界を探るさまざまのわざの中へ分け入って、世界の生成変化によりよく対応してゆくためのプロセスなのだと、社会人類学者は言う。そういう「探求の技術」として、「知ること」を「存在の中心」に置き戻す必要があると。『メイキング』（金子遊ほか訳）から。

2018・6・9

折々のことば 鷲田清一 1135

1球目はファンのために、2球目は自分のために、3球目は西本君のために

衣笠祥雄

1979年夏。対巨人戦で西本聖投手から死球を受け、肩胛骨が折れたその次の試合でも、元広島カープの内野手は代打で登場した。フルスイングで三振。ファンに心配させない、ファンの期待を裏切るまいとの思いもあったが、連続試合出場のかかる選手に深手を負わせた投手の心情を思いやることも忘れなかった。そういうフルスイングだった。本紙4月25日朝刊から。

2018・6・10

折々のことば
１１３６
～１１４０

捨てるものが少なくてすむのは
気持ちがいいです。

東野華南子

折々のことば 鷲田清一 1136

刺戟が絶えず遍在しているということが何よりも確実な平和の保障なのであります。

T・S・エリオット

一国の文化が実るには「国民は統一されすぎてもまた分割されすぎてもいけない」と、詩人は言う。社会の諸部分の間に十分な「摩擦」があれば、それらは強引に一つにまとめ上げられも、相互に疎隔されもしない。だからこそ政治家の演説は、「意味の曖昧」と、まるで雲を摑むような一般論の掃き溜め場所」になってはならないと。「文化の定義のための覚書」（深瀬基寛訳）から。

2018・6・12

折々のことば 鷲田清一 1137

「アンタの休みは――いつや？」……
「あんたが治った時が、わしの休みや」

早川一光

「お～い、元気かぁ～」と戸を開け、「あ、生きてる」と胸を撫でおろして「また、来るでなぁ」と次の家に向かう。京都・西陣の住民の出資で設立された病院を拠点に長く在宅医療に取り組んできた医師は、自分を気遣う痩せこけた末期患者の言葉に、「あんた、最後まで看てくれるか、つきあってくれるか」と問われたと感じる。そこが要だと思う。『ほな、また、来るで』から。

2018・6・13

折々のことば 鷲田清一 1138

感想戦は負けた側のためにある。

森雞二

佐藤天彦名人と羽生善治竜王が対決する第76期名人戦で立会人を務めた九段がこう語ったと、知人の記者から聞いた。将棋や囲碁に特有のこの感想戦では、ふつう、勝者は敗者が口を開くのを待ち、敗者のペースでやりとりが続く。負けた側の納得のゆくまで、そこに立ち現れるべきであった正しい理路を二人して追究する。ものごとの検証というのはかくあるべしと思う。

2018・6・14

折々のことば 鷲田清一 1139

まじめさには、きちんと酸素を補給してやらないとね。

東江一紀

翻訳にまじめに取り組むのは結構なことだが、それが嵩じて「悲壮」のレベルになると視野も狭まって危ないと、翻訳家は言う。だから「進行方向だけではなくて、周りの風景にも目を配り、最終的には、そういう自分の姿を客観的に眺められる余裕が、ぜひとも欲しい」と。官僚の心得についての話かと勘違いしそうになる。エッセー集『ねみみにみみず』（越前敏弥編）から。

2018・6・15

折々のことば 鷲田清一 1140

捨てるものが少なくてすむのは気持ちがいいです。

東野華南子

必要な物を、買うのではなくて自分で作るとなると、そもそも何に使うのか、素材として使えるものがどこかにないかと逐一考えるようになる。解体される建物から古材や建具を回収し、販売する「リビセン」（ReBuilding Center JAPAN）を夫と運営する長野県諏訪市の女性は、物を作ることは「暮らしの棚卸し」につながると言う。雑誌「TURNS」6月号から。

2018・6・16

折々のことば
１１４１
～１１４５

考えてみると、私１人で最初から
作れる物など、
身の回りに1つもないのだ。

更科功

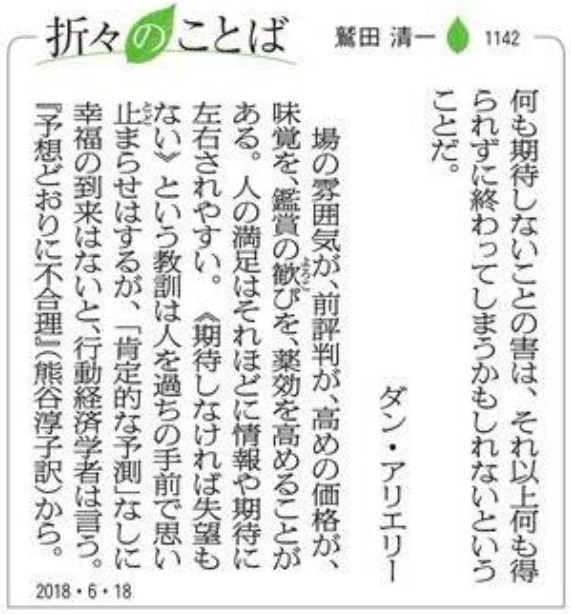

折々のことば　鷲田清一　1141

「コーヒーも、民主主義も、即製はいかん！」

獅子文六

コーヒー通の集いで、常連の画伯が格別のコーヒーを淹れると言って密かにインスタントコーヒーを出した。みながいけるとかAクラスの下だとか品評するなか種明かしをすると、会長がこう叫び、みな大笑い。その陰には、敗戦によりもたらされた日本の民主主義も即席物ではあれ少しずつ浸透させねばとの思いも。作家・演出家の50年以上前の小説『コーヒーと恋愛』から。

2018・6・17

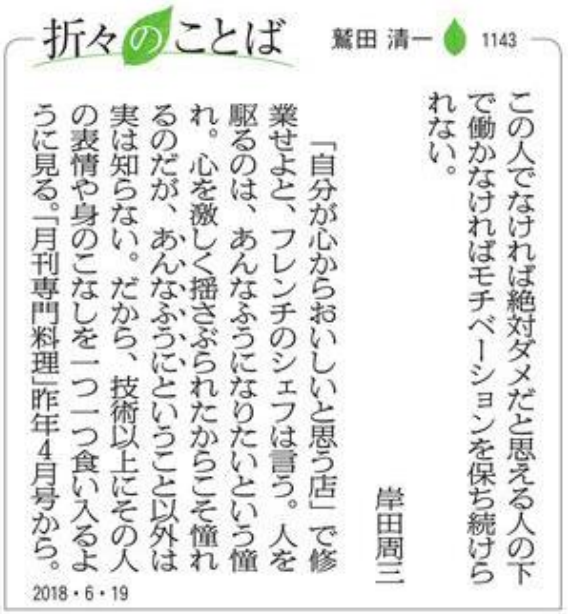

折々のことば　鷲田清一　1142

何も期待しないことの害は、それ以上何も得られずに終わってしまうかもしれないということだ。

ダン・アリエリー

場の雰囲気が、前評判が、高めの価格が、味覚を、鑑賞の歓びを、薬効を高めることがある。人の満足はそれほどに情報や期待に左右されやすい。《期待しなければ失望もない》という教訓は人を過ちの手前で思い止まらせはするが、「肯定的な予測」なしに幸福の到来はないと、行動経済学者は言う。『予想どおりに不合理』(熊谷淳子訳)から。

2018・6・18


折々のことば　鷲田清一　1143

この人でなければ絶対ダメだと思える人の下で働かなければモチベーションを保ち続けられない。

岸田周三

「自分が心からおいしいと思う店」で修業せよと、フレンチのシェフは言う。人を駆るのは、あんなふうになりたいという憧れ。心を激しく揺さぶられたからこそ憧れるのだが、あんなふうにということ以外は実は知らない。だから、技術以上にその人の表情や身のこなしを一つ一つ食い入るように見る。「月刊専門料理」昨年4月号から。

2018・6・19


折々のことば　鷲田清一　1144

「そんなに気になるんなら、じかにポルトガルに手紙をだして、きいてみなさいよ！」

アストリッド・リンドグレーン

父を亡くし一人暮らしを始めた少女ピッピ。心配した大人たちが、学校に行かないとポルトガルの首都がどこかも分からず困るよと諭すと、こう応える。7＋5は幾つと訊くと、自分が知らないことを代わりにやらせたいんでしょうと返す。ものを自分で調べ考える練習にはならない、と盾突くかのように。スウェーデンの児童文学作家の『長くつ下のピッピ』(大塚勇三訳)から。

2018・6・20


折々のことば　鷲田清一　1145

考えてみると、私1人で最初から作れる物など、身の回りに1つもないのだ。

更科功

みなで「力を合わせられる」ことが人類の特徴だと、分子古生物学者は言う。ネアンデルタール人はじめ人類は20種以上いたが、生き残ったのは私たちホモ・サピエンスだけ。保育を助けあうことでより多くの子を産んできた。言語を使い、食物を分配し、モノを製作するという相互協力の生活を高度に発展させることで、苛酷な環境に対処してきた。『絶滅の人類史』から。

2018・6・21

折々のことば
１１４６
～１１５０

技術ってやつも坂道と同じに
上るだけではなしに、
下ることもできなくては

菊地信義

折々のことば 鷲田清一 1146

何で来たと！　恥ずかしい！

佐賀県の女子児童

フィリピン人の母をもつ小学6年生は、母に来てほしくなくて学校行事の案内を渡さずにいた。なぜか当日姿を見せた母に向かって彼女はこう叫ぶ。高校生になってこの時の母の後ろ姿を思い出し「ごめんなさい」と嗚咽する。子どもがはじめて負った深い社会的な傷。これに限らず日本社会は今もこうした酷薄な地肌を晒しつづけている。西日本新聞社編『新　移民時代』から。

2018・6・22

折々のことば 鷲田清一 1147

雨の日は、しんみり物を考えるにはもってこい。人間にはそんな日が必要なのだ。

アルムおんじ（ハイジのおじいさん）

1歳で父母を亡くし叔母に育てられたハイジは、故あって祖父に預けられる。村人に煙たがられる彼も、ハイジには、摘んだ花が萎れる理由や鷹の叫びの意味、風との対話や夕焼けの美しさについて、いつも易しく、深く語る。足りないものを補いあう人と自然の交わりを、ハイジは彼の下で学んでゆく。アニメ作品「アルプスの少女ハイジ」第2・3話（脚本・吉田義昭）から。

2018・6・23

折々のことば 鷲田清一 1148

政治には計算がつきものであるが、つきあいに計算は要らぬ

渡辺京二

「要らぬどころか計算が入りこめばつきあいは死ぬ」と続く。熊本の自宅で大地震に遭った時、安否を気遣い連絡をくれた「信ずべき友」が市内だけで数十人いたことに評論家は驚く。殉ずべきものがあるとすれば、それは断じて国家ではなく、人生という旅の途上で出逢った人々であり、そこにある公正と憐憫の感覚は国家より古いと、改めて心に刻む。『原発とジャングル』から。

2018・6・24

折々のことば 鷲田清一 1149

技術ってやつも坂道と同じに上るだけではなしに、下ることもできなくては

菊地信義

SPレコードを古い蓄音機で聴くコンサートへ行こうと誘われた装幀家。1926年製の蓄音機から流れてくる歌声が体の隅まで沁み込む。幼い頃、家の応接室でこっそり聴くうち奇妙な体感が「ツーン」と走り抜けた時と同じく、この日会場を後にする時も、遠くで蟬の声がした。技術のレベルを下げたぶん、いのちのアンテナは逆に感度を増したか。『樹の花にて』から。

2018・6・25

折々のことば 鷲田清一 1150

拘置所で三食付き、それも税金だと思うとやるせない思いで、出たら職場に戻って働きたいと強く思いました。

元厚生労働事務次官・村木厚子

厚労省局長時代に大阪地検特捜部の資料改竄による冤罪で勾留された村木氏は、釈放後得た賠償金を、知的障がいがあって犯罪をくり返す人を支援する社会福祉法人に寄付した。勾留中は娘を思って不屈を貫き、退職後も逆境にある人々の支援にあたる。母であり、公僕であること。それが彼女を支えた。「フィランソロピー」6月号から。

2018・6・26

折々のことば
１１５１
～１１５５

魚たちにとってみれば、
どこであれ「ひとつの海」だ。

竹国友康

折々のことば　鷲田清一　1151

「わたくし元気ですわ」……
「と云ってもいいと思いますわ」

山本周五郎

武術に長けた浪人者が、同宿の貧しい旅人たちを元気づけようと、賭け試合に出て、稼いだ金で大盤ぶるまいをする。が、それが徒となり、整いかけた仕官の機会を失う。気を取りなおし「元気になりましょう」と言う夫に、妻は夫の口ぶりをまね、微笑んでこう返す。我より先に人々の境涯を案じ、せっかくの運を取り逃す夫の背中を愛おしんで。短編小説「雨あがる」から。

2018・6・27

折々のことば　鷲田清一　1152

あれこれ言う人が手伝ってくれるわけでなし、言う通りにしてもさらに上を求められるだけでお駄賃くれるわけでなし、きりもない

柴崎友香

「自分のやり方でいいやん」と続く。乾燥きざみ揚げを買ったらこれが「めちゃめちゃ便利」、ほんと助かると作家は言う。世の中、どれだけ手をかけたかで「愛情」を測りすぎ。暮らしを上手に回すにも「完璧以外」のやり方があると。手抜きできないものは人それぞれに異なる。本紙大阪本社版6月18日夕刊の随想「季節の地図」から。

2018・6・28

折々のことば　鷲田清一　1153

生まれ故郷はわたしたちがある時点で成長したり形成されたりしたあらゆる場所に少しずつ存在する。

ヨゼフ・チャペック

そこで人は「ゆっくりと生まれ直す」。東チェコの故郷では「庭の垣根の中」で育ったが、「ジュール・ヴェルヌの長編小説に出て来る世界各地の中」でも育ったと、画家・作家（カレル・チャペックの兄）は言う。が、その彼が生涯を閉じたのは、強制収容所という、故郷から最も隔たった場所だった。随想「生まれ故郷」（飯島周訳）から。

2018・6・29

折々のことば　鷲田清一　1154

魚たちにとってみれば、どこであれ「ひとつの海」だ。

竹国友康

日本と韓国の間では日々、多くの魚介類が互いの不足を補うために取引される。魚は「日本産」「韓国産」などと旗を立てて泳ぎはしない。かつて海を挟み、同じ一つの海に祈る人々がいた。「領海」という発想とは無縁の交流があった。海に線を引く〈国家〉の発想よりも古くからある漁民たちのネットワークを、竹国は予備校講師時代に訪ね歩いた。『ハモの旅、メンタイの夢』から。

2018・6・30

折々のことば　鷲田清一　1155

私は、並ぶことに生理的な嫌悪感があるのである。

吉村昭

「終戦前後、人々はよく並んだ」。何より配給の食料品を受け取るために。生き延びるには意に反しても列をなさざるをえないことの屈辱、摂食という生存の条件にあからさまに晒されることの恥辱。「並ばなくても生きていられる」ことの幸いを身をもって知る作家は、美味との噂を聞きつけて店前に列をなす人々の明るさを羨みつつも通り過ぎる。随筆集『わたしの流儀』から。

2018・7・1

折々のことば
１１５６
～１１６０

変装してるんですよ、みんな。

阿久悠











折々のことば
１１６１
～１１６５

言葉からこぼれ落ちたもの／言葉からあふれ出たもの／言葉をかたくなに拒んだもの／言葉が触れることも出来なかったもの

谷川俊太郎











折々のことば
１１６６
～１１７０

タイトルは、戒名に似ている。

阿武野勝彦

折々のことば　鷲田清一　1166

そのわからなさを持ち帰って自分の中で時間をかけて咀嚼してくれたらなと思います。

寺尾次郎

映画「勝手にしやがれ」などゴダールの初期2作の新訳を手がけた翻訳家は、字幕は長くても6秒しか出ないのですぐにわかる言葉に置き換えればいいのだが、ここでそれをすると「監督を裏切ることになる」と言う。すぐに呑み込めない引用もあって、観た後も「？」を引きずるのが映画の楽しみ。「カーサブルータス」オンライン版（2016年7月9日）のインタビューから。

2018・7・13

折々のことば　鷲田清一　1167

タイトルは、戒名に似ている。

阿武野勝彦

「明朗院○○居士」というふうに、戒名にはよく故人の人となりが盛り込まれる。映画も仕上がれば制作者の手を離れるが、タイトルにはそれに関わった多くのスタッフの思いが込められていると、映像プロデューサーは言う。戒名もタイトルも、人と作品に深くつきあった人たちの記憶に捧げられるということか。ドキュメンタリー映画「人生フルーツ」のパンフレットから。

2018・7・14

折々のことば　鷲田清一　1168

山へ行くと、強くなれる。弱くもなれる。その両方が大事、と感じています。

四角友里

山を歩いていると、頬を撫でる風に身を放つこともあれば、恐怖心の嵐になぎ倒されそうにもなる。自然の気品に包まれもすれば、力尽きてへたりもする。夕陽に身を染めもすれば、人恋しくて胸を詰まらせもする。いろんな場所に身を置くうち、人生の擁みに耐える力もついてくる。女子登山ブームの火付け役、アウトドアスタイル・クリエイターの『山登り12カ月』から。

2018・7・15

折々のことば　鷲田清一　1169

空腹は子どもから「いまここに」おける安心と安定を奪います。

芹沢俊介

空腹のまま放置するという暴力は、自分がここにいてよいという、子どもの「存在感覚」の核となるものを修復不能なまでに破壊してしまうと、評論家は言う。このことは家族内の虐待のみならず、社会格差による貧困についても言えるだろう。満ち足りたときのその温みが、生きることの歓びを、ひいては人への信頼を底から支える。『芹沢俊介　養育を語る』（事件篇Ⅰ）から。

2018・7・16

折々のことば　鷲田清一　1170

「なんでもいい」。でも、「どうでもよくは、ないんだよ」

五街道雲助

志ん生から受け継がれた一門の教えのようなものだと落語家は言う。師匠の十代目・金原亭馬生もそうだった。稽古をつけてほしくても知らんぷり。人にどう思われたっていいが、ひねくれや投げやりはだめ、とだけ言った。殿様からそこいらの小僧や女房、人殺しまで演じる落語家は、世の中の「一番下」に身を置かないとできない商売だと雲助は語る。『雲助、悪名一代』から。

2018・7・17

折々のことば
１１７１
～１１７５

いづくへか帰る日近きここちして
この世のもののなつかしきころ

与謝野晶子

折々のことば　鷲田清一　1171

有名な人たちの記憶より、無名の人びとの記憶に敬意を払うほうが難しい。歴史の構想はその無名の人びとの記憶に捧げられる。

ヴァルター・ベンヤミン

壮大な叙事詩のような歴史から外され、属性で一括りにされた人びとの肖像は、やがて歴史の地層に埋もれてゆく。連続性をも奪われた彼らの悲嘆をその重量ごと抱擁する歴史の記述とは？　ドイツの思想家の、「歴史の概念」をめぐる草稿にあるこの言葉、フランスとスペインの国境近くの海に臨む彼の追悼碑の硝子板に刻まれている。

2018・7・18

折々のことば　鷲田清一　1172

いづくへか帰る日近きここちしてこの世のもののなつかしきころ

与謝野晶子

未知の場所へ赴くのか未生の場所へと戻るのか知るよしもないが、自分もまもなくこの世を後にし何処かへ帰る日から時を逆流させて今を思うと、この今が愛おしく、懐かしささえ感じると、歌人は詠う。人は自らの死を朧に意識しだすと、普段は目もくれない身のまわりの物にふと、慈しむかのようなまなざしを注ぐようになる。晩年の歌を集めた『白桜集』（平野萬里編）から。

2018・7・19

折々のことば　鷲田清一　1173

ライフラインが止まる。
それは原始生活以下になるということです。

地震イツモプロジェクト

コンクリートで固められ、生活の全般を流通システムに依存する都会では、大きな災害時、人は自然の恵みも活用できず、「原始よりも不便で不安な状況」に置かれると、阪神・淡路大震災後に刊行された同プロジェクトの本は記す。日頃から隣の人と挨拶していれば、誰がいるかいないかすぐにわかる。「それが大きな防災でした」とも。『地震イツモノート』（源美穂、矢守克也監修）から。

2018・7・20

折々のことば　鷲田清一　1174

強さではなく優しさで、恐怖心ではなく誇りで、人を動かしなさい

ジョン・ウッデン

選手たちにまずは《敬意》を払うこと。それによって彼らは優しさと誇りを内に感じ、チームのために努力を惜しまなくなると、米国大学バスケットボール界の伝説的コーチは説く。翻ってわが国の「リーダー」たちはこの《敬意》を確たる下敷きとしているだろうか。スポーツコラムニスト、S・ジェイミソンとの共著『元祖プロ・コーチが教える育てる技術』（弓場隆訳）から。

2018・7・21

折々のことば　鷲田清一　1175

自己認識とは大なり小なり自分を騙すことなのだ。

三浦雅士

生物は視覚をもつことで対象との隔たりを得た。状況を俯瞰し、捕食する相手を騙すことを知った。人間はさらに言語をもつことで解釈する術を得た。解釈であるからには認識と騙し（装い）の区別は難しい。そして商業とは、騙されるのを覚悟で「信用」しあうこと。宗教とは、騙されていいと思い切れること……という議論の展開にそそられる。評論家の『孤独の発明』から。

2018・7・22

折々のことば
１１７６
～１１８０

ムッシューイノクマ、きみの絵は
うますぎる

アンリ・マティス

折々のことば　鷲田清一　1176

ムッシューイノクマ、きみの絵はうますぎる

アンリ・マティス

画家の猪熊弦一郎は、パリでの修業時代、自作を携え、憧れのマティスを訪ねた。その時マティスにこう言われた。「対象を深く見つめることなく、ただテクニックだけで描いている」と。画家の修業は、恵まれた才能を押し殺し、世界にイニシアティヴを明け渡すことから始まる。画業に限らず、何ごとも小器用、小細工はいかん。『猪熊弦一郎のおもちゃ箱』（文・小宮山さくら）から。

2018・7・23

折々のことば　鷲田清一　1177

まるで猥画をとり出すときのやうにして
ぼくはなぜぼくの思想をひろげてみせねばならないか

吉本隆明

初期の詩「その秋のために」から。思想の開陳に羞恥がともなうのは、近き人たちの生活を踏み台として独り離陸し、彼らを俯瞰するような位置に立ったことのうしろめたさからか。それとも同じ詩人、鮎川信夫が『歴史におけるイロニー』で言うように、「それが彼自身のものだから」、つまり「権威からの借りもの」ではないからか。

2018・7・24

折々のことば　鷲田清一　1178

あの、たいした人、いないんです

川村敏明

精神障害や依存症に苦しむメンバーをもつ家族の支援は、しっかりもんが一人二人いても難しいと、北海道浦河町で長年診療にあたる精神科医は言う。自身も応援を必要とする「しっかりしてない人」が二重三重に当事者を取り巻いていることが「温かみ」のある援助を生むのだと。斉藤道雄の連載「浦河ひがし町診療所物語」（「くらしと教育をつなぐWe」6／7月号）から。

2018・7・25

折々のことば　鷲田清一　1179

私は、科学者は「社会のカナリア」ともいうべき存在であると思っている。

池内了

炭鉱労働者はカナリアを先頭に立てて入坑する。有毒ガスがあるとすぐに反応するから。知的想像に長ける科学者も、科学技術の経済的利得や安全ばかり強調するのではなく、社会への危険を察知すればすぐに市民に伝える責務があると宇宙物理学者は言う。ちなみにチェコの銀鉱山ではゴキブリを使ったそうだが、「社会のゴキブリ」だと意味が違ってしまう。『科学の限界』から。

2018・7・26

折々のことば　鷲田清一　1180

あゝ　いとしくおもふものが／そのまゝどこへ行ってしまったかわからないことが／なんといふいゝことだらう

宮沢賢治

人の苦界から遠く隔たった行き先だからこそ、想像は止まねど理解は及ばない。そのことがむしろ救いだと詩人は思う。亡き妹を想いつつ記されたこの心象スケッチ「薤露青」は、消しゴムで消された鉛筆書きの草稿を復元したもの。『春と修羅』第二集所収。ちなみに薤露はオオニラ（ラッキョウ）の葉に結ばれた露の消えやすいこと。

2018・7・27

折々のことば
１１８１
～１１８５

〈経済〉と〈成長〉ということばを一緒に使うことが、誤解を招いているのかもしれません。

浜矩子



折々のことば　鷲田清一　1181

私には助けが必要でした。それをやっと認めることができました。

ケンプ・パワーズ

米国のジャーナリストには、14歳のとき過って親友を銃で撃ち、死なせた過去がある。事故として後に公判記録から抹消されたが、夢にうなされる日は続く。ある日突然気を失い、償いに親友の分までよく生きようとしたことの無理を悟る。自分は「一」未満であり、誰かに寄りかかってもいいのだと。C・バーンズ編『本当にあった15の心あたたまる物語』（岡本千晶訳）から。

2018・7・28



折々のことば　鷲田清一　1182

初めて取材に来た日、そこにモジモジと座っているあなたが、見合いをしたときの夫とすごく似ていたの

あるエリート官僚の妻

映画監督の是枝裕和はかつてテレビドキュメンタリー制作のため、公害訴訟で行政と患者の板挟みになって自殺した官僚の妻を訪ねた。単純な図式で描きたくないが、彼女にカメラを向ける根拠もかける言葉も見つからない。そんな撞着を抱えたまま敷居を跨ぐ。後に彼女からこう言われ救われた。『映画を撮りながら考えたこと』から。

2018・7・29



折々のことば　鷲田清一　1183

変人扱いされて、口を閉ざしている人、いっぱいいると思いますよ。

追川尚子

何かを食べると、丸や四角、尖りやギザギザなど味の形がありありと見える。が、それを言うとみなが訝しむので、小さい頃からずっと封印してきたと、新宿のビア＆カフェ「ベルク」の副店長は言う。音の外れが気になって苦しいとか、些細な言葉にもひどく傷つくとか、表に出せず圧し殺している人はきっと身近にも多くいる。編集人（よ）によるインタビュー『味の形』から。

2018・7・30



折々のことば　鷲田清一　1184

〈経済〉と〈成長〉ということばを一緒に使うことが、誤解を招いているのかもしれません。

浜矩子

大人になると背丈の伸びは止まる。だが人生の本番はそこから始まる。「成長」とはいよいよしっかりしてくること、よくなること。その意味でいえば、経済活動は「成長」ではなく拡大／縮小するだけ。経済は拡大しないと死ぬというのは思い込みで、「ちょうどいいサイズに直すような縮小なら、別に問題はありません」とエコノミストは言う。『お金さえあればいい？』から。

2018・7・31



折々のことば　鷲田清一　1185

そして私がうれしいのは、／みなさんに何かを／乞わなくてよいことです、／どれだけ私が貧しくとも。

アルセーニー・タルコフスキー

沖に網を流された漁師はいっそ「晴れやか」だと言う。そして「つつましく、静かに、はだしのまま」星の彼方へ赴くのだと。世界にすがる最後の手立ても失った。もはや死しかないが、誰かにすがらざるをえない惨めさからも放たれる。旧ソ連の映画監督、アンドレイ・タルコフスキーの父の詩集『雪が降るまえに』（坂庭淳史訳）から。

2018・8・1

折々のことば
１１８６
～１１９０

パッと言えてしまうようなことはたいしたことないんです。

大澤真幸

折々のことば　鷲田清一　1186

わずか「タ」と「チ」の違いで何十年も年をとる

三木成夫

「よちよち」から「よたよた」へ。たった一音の響きの変化が数十年の時の経過を表すと、解剖学者は言う。人はやがて「よろよろ」になり、いつか「よぼよぼ」「よれよれ」になりもしよう。人や物の姿や様子を音に転写するオノマトペ（擬態語・擬音語）は、ほんの一音ずらすだけで意味の大きな地滑りを引きおこす。まさに《音で描かれた絵》である。『内臓とこころ』から。

2018・8・2

折々のことば　鷲田清一　1187

you can do it too...

ヴァージル・アブロー

ルイ・ヴィトンのメンズデザイナーに就任したアフリカ系のデザイナーは、パリでの初ショーのあと、感極まり泣きながらランウェーを歩む自身の後ろ姿をインスタグラムに投稿し、こう記した。ショーでは冒頭、17人連続でアフリカ系モデルを起用した。テーマは「多様性」。床も虹色に彩った。「やったぜ」ではなく「きみにもできる」と書くところに、彼がこれまで辿ってきた苦難の道が偲ばれる。

2018・8・3

折々のことば　鷲田清一　1188

ボールを投げたとき指にかかった負荷ではなく、むしろ、投げ返したあとに、まだグラブのなかの掌に残っている感覚のほうが重要

堀江敏幸

言葉とは、自分が投げ、また投げ返されてくる球のようなものだと若い頃は思っていた。今は、投げ返した後も左のグラブに残る相手の球の「回転」というか感触のほうが大事だと思うと、作家は言う。思考はその「手応え」を溜めてゆくなかで紡がれる。社会学者・大澤真幸との対談「言葉と社会」（「神奈川大学評論」第87号）から。

2018・8・4

折々のことば　鷲田清一　1189

パッと言えてしまうようなことは大したことないんです

大澤真幸

ひとは競って早く知ろうとするが、「どうも腑に落ちない」という感覚のほうがはるかに重要だと、社会学者は言う。思考を駆動するのはこの「摑みきれてない感」であり、過去の思想も、その言い切れなかった部分から大きな刺激を受けると。科学の歴史についても同様のことが言える。昨日と同じ、作家・堀江敏幸との対談「言葉と社会」（「神奈川大学評論」第87号）から。

2018・8・5

折々のことば　鷲田清一　1190

いったん暴力に屈服した思想は、もはや判断するすべをわきまえぬまでになる。

アラン

それは、いちど恐怖に屈した肉体に以後思い切った運動ができなくなるのと同じだと、哲学者は言う。肉体と同様、思考にも血が通っている。脅威はそれを歪める。『音楽家訪問』（杉本秀太郎訳）から。若い頃、彼の指導を受けたシモーヌ・ヴェイユも、苛酷な工場体験を綴った手紙の中で、「メスをあてられる前に肉体がちぢむように、思考もちぢんでしまう」（田辺保訳）と書いた。

2018・8・6

折々のことば
１１９１
～１１９５

現代人が失いかけているのは「話しあい」などではなくて、むしろ「黙りあい」だ

寺山修司

折々のことば　鷲田清一　1191

私たちの映画の歴史のなかでは、この弁士のような滑稽な努力だけがくりかえされて来たのではなかったか

大島渚

明治の末、東京で上映中の外国映画『仏蘭西革命ルイ十六世の末路』が、「王室」を冒瀆するものとして警視庁令で上映禁止になった。映画館は機敏にも、悪行の果て民衆に捕らわれる山賊の話として弁士に語らせたという。これに言及する映画監督の胸中には、戦中・戦後の報道の歴史全体があった。評論「敗者は映像を持たない」から。

2018・8・7

折々のことば　鷲田清一　1192

その歌の主人公を代弁して歌っている

八代亜紀

デビュー後しばらくして、「八代亜紀は私たちの代弁者」「私たちのことを歌ってくれている」との声が女性ファンから届くようになった。以来、ここにこんな女性がいますよ、と伝える感覚で歌うようになったと言う。歌手というのも、不在の人の声を届ける巫女、あるいは人の苦境を代わりに語る弁護士や支援者に連なる仕事なのだろう。自伝的エッセー『素顔』から。

2018・8・8

折々のことば　鷲田清一　1193

自分たちより外にこんな苦い薬を能く呑む者はなかろうという見識で……ただ苦ければもっと呑んでやるというくらいの血気であった

福沢諭吉

緒方洪庵の適塾（大坂）では、これを知ることが何の役に立つかはわからずとも、「六かしければ面白い」という思いだけで勉学に励めたと、明治の思想家は回想する。みな粗衣粗食の貧書生ではあったが、「目的なしに苦学」できたのが幸いで、「我身の行く先ばかり」に心を引かれていたら本物の勉強はできないと。『福翁自伝』から。

2018・8・9

折々のことば　鷲田清一　1194

現代人が失いかけているのは「話しあい」などではなくて、むしろ「黙りあい」だ

寺山修司

やたらコミュニケーションの必要が説かれる時代だが、「黙りとおした」ことのない人に「語りつくせる」はずがないと、歌人・演劇家は言う。人は話し相手を見つけることが幸福への糸口だと勘違いしていると。言葉を呑み込んだ相手の思いにあれこれと想像を巡らすより先にもう「返信」している、そんなネットの世界が出現するはるか前の発言である。『歴史の上のサーカス』から。

2018・8・10

折々のことば　鷲田清一　1195

僕は自分の肉体に鍬を入れられたと感じました。

中島丈博

数多くの黒澤明作品や松本清張モノの映画脚本を手がけた橋本忍の口癖は「正確に書け」だったと、「弟子」の中島は回想する。例えば「赤ん坊を背負った女が」ではなく「女が赤ん坊を背負って」が正しいと。観客の目に入る順がそうだから。中島の脚本に手を入れる時のその姿は、うまく書こうという弟子の邪念を一つ一つ潰してゆくかのようだった。本紙7月24日朝刊から。

2018・8・11

折々のことば
１１９６
～１２００

大事なのは作業の半歩先。

加世井眞次

折々のことば　鷲田清一　1196

私には何も返さんでいいから、この2人（息子）に奥さんができたときに、全部返したり

文美月の義母

「民族的マイノリティ」として生き、少数の「女性総合職」として働いた文さんは、自身でヘアアクセサリーのネットショップを創業し、「働く母」を続けてきた。その陰には自社に「転職」してきた夫の、さらには近所に住む義母の応援があった。贈り物は贈り主に返すのではなく、次に誰かに手渡すものなのだ。大阪発の企業情報サイト「Bplatz」（２０１４年12月配信）から。

2018・8・12

折々のことば　鷲田清一　1197

大事なのは作業の半歩先。

加世井眞次

魚屋「魚眞」の代表は、見習に入ったお笑い芸人・川田広樹に、作業はまだ仕事でない、さらに半歩踏み込んだところが仕事になると教える。その半歩とは、美味しいものを食べさせたいとの一念で工夫を重ねること。客がどんなふうに歓ぶか、それを想像しながらやる仕事は楽しい。面白くないのは仕事じゃないと。ＮＨＫ「仕事ハッケン伝」（２０１３年９月19日放送）から。

2018・8・14

折々のことば　鷲田清一　1198

この世の中では、なにを悲しむかということは、すこしも問題ではなく、どれほどふかく悲しむか、ということだけが問題なのです。

エーリッヒ・ケストナー

幼少の頃というのは、大人が描く「極上の粉で焼いたお菓子みたい」なものではない。そこには大人に劣らぬ悲しみがある。人形が壊れたことと友をなくしたことに重さの差はなく、むしろ悲しみとまっすぐ向きあう力をもつことが大切だと、ドイツの作家は言う。高等中学校の寄宿舎を舞台とした少年小説『飛ぶ教室』（山口四郎訳）から。

2018・8・15

折々のことば　鷲田清一　1199

人生、七味とうがらし

ある占師

うらみ、つらみ、ねたみ、そねみ、いやみ、ひがみ、やっかみ。人を翻弄するこれら七つの性は、いずれも自他の比較に由来する。他人と較べる中でしか自己を見ることのできない人の宿痾であり業であるが、これと正面から向きあうことで人生の味わいもいっそう深まると、テレビ東京系の連続ドラマ「ラストチャンス　再生請負人」（原作・江上剛）に登場する謎の占師は言う。

2018・8・16

折々のことば　鷲田清一　1200

眼玉で見た物を、何故眼玉で受止められないのでしょう。

青山二郎

眼で見たものをすぐに頭で判断したりすれば、眼は物が通過するだけの道具に成り下がる。人には生来、観念を介さずとも「黙って坐ればピタリと当てる」眼が備わっていると、骨董蒐集で有名な装丁家・評論家は言う。達人ならではの言葉に聞こえるが、普段のありふれた生活にあっても、家族の眼をはじめ、私には見えていない私を射抜く眼がいっぱい。評論「眼の引越し」から。

2018・8・17

折々のことば
１２０１
～１２０５

師匠というものはまちがいのない基本を正しく教えれば、いい師匠だ。

高橋竹山

折々のことば　鷲田清一　1201

師匠というものはまちがいのない基本を正しく教えれば、いい師匠だ。

高橋竹山

師匠は、「筋」だけをきちんと教えればいい。弟子にとって師匠は「商売一代の飯の種をわけてもらうのだから、命の親、生活の親だ」と、人並みでない苦労を重ねた津軽三味線奏者は言う。習いは彼にとって、すべて生活の土台をなすものとしてのみ意味をもった。その土台を確実に身につけること。習いはそれにかかっていた。『津軽三味線ひとり旅』（聞き書き・佐藤貞樹）から。

2018・8・18

折々のことば　鷲田清一　1202

きのふのための悲しみか／あすの日ゆゑの侘しさか／きのふもあすもおもはぬに／この寂しさはなにならむ。

竹久夢二

回想や期待、悔恨や希望といった、過去もしくは未来という不在の時への想いでなく、〈私〉が今ここに在るという、その一点に滲み出てくる寂しさを、画家は詩「けふ」でこう詠う。別の詩「孤独」では、《いさかひをする時だけが／「私達」／人はみなひとりびとりだ／キスする時も。》とある。ともに『竹久夢二詩画集』（石川桂子編）から。

2018・8・19

折々のことば　鷲田清一　1203

時計と違って止まることのない星が暮らしのなかにあった。

北尾浩一

「あの山の上にサンジョサマがくれる（沈む）から夜なべ仕事やめるべ」というふうに、人は昔、時計を見るように星を見た。星が山へ、海へと連なる景色から時を感じたと、「天文民俗学」の研究者は言う。サンジョサマは、「ダンゴボシ」「唐鋤星」などと並ぶオリオン座三つ星の和名。星の名は人々の生活に根づいており、そこには分厚い歴史がある。『日本の星名事典』から。

2018・8・20

折々のことば　鷲田清一　1204

僕が感じた「気持ちいい」は、この土地に重層的に積み重なる歴史のなかに自分がコミットしはじめた、そのことを感知したから

三島邦弘

京都市内にある築80年の古民家を、建築家・光嶋裕介にリノベートしてもらい、そこに住んで一番に思ったのがこれだと、出版社主は言う。古い丸太の梁が綺麗なヒノキの柱で支えられ、新旧の土壁が隣りあう。以前ここで暮らした家族、家を修理した棟梁らの息遣いにふれ、はじめてそこに根を下ろせた。光嶋の『ぼくらの家。』から。

2018・8・21

折々のことば　鷲田清一　1205

俺、ガンに罹って血がうまいかどうか分からないが、ご縁だから、よかったらたらふく飲んでいきなさい。

大林宣彦

肺ガンを患う映画監督は、肌にとまった蚊にこう囁く。自分が同居人「ガン君」の宿主なら、地球は人間の宿主。その人間というガン細胞が地球をいじめていると悟り、蚊は叩かず、草もよけて歩くようになったという。同じ一時の仲間として共に生き延びようやと。講演「あなたのいのちと私のいのちを考える」（「Relief」第32号）から。

2018・8・22

折々のことば
１２０６
～１２１０

何を論じたかは忘れたが、熱心に論じ合った。

和辻哲郎

折々のことば　鷲田清一　1206

家事は、あなたと家族が快適に暮らしていくための手段であって、けっしてあなたの生涯の目的ではないのです

犬養智子

運動靴は洗濯機で洗うとか、料理は近所の友人と分けて作るとか、上手に家事を「サボる」400の驚きの提案がなされるが、じつは合理的なものばかり。手抜きと、外の世界への関心と、身近な人への愛は同時に成り立つと、評論家は語る。家事は大切なことだからこそみなで協力しあってと。50年前に刊行された『家事秘訣集』から。

2018・8・23

折々のことば　鷲田清一　1207

大槌町は、絶対にいい町になります

菊池由貴子

震災で大きな被害を受けた岩手県大槌町で、取材から編集まで(当初は配達も)、毎週一人で新聞を発行し続けてきた菊池さんは、ある時期から第1面にこの言葉を掲げ続けている。「学識者」が人口減少の話ばかりするので、それに抗う気持ちもあって。復興は遅れ不安も募るが、町民の背を押す風は自分たちで吹かせるしかないと思い定めた。『大槌新聞　縮刷版』第1巻から。

2018・8・24

折々のことば　鷲田清一　1208

ごつごつした、硬いもの、何かヒリヒリする、ガシガシ嚙んで固い芯が残るもの

富士正晴

作家は、主宰する雑誌「VIKING」の同人たちにこういうものを求めたと、同人の一人、仏文学者・作家の山田稔は回想する。ひっかかるもの、痛いもの、嚙み切れないもの、飾りけのないもの。反対に、時流に迎合し、読者におもねり、自己をひけらかす「いやしさ」を、正義や学識の高みから日常の些事を見くだすような視線を、斥けた。山田の随想集『こないだ』から。

2018・8・25

折々のことば　鷲田清一　1209

父がいて兄の森之助がいて、妹がいて、屋敷にはしじゅう父の兵法の弟子が出入りし、門の軒にはつばめが巣をつくり……

藤沢周平

「終ったのはそういうものだった」と、婿を迎えて代々続く物頭の家を継いだ路は思う。世事にうとく何ごとにも粗忽な弟子の一人が藩命で討たれる身になった時、亡父から口伝で託された剣の秘術を彼に伝えた。あえて当主の意に背き。多くの者が出入りしたかつての家の、粗忽を許容する温かみを惜しみつつ。小説「玄鳥」から。

2018・8・26

折々のことば　鷲田清一　1210

何を論じたかは忘れたが、熱心に論じ合った。

和辻哲郎

詩人・劇作家であり医学者でもあった木下杢太郎との交友をふり返り、哲学者はこう記す。理不尽に悔し涙を流したが、その理不尽が何であったか思い出せない。事あるごとに詰りあったが、何が問題だったか憶えていない……。記憶として後を引くのは、ひょっとしたら出来事それ自体ではなく、それとくんずほぐれつした感触のほうなのかもしれない。随想「享楽人」から。

2018・8・27

折々のことば
１２１１
～１２１５

寂しくなった時、うまいもん食べたいと思うんや。嬉しい時、おいしいもん食べよと思うんや。だから、人は食べるために生きるんや

田村隆



折々のことば　鷲田清一　1211

読書は、人生の全てが、決して単純でないことを教えてくれました。私たちは、複雑さに耐えて生きていかなければならないということ。

皇后美智子さま

人の思いや立場が交錯する中、複雑さにたじろぎ呑み込んだ息は、それに耐えうる知的な肺活量を鍛えもする。とくに幼時の読書は、人生の「根っこ」と想像の「翼」と「痛みを伴う愛」を育むと、皇后は20年前、インドで開かれた国際児童図書評議会世界大会でのビデオ講演で語った。「美智子」の名で刊行された『橋をかける』から。

2018・8・28



折々のことば　鷲田清一　1212

「存在しないもの」は文化の違いを超えて、誰にとっても存在しないので、それがもたらす欠落感や悔恨や恐怖や不安は共有できる。

内田樹

慣習や財産のように、見えるもの、所有できるものは、異なる文化の間で共有するのが難しい。が、見えないし所有もできないけれども、人が生きるうえで真に拠り所としてきたものを失ったことの悲愁は共有できると、哲学者・武道家は言う。だから世界文学の多くが「喪失についての物語」なのだと。8月20日のツイッターから。

2018・8・29



折々のことば　鷲田清一　1213

父母に捨てられたとき、彼らはいのちのあらんかぎり泣きさけんだであろうに……人間の味わう悲哀の極限を経験したであろうに

山田風太郎

自分は5歳で父を、妹は9歳で母を喪った。なのに自分に父の記憶があり、妹に母のそれがないのは、自分には父のことを語る母がいたが、妹には母のことを語る人がなかったからだと、作家は言う。だから「中国残留孤児」に親の記憶の大半がないと聞き、「身につまされて、いっそうのいたましさをおぼえる」と。随想集『死言状』から。

2018・8・30



折々のことば　鷲田清一　1214

恋というのは、自分の描く理想像に自分がのめり込んでいるようなもので、ほんとうのところ、いつまでやってもきりがない。

吉本ばなな

だが、「おいしい漬物や、おなかに優しいヨーグルトみたいに私たちの関係に発酵をもたらして、人と人が家族のようになる」、そういう関係もあると、作家は言う。とりとめもないことのくり返しがそのまま「大切な塊」となるような。これこそ「恋以上に人生の大きな神秘」ではないかと。『切なくそして幸せな、タピオカの夢』から。

2018・8・31



折々のことば　鷲田清一　1215

寂しくなった時、うまいもん食べたいと思うんや。嬉しい時、おいしいもん食べよと思うんや。だから、人は食べるために生きるんや

田村隆

料亭「つきぢ田村」の三代目は、祖父からそう聞かされたと回想する。生きるために食うのであれば何でもいい。けれども人はものを味わい分ける。ただ受け入れるのではなく、よく調べて判断する。つまり吟味する。ちなみにホモ・サピエンスというときのサピオー（知る）も辞書によれば原義は「味わう」である。『隠し包丁』から。

2018・9・1

折々のことば
１２１６
～１２２０

職能がつながっていなければ、私たちの魚食はなかった。

濱田武士











折々のことば
１２２１
～１２２５

手のかからない子供というのは、子供がそうしているんだ

道野正

折々のことば　鷲田清一　1221

翻訳家は、翻訳をすればするほど、ますます浮力がついたような状態になってしまう。

マイケル・エメリック

翻訳をする際には、一つのモノ、一つの事態をめぐりいろんな言葉がよぎる。物事が言葉との密着を解かれ、「少しだけ、浮いて」くると、日本文学研究者・翻訳家は言う。世界がそのように流動化しだすと、〈私〉も言葉の重力から解き放たれ、そのぶん自由になる。翻訳ならずとも作文には本来、物事の定着とともに、それとは逆のこういう面がある。著述集『てんてこまい』から。

2018・9・7

折々のことば　鷲田清一　1222

ただ今あるものをなぞっている。その絶え間ない行ないの連続が、道に生き物のような優しさと揺らぎを与える。

青木淳

沖縄・八重山地方の竹富島は、周回道路以外は舗装されずに砂土の道。住民が朝夕竹箒で掃くので、おのずとまろやかな表情になる。都市でもかつて道には生活のいろんな「エキス」が滲み出て「膨らみ」があった。そんな、部屋のない動線だけからなる建築の構想が自分の原点にあると建築家は言う。『フラジャイル・コンセプト』から。

2018・9・8

折々のことば　鷲田清一　1223

手のかからない子供というのは、子供がそうしているんだ

道野正

硬骨のフランス料理店主は、妻の留守中、家事を引き受けた娘が台所に洗い物を溜めているのに苛つき「とことんきれいに」する。お利口さんだが「よくわからない」子と思ってきたが、娘は風呂上がりにそれを目にして号泣する。親に負担をかけまいとバイトに行き、翌朝片づけをと段取りをつけていたのだった。父には生涯の痛恨事として今も疼く。『料理人という生き方』から。

2018・9・9

折々のことば　鷲田清一　1224

このままだと、あの時と同じことが起きてしまう。

長嶺隆

沖縄の獣医師が野生動物の保護活動に乗りだしたのは、ヤンバルクイナが絶滅の危機にあると知り、幼い頃、近くの干潟が埋め立てられ数千羽の海鳥たちが消えたのを思い出したから。「こんな生き物、どこにでもいるじゃないか」という「過信」の広がりが、生き物を絶滅へと追いやってしまうのだと警告する。デジタルマガジン「オルタナS」の記事（4月16日配信）から。

2018・9・11

折々のことば　鷲田清一　1225

わずかのことがわれわれを悲しませるので、わずかのことがわれわれを慰める。

パスカル

〈私〉の存在には不動の確かな足場などない。この虚しさから人はいつも目を逸らそうとする。仕事も恋も遊びもみなそういう気散らしとしてあると、17世紀フランスの思想家は言う。こういう醒めた物言いにはしかし効用もある。人は仔犬のいたいけな仕草にも慰められる。すると爆発寸前だった怒りや不満も些細なことに思えてくる。『パンセ』（前田陽一・由木康訳）から。

2018・9・12

折々のことば
１２２６
～１２３０

社会とはそもそも人が健全に傷つくための仕組みだ、と僕は考えます。

奥田知志

折々のことば　鷲田清一　1226

映画の何がいいって、僕は、〝待ってくれること〟だと思うんですよ。

柄本佑

映画「きみの鳥はうたえる」（監督・三宅唱）は制作に3年かけた。台本を書き換えたり、苦労して撮った場面をカットしたり、寄り道がたっぷりできたと、俳優はふり返る。出演者が自身の枠を外し、関係が熟れて思わぬものが現れてくるまで、場を空けたままにしておけた。家族や友人にしても、なろうとしてなれるものではない。「週刊朝日」（9月7日号）でのインタビューから。

2018・9・13

折々のことば　鷲田清一　1227

「彼」は、世間の中にいない。世間に生きている日常の日本語が、「彼」を持っていないからである。

柳父章

英語のｈｅは既出の男性をさすが、日本語の「彼」はもともと会話の外にある人や物を表した。それが改めて人称代名詞の翻訳語として導入された。例えば田山花袋はその語を駆使して〈私〉を対象化する方法を小説世界に持ち込んだ。「彼・彼女」という語が〈私〉の新しい世界を開いたのだと、評論家は考える。『翻訳語成立事情』から。

2018・9・14

折々のことば　鷲田清一　1228

何かを失い始めると、急スピードですべてを失ってゆくのね

ジェーン・バーキン

70歳を過ぎた今もあの囁くような声で歌い続けるフレンチポップスの歌手は、過去の夫との破局をふり返り、こう語る。「あたりまえ」と思っていたことも、ちょっとした油断であっけなく崩れる。幸福は日々の繕いがあってかろうじてもつ。同じことはきっと、社風についても、政治家や官僚の規矩や矜持についても言える。作家・山口路子の『ジェーン・バーキンの言葉』から。

2018・9・15

折々のことば　鷲田清一　1229

社会とはそもそも人が健全に傷つくための仕組みだ、と僕は考えます。

奥田知志

誰ともつながれないのが「孤立」だとすれば、誰かと一緒にいながら独りであるのが「孤独」。「絆」には「傷」がつきものなのだ。なのに人は他人との関わりがリスクを生むと考え、深入りするのを避ける。そのことでかえってセーフティーネットに「穴」が開いてしまうと、北九州市で生活困窮者を支援するＮＰＯ「抱樸」の理事長は取材を受けて語る。「ＡＥＲＡ」9月3日号から。

2018・9・16

折々のことば　鷲田清一　1230

タコツボのなかで／かつがつ生きるようになると／聞き飽きたと思っていた常套句が／生きるか死ぬかの／大問題になりかねない

デヴィッド・フォスター・ウォレス

魚にとっての水のように、死活のかかるものはふだん意識されない。人にとって、教養とは知識の量ではなく、考えるべきものの選択だという常套句がその一つ。知らぬまに内に埋め込まれた思考の初期設定をたえず検証し、見直しできているかどうかが人の行く末を決すると、米国の作家は言う。『これは水です』（阿部重夫訳）から。

2018・9・17

折々のことば
１２３１
～１２３５

私は、今とずっと後のことだけを考えている。だから、明日の約束はできないが、百年後の約束ならできる

アマゾンの先住民

折々のことば　鷲田清一　1231

だれか食べるでええわい

梅原猛の養父

学生だった両親の結婚が認められず、その母も産後1年で亡くなったので、哲学者は、醸造業を営んでいた伯父夫婦の下で育てられた。戦時中、その養父が米を盗まれる。後処理に迷う妻に彼はこう告げた。それどころか、のちにその盗っ人の親に請われ身許保証人にもなった。その時代、人はみなで生き延びるのだという大らかな思いがまだ息づいていた？『少年の夢』から。

2018・9・18

折々のことば　鷲田清一　1232

さようなら僕の直感。
アー、猛烈に面倒くさい。

伊藤ガビン

エッセー「もう直感は役に立たなくなってしまった」（『新潮』9月号）から。良いデザインは「それを持った瞬間に使い方がわかる」と言われてきたが、それは人の行動や動線を巧妙に誘導することでもあると、編集者は言う。街には実際、人がこれまで直感で「よし」としてきた店の佇まいや装備をデータベース化して等し並みにデザインしたものが溢れ、なんとも気持ち悪いと。

2018・9・19

折々のことば　鷲田清一　1233

しっかりと感じて、たしかめて、愛して、何かを決めるのはそれからじゃないのか。

遠藤水城

原発事故後、キュレーターは文明のこの「行き止まり」を確と怖れるために、津軽を起点に徒歩で南下、福島の放射能汚染区域へと、野宿を続けながら歩く。線量の僅かな差で立ち入り禁止に「なる／ならない」、そんな「相対的な地点」で旅は終えられない。数値はあくまで基準。体で「納得」し、その感覚を持たなければ以後何も始められないと。『陸の果て、自己への配慮』から。

2018・9・20

折々のことば　鷲田清一　1234

私は、今とずっと後のことだけを考えている。だから、明日の約束はできないが、百年後の約束ならできる

アマゾンの先住民

文明と接触をもたないアマゾンの先住民「イゾラド」（隔絶の民）の記録を制作してきたNHKディレクター・国分拓は、かつて先住民の一人がこう語ったという。明日のことより遠い未来をはるかに雄弁に語る民。夜空にいつも見える星のように、彼らは遠い未来への希望を支えに苛烈なその生を生き抜いてきたのか。近著『ノモレ』から。

2018・9・21

折々のことば　鷲田清一　1235

わかるわからないということじゃない価値観がないかな、とさぐってる。

五味太郎

意味や理屈やストーリーで理解するのが知性だとしたら、「山を見てため息つく」のも紛れもなく知性の一つだと、絵本作家は言う。意味から離れて「絵的に考える」。これ、翻って文章についても言え、「論破したり結論出したりっていうのと違う文章の書き方」もきっとあると。対談集『絵本のこと話そうか』（松田素子編）に収められたイラストレーター・黒井健との対談から。

2018・9・22

折々のことば
１２３６
～１２４０

暗黒や関東平野に火事一つ

金子兜太

折々のことば 1236

鷲田清一

ぼくはナンセンスなものを描いているわけだから、その意味づけを云々されても困るわけ

長新太

何の意味もメッセージもないと、読者より批判が向けられた時、絵本作家は、しつけや感動といった「指導」より、生きるのは楽しい、不思議がいっぱいと、子供自身が感じるほうが先だと思った。「ためになる」かどうかより、「生理的に心地よいこと」が生きることの根底になければと。昨日と同じ対談集『絵本のこと話そうか』（松田素子編）での絵本作家・五味太郎との対談から。

2018・9・23

折々のことば 1237

鷲田清一

負けていて残り1分というときに、笑えるかどうか、ということなのです。

岩出雅之

接戦で相手チームにトライを決められた時、主将が「いやあ、面白くなってきたなあ」と皆に言ったという。全国大学選手権9連覇中の帝京大学ラグビー部の監督は、ピンチの時こそ笑える余裕をもてと言う。笑うとは自分に距離を置くこと、状況を俯瞰する冷静さをもつこと。監督はむしろ選手の「テンションが上がりすぎていないか」に注意を払うと。『負けない作法』から。

2018・9・24

折々のことば 1238

鷲田清一

暗黒や関東平野に火事一つ

金子兜太

銀行員だった頃、組合活動が理由で左遷された。用事で東京に向かう車中、遠くに火の手が見えた。一瞬、一揆が起きたかと思った。自分の中に「希望の火種」があれば、偶然目にした光景にも励まされると俳人は記す。後日、作家の井上ひさしにこの話をしたら、「火事」より「ぼや一つ」にしたら、と言われたという。たしかに心のもつれがいや増す。『私はどうも死ぬ気がしない』から。

2018・9・25

折々のことば 1239

鷲田清一

「大人になっても○をつけてもらいたい時があるの」

宮原るり

不器用にしか生きられない「残念な」若者たちの下宿「河合荘」。田舎に戻り父親の会社に入った元下宿人が、父が煙たくて河合荘に遊びに来る。ぐちを言いつつ、でも父もよくやっていると思うとつぶやくと、管理人がこう返した。「いいね！」と即座に返すのでなく、じっと見つめたうえで静かに返してくれる○がほしい時が誰にもある。コミック『僕らはみんな河合荘』⑪から。

2018・9・26

折々のことば 1240

鷲田清一

母ちゃんは、信じられないところから褒め言葉を持ってくる。

山里亮太

学校で先生に叱られた時は「反省してる感じ出すのうまいねぇ」と、この子はすぐ嘘をつくと言われた時は「聞かれてすぐに何か言えるって、しかも作って言えるってすごいねぇ」と、お笑い芸人の母は言う。そんな信頼の過剰に、息子はふつう、そこまで言ってくれなくても、と退いてしまう。〝親馬鹿〟は子に、ときにクールな自己認識をもたらす。『天才はあきらめた』から。

2018・9・27

折々のことば
１２４１
～１２４５

症状が対処法である、ということは、体にまつわる現象においてはよくあることです。

伊藤亜紗

折々のことば　鷲田清一　1241

大切なものが近くにあってもそれに気付くのはずっと後、ということが私には往々にしてある。

鴻池朋子

美術家は随想「河原にて、また会いましょう」（『司修のえものがたり』所収）にそう綴る。いえいえ、みなきっとそうなんです。気付いた時はもう取り返しがつかない。そのぶん余計こたえる。あなたが後で知ったその大切なものは、だから、後に生きる人たちに確と伝えておかねばならない。あなたの大きな絵がまさにその仕事ですよね。

2018・9・28

折々のことば　鷲田清一　1242

症状が対処法である、ということは、体にまつわる現象においてはよくあることです。

伊藤亜紗

発熱が、体内に侵入するウイルスへの対処の結果であるように、吃音における連発（最初の音をくり返す）には次の音に移行する準備運動という面が、難発（音が出ない）にもその連発の回避という面があると、美学者は言う。体はときにフリーズして制御不能となるが、「タガが外れた」心身の難局を是正しつつ、活動の別の可能性を必死に模索してもいる。『どもる体』から。

2018・9・29

折々のことば　鷲田清一　1243

「牡丹を移すおりは根から土が落ちぬよう、そして牡丹が気づかぬようにそっと移して欲しいのでございます」

葉室麟

その牡丹は、伊達家を守るため自ら楯となって果てた家臣がかつて姫の輿入れ先に植えたものだった。いずれ起こる「醜き争い」を姫には見せまいと。命懸けで花を守ろうとする人の想いを「花は知らずともよい」。周りのそんな思い遣りの連なりが自分を支えてくれていたのだと知り、彼女はこう希う。短編小説「牡丹咲くころ」から。

2018・9・30

折々のことば　鷲田清一　1244

好きでも　嫌いでもなかったあの日を
失う時が来るかもしれない

PROJECT　NOW！

若手芸術家らによる核廃絶キャンペーン《PROJECT　NOW！》。あってあたりまえの日常がある日忽然と消える、そんな未来に向けて想像力を起動しようと、彼らはアートブック『NOW！』の中で訴える。「愛」や「正義」から、この人、この樹まで、人は〈かけがえのないもの〉を命懸けで育んできた。誰にもある取り換えのきかないこの時、この場所もここから生まれた。

2018・10・1

折々のことば　鷲田清一　1245

とても複雑に見えるこの世界でも、たった一本の「糸」が、大切なにかを繋ぎ、結ぶことがあります。

清川あさみ

写真に刺繍を施したり、ネガポジ反転させたインスタ画像を縦糸だけを連ねた面に転写したりして、自分という存在を形作る幾重の層を膸に浮き上がらせる美術家。彼女はそのあわいを表へ裏へと丹念に「行き来」したいと言う。そうでないと、他の人と繋がるにもうわべだけのものになってしまうから。作品集『I：I』の序文から。

2018・10・2

折々のことば
１２４６
～１２５０

とことん時代に遅れ続けよな、言うてんです。

一澤信三郎

折々のことば　鷲田清一　1246

ボーっと生きてんじゃねーよ！

チコちゃん

NHKのクイズ番組「チコちゃんに叱られる！」。答えに窮する大人たちを、司会の着ぐるみの5歳児が、こんな基本もわきまえずに生きてきたのかと一喝する。「ボーっは注意散漫なこと」。でも、予期せぬ事態にしかと対応できるよう、あえてふわっと身を漂わせておくのも時には大事。ただ、スマホに没入する傍迷惑な人には「ボーっと歩いてんじゃねーよ！」と言いたくもある。

2018・10・3

折々のことば　鷲田清一　1247

ヒトが生きるための言葉は、逡巡しているとき、沈黙しているときに生まれる

佐々木幹郎

言葉がここまで軽くなった時代はないと憂える詩人は、一方で、東日本大震災を機に長く失語状態に陥り、みずからの詩語と技術を初期化せずにいられなかった詩歌人がいることに着目する。「大震災からは遠いところから、にもかかわらず大震災に出会わなければ生まれなかった視点から」紡がれた言葉がしかとあることに。随想「詩のいま　言葉のいま」（「望星」10月号）から。

2018・10・4

折々のことば　鷲田清一　1248

借りを返せば、恩が返せるわけじゃない

柚月裕子

小説『検事の本懐』から。命の恩人から託されたある思いを遂げるため、自身が横領の罪を問われることになってもついに口を割らず、服役した弁護士。彼を父にもつ主人公の佐方検事は、父のこの口癖を胸に畳み込み、容疑者を調べる過程でも、彼がのちに人生を本当にやり直せるよう、そのきっかけとなる事実をつぶさに探す。恩と無縁で生きてこられた人はいないから。

2018・10・5

折々のことば　鷲田清一　1249

金や力がなくても、守るべきもののためにあがき続ける人間はいる。そういう人間は夢なんて語らない。

鷲津政彦

夢をどうしても実現したいという企業の支援要請を、剛腕の投資家はこう言って撥ねつける。まずは「他人任せの考え方を徹底して捨てろ」「話はそれからだ」と。夢を叶える困難を知る者は、夢を語る前にすべきことも知っている。テレビ朝日系のドラマ「ハゲタカ」（原作・真山仁、脚本・古家和尚）第7話（8月30日放送）から。

2018・10・6

折々のことば　鷲田清一　1250

とことん時代に遅れ続けよな、言うてんです。

一澤信三郎

帆に使う厚手の布製かばんを手作り・直売する京都の老舗の店主は、日頃からスタッフにこう言っている。世間は時代を先取りしろと言うが、先取りといっても利益率や投資効果、利便性のことばかり。暮らしに何十年と役立つものはそんなものからは生まれないと。だから、綻びができたら修繕も確と引き受ける。テレビ東京系の番組「カンブリア宮殿」（5月10日放送）から。

2018・10・7

折々のことば
１２５１
～１２５５

遇うて空しく過ぐる勿れ

九鬼周造


折々のことば　鷲田清一　1251

いっぴゃこっぴゃ／よんにょ／あばかん

熊本の方言

「たくさん」という意味。熊本出身の記者から教わった。「これ、とってもファンキーでしょ」、と。中川義一編著『こらおもしろか肥後弁辞典』によれば、「釣銭よんにょやり過ぎた」「銭ばあばかん持っとるね」というふうに使う。私が育った京都ではもっとおっとり「ようけ／ぎょうさん／たんと」。語感から彼の地の気風を想像するうち、身にこびりついた言葉が少し剝がれもする。

2018・10・8


折々のことば　鷲田清一　1252

人は生きていたように死んでいく。

島﨑今日子

樹木希林の最後の1年を撮ったテレビ番組を観て、全身転移したガンの検査画像を見せたことと、映画で入れ歯を外して老婆を演じたことは、作品のためには全てさらけ出すという意味で「地続き」だったとライターは記す。死にゆく姿が生の一部なら、生きるその姿も死の一部。時折耳にする言葉だが、樹木さんの人生にぴたり。本紙大阪本社版のコラム「キュー」（3日朝刊）から。

2018・10・10


折々のことば　鷲田清一　1253

遇うて空しく過ぐる勿れ

九鬼周造

偶然とは、偶々「あった」が「ない」こともありえたということ。この〈私〉も両親の偶々の結ばれから生まれた。そのかぎりで〈私〉が今ここにこうしてあることに最終的な根拠はない。が、この偶然は人生を最後まで制約する。そう、偶然は必然へと裏返る。〈私〉の存在が意味をもつのは、この裏返りに孕まれた可能性を生き抜く時だけだと哲学者は言う。『偶然性の問題』から。

2018・10・11


折々のことば　鷲田清一　1254

君のエサ代、稼いでくるからね

宇崎竜童

作曲家は拾ってきた子猫に首ったけ。出がけにもこう声をかける。そして猫から学んだのは「無償の愛」だと言う。人に何かしてあげても、「返礼がねえな。挨拶、全然ねえな」とすぐに思ってしまうが、お返しなど求めない愛もあると知ったと。猫がどう思っているかは知らないが、すべて猫中心に回る生活、わからなくもない。BS日テレの「MY STORY」（8月19日放送）から。

2018・10・12


折々のことば　鷲田清一　1255

「それで、だれがあんたを見送ってくれるんだい」……／「お月さま、霧」／「そうかい。ひとりじゃないんだね。よかった」

岩城けい

アフリカから難民として逃れてきて、食品加工工場で働き始めた女性。教育係の人が彼女に肉の捌き方を教えつつ、故郷での暮らしについて訊ねる。毎日、家で畑仕事などをし、働きに出る人を送る側だったが、今は出る側になったと答える。その後の2人のやりとり。「情け」は人の背中を静かに押す。小説『さようなら、オレンジ』から。

2018・10・13

折々のことば
１２５６
～１２６０

「スポーツくらい好きにさせてよ」という流れがもっとあっていい。

為末大



折々のことば　鷲田清一　1256

「あなたは、違う。だから、いいんだ」

岩城けい

偏見に晒されても周りにおもねらずに実直に働く。アフリカから豪州へ逃れてきた難民女性のその姿を見て上司はこう言った。その彼女が、夫の転職で移住し同じ英語学校に通う日本人女性に、あなたは大学にいるべき人、ここにいるのは間違っていると諭す。違うところがいい。生きづらい思いでいる子にもそう声をかけたい。昨日と同じ小説『さようなら、オレンジ』から。

2018・10・14



折々のことば　鷲田清一　1257

雑談ができないのは、本当にピンチです。

石田紀郎

農薬公害、琵琶湖汚染などの調査に取り組んできた農学・環境学者は、昨今の研究が、入手したデータの解析に没頭するばかりで、現場に身を置きそこから真に考えるべきテーマを汲み上げるという作業を蔑ろにしていると警める。農学ならまずは農家の人と膝を交えて話すことから始めよと。雑談の中にこそ思いがけないヒントが潜んでいる。『現場とつながる学者人生』から。

2018・10・15



折々のことば　鷲田清一　1258

思い出の中で最後まで消えないのは、特にこれといったこともないような一場面、突き詰めれば一瞬のしぐさや何気ない一言なのかも

北村薫

高校を舞台とした推理小説『秋の花』から。誰かのことを思う時、さりげない仕草や口ぶりが「くじ引きの器械を回してたまたまコロリと出て来た玉みたいに」現れると、登場人物の一人が言う。肩の線なんかもそう。記憶の淵に淀むのは、一度限りの決定的な場面ではなく、緩やかな抑揚としてその体をくり返しよぎるものなのだろう。

2018・10・16



折々のことば　鷲田清一　1259

「スポーツくらい好きにさせてよ」という流れがもっとあっていい。

為末大

スポーツと教育・指導との「学校っぽい」結びつきが日本では強すぎると、スポーツ文化の振興に取り組む元陸上選手は言う。競技場なども公園のように、どこの誰がいきなり入って練習してもいい場所であったらいい。「正しいランニング」という観念から離れ、もっと自由な空間になるべきだと。「PLANETS」第10号（宇野常寛責任編集）でのインタビューから。

2018・10・17



折々のことば　鷲田清一　1260

恋人になると誓うより、仕事への志を語るより、心を本当に励ましてくれるのは日々の小さなできごとだ。

宇田智子

都会の大書店から沖縄へ転勤となったが、一念発起、勤めをやめ那覇の公設市場前で小さな古本屋を開いた。が、今となれば偶々いろんなタイミングが重なってのことと店主は思う。店がなければ会えなかった人たちとの日々の細かなやりとりのほうが今は遥かに大切だと。布の模様をなすのは糸の一本一本。『市場のことば、本の声』から。

2018・10・18

折々のことば
１２６１
～１２６５

信頼されるということは、あいまいさをなくすことだということにつきるようです。

高峰秀子

折々のことば　鷲田清一　1261

信頼されるということは、あいまいさをなくすことだということにつきるようです。

高峰秀子

微笑は、愛嬌のよさで苦境を凌ぐほかなかった日本女性のやむをえぬ術だったと、往年の女優は言う。「娘時代は、カラカラとよく笑ったのが、ある年齢に達すると微笑になり、そして結婚すると笑いを忘れ、姑になるとゲラゲラ笑いだした」という変化の中に、「あいまいな笑いのかなしい原因」が潜むと。信頼があれば表情の粧いなど無用だ。随筆集『あぁ、くたびれた。』から。

2018・10・19

折々のことば　鷲田清一　1262

「共感できないけど一理あるかも」って脳がパッカーンってなるあの瞬間が好きなのにな。

若林正恭

お笑いコンビ・オードリーのツッコミ役は、社会の底で渦巻く不満が「邪論や暴論を楽しむ余裕を奪っている」みたいと言う。「ダメだったりバカだったりすることが少なくとも排除されない温もり」。それを封じる空気がバラエティー番組にさえ浸透してきているのが怖いと。自身はきっとこの正論っぽい口調もおちょくりたいのだろうけど。エッセー集『ナナメの夕暮れ』から。

2018・10・20

折々のことば　鷲田清一　1263

味で見る人の評には、要を尽くしている割合に案外聴くべき所が少ないが、感じで敲かれるとどこか痛く身に応える所がある。

濱田庄司

「味」とは作品の形や調子や模様といった細部の風合いを、「感じ」は全体の印象をいう。「味」はある程度まで狙って出せるが、「感じ」は違うと、陶芸家は言う。「味」に蘊蓄を傾ける粋人でなく素人の感想が怖いのは、「離れて自身の角度でぶっつかって」いて、作家の知らない「未成の標準」を突きつけてくるから。随想集『無盡蔵』より。

2018・10・21

折々のことば　鷲田清一　1264

いやぁ、感じ悪ぅ。

大阪の女の人

大阪の人はバリアを築く人を嫌う傾向があるらしい。お高くとまる、のぼせ上がる、ひけらかすといった態度。あるいは裏表、おすまし、よそいき、上滑りに、小心やしみったれ。心にもないことを言われると遠ざけられたと感じ、魂胆が透けて見えるふるまいを目にしたらすぐに隣の人に「何なん、あの人」と言いたくなる。感覚も判断も自分の流儀を貫くところ、進んでいる。

2018・10・22

折々のことば　鷲田清一　1265

一杯のコーヒーから店のあらゆる寸法を割り出す

森光宗男

ともに焙煎とネルドリップの名人、森光と大坊勝次の対談録『珈琲屋』から。椅子にもこれしかない寸法があると森光が言うと、道具から設えまで「コーヒーを楽しむ」ことで決まると大坊が応える。森光が判断の根拠は後でしかわからないと言えば、大坊は「あきらかにしないからこそ、誰もが生きていられることがある」と返す。目の前の一事も大きな時空感覚で捉える2人。

2018・10・23

折々のことば
１２６６
～１２７０

There is no pleasure in the work

川久保玲


折々のことば　鷲田清一　1266

自由はある日突然なくなるものではない。それは目立たない形で徐々に蝕まれ、気がついたときにはすべてが失われている

宮澤喜一

かつて内閣総理大臣・自由民主党総裁を務めた人の言葉。戦時下の日々をふり返りまず思い出すのは、生活の困窮以上に、自由と批判への圧迫だったと言う。僅かな変調を軽く見たことが強権への全面屈服につながった。そしてこの「魔性の歴史」を二度とくり返すまいと、《蟻の穴から堤も崩れる》という諺を引く。『新・護憲宣言』から。

2018・10・24

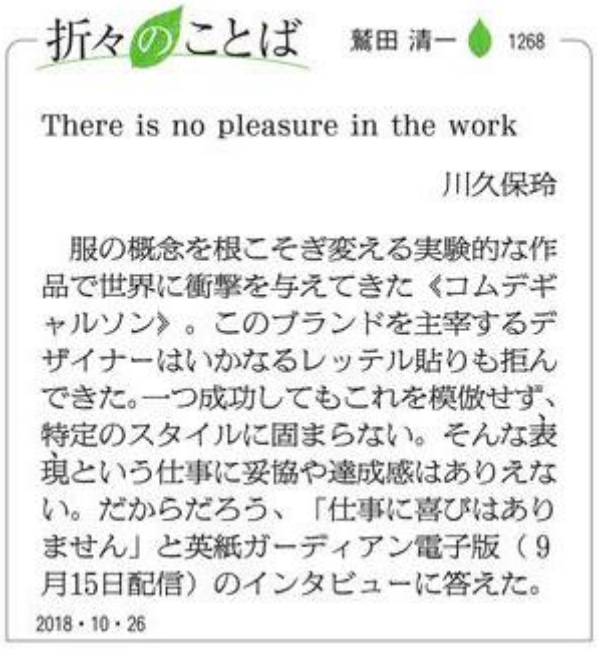

折々のことば　鷲田清一　1267

本来は自分がやるはずの自炊を、誰かが代りに朝から働いてやってくれているから「たすかる」店だと。

按田優子

一人でも気軽に腹ごしらえができ、近くにあると「たすかる」店とメニューにしたかったと、食堂「按田餃子」を共同経営する料理家は雑誌『Spectator』第42号のインタビューに答える。「たすけて」は惨めで言いづらいが、「たすかる」なら素直に言える。「してあげる／してもらう」という心の負担なしに互いを思いやれる関係だから。

2018・10・25


折々のことば　鷲田清一　1268

There is no pleasure in the work

川久保玲

服の概念を根こそぎ変える実験的な作品で世界に衝撃を与えてきた《コムデギャルソン》。このブランドを主宰するデザイナーはいかなるレッテル貼りも拒んできた。一つ成功してもこれを模倣せず、特定のスタイルに固まらない。そんな表現という仕事に妥協や達成感はありえない。だからだろう、「仕事に喜びはありません」と英紙ガーディアン電子版（9月15日配信）のインタビューに答えた。

2018・10・26


折々のことば　鷲田清一　1269

昔の職業というものは大まかで、何でも含んでいる。

夏目漱石

職業がどんどん細分化されてゆく中、大卒の若者が「何か生活の手蔓はないかと朝から晩まで捜して歩」く姿（現代でいう「就活」？）は「不経済」だと、明治の文豪は言う。昔は一人がいくつもの商売をし、すぐに手に入らない物は間に合わせで作った。昨今は「知識や興味の面積が日に日に狭められ」て、個人が孤立し、ひどく無能になりつつあると。講演「道楽と職業」から。

2018・10・27


折々のことば　鷲田清一　1270

結婚や出産で働き方が流動的になりがちで、会社と自分の関係性を突き詰めて考えることにも慣れています。

朱野帰子

本業を複数もつ生き方がじわり広がりつつある。これには女性の方が相性がいいと作家は言う。1社に参勤交代よろしく勤めるのでなく、「少しでも自分を評価してくれる大名のもとを渡り歩く」戦国武士に近いから。淡い期待に引きずられるほど甘くない点でも？　本紙「耕論／二足のわらじ広がるか」（10月17日朝刊）での発言から。

2018・10・28

折々のことば
１２７１
～１２７５

俗論は頑論よりも害あり。

中江兆民

折々のことば　鷲田清一　1271

俗論は頑論よりも害あり。

中江兆民

憤懣の溜まる社会では、「極端と極端とを並べて見せる」性急で頑なな論がはびこる。これらは他山の石としうるが、厄介なのは俗論のほう。尖らない論点は温和でいかにも正論に映るが、その耳あたりのよさが批判力を鈍らせ、大勢を見誤らせる。そして人心が議論に倦めば、社会は内部から蝕まれてゆく。だから論を耕せと、明治の思想家は警めた。『中江兆民評論集』から。

2018・10・29

折々のことば　鷲田清一　1272

文化破壊が猛威を極めても、失われたように見えるのは有形の遺産だけで、人の記憶を抹消することはできない。

加藤種男

廃仏毀釈など明治政府による「文化破壊」を尻目に、横浜の原富太郎は広大な自邸の庭を公園として開放し、大阪の企業人らは懐徳堂という江戸期の自治的な教育機関の再興に動いた。企業の私的資産を社会資本へと転換するこの精神が、現代の企業メセナの源にあると、クリエイティブディレクターは言う。『芸術文化の投資効果』から。

2018・10・30

折々のことば　鷲田清一　1273

「ホスピスに必要なのは、言葉ではなく無言」、だと思う。

徳永進

食事や排泄のケアにあたるスタッフと共に、ホスピスの活動に長年取り組んできた鳥取の医師。この間、看取りを語る言葉は増え、医療措置も進化したが、病者の横に黙って座し「時の流れに共に乗る」ことで、両者のまなざしに「弱さと柔らかさ」が行き交うという、太古からある看取りの形には何の変化もないと言う。氏が開設した診療所の機関誌「野の花通信」第31号から。

2018・10・31

折々のことば　鷲田清一　1274

これが冬眠だって？　これが休息だって？　むしろ、自然はひまがないので、いまは上へ育つのを見合わせているのだ

カレル・チャペック

秋に入り、生き物たちは冬眠に入るかに見える。だが植物は、土が凍らないうちにと土を掘り起こし、新しい根を懸命に伸ばし芽を育む。春を「立案」しているのだと、戯曲「R・U・R」（人造人間）で知られる劇作家は言う。人間の歴史にもそういう時がある。未来は人々の前方でなく足下にある。『園芸家12カ月』（小松太郎訳）から。

2018・11・1

折々のことば　鷲田清一　1275

優子ちゃんと暮らし始めて、明日はちゃんと二つになったよ。自分のと、自分のよりずっと大事な明日が、毎日やってくる。すごいよな

瀬尾まいこ

小説『そして、バトンは渡された』から。縁あって高校生・優子の義父となった男の言葉。優子は幼くして母を亡くし、血縁でない大人たちにリレーされて育った。その〝親〟たちが大切なもう一つの「明日」のためそれぞれに心を砕く。改めて考えれば、自分のために生きるというのは、自分を満たすものが何か見えず、存外難しいもの。

2018・11・2

折々のことば
１２７６
～１２８０

欠点を直すことに一生懸命にならない

羽生善治











折々のことば
１２８１
～１２８５

大阪は音楽の町なんですね。だって、ドで始まり、ドで終わる。

東京のタクシードライバー

折々のことば　鷲田清一　1281

思慮の浅い者たちは、あかりは持っていたが、油を用意していなかった。

マタイによる福音書（新約聖書）

先の見えない、塞いだ時代だと人は言う。けれども視界が遮られているのは、未来が不確定だからではなく、目を凝らせばある未来が確実に来ることがわかるのに、すべて先送りにし、その対策に本気で着手できないでいるからではないのか。例えば人口減少、国家財政の破綻、経済成長の限界、放射性廃棄物処理の膠着。聖書のこの一節は私たちのそんな無様も思い起こさせる。

2018・11・8

折々のことば　鷲田清一　1282

迷うのは、自分で選ぼうとしている証拠。自分の頭で考えている人だけが得られる「勲章」みたいなものだ。

小国綾子

それでも迷いが吹っ切れない時は「やったことのない方を選ぶ」と毎日新聞記者は言う。嫌な仕事もやってみたら発見があったり、「できないこと」ばかり数えて凹んでいた子育て期に旅に出たら、赤ん坊がいたからこそできた経験があったり。人生に思いもよらない線がいっぱい引けた。『？（疑問符）が！（感嘆符）に変わるとき』から。

2018・11・9

折々のことば　鷲田清一　1283

大阪は音楽の町なんですね。だって、ドで始まり、ドで終わる。

東京のタクシードライバー

車の中で町名の話になった。難波、船場など大阪の町名は濁音のものが多い。なかでも淀屋橋、道頓堀、堂島、道修町と「ド」の音が際立つと私が言うと、すかさずこう切り返した。音楽の話に持っていくところが凄い。京都を「はひふへほ」、大阪を「ばびぶべぼ」、神戸を「パピプペポ」と表現した雑誌編集者もいた。音調が三都の気風をぴたり伝える。他の都市も音で知りたい。

2018・11・10

折々のことば　鷲田清一　1284

いま在る
あなたの如く　私の如く
やすらかに　美しく　油断していた。

石垣りん

広島に原爆が投下された「午前八時一五分は／毎朝やってくる」と、詩人は詩「挨拶」（1952年）に記す。核の装備があちこちでなされ、地球は「生と死のきわどい淵」にあるのに、一瞬にしてあまたの命を奪ったあの日の記憶は遠のき、人は平和に安らう。かつてその健やかな微睡みのすきをついて戦禍が始まったことを忘れまじと。

2018・11・11

折々のことば　鷲田清一　1285

「話す」ということを発見した人類のこころの中には、苦痛をのり越えてきたものの切実な祈りがひそんでいる。

中井正一

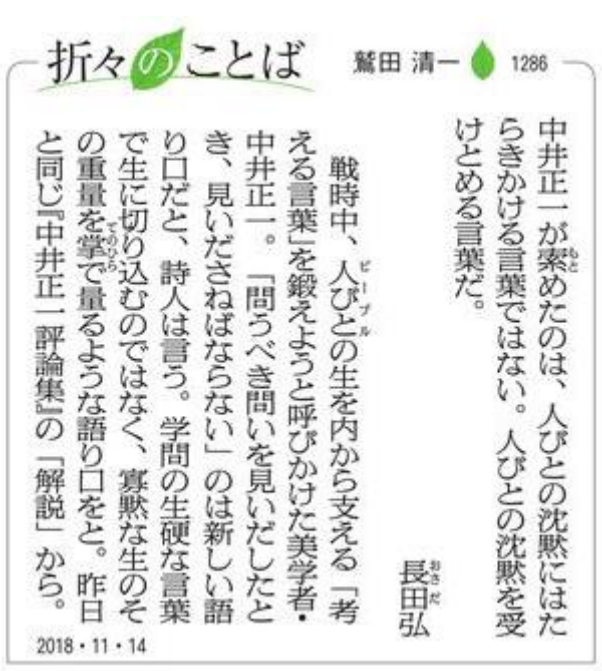
「直接に血を流さないために、人類はここまで歩みきたった」と続く。だから歴史の過ちを正す資源は、批判と協同をともに可能にする言語と書籍にあると美学者は言う。例えば百年の戦争の結末が数頁の講和文書であるなら、それを戦争前に書けば「血潮の中をのたうちまわらなくて」済んだはずだと。『中井正一評論集』（長田弘編）から。

2018・11・13

折々のことば
１２８６
～１２９０

生きものは、いなくなってから存在感を増す。

那須圭子

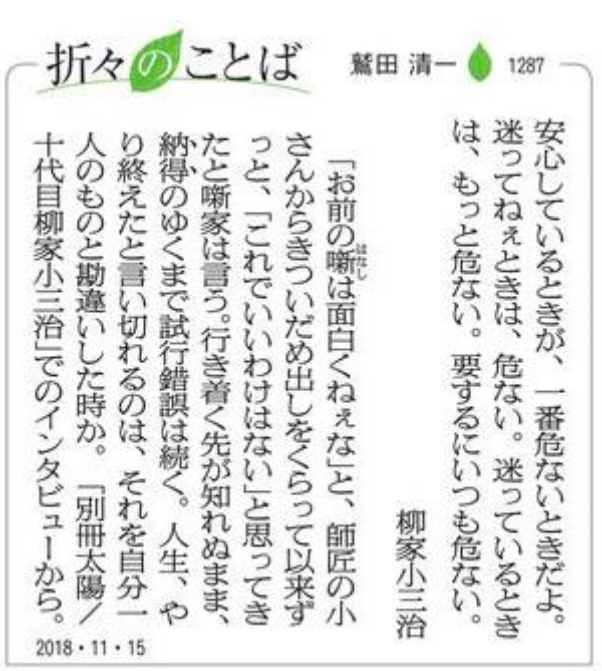

折々のことば　鷲田清一　1286

中井正一が索めたのは、人びとの沈黙にはたらきかける言葉ではない。人びとの沈黙を受けとめる言葉だ。

長田弘

戦時中、人びとの生を内から支える「考える言葉」を鍛えようと呼びかけた美学者・中井正一。「問うべき問いを見いだしたとき、見いださねばならない」のは新しい語り口だと、詩人は言う。学問の生硬な言葉で生に切り込むのではなく、寡黙な生のその重量を掌で量るような語り口をと。昨日と同じ『中井正一評論集』の「解説」から。

2018・11・14


折々のことば　鷲田清一　1287

安心しているときが、一番危ないときだよ。迷ってねぇときは、危ない。迷っているときは、もっと危ない。要するにいつも危ない。

柳家小三治

「お前の噺は面白くねぇな」と、師匠の小さんからきついだめ出しをくらって以来ずっと、「これでいいわけはない」と思ってきたと噺家は言う。行き着く先が知れぬまま、納得のゆくまで試行錯誤は続く。人生、やり終えたと言い切れるのは、それを自分一人のものと勘違いした時か。「別冊太陽／十代目柳家小三治」でのインタビューから。

2018・11・15


折々のことば　鷲田清一　1288

生きものは、いなくなってから存在感を増す。

那須圭子

山口・祝島の原発反対運動を撮影してきた写真家は、ヒロシマを撮り続けた福島菊次郎と福島県飯舘村を訪れ、空になった牛舎を撮る。9・11同時多発テロのその後は語られても米国のそれまでが確と質されなかったように、3・11後も日本のそれまでが問われないことへの違和感が言葉に重なる。那須の写真集『My Private Fukushima　報道写真家福島菊次郎とゆく』から。

2018・11・16


折々のことば　鷲田清一　1289

ひとは孤独を逃れるために独居しさえする

三木清

人は大勢の人の間にあっても、というかその中でこそ孤独であると、哲学者は言う。だから人は、逆説的にも孤独から逃れるために独居しもする。が、反対に、孤独を味わうために街に出もする。孤独は何かの欠乏ではなく、まぎらすよりもむしろ味わうべきもの。その意味で孤独は感情よりも知性に属し、その中ではじめて世界と確と向き合うことができる。『哲学と人生』から。

2018・11・17


折々のことば　鷲田清一　1290

「既知」の領域が拡大するにともなって、「未知」の領域が狭まってゆくどころか、逆にかえってそれは正比例的に拡大する

林達夫

知らない諸事実が見えてくると、従来の理解では説明できないことも増える。それらをも説明できる視点に移行すれば、新たな問題のみならず、すでに解決済みの問題まで改めて浮上してきて、事態はいっそう複雑になる。優れた科学者がときに宗教へと「転向」したのもここに理由があると批評家は言う。評論集『歴史の暮方』から。

2018・11・18

折々のことば
１２９１
～１２９５

盗むならその人の考え方を盗め

佐藤康宏



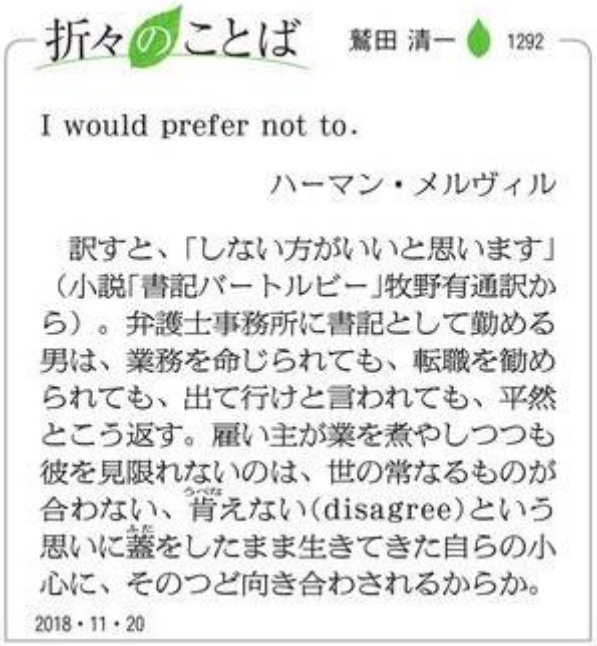
折々のことば　鷲田清一　1291

僕は君から、またかい！　と笑われても、人間が自分の作ったものの機械になるのは困ると繰返し繰返し言っているつもりなのですよ

渡辺一夫

車を運転しているとその速力を自分の力とつい勘違いする。銃を手にするとおのれの攻撃能力に酔いだす。使っているつもりがそれに使われている。こうして人は自分の作った物の奴隷になってゆく。自分の思いを手軽な情報機器で容易に発信できるようになって、同じことがそこでも起こっていまいか。仏文学者の『僕の手帖』から。

2018・11・19



折々のことば　鷲田清一　1292

I would prefer not to.

ハーマン・メルヴィル

訳すと、「しない方がいいと思います」（小説「書記バートルビー」牧野有通訳から）。弁護士事務所に書記として勤める男は、業務を命じられても、転職を勧められても、出て行けと言われても、平然とこう返す。雇い主が業を煮やしつつも彼を見限れないのは、世の常なるものが合わない、肯えない（disagree）という思いに蓋をしたまま生きてきた自らの小心に、そのつど向き合わされるからか。

2018・11・20



折々のことば　鷲田清一　1293

盗むならその人の考え方を盗め

佐藤康宏

論文でも文芸作品でも、剽窃とその摘発のいたちごっこはときに目に余る。ある程度までは検索システムで調べられるが、そんな詮索に時を費やすのはつまらないと美術史家は言う。魅了された著述家の仕事を、彼と同じ眼でしかものが見えなくなるほどに読み込んだのちに、別の主題で新しい仕事ができれば、剽窃とは言われないと。随想「剽窃指南」（「UP」11月号）から。

2018・11・21



折々のことば　鷲田清一　1294

蛻にいかに響くか蟬の声

平野啓一郎

小説『ある男』から。祖父と弟を、さらに慕っていた養父をも亡くした男子中学生が宿題で作った句。「大切な部分をごっそりと削り取られ」たその思いを詠う。後に彼は、養父が過去に他人の戸籍を手に入れ自身の来歴を消した事実を知る（養父もまた別の意味で蛻を生きたのだった）。たとえ偽りを起点としていても、共に過ごした時間のかけがえのなさが揺らぐことはなかった。

2018・11・22



折々のことば　鷲田清一　1295

誰が、いつ、どのように化けるのかわからない中で、いかに奇跡を信じられるかが肝だと思っています。

山縣良和

とろとろ、ぐずぐずするばかりの冴えない若者が、何かを摑んだか、豹変して凄い仕事をすることがある。そういう経験の乏しい教育者にかぎって「あなたはこうだという決めつけをしがち」だと、ファッションスクール「ここのがっこう」を主宰する若手デザイナーは言う。インタビューサイト「カンバセーションズ」8月30日配信から。

2018・11・23

折々のことば
１２９６
～１３００

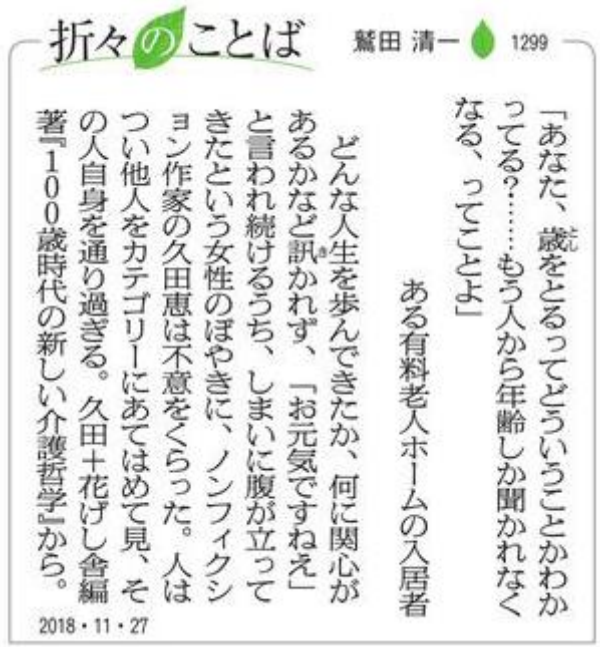
人はほとんど自分に関するかぎり、
その真の動機を知っていない。

色川大吉











折々のことば



鷲田清一

折々のことば
１３０１
～１３０５

「明るすぎる光が隠れていた病気を引き出してしまうこともあるんですって。」

多和田葉子

折々のことば　鷲田清一　1301

思い出はときどき補修したほうがいいよね。

居酒屋にて

隣りあわせた中年の客が口にした一言が、自分の中で後を引いていると知人は言う。記憶は、意識というよりその淵、つまり体に貯えられることもあれば、あることを思い出すのが苦しくて別の記憶にすり替えられることもある。さらに、くり返し整えられ修正され、やがて見事な悲劇に仕立てられもする。記憶とはこのように捏造されやすいものだから、つねに点検が必要なのだ。

2018・11・29

折々のことば　鷲田清一　1302

「いいことには、かならずへんなおまけがついてくるものなのかなあ」

川上弘美

夫は妙に身軽。男の変なプライドはなく、逆境も楽しんでしまうし、ユーモア感覚もある。こうした美点は、両親の不和に振り回され、母の濫費の尻拭いをしてきた彼の苦い「修行」からくると悟った妻は、義母を「おまけ」になぞらえて呟く。そんな妻の思いも知らず、夫は「ともすれば、おまけの方が、ずっと存在感があるものなんだよ」と返す。小説『森へ行きましょう』から。

2018・11・30

折々のことば　鷲田清一　1303

「それ、いいデータだね」と淡々とではなく、「何でそんなオモロいこと、考えられるんや！」と

永田和宏

大学は、既知のことを教えるのではなく未知のことに気づかせる場だと、細胞生物学者は言う。だから学生には「安全なほうより、まず、面白そうなほうを選べ」と言っているという。ワクワクという気分が、新たな道を開く原動力だから。皮膚科医・桃島健治との対談《鍛えよ、「知の体力」を》（「週刊医学界新聞」11月12日号）から。

2018・12・1

折々のことば　鷲田清一　1304

ぞくぞくした。この永続する不安感は探検がうまくいっている証拠なのである。

角幡唯介

探検とは、地図の空白部を踏査することではなく、「人間社会のシステムの外側に出る活動」だと言う探検家は、太陽光が終日届かない漆黒の極地、冬の北極圏への苛酷な旅に挑む。文明の恩恵で芯までふやけた人間の「生」のその原点を再確認するために。最低限の装備も次々と失い、死の淵を経て再び陽光にふれた時、文明と信仰の初動を体で知った。探検記『極夜行』から。

2018・12・2

折々のことば　鷲田清一　1305

「明るすぎる光が隠れていた病気を引き出してしまうこともあるんですって。」

多和田葉子

国籍も言語も違う若者たちが、国を失った一人の女性と旅を共にする。彼らの母親の一人は、光あふれる南仏についてこう言う。人は苦労を共にしつつ「薄闇の中で」結ばれている。それを白日に晒せばみな孤立してしまうと。だが彼らは、湿った凭れあいでなく、不完全な言葉であってもその存在は正確に摑める、そんな関係を旅に求めていた。小説『地球にちりばめられて』から。

2018・12・3

折々のことば
１３０６
～１３１０

生にはなんの意味もないという事実は、生きる理由の一つになる。

シオラン

折々のことば 鷲田清一 1306

そうね、演劇そのものの形式が反社会的だという感じがするんですよ。

別役実

演劇はコピーがきく消費財ではなく、小さな器でもその「消費できない」ところにこそ有効性があると、劇作家は言う。生身に「波状攻撃」のように伝わるその出来事は、たとえ国家や制度からはじかれても生き延びてゆくその最後の拠り所に関わると。この思いには恐らく旧満州から引き揚げてきた幼い日の経験が深く刻まれている。内田洋一による『風の演劇　評伝別役実』から。

2018・12・4

折々のことば 鷲田清一 1307

どうせ分かってもらえない。人間ってこんなものと思い込んでいる人の強さというか。

五木寛之

小説で凝視したいものはそこにあると、作家はいう。少年時代、平壌から引き揚げる時に同胞らはソ連兵の脅迫に屈し、女性二人を差し出した。朝ボロボロになって帰ってきた二人。同胞らは子どもたちに「触るな」と耳打ちする。が、二人はついに恨み言を口にしなかった。その底知れぬ悲しみをこそ見つめたいのだと。「中央公論」9月号の演出家・鴻上尚史との対談から。

2018・12・5

折々のことば 鷲田清一 1308

ゆっくりと歩む人でも、つねにまっすぐな道をたどるなら、走りながらも道をそれてしまう人よりも、はるかに前進することができる

デカルト

真なるものを偽なるものから分かつ判断力は誰にも備わっていると、17世紀フランスの哲学者は言う。ただしそれを持つだけでは不十分で、それを「良く用いる」ことが肝要だと。たとえ不器用に、愚鈍に見えようとも、道を外すまい、過ちだけは犯すまいとの心がけを貫くところにしか道は開けない。『方法序説』（谷川多佳子訳）から。

2018・12・6

折々のことば 鷲田清一 1309

書が、暇をもて余した者の戯技だとは決して思わないが、墨を磨る暇と余裕がなければ、筆など執らなければよい。

石川九楊

考えが浮かんでから筆を執るのか、逆に書きながら考えるのか。存外むずかしい問題である。いずれにしても筆を執るまでに心を整える時間が要る。急須で茶を淹れるのと同じく、墨を磨るのも、人が段取りというものに深い意味を見いだすからだ。墨を磨るもついに筆を持たずに終わる時もあるが。書家の『書と文字は面白い』から。

2018・12・7

折々のことば 鷲田清一 1310

生にはなんの意味もないという事実は、生きる理由の一つになる。

シオラン

誕生は死以上の禍であり、人が西に東に駆けずり回るのも、「自分がこの世に存在するようになった、そのときよりも以前のものに、もう一度なるためだ」とする、ルーマニア出身の思想家の言葉。が、これは、自己の生存の意味をめぐる果てない問いから下りて、意味とは異なる次元で生を支えるものを手探りするよう誘っているとも読める。『告白と呪詛』（出口裕弘訳）から。

2018・12・8

折々のことば
１３１１
～１３１５

人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである。

ヴィクトール・E・フランクル

折々のことば 鷲田清一 1311

まってる。

デヴィッド・カリ

坊やのころは「おやすみのキス」を、「〝おにいちゃん〟ってよばれる日」を待った。大人になれば「仲なおりのきっかけ」を、「『さようなら。ありがとう』って言わなきゃいけない日」を待つ。待つのは物事が私一人の思いでは動かないと知るから。だから祈りを込める。待つことは人をちょっぴり大きくする。絵本『まってる。』（イラスト／セルジュ・ブロック、小山薫堂訳）から。

2018・12・9

折々のことば 鷲田清一 1312

人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである。

ヴィクトール・E・フランクル

強制収容所ではクリスマスと新年の間に多くの人が力尽きて死んだ。クリスマスには帰郷できるという希望に身を委ねた末の落胆が、彼らを打ちのめした。何かを期待するのではなく、何かを期待される者として自分を捉え直すことでしか人は生き存えられないと、同じ収容所体験をした精神科医は言う。『夜と霧』（霜山徳爾訳）から。

2018・12・11

折々のことば 鷲田清一 1313

社会的共通資本は……利潤追求の対象として市場的な条件によって左右されてはならない

宇沢弘文

水や大気、森や河川といった自然環境と、道路や交通機関、水道や電力といった社会的インフラと、教育や医療、司法や行政といった制度資本は、誰の生活にも不可欠な基盤として「社会的共通資本」なのだと経済学者は言う。だからその管理・運営は、職業的専門家がその職業的規律に従って行動する独立の機構に「信託」の形で委ねられるべきだと。『社会的共通資本』から。

2018・12・12

折々のことば 鷲田清一 1314

不完全であると感じれば感じるほどわたしは、生きていると実感する。

ジュンパ・ラヒリ

家ではベンガル語、外では英語で話して育ったインド系米国人の作家は、祖国もなく、二つの言語のはざまで「揺れたり、歪んだり、隠れたり」するその不確かなありようこそが、自分の存在であったと言う。その引き裂かれを、虚しさから自由へと反転させようと、彼女はイタリアに移住し、第三の言語で表現することを選んだ。随想集『べつの言葉で』（中嶋浩郎訳）から。

2018・12・13

折々のことば 鷲田清一 1315

彼らがわたしの言うことがわからないのはわかろうとしないからだ。

ジュンパ・ラヒリ

わかろうとしないのは「わたしを受け入れたくないから」、わたしを無視でき、わたしのことを考慮しないですむからだと、インド系米国人の作家は言う。言葉は、それを聴こうとする耳にしか届かない。関心のない人には、どれほど情理をつくし語っても伝わらない。聴くことは他者を人として尊重することであるから。昨日と同じ随想集『べつの言葉で』（中嶋浩郎訳）から。

2018・12・14

折々のことば
１３１６
～１３２０

夏の日をくり返すことができる者は
夏よりも偉大だ

エミリー・ディキンスン

折々のことば　鷲田清一　1316

赤ん坊が泣いていれば、その声を聞いた人の「責任」です。

松居和

媚びる、おもねるといった技巧を赤ん坊は知らない。いつも「信じきり、頼りきり」。それが大人に自分の中の無垢を思い出させる。昔は、赤ん坊が泣けば誰の子であれ、あやし、抱き上げた。未知の大人であっても、泣く声を聞けば自分にもその責任があると感じた。そこに安心な暮らしの原点があったと音楽家・映画制作者はいう。『なぜわたしたちは0歳児を授かるのか』から。

2018・12・15

折々のことば　鷲田清一　1317

せめて人間が食するものは人間の手で殺すべきではないか、それが相手に対する礼儀ではないか

本橋成一

他の動物と同じく、人は生きものを殺し、食わずには生き存えられない。業ともいうべきこの事実を、人はベールの向こうに押しやってきた。写真家は、牛の眉間に鉄の芯棒を撃ち込む仕事人が、休憩時、蚊がたかっても叩かずにそっと追い払うその姿に、「殺す」という業とじかに向きあう仕事のまやかしのなさを見た。写真集『屠場』から。

2018・12・16

折々のことば　鷲田清一　1318

あ、私、異物になっている。

村田沙耶香

マニュアルを誰より完璧にこなすコンビニ店員。子どもの頃、死んだ小鳥を弔おうと野花を引きちぎって供える大人たちに強い違和感を抱くも、それを口にすれば波風が立つと知り、思いを封印して「普通」の店員として業務に励む。が、その完璧さがこんどは不気味がられる。人は普通が普通である理由は知らないのに、それに従わぬ人は削除する。小説『コンビニ人間』から。

2018・12・17

折々のことば　鷲田清一　1319

夏の日をくり返すことができる者は
夏よりも偉大だ

エミリー・ディキンスン

夏が終わっても人はその夏を描きなおすことができる。日没の時も太陽の「ためらいと茜色」を「もういちどつくる」ことができる。いかにちっぽけな存在でもそこが偉大だと、19世紀米国の詩人は書く。人生の黄昏どきもたんに日没の季ではない。老いて人は盛りを懐かしむだけでなく、その蜜汁をより濃く、より深く味わいなおす。『ディキンスン詩集』(新倉俊一訳編)から。

2018・12・18

折々のことば　鷲田清一　1320

最初の線は生きています。だから消してはいけません

図工の先生

山登りの途中、立ち止まってスケッチをするのが好きな編集者・若菜晃子は、小学生の時、図工の先生によくこう言われた。ものをよく見て最初に手先が動いた瞬間の小さな発見を大事にしなさいと。例えばはじめて職場に立った時の微かな違和感も、組織の抱える問題点を言い当てていることがある。その小さな芽をすぐには摘まないように。随想集『街と山のあいだ』から。

2018・12・19

折々のことば
１３２１
～１３２５

料理は愛情でもなければまごころでもない。料理は知識であり、技術なのだ。

玉村豊男

折々のことば　鷲田清一　1321

持てる力を、他に使いようがないまま無駄遣いしてしまう、そこにこそ青春の魅力が潜んでいるのかもしれません。

トゥルゲーネフ

青春の特権は、「なんでもできる」ではなく「なんでもできると思える」ところにあると、19世紀ロシアの作家は言う。何をしたって同じと感じる現代の若者にはやや酷かも。一方、すぐにこの世から失せる身、できないことは何もないと、怖じ気なく思えるのが老いだとすれば、それも捨てたものでない。小説『初恋』（沼野恭子訳）から。

2018・12・20

折々のことば　鷲田清一　1322

不安にあらがう方法の一つが、言葉によって、理屈にそって、自分が何におろおろしているのかを、誰かに伝えることなのだ

松沢裕作

世の中には「あまりの複雑さ、わけのわからなさ」に身ごと翻弄される時がある。そういう時の歴史家の務めは、過去に同様の不安に駆られ人々がしたこと、するほかなかったことを跡づけ、伝えることだと歴史学者は考え、「がんばれ」「変わらなきゃ」と人々を競争へと駆った明治期のその心のワナを探る。『生きづらい明治社会』から。

2018・12・21

折々のことば　鷲田清一　1323

料理は愛情でもなければまごころでもない。料理は知識であり、技術なのだ。

玉村豊男

料理に愛情がこもることは認めるが、そこに知識や技術がないと料理にならないと、農園経営とワイン醸造にあたる文筆家は言う。「食べさせる」とか「つくってもらう」なんて思っていると、料理は「義務」や「重荷」に、ひいては諍いの原因や不満のはけ口にもなる。食べたいものは自分でつくるのが基本。あえて言うなら料理は「食い意地」であるとも。『男子厨房学入門』から。

2018・12・22

折々のことば　鷲田清一　1324

作文の秘訣を一言でいえば、自分にしか書けないことを、だれにでもわかる文章で書くということだけなんですね。

井上ひさし

自分がいちばん大事に思っていること、辛いこと、嬉しいことを書く。一人ひとり少しずつ違う「その違うところ」を平明に書く。いい文章はそのことで人の心を動かすと、作家は『井上ひさしと141人の仲間たちの作文教室』で語る。彼は生前よく、「むずかしいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことを面白く」とも語った。

2018・12・23

折々のことば　鷲田清一　1325

子どもべやには　ときどき　まほうが　おこる　ものなのだ

マージェリィ・W・ビアンコ

クリスマス。プレゼントのビロード製のウサギに坊やは飛びつくが、新しい贈り物をもらうとすぐそっちに夢中に。ウサギがしょげていると、坊やの大好きな犬のおもちゃがどこかに消え、今度は代役に。でも、坊やと喜びや悲しみを一つ一つ共にするうち、代役が代わりのきかない存在となってゆく。もはや魔法ではなく。絵本『ビロードのうさぎ』（酒井駒子／絵・抄訳）から。

2018・12・24

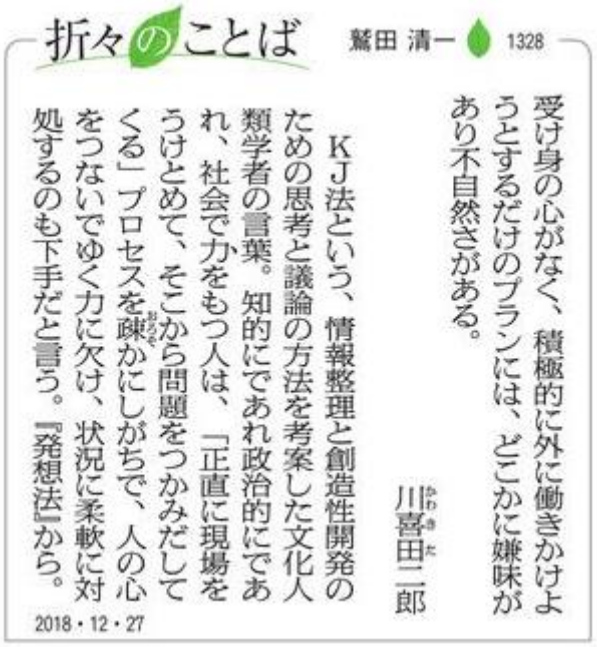
折々のことば
１３２６
～１３３０

罰（ばち）あたらへんえ

関西の言い回し











折々のことば
１３３１
～１３３５

大事なのは、自分自身が生きるために必要なエネルギーの量を知ることだ。

テンダー

折々のことば　鷲田清一　1331

大事なのは、自分自身が生きるために必要なエネルギーの量を知ることだ。

テンダー

横浜生まれの自称「ヒッピー」さんは、電気・水道・ガスを契約せず、すべて自前でまかなう生活に取り組む。たとえば電気。遠隔地で発電して送る方法は送電ロスが膨大で、もったいないという。自分のエネルギー消費量を知れば、本当に必要な電力量もわかる。電気に限らず、生産の場と消費の場が遠く切り離され、問題の所在が見えにくくなっていると。『わがや電力』から。

2018・12・30

折々のことば　鷲田清一　1332

けっしてことばにできない思いが、ここにあると指さすのが、ことばだ。

長田弘

死んだ人は「どこにもいない」のではなく、「どこにもゆかない」のだと、詩人は言う。死んだ人は私の記憶の中にあって「年をとらない」。そうと知って、歩くことをやめた。ここが「いちばん遠い場所」だと気づいた。死んだ人、話すこともなかった人ともここで語らうことができるようになったと。言葉になりえないものを大切にするために言葉はある。詩集『詩ふたつ』から。

2018・12・31

折々のことば　鷲田清一　1333

時間にケジメをつけようとすることも、ケジメをつけないでいようとすることも、どちらにしてもやっかいなことだ

富岡多恵子

いつもと違う装いで、違うものを食べ、違う表情で挨拶した後、とくにすることがないのはいつもと同じだった。「ヒネクレて普段どおりにする人も、世間が静かでついそわそわしたと、詩人・作家は往時の正月をふり返る。55年前の感想だ。暮れに年始仕度の大仕事があった頃の話。さてこの正月は。『回転木馬はとまらない』から。

2019・1・1

折々のことば　鷲田清一　1334

国はまるで積荷のゆるんだ大型貨物船のようである。船が傾くと、荷物が全部片より、船は沈んでしまう。

E・F・シューマッハー

経済が国境を呑み込み、「経済以外のおよそ人間的な観点を封じ」てしまうと、社会内のまとまりが崩れ、その構造が「脆く、不安定に」なると、経済学者は言う。組合、地域団体、結社、大学など、国家と個人の中間にある勢力が萎むと、個人も浮草のように市場に弄ばれる。『スモール・イズ・ビューティフル』（小島慶三・酒井懋訳）から。

2019・1・3

折々のことば　鷲田清一　1335

戦争の影響で食糧がなくなるのではない。食糧がなくなることが戦争なのだ。

斎藤美奈子

終戦の前後の食糧事情は凄まじかった。生き残るには、普段なら絶対口にしないものを食べるほかなかった。国民あげての総力戦を一言でいえば「寝不足で重労働で飯がない」。戦闘は戦争のほんの一部、戦争の大部分は「物資の調達、運搬、分配」という「お役所仕事」にあった。そこを日本政府と旧日本軍は「甘く見ていた」と文芸評論家は言う。『戦下のレシピ』（文庫版）から。

2019・1・4

折々のことば
１３３６
～１３４０

私の友だちは、たしかに私の友だちだった。

石井桃子

折々のことば　鷲田清一　1336

「ぼくも　けっこんする」……
「だれと？」
「ひとりで」

新沢としひこ／今井弓子

大人にとって結婚は誓いの儀礼。いつかその契りが試される時も来る。が、みなから祝福されるその儀礼に憧れる幼子たちにとって、結婚式は大好きなものとの合体。だからぬいぐるみと、先生と、図鑑と、思い思いに式を挙げる。ついでに「けっこんしないしき（式）」も盛大に。なんと広やかな自由。絵本『けっこんしようよ』から。

2019・1・5

折々のことば　鷲田清一　1337

趣味に便利さを求める人は、いませんよね

角田太郎

大手企業の元部長は、趣味のカセット収集をビジネスにしようと、都内に音楽カセットの専門店「ｗａｌｔｚ」を開く。ある目標に達するための手段として何かをするのでなく、それをすること自体が面白いのが趣味。プロセスを楽しむのだから急げば興も殺がれる。仕事もそんなふうになればいいのに。本紙大阪本社版の連載「暮れゆく時代に・4」（昨年12月26日夕刊）から。

2019・1・6

折々のことば　鷲田清一　1338

限度。学問とは、限度の発見にあるのだよ。

坂口安吾

原子爆弾という、人間の制御を超える装置を発明するのは学問ではない、「子供の遊び」だと作家は言う。おのれの限界をはみ出る「大ゲサ」な夢想にのぼせず、せいぜい数十年しか生きられない有限な個人として、みずから責任をとれるところでその義務を全うすること。そこに人の「戦い」がある。人はそれに勝てずとも、負けはしないと。論考「不良少年とキリスト」から。

2019・1・7

折々のことば　鷲田清一　1339

新聞を見るのが恐怖です。

旧友からの年賀状

端正な文字でこう添えてあった。偶々この元旦に、私は児童文学作家、石井桃子の随想集『みがけば光る』で、「朝、新聞をひらくのが、こわい気がしました」という文にふれていた。戦後の不況下、親子心中の記事が続いた頃。人びとが「ポツンとひとりぼっちになってしまった、死の直前の苦しみ」が胸を刺したという。社会の底がどんどん抜けてゆく、それを友人も憂えてか。

2019・1・8

折々のことば　鷲田清一　1340

私の友だちは、たしかに私の友だちだった。

石井桃子

『ノンちゃん雲に乗る』で有名な明治生まれの児童文学作家は、戦前の日本女性は、異性はもちろん同性間の友情にさえ恵まれなかったと言う。あっても学校を卒業すれば途絶えた。彼女には友だちがいたが、それが非婚のゆえだと思うと「かなしいような、おかしいような」気になると。が、確信をもって書く。友人は死んだ後でも自分を支えると。随想集『みがけば光る』から。

2019・1・9